大宰府史跡

昭和57年度発掘調査概報



昭和58年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和57年度発掘調査概報

昭和58年3月

九州歴史資料館

序

昭和57年度大宰府史跡の発掘調査は、政庁地区南側の隣接地が選ばれた。そして、月山丘陵南側の第80次調査においては、掘立柱建物9棟分を確認し、同じく第81次調査では、政庁正殿と規模を等しくすると見られる掘立柱建物、および暗渠一条を検出した。政庁南門の南側の第82次調査では、遺構を検出するまでに至らなかった。

大宰府の条坊については、いわゆる朱雀大路を中軸として、東西と南北の大路が均正に通じていたと想定されてきたが、しかし現在までのところ、条坊の遺構は確認されないのみならず、政庁地区外から官衙の遺構が発見されている。政庁域や条坊についても再検討を要することとなった。

本年は第三次五ヶ年計画の初年度にあたる。大宰府史跡の発掘調査が開始せられて15年を数える。御指導を賜わってきた発掘調査指導委員会の委員各位に深甚の謝意を表する次第である。

昭和58年2月26日

九州歴史資料館長　田村圓澄

例　言

1．本概報は昭和57年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし第78次調査は昭和56年度の事業であるが、未報告であるので併せて報告する。また第82次調査については顕著な遺構は検出されなかったので報告は割愛した。

2．検出遺構については大宰府史跡発掘調査指導委員の他に九州芸術工科大学沢村仁教授の指導を得た。

3．遺構、遺物の写真は学芸第一課石丸洋の撮影による。

4．本概報の執筆、編集は調査課の石松好雄・倉住靖彦・髙倉洋彰・横田賢次郎・森田勉・髙橋章が行った。また遺物の整理については田崎道子・大田千賀子の協力を得た。

目　　次

序
I　調査計画……1
II　調査概要……3
1．概　　要……3
2．第78次調査……4
検出遺構……4
出土遺物……9
小　　結……48
3．第80次調査……51
検出遺構……51
出土遺物……55
小　　結……70
4．第81次調査……72
検出遺構……72
出土遺物……75
小　　結……81

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折り込み
第２図　第78次発掘調査遺構配置図……折り込み
第３図　層位模式図……5
第４図　ＳＥ2110実測図……6
第５図　ＳＤ2115出土土器・陶磁器実測図……10
第６図　ＳＤ2145出土土器実測図……11
第７図　ＳＥ2110出土土器実測図……12
第８図　ＳＧ2130出土土器・陶磁器実測図(1)……14
第９図　ＳＧ2130出土土器・陶磁器実測図(2)……15
第10図　ＳＧ2130出土土器・陶磁器実測図(3)……16
第11図　ＳＧ2130出土土器・陶磁器実測図(3)……17
第12図　ＳＫ2120出土土器実測図……19
第13図　ＳＫ2159出土土器実測図……20
第14図　ＳＸ2127出土土器実測図……20
第15図　ＳＸ2139出土土器実測図……21
第16図　下層腐植土層出土土器・陶磁器実測図……22
第17図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(1)……24
第18図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(2)……25
第19図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(3)……26
第20図　各層出土土器・陶磁器実測図……27
第21図　軒先瓦拓影・実測図……28
第22図　軒先瓦……28
第23図　ＳＤ2104・ＳＤ2115出土木製品実測図……29
第24図　ＳＥ2110出土木製品実測図……30
第25図　ＳＧ2130出土卒塔婆実測図……31
第26図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(1)……34
第27図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(2)……35
第28図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(3)……36
第29図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(4)……38
第30図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(5)……39
第31図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品実測図(6)……40

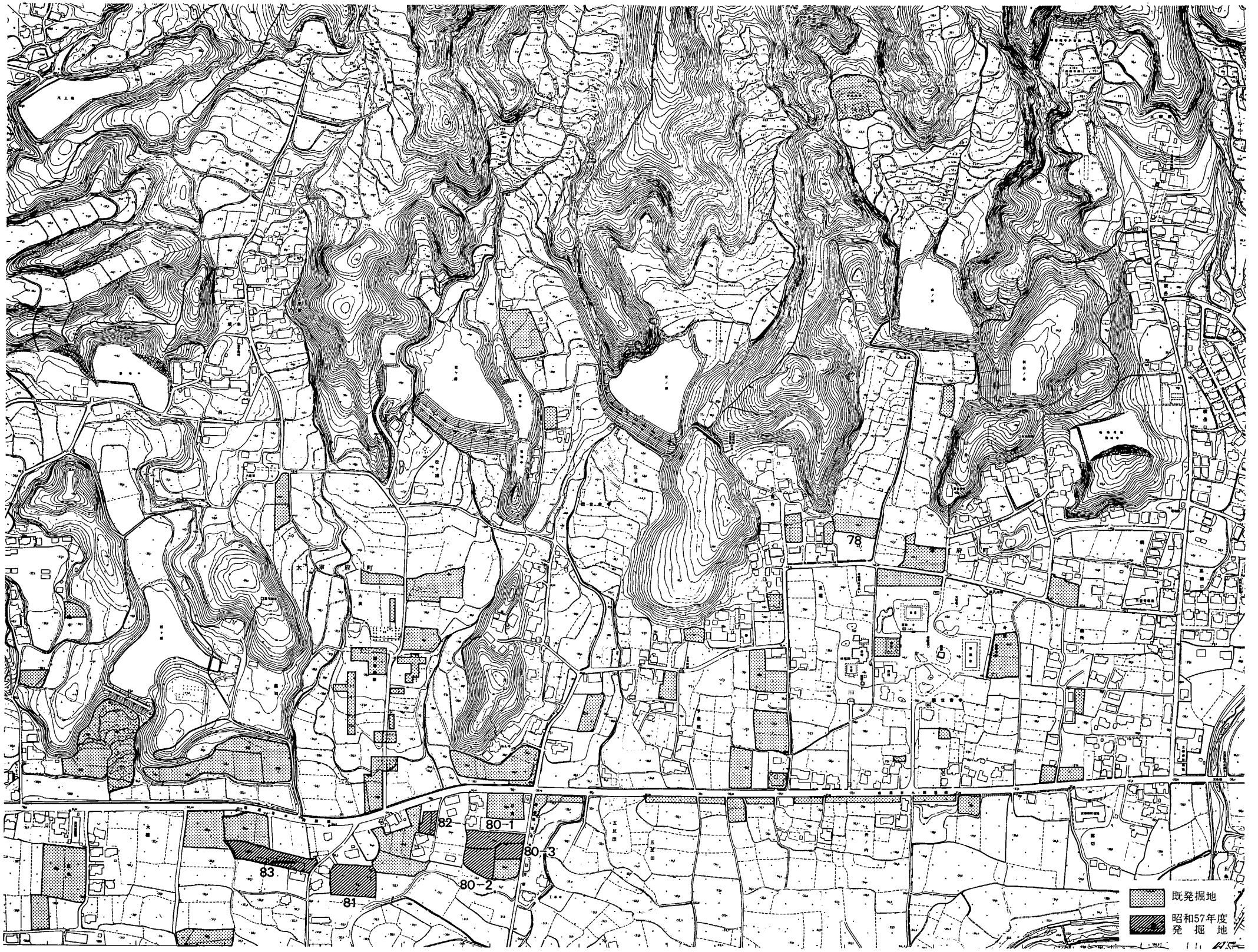
第32図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品(7)……41
第33図　ＳＧ2130・下層腐植土層出土木製品(8)……43
第34図　ＳＧ2130出土木製尺実測図……44
第35図　銅銭拓影……45
第36図　金属製品実測図……46
第37図　土・石製品実測図……47
第38図　ＳＧ2130出土ガラス製小壺……48
第39図　遺構模式図……49
第40図　第80次発掘調査遺構配置図……折り込み
第41図　井戸実測図……54
第42図　ＳＢ2220・ＳＢ2240出土土器実測図……55
第43図　ＳＥ2250・ＳＥ2265出土土器実測図……56
第44図　ＳＫ2203出土土器・鋳型・鞴羽口実測図……57
第45図　ＳＫ2251・ＳＫ2252・ＳＫ2274・ＳＫ2279出土土器実測図……58
第46図　ＳＸ2275出土土器・陶磁器実測図……61
第47図　整地層出土土器実測図……62
第48図　遺構面上出土土器実測図……62
第49図　黒灰色砂質土層出土土器・硯実測図(1)……63
第50図　黒灰色砂質土層出土土器・硯実測図(2)……64
第51図　灰褐色土層出土土器・陶磁器実測図……66
第52図　軒丸瓦拓影・実測図……68
第53図　軒平瓦拓影・実測図……68
第54図　熨斗瓦拓影・実測図……69
第55図　石帯実測図……70
第56図　遺構模式図……71
第57図　第81次発掘調査遺構配置図……折り込み
第58図　ＳＸ2320実測図……74
第59図　ＳＢ2300・ＳＫ2309・ＳＫ2323出土土器実測図……76
第60図　ＳＸ2318出土土器実測図……78
第61図　ＳＸ2320出土土器実測図……79
第62図　軒丸瓦拓影・実測図……80
第63図　軒平瓦拓影・実測図……81
第64図　熨斗瓦拓影・実測図……81

図　版　目　次

図版１　（上）第78次調査区全景航空写真
（下）第78次調査区上層全景
図版２　（上）第78次調査区中層全景
（下）第78次調査区下層全景
図版３　（上）礎石建物ＳＢ2140・ＳＢ2150、掘立柱建物ＳＢ2155
（下）礎石建物ＳＢ2140
図版４　礎石建物ＳＢ2150、掘立柱建物ＳＢ2155
図版５　（上）柵ＳＡ2105柱根
（下）掘立柱建物ＳＢ2155柱掘形
図版６　（上）溝ＳＤ2115
（下）溝ＳＤ2145
図版７　（上）井戸ＳＥ2110
（下）園池ＳＧ2130
図版８　園池ＳＧ2130
図版９　（上）第80－１次調査区全景
（下）第80－２次調査区全景
図版10　（上）第80－３次調査区全景
（下）掘立柱建物ＳＢ2215・ＳＢ2220
図版11　掘立柱建物ＳＢ2001・ＳＢ2195
図版12　掘立柱建物ＳＢ2200
図版13　（上）掘立柱建物ＳＢ2205・ＳＢ2210
（下）掘立柱建物ＳＢ2215
図版14　（上）掘立柱建物ＳＢ2220
（下）掘立柱建物ＳＢ2230・ＳＢ2240
図版15　（上）掘立柱建物ＳＢ2230
（下）掘立柱建物ＳＢ2240
図版16　掘立柱建物ＳＢ2195柱掘形
図版17　（上）掘立柱建物ＳＢ2200柱掘形
（下）掘立柱建物ＳＢ2220柱掘形
図版18　（上）ＳＥ2250
（下）ＳＥ2255

図版19　（上）ＳＥ2260
　　（下）ＳＥ2265
図版20　（上）ＳＥ2270
　　（下）ＳＥ2275
図版21　第81次調査区全景
図版22　（上）掘立柱建物ＳＢ2300・ＳＢ2305
　　（下）掘立柱建物ＳＢ2300
図版23　掘立柱建物ＳＢ2300柱掘形
図版24　（上）掘立柱建物ＳＢ2305
　　（下）土壙ＳＫ2306
図版25　暗渠施設ＳＸ2320全景
図版26　暗渠施設ＳＸ2320細部
図版27　第78次調査ＳＤ2115・ＳＥ2110出土土器・陶磁器
図版28　第78次調査ＳＤ2145出土土器
図版29　第78次調査ＳＤ2145出土土器
図版30　第78次調査ＳＧ2130（腐植土層）出土土器
図版31　第78次調査ＳＧ2130（腐植土層）出土土器
図版32　第78次調査ＳＧ2130（腐植土層・黒灰色土層・黄茶色土層）出土土器
図版33　第78次調査ＳＧ2130（腐植土層）出土陶磁器
図版34　第78次調査ＳＸ2127・ＳＸ2139出土土器
図版35　第78次調査下層腐植土層出土土器・陶磁器
図版36　第78次調査黒灰色土下層出土土器
図版37　第78次調査黒灰色土下層出土土器・陶磁器
図版38　第78次調査黒灰色土下層・各層出土土器・陶磁器
図版39　ＳＤ2104・ＳＤ2115・ＳＥ2110出土木製品
図版40　ＳＧ2130出土卒塔婆
図版41　第78次調査ＳＧ2130出土墨書木札・墨書経石
図版42　第78次調査ＳＧ2130出土木製品
図版43　第78次調査ＳＧ2130出土木製品
図版44　第78次調査ＳＧ2130出土下駄
図版45　第78次調査ＳＧ2130出土木製品
図版46　第78次調査ＳＧ2130出土木製品
図版47　第78次調査ＳＧ2130出土木製品

図版48　第78次調査出土金属製品
図版49　第78次調査出土土製品・石製品
図版50　第80次調査ＳＢ2240・ＳＥ2250・ＳＥ2265・ＳＫ2252・ＳＫ2279出土土器
図版51　第80次調査ＳＫ2203・ＳＫ2274出土土器・土製品
図版52　第80次調査ＳＸ2275出土土器・陶磁器
図版53　第80次調査整地層・遺構面上出土土器
図版54　第80次調査黒灰色砂質土層出土土器
図版55　第80次調査黒灰色砂質土層出土土器
図版56　第80次調査灰褐色土層出土土器・陶磁器
図版57　第80次調査灰褐色土層出土陶磁器
図版58　第80次調査出土軒先瓦・熨斗瓦
図版59　第81次調査ＳＢ2300・ＳＫ2309・ＳＫ2323・ＳＸ2318・ＳＸ2320出土土器
図版60　第81次調査出土軒先瓦・熨斗瓦



第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

I　調査計画

大宰府史跡の発掘調査については昭和47年度に九州歴史資料館が設立されたことにより、当館の主要な業務として調査課が、これを担当している。実際の発掘調査にあたっては5年毎に計画を立案し、これにもとずいて進めているが、昭和56年度をもって第2次五ヶ年計画を終了した。この第2次五ヶ年計画では観世音寺及び同子院跡と条坊制の遺構解明を調査の主眼として17ヶ所、約20,300㎡について調査を行うよう計画した。その調査結果については昭和56年度の発掘調査概報において、その概略を報告したが、ここで改めてその概要を振り返ってみよう。

まず観世音寺については東面築地と僧房推定地について調査を行った。しかしながらこの両地域はいずれも中世における攪乱が激しく、創建時における各遺構については、ほとんど明らかにすることができず成果を上げることはできなかった。これに対して観世音寺子院跡については推定金光寺跡の調査において礎石建物などの遺構を非常に良好な状態で検出できたとともに遺物の面においても墨書木札や陶磁器類など内容豊富なものが検出され大きな成果を上げることができた。さらに今回報告する第78次調査においては、子院のひとつである西福寺跡と推定される庭園をともなった中世の遺構が検出されたことは予想外の成果であり、今後の子院跡の調査について明るい見通しを得ることができた。

またこの計画のもう一方の主眼とした条坊遺構の解明については、調査対象地が観世音寺地区土地区画整理事業にともなう地域であり、したがって史跡指定地外であるため調査の進行が危ぶまれたが、幸い地権者および太宰府市当局の協力を得ることができ、ほぼ計画どおり調査を実施することができた。その調査結果については各年度毎の発掘調査概報において報告したとおりであるが、なかでも政庁前面域における掘立柱建物の存在などは、これまでの大宰府復原案とはかなり異った状況を示しており、改めて再検討を行う必要性のあることを示しており、今後の大きな課題として残されることとなった。以上が第2次五ヶ年計画における主な調査結果であるが、結局この計画では当初計画面積の82%にあたる16,700㎡について調査を終了した。

この第2次五ヶ年計画の成果をもとに第3次五ヶ年計画を立案したが、この計画では、現在進行中の土地区画整理事業が、いよいよ政庁前面域の主要地域に及んでくるため、この計画の前半は主にこの地域の大半を占める字日吉、不丁の地域について集中的に発掘調査を行うこととし、当面昭和57年度については次の個所について調査を行うこととした。

まず第80、81次調査地は政庁の東側にある月山丘陵の南側で昭和56年度に行った第75次調査地の南に接した所である。第75次調査地では掘立柱建物4棟と柵を1条検出しているが、掘立柱建物はいずれも梁行3間で柱掘形から検出された瓦から八世紀前半代に比定できるものである。これらの遺構はさらに南へ広がっていることが明らかになっており、したがって今回の調

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備　　考
80	6AYI－C	2,135	4月～8月	左郭五条一・二坊
81	6AYI－C	620	9月～10月	左郭五条二坊
82	6AYM－A	2,000	11月～3月	右郭五条一坊

査では、その範囲を確認するとともに遺構の具体的な状況についての知見を得ることを目的とした。

次に第82次調査地は政庁南門の南約140m付近の政庁中軸線の延長線に接した所で右郭五条一坊推定地である。この政庁中軸線の延長線上付近については、これまでに第58次および第73次調査として二度の調査を実施しているが、いずれの調査においても遺構は検出されておらず、一種の広場的な地域ではなかったかと推定されるにいたっている。したがって今回の調査では、この広場と推定される遺構の存在しない地域がどのくらいの範囲にまで及んでいるのかを確認することとした。

以上の昭和57年度の発掘調査計画については昭和57年5月12、13日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において了承されたため計画どおり調査を実施することとした。

II　調査経過

1　概　　要

昭和57年度の調査は当初の計画どおり4月12日から第80次調査に着手したが、排土置場が確保できなかったため二度に分けて調査せざるを得なかった。調査地域はかなりの削平を受けていたため遺構面が比較的浅く、予定よりも若干早く調査を終了することができた。この第80次調査終了後、引き続いて第81次調査として予定していた北側隣接地についての調査を行う計画であったが地権者の強い要望もあって、この地域については区画整理完了後に調査を行うこととし、次の第82次調査を繰り上げて、これを第81次調査として着手した。この第81次調査の進行中に当初計画にはいれていなかった第80次調査地の南側隣接地について地権者の了解が得られたため、これを第80－3次調査として着手することとし、第81次調査を一時中断することとした。この第80－3次調査は遺構面が浅かったことや対象面積が狭かったこともあって2週間ほどで調査を終了することができた。結局三回に分けて行った第80次調査では掘立柱建物9棟分を確認することができた。さらに第81次調査継続中に第82次調査として政庁南門の前面の一部について調査を行った。政庁南門の西南方約80mほどの所には10m×30mほどの基壇状の高まりがあり建物の基壇とも考えられたためトレンチを設定して調査を行った。しかしながら遺構は何ら検出されず3日間で調査を終了した。以上のような状況であったため第81次調査を終了したのは12月にはいってからであった。この第81次調査で検出した主な遺構は4間×10間の南北棟掘立柱建物1棟と整地にともなう暗渠1条のみであった。ところで、この調査において検出した掘立柱建物は政庁正殿に匹敵する規模のものであり、また中軸線上にきわめて近接しているとともに周囲からは他に建物遺構が検出されておらず、きわめて特殊なものであることが考えられる。現在この建物についての具体的な見解を持ちあわせていないが今後に残された課題のひとつである。

以上述べたように昭和57年度の調査は遺構面が浅かったことや調査終了後の埋め戻しに機械

調査次数	調査地区	調査面積	調　査　期　間	備　　考
80－1	6AYI－C	606	820412～820607	左郭五条一坊
80－2	〃	906	820612～820823	〃
80－3	〃	325	820927～821013	左郭五条二坊
81	6AYM－A	1,656	820823～821209	右郭五条一坊
82	〃	93	821116～821118	左郭五条一坊
83	6AYM－B	1,053	821130～830228	右郭五条一・二坊

力を導入したこともあって12月初旬には当初計画した調査をすべて終了することができた。このため12月以降については土地区画整理事業との関係を考慮し、昭和58年度調査予定地を一部繰り上げて調査を行うこととした。

昭和57年度の発掘調査地を地区別に記すと前表のとおりである。

2　第78次調査

第78次調査として、観世音寺の北面築地推定地の調査を実施した。観世音寺の主要伽藍を囲繞する築地については、南大門の残存礎石や『観世音寺資財帳』記載記事から、これまで考究され、ある程度復原がなされている。

築地跡の調査として、これまで4個所（第21・45・66・68次）の調査を実施しているが、未だ直接的な手懸りを得るには至っていない。

今回の調査地は昭和47年度の第21次調査地の東側で、約1,000㎡を対象として発掘調査を行った。地番は太宰府市大字観世音寺字安養寺813－2である。

調査は昭和57年11月25日に開始し、表土・床土を除去後、江戸時代末～明治期にかけての土壙や溝などを検出した。先の第70次調査で江戸末～明治初頭頃にかけての建物跡が検出されているが、それとの関連もあり、この時点で写真撮影を行い、その後さらに下層遺構の究明を行った。その結果、中世の建物跡や溝・池などを比較的良好な状態で検出することができた。今回の調査目的である築地跡や古代の遺構面に達するためには、これら中世の整地層を除去しなければならないが、断面観察の結果、この整地層の下層は、西側から東側に向って地山が下がっており、その上には腐植土層が堆積し、東側地域ではかなり厚い堆積層であることが判明した。調査地域は東・西に四王寺山から派生した小丘陵が延びてきており、谷地形を呈する所に位置している。第70次調査の結果では調査地域の西側が谷の氾濫によって奈良時代の遺構は完全に失なわれていることが確認されている。これらのことから、築地等の遺構は、この谷の氾濫で壊され、失なわれたと判断し、下層については一部を掘り下げるに止めた。昭和58年4月初旬に実測・写真等の全ての作業を終了し、埋め戻し作業を行った。

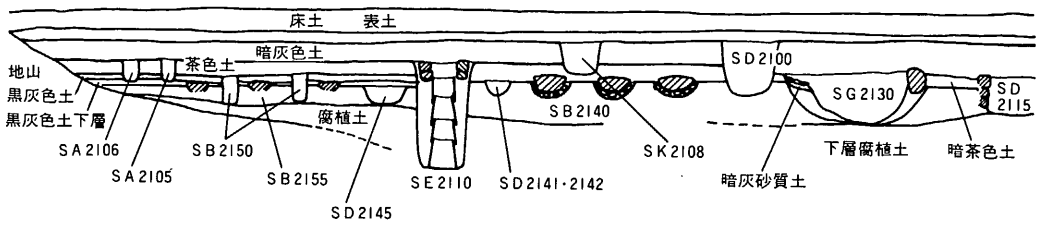
検出遺構

土層の関係（第3図）

調査地の西北隅部分は表土・床土を除去するとすぐに地山の花崗岩バイラン土層になり、これは南・東方に向って、なだらかな傾斜で下がっている。層の形成も必然的にこの地形に合い、南・東地域は層の堆積が厚くなる。床土除去後、暗灰色土層が表われる。この層には、発掘区のほぼ中央部に位置する南北方向の溝ＳＤ2100や、その西側に位置するＳＫ2108・2109それに



第２図　第78次発掘調査遺構配置図



第3図　層位模式図

南北・東西方向の浅い溝がある。これらは江戸末～明治期のものと考えられる。暗灰色土層を除去すると、ＳＤ2100を境として層位の状況が東側地域と西側地域では異なっている。西側では茶色土層が表われ、東側では暗茶色土層となる。これには、ＳＡ2105・2106・ＳＥ2110、それに多数のピット群がある。西側地域では、茶色土層を除去すると、黄色の整地層が表われる。これには一面に炭層があり、南側では炭層と黄色土が入り混った状態となっていた。これにはＳＢ2155の柱穴が切り込んでいる。炭混りの黄色整地層を除去すると黒灰色土層があり、その下層に土器を多く含んだ黒灰色土下層がある。これを除去するとＳＢ2150・ＳＤ2145が検出される。但し、黄色整地層以下黒灰色土下層はＳＢ2140およびＳＤ2141・2142にはみられない。

東側では、暗灰色土を除去すると暗茶色土が表われ、ＳＧ2130・ＳＤ2115および多数のピット群がこれに切り込まれている。これを除去するとＳＧ2130の掘形とＳＤ2128、それにＳＧ2130の南側では多数のピット群が検出される。ＳＧ2130は一度修復されたらしく、当初の掘形より内側に礫敷や石組がある。池の部分は暗灰色砂質土層が入り、周辺は暗茶色土層で整地される。ＳＤ2115の護岸の石組も暗茶色土層の整地と同時期と考えられ、当初からのものではなく後補の可能性が強い。

また、池および溝ＳＤ2115の底部では下層腐植土層があり、これはかなりの厚さで堆積しており、これは周囲の地形からみて、谷の氾濫によるものと考えられた。この下層腐植土層から出土した遺物は14世紀前半代に考えられるものである。ＳＧ2130・ＳＤ2115はこの上に整地した後に造られている。また、西側地域にあるＳＢ2140・2150の下層でも腐植土層がみられ、建物はこの上に整地し建てられている。この腐植土層と池の底部で検出した下層腐植土層が同一のものであるのかは不明であるが、整地の状況からみて同じである可能性は大きい。

最上層の遺構

溝

ＳＤ2100　発掘区のほぼ中央部に位置する南北方向の素掘り溝である。幅1.5ｍ、深さ0.5ｍ、長さについては約18ｍ分を検出した。これは発掘区外の南・北に延びている。ＳＢ2140を切り、溝中からは近世陶器が出土した。

土壙

ＳＫ2108　ＳＤ2100の西側にあり、約半分を検出したが、全形は不明である。ＳＢ2140を切り、床土直下より掘り込まれる。長径2.60ｍ、深さ0.50ｍである。

ＳＫ2109　全体の約半分を検出した。円形のもので径3.2ｍ、深さ0.5ｍ、底には藁製の円座が残存していた。これは腐朽が著しく、やっと形状を知れる程である。

上層の遺構

柵

ＳＡ2105　発掘区の西南地域で検出した南北方向の柵である。３間分を検出したが、柱間寸法は2.50ｍ等間である。全て柱根が残存している。一辺が20cmの角柱で、残存良好なものは90cm分が残っている。

ＳＡ2106　ＳＡ2105にほぼ直交し、東西方向に延びる。３間分を検出したが、柱間寸法は2.20ｍ等間である。残存する柱根は円形のもので、ＳＡ2105のそれに比べ細い。

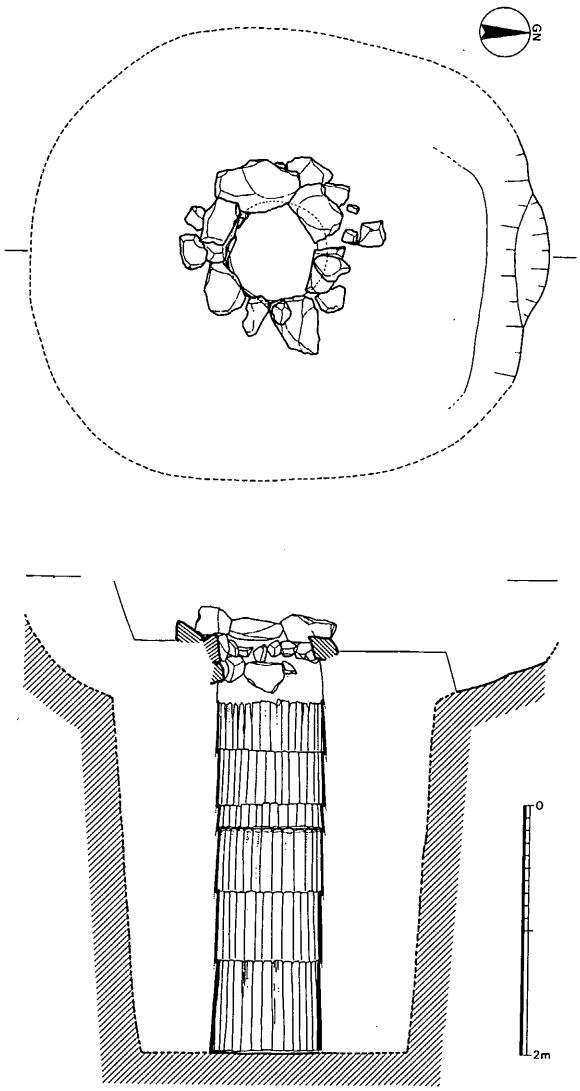
井戸

ＳＥ2110　ＳＤ2145より後出する井戸である。井戸枠は上部構造を石組、下部構造を桶側としている。石組は平面形が円形で径80cm、深さ60cmが残存している。桶側は７個を積み重ねているが、上端径85cm、下端径90cmである。井戸枠の全体の深さは約3.50ｍで、掘形については一部検出したものの、全体のプランについては明確にし得ていない。

ＳＥ2160　発掘区の西北隅部で検出した。井戸枠は残存していなかったが、掘形は円形で上面径1.60ｍ、底面径1.20ｍ、深さ1.20ｍである。

下層の遺構

礎石建物



第４図　SE2110実測図

ＳＢ2140　ＳＧ2130の西側で検出した礎石建物である。東西６間、南北２間分を検出したが、大部分は発掘区外の北側へ延びているため、全体の規模については定かでない。この建物の特徴として、東側１間分が南へ２間分張り出していることである。身舎部礎石は３個残存するが、他は全て抜き取られ、根石や掘形を残すのみである。柱間寸法は東西・南北柱間とも1.93ｍ等間のものである。部分的ではあるが、礎石間に柱筋は合せて小さな石が配されている。これは床束柱礎石と考えられる。また東側と西側には縁束礎石と思われる小礎石がある。縁の出は東側では1.08ｍ、西側では0.70ｍである。南側に縁が取り付いていたのかは礎石１個が残存するだけで、断定するには至らなかった。周囲に雨落溝ＳＤ2141・2142・2129がめぐるが、張り出し部の南側には溝はない。

ＳＢ2150　ＳＢ2140の西南に位置する３間×３間の礎石建物である。礎石は９個が原位置で残存しているが、ＳＢ2140の礎石と比べて一回り小さい。建物の方位はＳＢ2140と同じで、ＳＢ2150の北側柱列はＳＢ2140の南側柱列に柱筋を合せて建てられている。柱間寸法は南北・東西柱間とも1.93ｍで、ＳＢ2140と同一である。

ＳＢ2135　ＳＢ2140の南側に位置する２間×３間の総柱礎石建物である。礎石および根石が完存していないため若干疑問もあるが、東西２間（柱間寸法は1.90ｍ等間）、南北３間（柱間寸法1.80ｍ等間）の総柱の建物と考えた。建物の方位はＳＢ2140・2150と同じで、ＳＢ2140の東側柱列に筋を合せている。

掘立柱建物

ＳＢ2155　ＳＢ2150廃絶後にほぼ同位置に建てられた２間×３間の建物で、東・西に柱間寸法1.0ｍの廂がつく。これは、ＳＢ2150を１間分（1.93ｍ）南へずらし、東西については、両側の柱筋をほぼ合せている。構造的にはＳＢ2150と若干異なり、柱間寸法にも違いがみられる。東西の柱間寸法は1.93ｍ、南北の柱間寸法は2.14ｍである。柱穴の掘形は0.60ｍ前後、深さ0.35ｍ前後で、底部には石を置き礎板としている。東側柱列の北から１番目と２番目の柱穴間に柱筋に合せて木材が残存しているが、性格については不明である。

柵

ＳＡ2125　ＳＢ2140の東側に位置する南北方向の柵である。１間分を検出した。柱間寸法は1.90ｍである。これは北側へさらにのびる。

ＳＡ2143　ＳＢ2140の南側にある東西方向の柵である。３間のもので、柱間寸法は1.93ｍで、ＳＢ2140の東西の柱筋に合っている。

溝

ＳＤ2115　発掘区東端で検出した南北方向の溝である。溝の東肩は発掘区外（現在この位置に水路がある）となり、溝幅は不明である。これは発掘区外の南・北に延びている。西肩の北端には護岸のための石組が残存している。しかしながら、大部分は氾濫によるためか、石組は

残っていない。溝中には、ところどころ石が落ち込んでいるので、本来は石組の護岸を施していたものと考えられる。但し、この石組は当初からあるのではなく、やや遅れた時期に積まれたものと考えられる。

ＳＤ2128　ＳＧ2130の南側にある東西方向の溝である。幅1.30ｍ、深さ0.15ｍで、発掘区の南側へさらに延びている。底は南へ向ってやや下がっているので、ＳＧ2130の排水の役割があったとも考えられる。

ＳＤ2129　ＳＢ2140の東側の雨落溝である。溝幅は一定しておらず、溝中には石が景観を意識したかのように配されている。この配石はＳＧ2130の縁辺部の護岩石と連続する。池への導水溝と雨落溝を兼ねたものとも推察される。

ＳＤ2141　ＳＢ2140の西側の雨落溝である。幅1.0ｍで、礎石心から溝心まで1.2ｍである。ＳＤ2142とＳＤ2145と連続し、一連の排水溝となっている。

ＳＤ2142　ＳＢ2140の南側の雨落溝で、幅0.8ｍでＳＤ2141・2145と一連の溝である。東側では直角に南へ曲がり、ＳＢ2140の張り出し部の雨落溝となる。

ＳＤ2145　ＳＢ2150の東側に位置する南北方向の溝で、ＳＤ2141・2142はこの溝に連続する。溝幅は一定でなく、北側が広くなっている。これは、ＳＤ2141・2142の合流点となっているためであろう。幅1.0ｍ～1.8ｍ、深さ0.1ｍ～0.2ｍで、南へいくに従って深くなっている。この溝はさらに発掘区外の南へ延びている。溝の南端近くの西岸には厚さ1.0㎝の板を杭でとめ護岸としたものが残存している。

園池

ＳＧ2130　発掘区の東側にあり、その大部分を占地している。平面形はほぼ円形を呈するが、南北にやや長い形状である。長径約12.4ｍ、短径10.0ｍである。池の汀線には護岸と景観のための、かなり大きな石が配されている。所々、石のない部分があるが、当初よりなかったものか、後に抜き取られたのか、もしくは池中に落ち込んだものか（調査時に池中に落ち込んだ石が検出された）判然としない。汀線の北および東側は比較的石の残存状態が良好であるが、掘形より2.0ｍ前後石組が内側へ入っている。これはずり落ちたのではなく、整地の状況などからみて、後の補修の可能性が強い。また、西北部分に多く石が配されており、ここでは、段状に石を組んでいる。これは護岸と言うより、むしろ景観を意識したものと考えられる。前記したＳＤ2129の導水溝との関連を考慮すれば、一連の施設（滝口的施設）とも考えられる。

池の埋土は下層より、腐植土層・暗灰色砂質土層・黒灰色土層・黄茶色土層・灰褐色土層から成る。最下層である腐植土層からは、多くの遺物が出土した。

土壙

ＳＫ2120　ＳＧ2130の南側にある不整形の土壙である。幅約1.5ｍ、長さ約3.0ｍ、深さ0.1ｍ前後の浅いものである。

ＳＫ2159　発掘区の西端で検出した不整形の浅い土壙である。一部を検出しただけで全形については不明。床土除去後に地山面で検出したものである。

不明遺構

ＳＸ2127　ＳＧ2130の当初の掘形の縁辺部で検出した土壙状の浅い窪みで、そこでは土師器がまとまって出土した。周辺では小石を敷いた状況のものが検出された。

ＳＸ2139　ＳＢ2140の西端部で検出した土壙状の浅い落ち込みである。ここからは土器がまとまって出土した。

出土遺物

ＳＤ2115出土土器・陶磁器（第５図、別表、図版27）

発掘区東端部で検出した石組の護岸を有する南北溝から出土したものである。

土師器

皿ｂ（４・５）　口径7.2cm・7.2cm、器高1.6cm・1.8cm、底径5.2cm・5.1cmである。

杯ａ（１・２）　口径・底径ともに12.6cm・9.0cm、器高2.8cm・3.1cmである。

杯ｂ（３）　口径11.6cm、器高3.0cm、底径5.4cmである。

釜（６）　口径13.5cm、器高18.2cmに復原できる。内面には粘土紐成形の際生じた指頭痕を残し、外面には刷毛目調整がある。胎土中には細砂粒を多く含み、また焼成は良好である。内面は焦げ付きが著しく、炭化物が付着している。

鍋（７）　復原すると口径35.6cm、器高15.3cmになる。刷毛目調整は体部内面および底部だけに行われる。他の部分、体部外面はナデ、口縁部はヨコナデ仕上げである。胎土中には少量の砂礫を含むが、比較的精良である。外面には煤が厚く付着し、内底には焦げつきが観察される。

白磁

椀（９）　内外面ともに粗いヘラ削りがなされる。このため内底は渦文状になる。胎土は白灰色、釉は淡緑灰色を呈する。類例は稀有である。

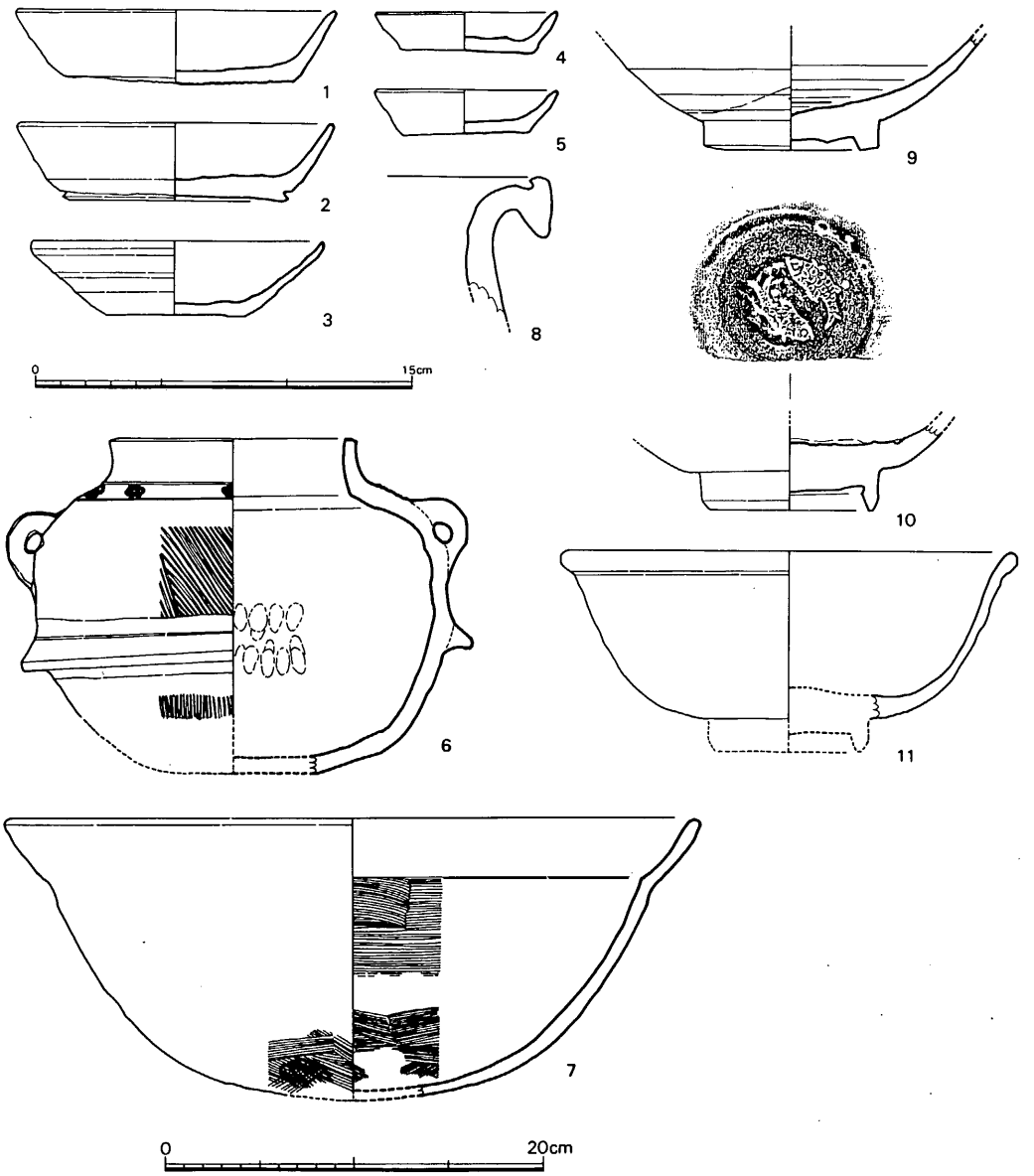
染付

椀　小片が１点出土した。高台先端部は露胎となっているが、いわゆる砂底ではない。胎土は白色緻密で、釉は青白色である。花文を描いたコバルトはあざやかな色を呈する。

青磁

椀（11・12）　11の内底見込み部は露胎となり、その部分に双魚文が押捺されている。胎土は粗く、白色の砂粒を非常に多く含み、暗赤茶色を呈する。外底見込み部に墨書があるが、判読困難である。12は口径18.2cmに復原できる。胎土は11と同様に粗い。この粗い土は暗灰色に焼成されている。釉は暗黄緑色を呈し、体部内面は擦痕が著しい。

以上の土器を概観すると16世紀代を下限とする。



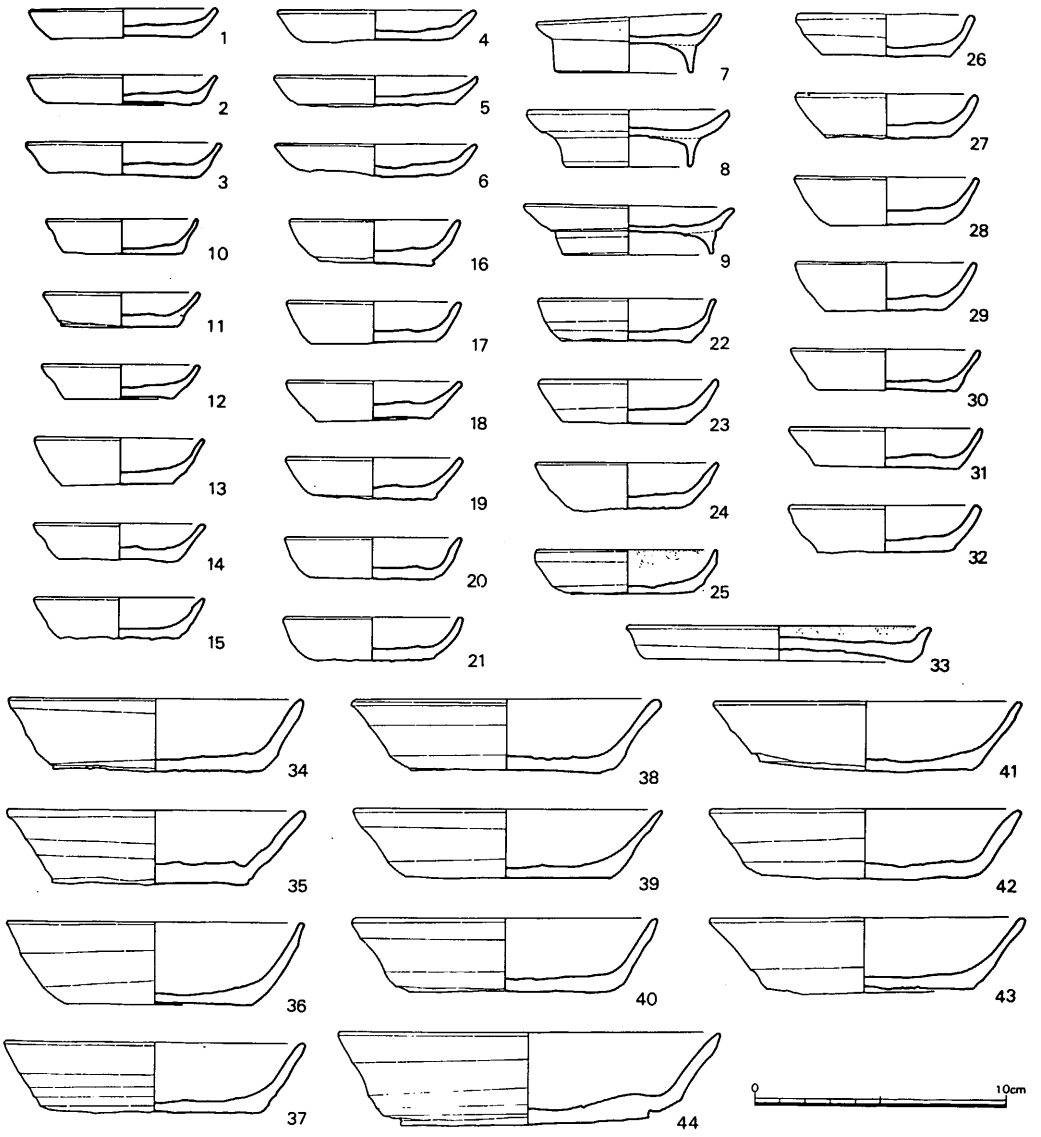
第５図　SD2115出土土器・陶磁器実測図

ＳＤ2145出土土器・陶磁器（第６図、別表、図版28・29）

土師器

Ⅲａ（１～６）　口径7.3cm～8.1cm、器高1.2cm～1.3cm、底径5.6cm～6.1cmである。

Ⅲｂ（10～32）　口径6.0cm～7.6cm、器高1.4cm～1.9cm、底径4.3cm～5.7cmである。25は灯火器として使用されたようで、油煙が付着している。



第6図　SD2145出土土器実測図

皿ｃ（７～９）　口径7.3cm～8.3cm、器高2.0cm～2.3cm、高台径5.0cm～6.0cmである。

皿（33）　口径11.9cm、器高1.4cm、底径10.5cmである。体部内面には油煙が付着していることから灯火器としての使用が考えられる。この種の皿は一般的には存しないもので、特別の目的のために造られたと思われる。

杯ａ・ｂ（34～43）　口径11.6cm～12.5cm、器高2.8cm～3.2cm、底径7.3cm～8.6cmである。法量からみるとＳＸ1200期（14世紀前半代）に相当する。

杯（44）　口径15.0cm、器高3.7cm、底径9.7cmである。ＳＧ2130（腐植土層）や黒灰色土層からも同一タイプのものが出土している。このタイプは今回の調査でまとまって出土している。時期を考える上で一つの手掛りとなる資料である。

白磁

Ⅸ類の皿２点と口縁部を露胎とし内面に雷文帯と花文の浮き文を有する皿１点が出土した。他に12世紀代の椀が出土している。

青磁

鎬蓮弁文椀Ⅰ－５・ｂ類２点と杯Ⅲ－４類１点が出土した（龍泉窯系）。ＳＸ1200新でみられる龍泉窯系青磁椀のなかで、口縁部を肥厚させたり、外反させるタイプは１点も出土していない。土師器の特徴とを考えあわせると、ＳＤ2145出土品は14世紀前半代のものとすることができる。

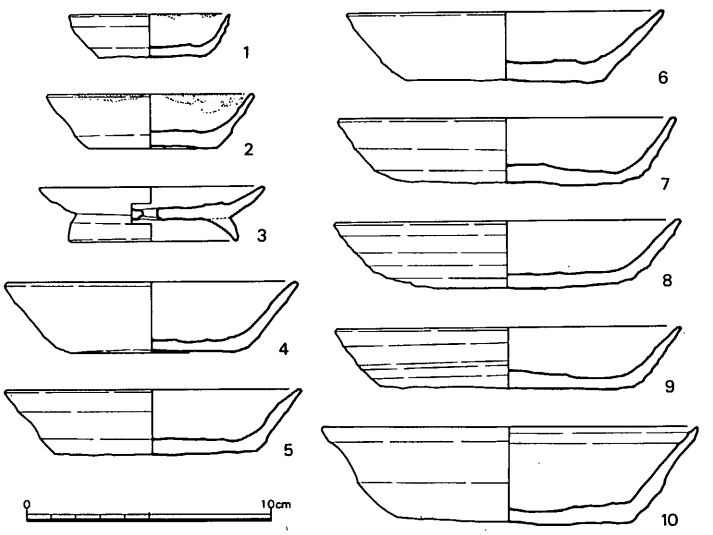
ＳＥ2110出土土器（第７図、別表、図版27）

上層からの出土はほとんどなく、下層から少数ではあるがまとまって出土した。

土師器

皿ｂ（１）　口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.5cmである。灯火器として使用されたようで、口縁部に煤の付着がみられる。

皿ｃ（３）　口径9.2cm、器高2.2cmを測る。底部中央に一つの搾孔がある。



第７図　SE2110出土土器実測図

皿ｄ（２）　口径8.4cm、器高2.2cm、底径5.3cmである。１と同様に灯火器として使用されている。

杯ａ・ｂ（４～９）　口径12.0cm～14.0cm、器高2.5cm～2.9cm、底径7.8cm～10.2cmである。６は杯ｂに属するものであろう。

杯ｂ（10）　口径15.2cm、器高3.8cm、底径9 5cmである。

ＳＧ2130出土土器・陶磁器（第８～11図、別表、図版30～33）

長期にわたって開いていたためか、土師器や陶磁器類が多数出土した。下層から腐植土層、

暗灰色砂質土層、黒灰色土層、黄茶色土層と層を成していた。そこで、ここでは層位毎に報告する。

腐植土層出土

土師器

皿a（1～6） 口径7.7cm～8.5cm、器高1.0cm～1.4cm、底径5.4cm～6.5cmである。1の内面には煤が付着している。

皿b（7～24） 大別すると7～21と22～24に分けられる。前者は口径6.4cm～7.6cm、器高1.5cm～2.1cm、底径3.9cm～5.4cm、後者は口径6.7cm～7.0cm、器高1.6cm～2.1cm、底径3.5cm～3.9cmである。前者よりも後者は口径に比して底径の割り合いが小さく、24の成形法は杯46・47と酷似し、それらはセットになると考えられる。22・23は前者と後者の中間的形態を有するが、ここでは器高を考慮し後者に入れた。後者は強いヨコナデ成形により体部、特に内面に凹凸を生じ、また内底にはナデ仕上げがないため板状圧痕は伴わないのを特徴の一つとするため、22・23はあるいは前者に入れた方がより妥当なのかも知れない。8・10～12・14・18～22には煤の付着がみられ、灯火器として使用されたと考えられる。

皿d（25） 口径8.5cm、器高2.7cm、底径5.1cmである。

杯a・b（27～47） 法量からA(27～36)、B(37～42)、C(31～45)、D(46～47)に分かれる。Aは口径12.4cm～13.5cm、器高2.6cm～3.0cm、底径7.4cm～8.8cm、Bは口径13.5cm～14.0cm、器高2.8cm～3.4cm、底径7.2cm～9.2cm、Cは口径12.1cm～12.2cm、器高2.8cm～3.1cm、底径6.5cm～7.0cm、Dは口径12.3cm・13.1cm、器高3.0cm・4.0cm、底径4.9cm・4.2cmである。A～Cは14世紀から15世紀代、Dは15世紀終り頃から16世紀中頃までと考えられる。

鍋（57） 口径25.3cmに復原できる。粘土紐成形の後、内面は全て、外面は体部下位だけを刷毛目調整している。口縁部と体部の境は内面では明瞭であるが、外面ではほとんど区別はつかない。鍋の形態としては最終期と考えられる。外面には濃密に煤の付着がみられる。胎土中の砂粒は少なく比較的精良である。

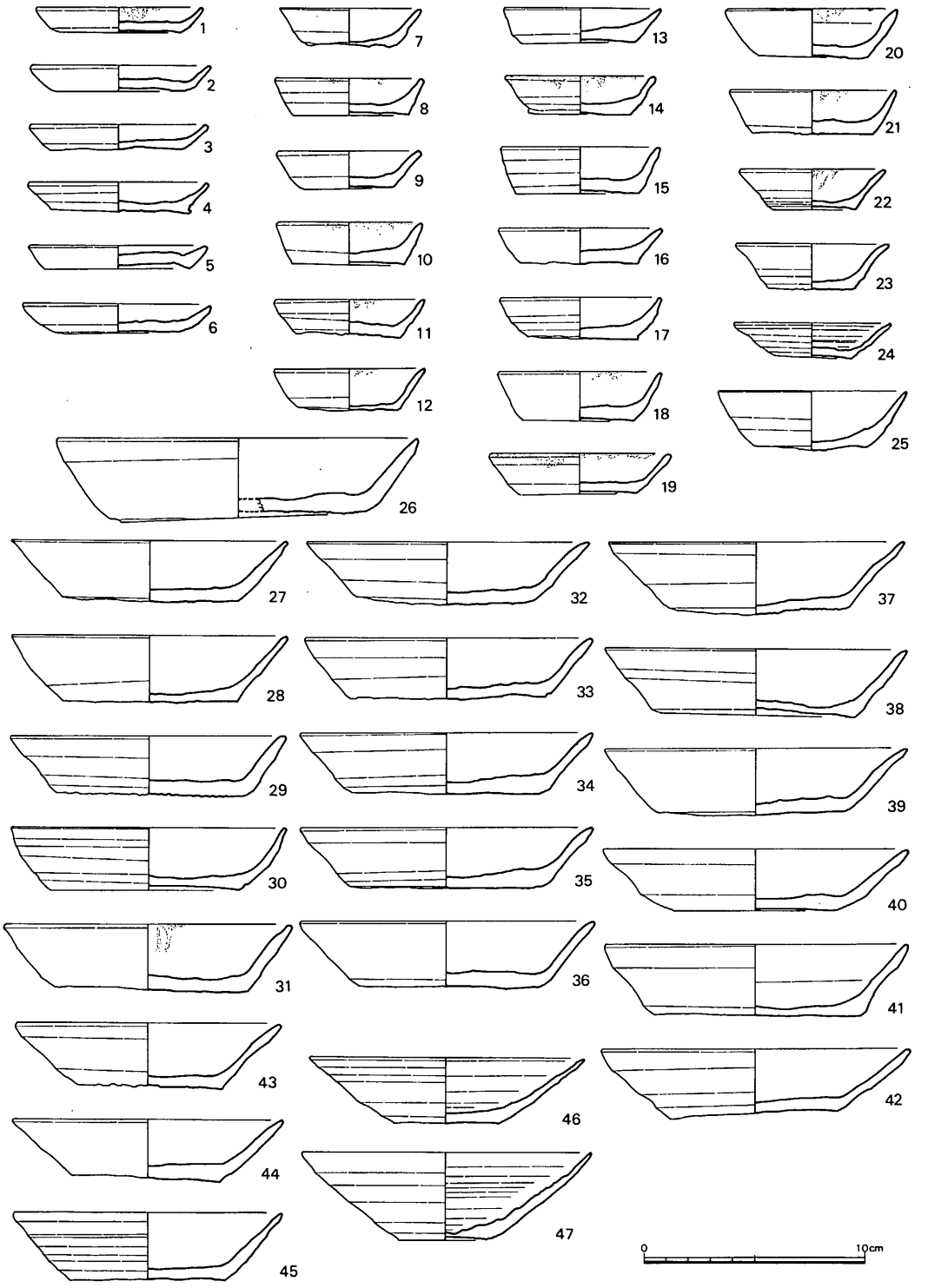
摺鉢（58） 口径30.8cm、器高11.3cmに復原できる。内面の刷毛目調整は木目の小さなものを使用しているが、外面は粗い。下し目は5本を単位とする。胎土中の砂粒は比較的多く、また焼成は軟質である。部分的に黒色を呈する所があるが、全体的には淡赤茶色を呈する。

瓦質土器

鉢（59） 体部を内彎させ、肩部に16弁の菊花文を押捺している54が出土した。復原すると口径は45cm程になる。体部内面は上半部はヨコナデ、下半部は刷毛目調整、外面は横方向のヘラミガキを行う。胎土中には少量の砂粒を含む。暗灰色を呈する。

白磁

皿（65・66・68） 65・66はいわゆる「口禿げ」のもので、白磁皿Ⅸ－1類に属する。68は



第８図　SG2130出土土器・陶磁器実測図(１)

細い貫入を伴う淡黄色の釉を有する小形の高台付皿であり、14世紀末から15世紀代にかけてのものである。

椀（67）　白磁椀Ⅸ類である。

青白磁

皿（69）　小片からの復原のため口径は不正確である。器肉が薄く、白色の胎土と淡青色を呈する釉をみると、非常に造りの良い優品といえる。内面には雷文と花文が型により浮きあがって描かれている。口禿げ部分にかぶせた銀鉤の一部も残存している。

青磁

椀（70～72）　70は口縁部を外反させる、いわゆる「端反り」の椀で、14世紀中頃以降の遺構からしばしば出土するタイプである。釉は薄く淡灰青色を呈する。胎土は暗灰色でやや粗である。71は全面施釉後、高台見込み部分の釉を環状にカキ取る龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。釉は厚くかけられ暗緑色を呈する。胎土は淡青灰色を呈する。内面には小さな花文様が押捺されている。72は暗灰色の胎土を有し、淡黄緑色の釉が高台見込み部分に除いてかけられている。体部の傾斜角度からそれほど大きな口径にはならないであろう。14世紀末から15世紀代にかけてのものと思われる。

黒釉陶器

椀（73）　口径10cm程の小椀である。黒灰色を呈する胎土は若干粗い。釉は口縁部付近は薄く濁茶色を呈するが、下るにしたがって厚くなり、漆黒色になる。口縁部付近を除いて内外の釉面に灰色の禾目が走る。

高麗陶磁

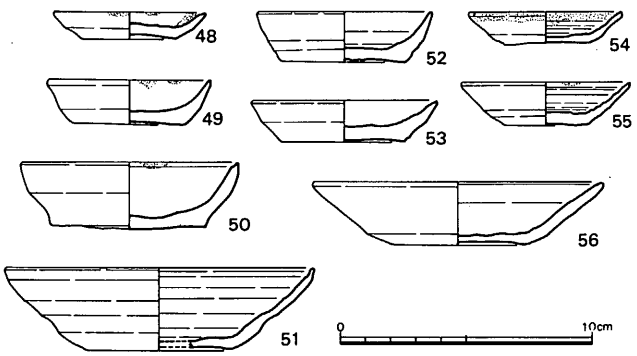
椀（74）　口径19.4cm、器高6.9cm、高台径5.7cmに復原できる象嵌青磁である。胎土は暗灰色を呈し、灰緑色の薄い釉が全面にかかる。象嵌は白を主体とし、花文の内側の線だけは黒象嵌をしている。胎土と同質の粘土を用いた目跡がある。2個残存しているが、復原すると5個になるであろう。高台見込み部分はヘラで粘土をこきざみに削ったような痕跡が一面にある。ある。高台畳付部分には砂粒が多数付着している。

暗灰色砂質土層出土

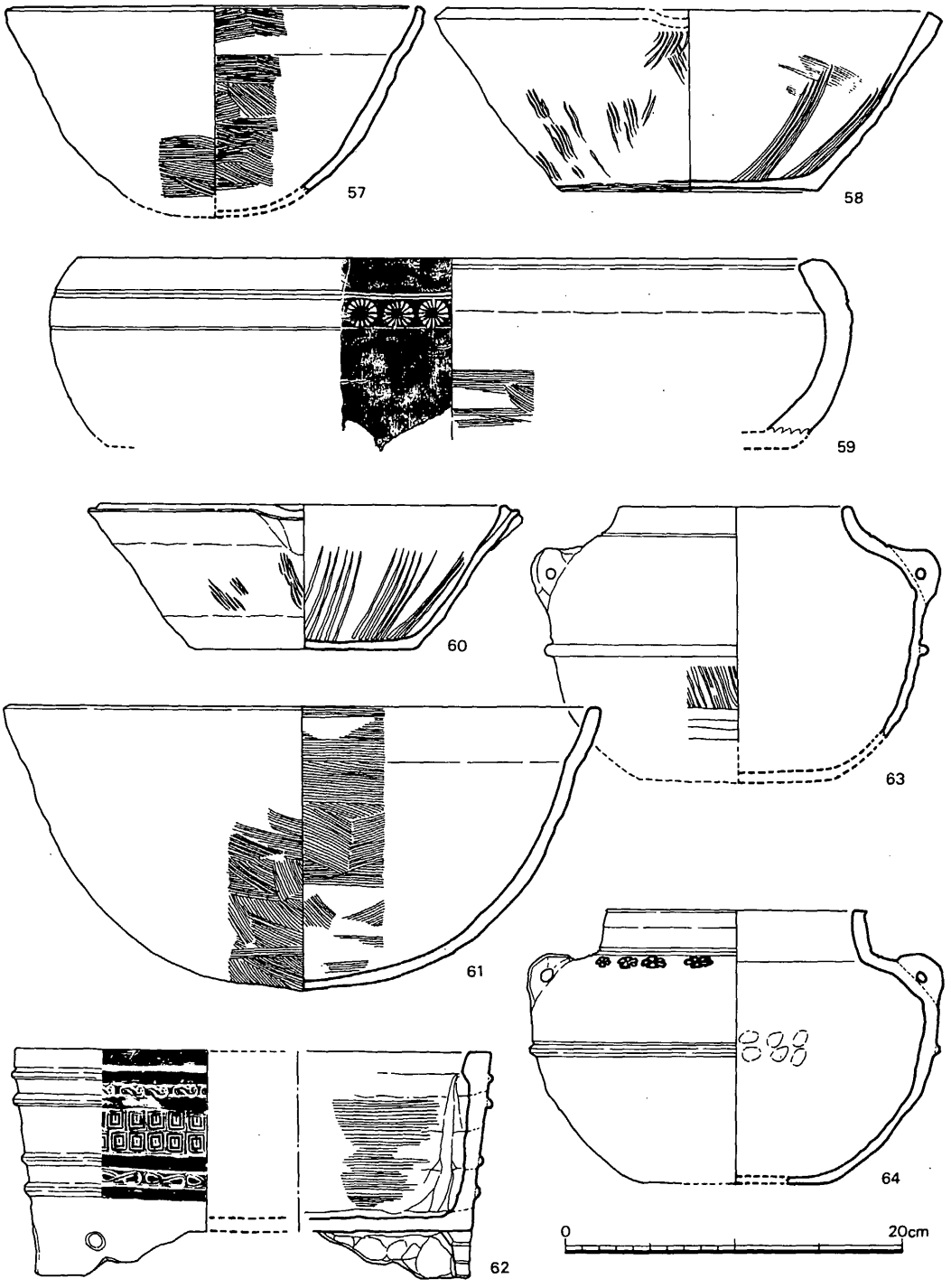
土師器

皿b（48・49）　口径6.0cm・6.6cm、器高1.1cm・1.7cm、底径3.8cm・4.3cmである。48・49ともに灯火器として使用されている。

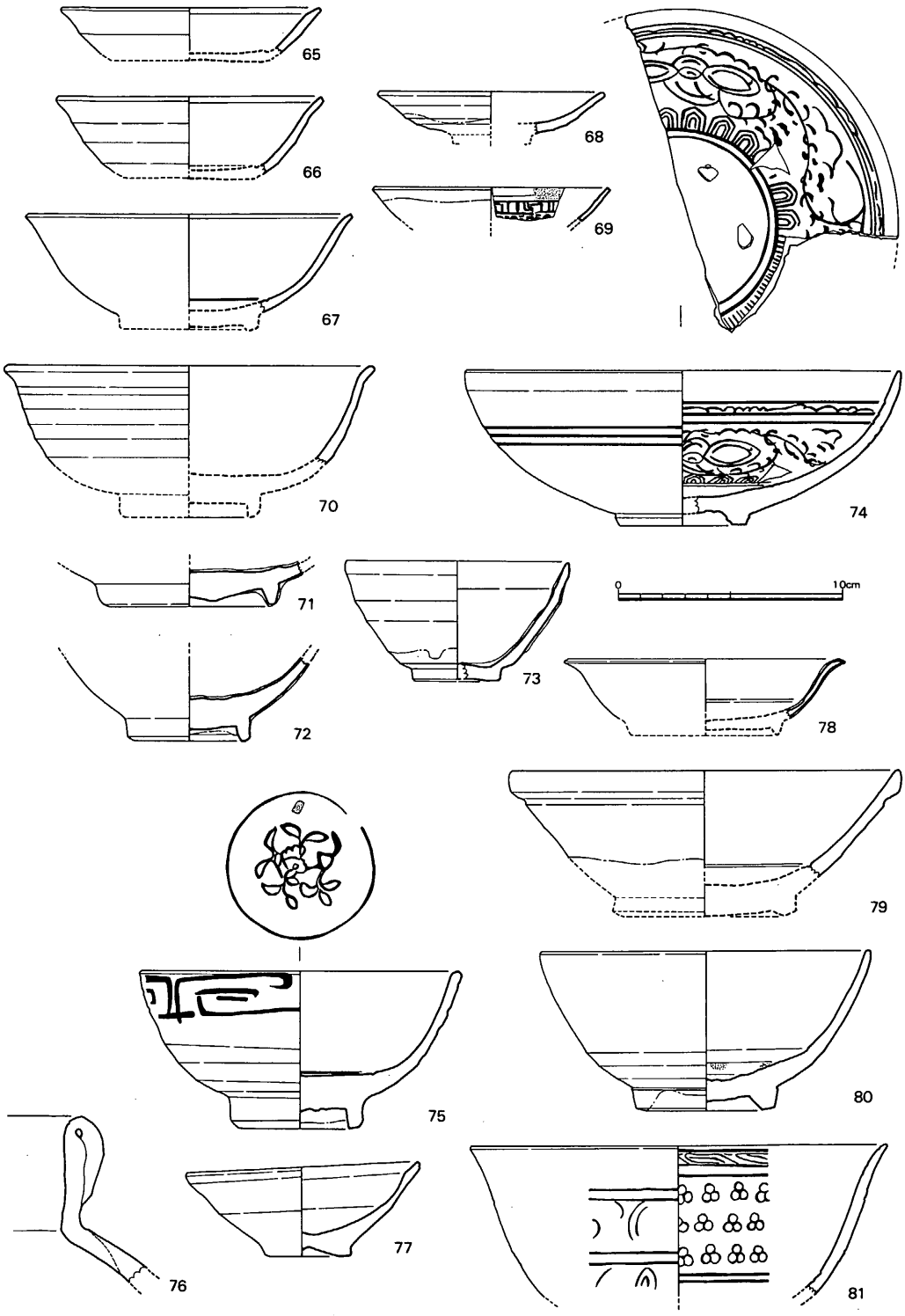
皿d（50）　口径8.7cm、器



第9図　SG2130出土土器・陶磁器実測図（2）



第10図　SG2130出土土器・陶磁器実測図(３)



第11図　SG2130出土土器・陶磁器実測図(４)

高2.6cm、底径6.0cmで、口縁部に油煙が付着している。

杯b（51）　口径12.3cm、器高3.3cm、底径5.7cmである。器壁は薄く強いロクロ目を残す。

陶器

甕（76）　幅4cm程を測る大きな玉縁口縁を有する。若干砂粒を含むが、良く精選された胎土を用い、暗赤褐色で硬質に焼成されている。備前焼であろう。

青磁

椀（75）　口径14.4cm、器高7.1cm、高台径5.9cmである。外面上位に大きな単位の雷文帯を描き、内底面に花文をスタンプしている。胎土は黄白色を呈する。緑黄色の釉は高台台部内側中位までかかり、小さな貫入を無数伴なう。高台畳付部の釉は焼成後摺り取っている。

黒灰色土層出土

土師器

皿b（52～55）　52・53と54・55に分かれる。前者は口径7.1cm・7.4cm、器高2.0cm・1.6cm、底径4.9cm・4.9cm、後者は口径6.0cm・6.6cm、器高1.3cm・1.6cm、底径3.3cm・3.2cmである。54・55ともにヨコナデ成形だけでナデを伴なわない。

杯b（56）　口径11.4cm、器高2.5cm、底径5.1cmである。口縁部の内側に1条の沈線が巡る。

鍋（61）　口径36cm、器高17.5cmである。内外面とも刷毛目調整を行なうが、外面上位は器面剥離および成形時の指押えが顕著なため明確ではない。砂礫を少量含むが比較的精良で、焼成も良好である。淡茶色を呈する。外面は煤が濃密に付着している。

鉢（60）　約半分残存しているので、口径25.9cm、器高13.9cm、底径12.9cmに復原できる。内・外面の一部に刷毛目調整が残っている。下し目は6本を1単位とする。胎土中には砂粒を多く含み、粗い。焼成は硬質で淡茶色を呈する。

瓦質土器

釜（62）　口径14.0cmを測り、肩部に耳を2個有する茶釜形のものである。口頸部および内面はヨコナデ調整、突帯より上位は生乾燥時にヘラナデを行なっているためヘラミガキ状であり、突帯より下位は刷毛目調整の上からヨコ方向のヘラ削りをしている。内外面ともに燻しのため黒色を呈する。また、外面には煤が厚く付着している。

鉢（63）　方形の鉢の隅部の破片のため一辺の長さは明らかでない。外面には4本の突帯を貼付し、その間に「S」「二枡文」「8」文を押捺している。また脚部に円文がある。胎土は精良で比較的砂粒は少ない。内外面ともに黒灰色を呈する。

白磁

皿（78）　高台付皿の小破片である。胎土・釉ともに白色を呈する。明時代。

椀（79）　口縁部を断面四角形に仕上げたⅣ類である。

李朝陶磁

椀（77・80）　80は口径14.8cm、器高7.2cm、高台径6.2cmを測る。胎土は淡黄白色を呈し、焼成はあまい。内面の釉は淡黄色、外面は淡黄灰色で、全面に施釉され、内面には貫入を多数伴う。内面見込み部分は強い水挽きのため渦文をえがき、５つの目跡がある。外底見込み部分は粘土が軟らかい時点で削ったためか一般にいう「かいらぎ」がみられる。77は口径10.4cm、器高4.0cm、高台径3.8cmである。火のあたりが良い部分は暗灰色に、悪い部分は茶褐色に焼成されている。釉は胎土の暗灰色部分は暗灰色、茶褐色部分は灰白色を呈する。釉は全面に施釉されているが、畳付部分は焼成後摺り取っている。

黄茶色土層出土

瓦質土器

釜（64）　口径15.6cm、器高16.9cm、底径11.3cmに復原できる。粘土紐成形の際生じた指頭痕が内面に若干残っている。体部下位は62と同様にヨコ方向のヘラ削りをしている。肩部上位に１条の沈線を巡らし、その直下に梅花文を押捺している。胎土は精良で砂粒を含まない。焼成は硬質で、器肉内部は灰白色、器面は黒色である。

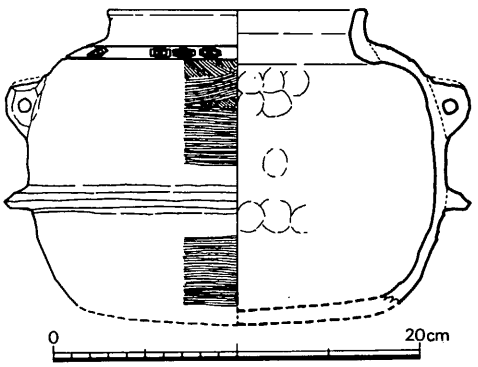
高麗陶磁

椀（81）　口径18.5cm程になる。胎土は暗灰色である。暗灰青色の釉は細かい貫入を多数伴なう。また外面の釉は大部分が白濁化しているため外面の象嵌文様は明らかでない。文様は全て白象嵌している。

ＳＫ2120出土土器（第12図）

瓦質土器

釜　口径14.4cm、器高18cm程に復原できる。肩部に双耳を貼付し、胴部中位に高さ1.5cmの突帯を巡らしている。双耳の上位に２条の沈線を巡らし、その間に六角形文を押捺している。外面は刷毛目調整、内面は粘土紐成形時に生じた指頭痕の上からヨコナデおよびナデによって仕上げている。口頸部はヨコナデ仕上げである。胎土中の砂粒は少なく精良である。燻しは浅く、若干茶色をおびる部分もある。外面の煤の付着は著しい。



第12図　SK2120出土土器実測図

ＳＫ2159出土土器（第13図、別表）

発掘区西端で検出した浅い土壙から多数の土器が出土した。しかし、細片化しているものが大部分であるため、完成品かそれに近いものを実測し、図示した。

土師器

皿ｂ（１～３）　口径6.2cm～6.8cm、器高1.5cm～1.7cm、底径4.0cm～4.5cmである。

杯ａ（６）　口径12.4cm、器高2.7cm、底径8.2cmである。

杯b（4・5・7・8）　口径11.6cm～12.7cm、器高2.4cm～2.9cm、底径6.7cm～7.7cmである。

ＳＸ2127出土土器（第14図、別表、図版34）

ＳＧ2130の北側石組から一括して出土した。遺構それ自体は明らかでなく、ＳＧ2130腐植土層に属する可能性もある。

土師器

杯a（1～8）　口径12.6cm～14.0cm、器高2.6cm～2.9cm、底径8.2cm～9.2cmである。全て内底にナデ、外底に板状圧痕がある。

杯（9～11）　口径16.1cm～16.8cm、器高3.4cm～3.9cm、底径11.0cm～11.6cmである。この種の大形品は、全体の出土量からみると、量は少なく、用途を考えると興味ある資料である。

ＳＸ2139出土土器（第15図、別表、図版34）

土師器

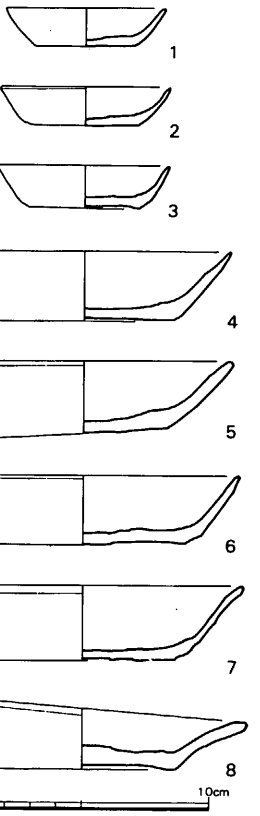
皿a（1～3）　口径7.7cm～8.4cm、器高1.1cm～1.5cm、底径5.5cm～6.3cmである。

皿b（4～8）　口径7.1cm～7.9cm、器高1.7cm～1.8cm、底径4.5cm～5.7cmである。

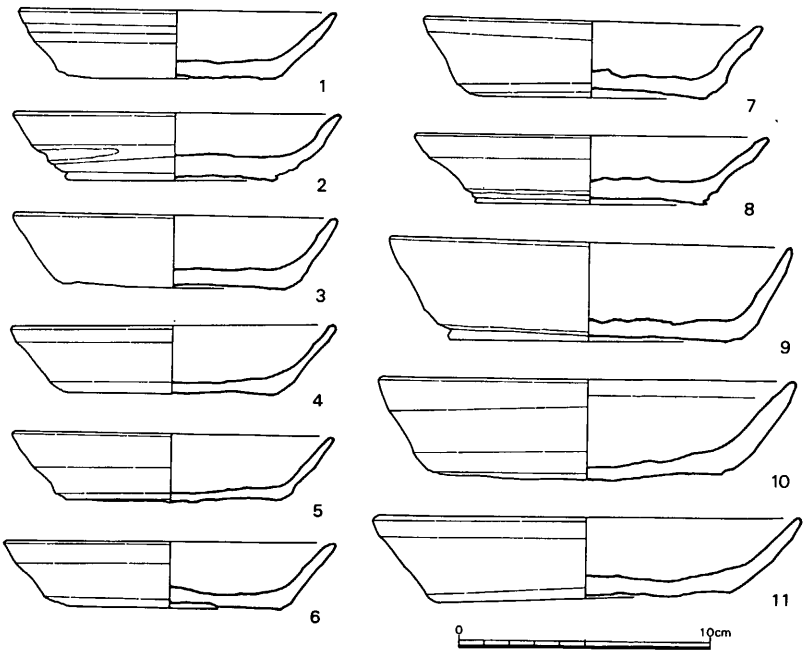
皿d（9）　口径8.9cm、器高2.5cm、底径5.2cmである。

杯a・b（10～14）　口径12.0cm～12.4cm、器高2.9cm～3.1cm、底径7.4cm～8.3cmである。

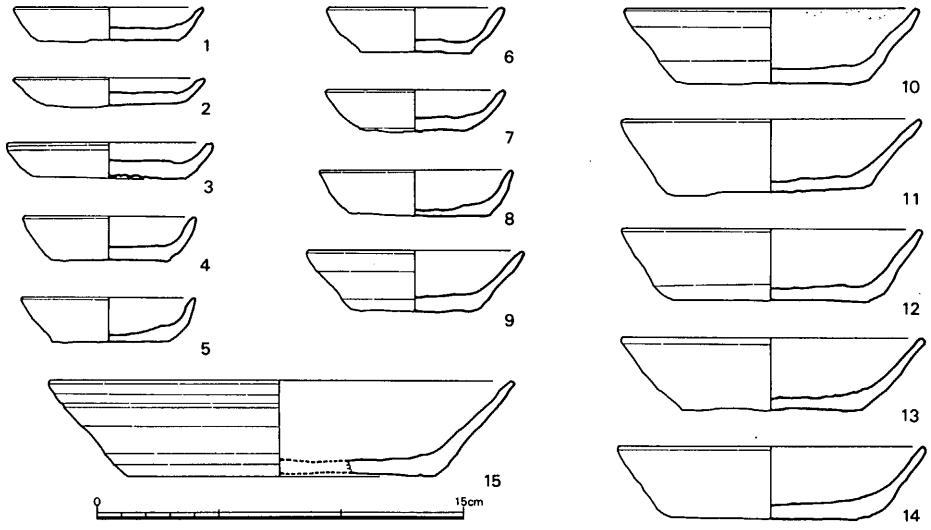
杯（15）　口径



第13図　SK2159出土土器実測図



第14図　SX2127出土土器実測図



第15図　SX2139出土土器実測図

19.0cm、器高3.9cm、底径12.6cmである。杯の大形品としては最大級に属する。

下層腐植土層出土土器・陶磁器（第16図、別表、図版35）

下層腐植土層は、SG2130の下位で検出した層であり、更に四方へ延びるが、上位に遺構があるため、調査した範囲は少ない。そのため検出した土器・陶磁器は限られる。

土師器

皿a（1～10）　口径7.3cm～9.2cm、器高0.9cm～1.4cm、底径5.4cm～7.2cmである。6以外は全て板状圧痕がある。法量からみると1、2～9と10の3者に分けられる。

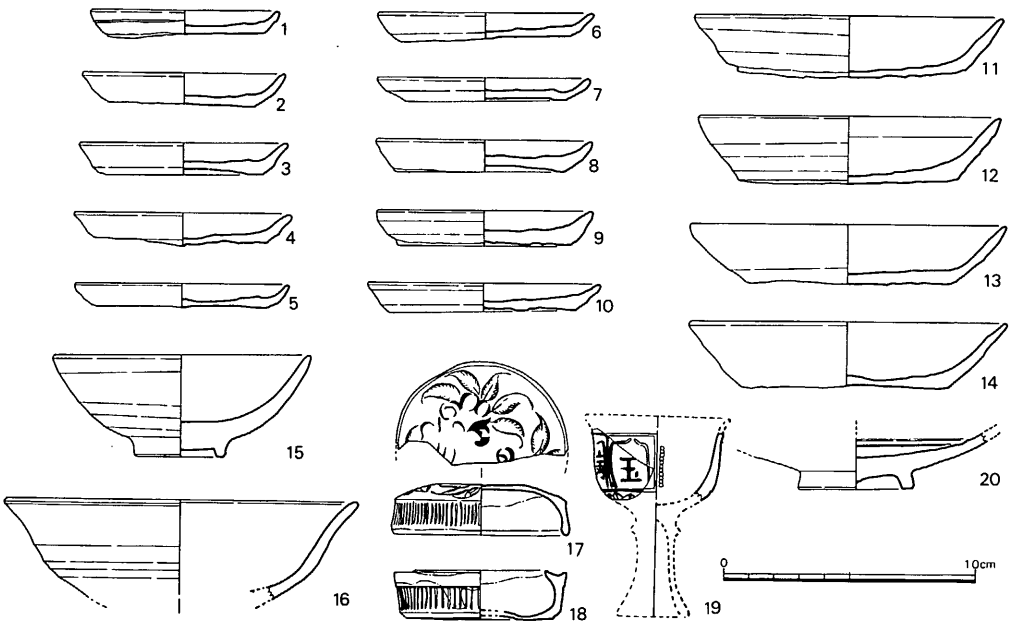
杯a（11～13）　口径12.3cm～12.6cm、器高2.4cm～2.6cm、底径8.5cm～8.9cmである。

杯b（14）　口径12.7cm、器高2.7cm、底径8.0cmである。aに比して底径を減じている。SX1200新に相当し、14世紀中頃と考えられる。

白磁

皿（20）　Ⅸ類が9割以上を占める。20は内面に唐草文の浮文がある枢府系の皿である。淡青灰白色を呈する釉は高台畳付以内を除いて均一にかけられている。胎土は白色で緻密である。高台内側の一部に砂が焦げついている。

椀（16）　12世紀代のものを除外すると、Ⅸ類が全てである。16は灰白色の胎土に若干草色をおびた灰白色の釉がかかる。体部上位から下位にかけて回転ヘラ削り調整が顕著である。C群の椀が2点出土している。鹿児島県から沖縄県にかけて数的に多く出土しているタイプで、北部九州では少ない。厚い断面四角形の高台と内面に花文をスタンプするのを特徴とし、従来位置付けが困難であった資料である。混入でなければ14世紀中頃まで上る可能性がある。



第16図　下層腐植土層出土土器・陶磁器実測図

青白磁

杯（19）　体部の小片である。外面に型造りによる「金」「玉」および蓮弁文様を浮き上がらせている。吉祥句が入る枠は復原すると6つになり、「金玉満堂」以外の文字か文様が配されていたと考えられる。内面はビーズ玉様の紐を型で造り貼付している。残存部には1本しかないため幾本あったか明らかでないが、残存部から復原すると5本以上にはならない。3ないし4本が貼付されていたのであろう。白色緻密の胎土であり、釉は水色を呈する。断面に漆が塗られており、破損後修復したと考えられる。器形の復原は小片のため困難であるが、一応図示したように馬上杯と考えた。

青磁

皿　龍泉窪系青磁皿が1点出土した（図版）

杯　龍泉窯系青磁杯Ⅲ－4・b類が2点出土した。このうち1点は内底に双魚文がみられる。

椀（15）　龍泉窯系青磁の蓮弁文椀が圧倒的である。同安窯系のものが1点出土している。15は、一部を欠くがほぼ完存する龍泉窯系青磁小椀Ⅰ－5類である。外底見込み部分に焼き台の一部が残っている。龍泉窯系青磁小椀Ⅲ－1・a類の口縁部の釉をカキ取り、伏せ焼きしたものも1点出土した。この他に新安沖出土品にみられるような、間弁が略化されようとするタイプのものも1点ある。

褐釉陶器

合子（17・18）　17・18ともに胎土は淡茶灰色、釉は若干黄色味をおびた暗褐色を呈する。また、17・18はともに笵に入れ、外面の文様を浮き出している。17は天井に花文、体部に連子文、18は体部に連子文を入れている。17は口縁端部を除き外面は全面に、内面は内底部のみ、18は外面上端部と内面一面に釉をかけている。口径が合致することと、釉・胎土からセットになると考えられる。

黒灰色土下層出土土器・陶磁器（第17～19図、図版36～38）

土師器

この層には多数の皿や杯の完形品が一括して出土した。

皿ａ（１～９）　口径7.3cm～8.7cm、器高1.1cm～1.5cm、底径5.3cm～6.8cmである。２以外は全て板状圧痕がある。

皿ｂ（13～89）　口径6.0cm～8.1cm、器高1.4cm～2.2cm、底径3.6cm～6.3cmである。89は皿ａの大形品かも知れない。このｂはａやｃに比して圧倒的に多い。通例ｂ・ｃは少なくａが多数を占めるが、ここでは逆の現象がみられた。ＳＸ1200でもこのようなことが指摘でき、この時期以降よくみられる現象である。

杯ａ・ｂ（99～150）　口径11.4cm～12.9cm、器高2.5cm～3.2cm、底径6.5cm～8.9cmである。ａ・ｂが混在しているがａの方が多い。ＳＸ1200出土杯と形態・法量ともに酷似するが、ＳＸ1200で出土した口径13cm代のものはない。ＳＸ1200新よりも若干古期に属するのであろう。

杯（151・152）　口径16cm、17cmを測る大形のもので、14世紀前後の時期から出現するようである。量的には極めて少ない。

白磁

皿　白磁皿はⅨ類だけであるが、非常に少なく、５点出土しただけである。

椀　Ⅸ類が１点出土した。

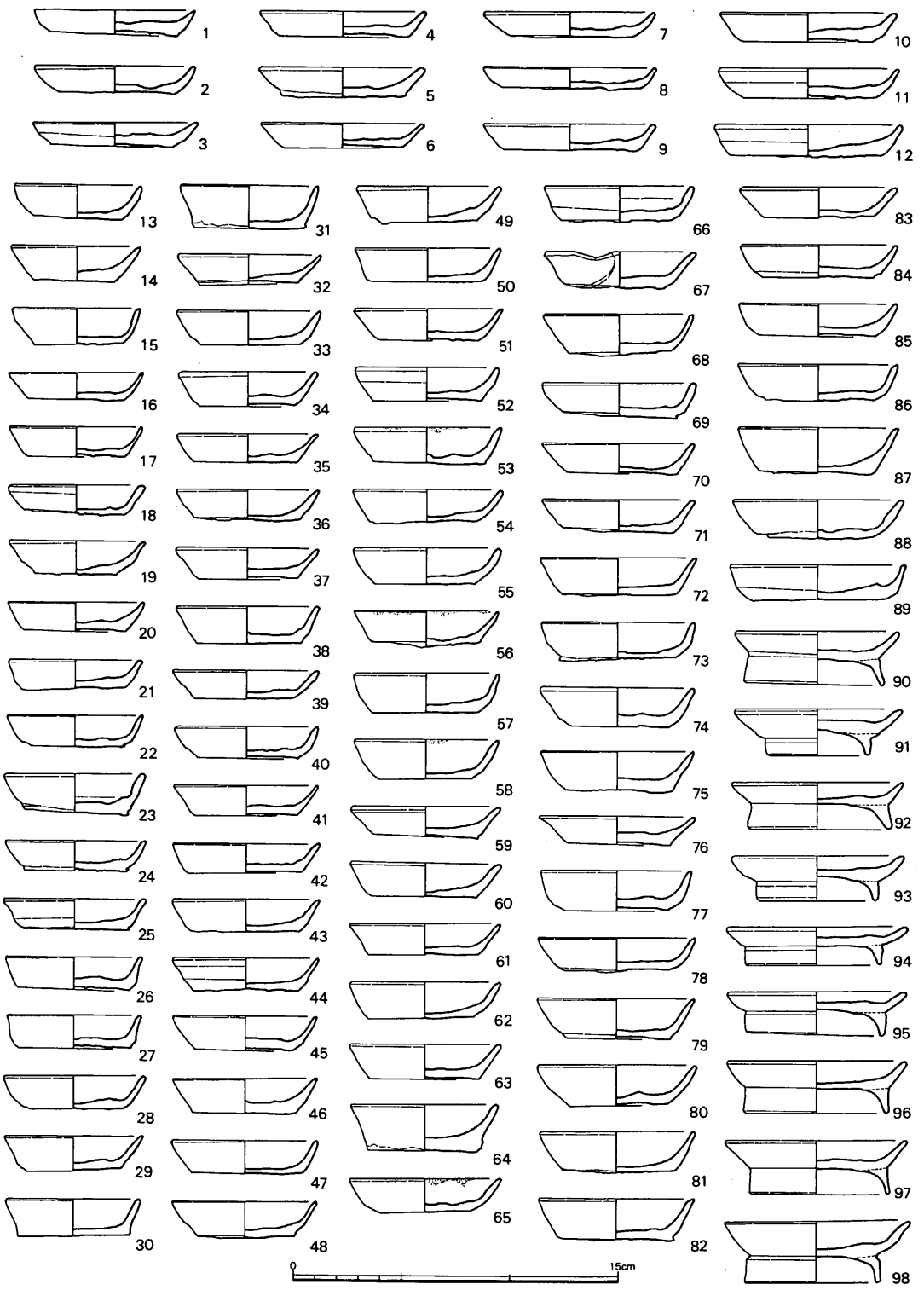
合子（153）　型造りにより外面に蓮弁文と半円形の文様を突線で表現している。胎土は白色緻密である。白化粧がかけられており、露胎部分は淡赤色を呈する。釉は白色に近いが、若干青味をおびる。体部下位は円形の焼き焦げがみられ、その部分から上位と下位では色調が異なる。筒形か中央が窪む焼台に置いて焼成されたと思われる。大宰府では初めての資料である。

青白磁

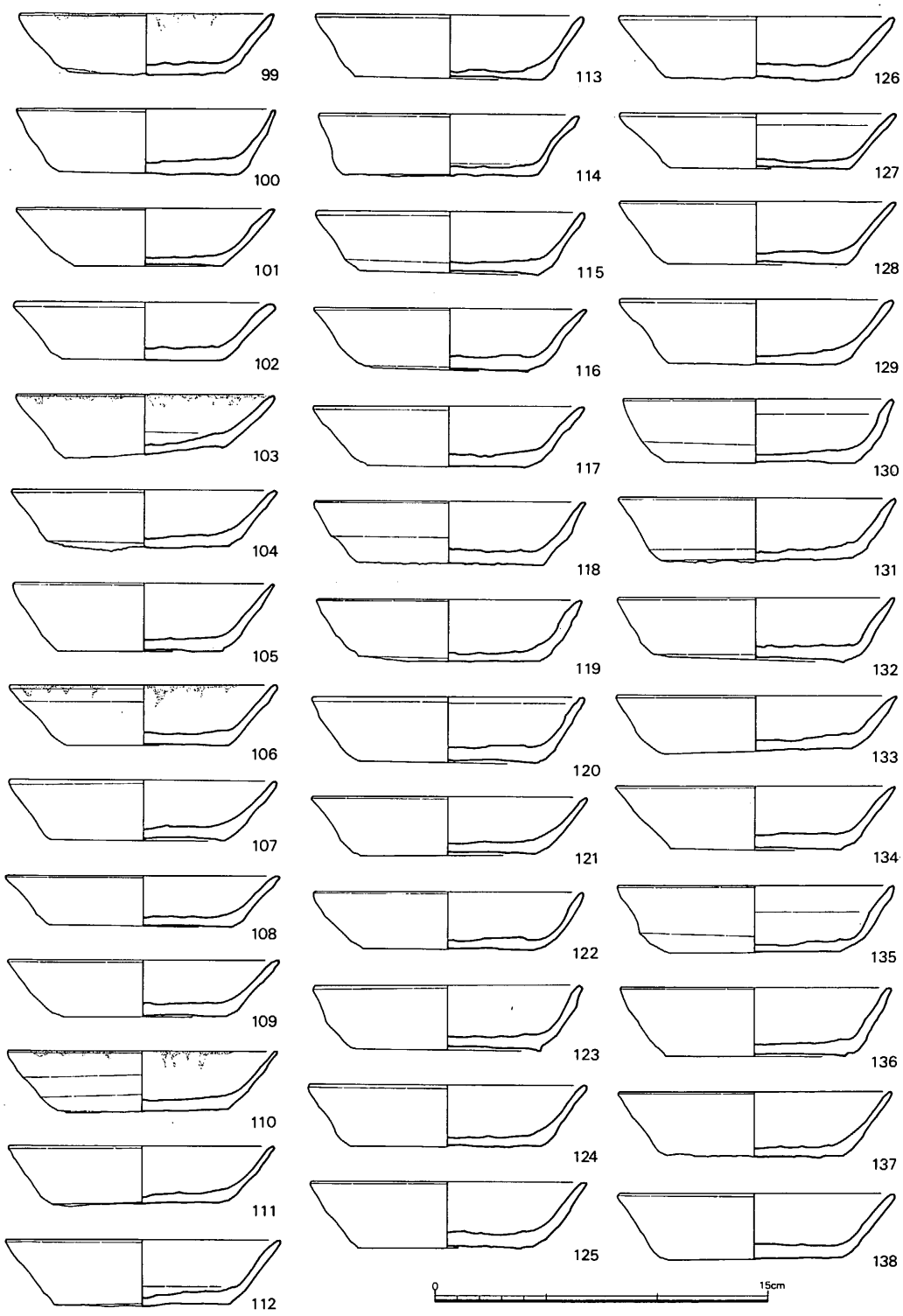
皿・杯・椀が出土している。

杯（154）　型により内面に雷文帯と蓮弁文か蓮弁文のみの浮文を描くものが７点出土した。いずれも薄手で白色緻密な胎土を有する。みな小片であるが、154はそのなかでもっとも大きな破片である。薄くかけられた青白色の釉は鮮かである。

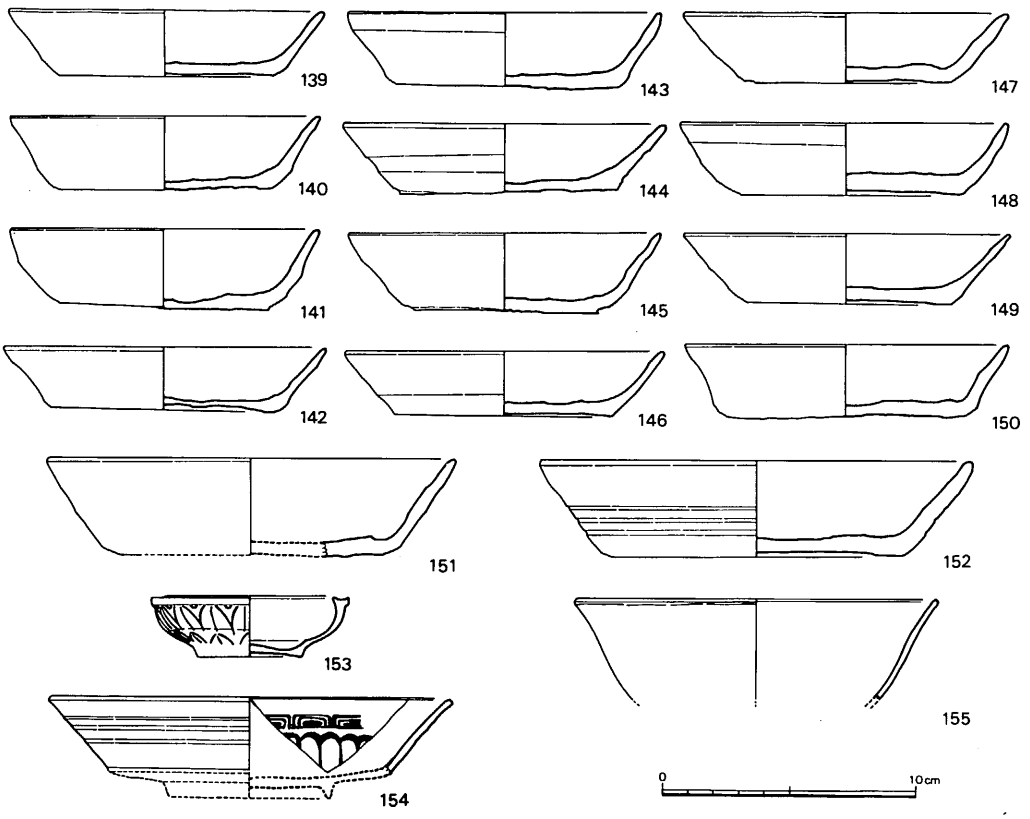
椀（155）　薄く、高く削り出された高台を有し、型により内面に花文を入れた椀（図版38－Ａ）や口縁部を大きく外反させ内面に雷文帯と花文を型により描く例（図版38－Ａ）が出土し



第17図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(１)



第18図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(２)



第19図　黒灰色土下層出土土器・陶磁器実測図(３)

た。155は無文で口縁部を露胎としている。胎土は薄く精巧な造りである。

青磁

椀・盤などが出土した。

龍泉窯系青磁椀Ⅴ類がもっとも多いが、間弁がなく沈線で蓮弁文を描く例（図版38－Ｂ）や龍泉窯系青磁小椀Ⅲ－３類（図版38－Ｂ）も出土した。

各層出土土器・陶磁器（第20図、図版38）

茶色土層

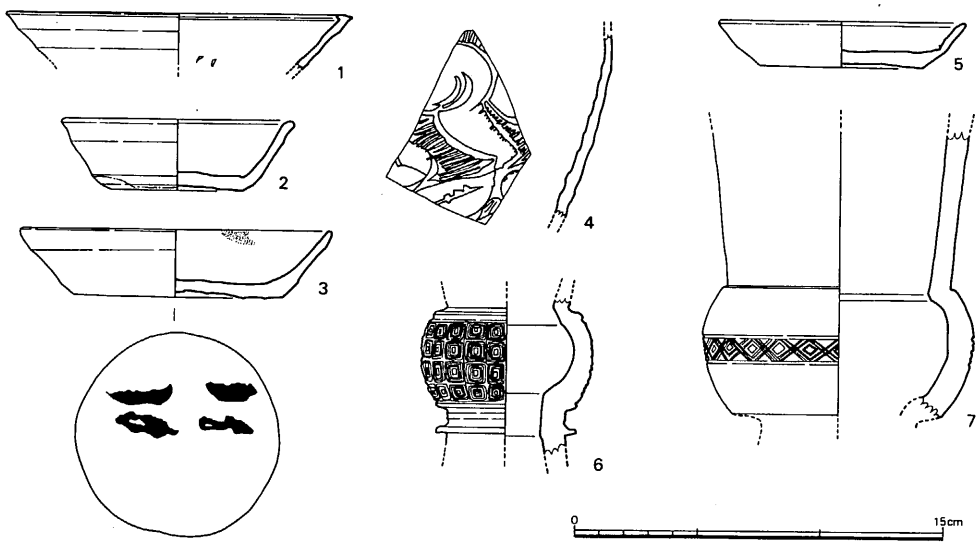
灰釉陶器

下し皿（１）　口径14.0cmに復原できるが小片のため明らかでない。内面の下し目は上部の一部がみえるだけである。灰釉は残存部全体にはあるが全てに施されたかどうか明らかでない。

黄灰色土層

土師器

杯（３）　口径12.3cm、器高2.8cm、底径8.4cmである。口縁部内面に煤の付着があることか



第20図　各層出土土器・陶磁器実測図

ら、灯火器として使用されたのであろう。一方、外底には眉と目を描く。呪術的な目的にも使用されたのであろう。

暗灰色砂質土層

瓦質土器

瓶（６・７）　６は脚部と胴部との境に１条の突帯を有し、円球状の胴部には三枡文の押捺文がある。７は胴部中央部に２条の沈線間に複斜格子文と菱形文を入れている。外面は摩滅のため不明瞭であるが、ヘラミガキがなされている。２点とも胎土中に少量の砂粒を含み、外面は真黒色に燻されている。

白磁

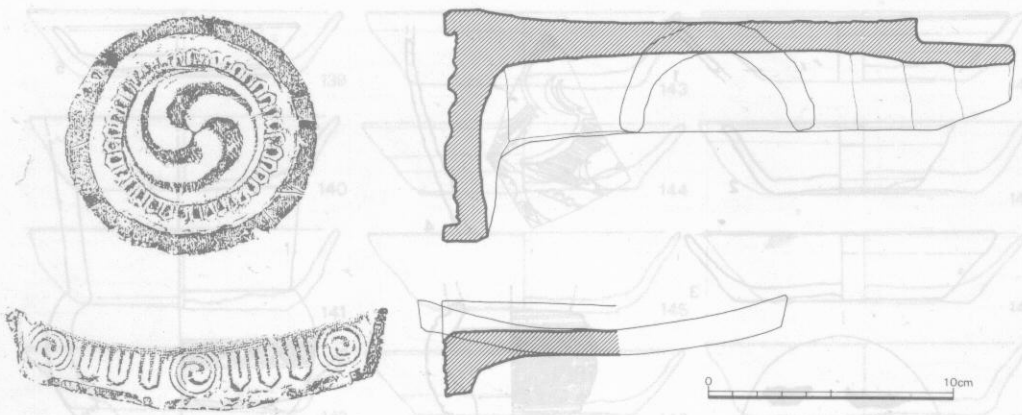
皿（５）　口径10.0cm、器高1.9cm、底径6.6cmである。口縁部を露胎とする他は全面に施釉される。体部中位から外底部まで回転ヘラ削り調整をしている。

青白磁

瓶（４）　体部外面に唐子文を有する梅瓶である。唐子は脚を曲げ臀部をかがめている。胎土は精良で白色緻密である。内面は露胎で、淡黄色を呈し、外面にかけられた釉は青白色の光沢を放つ。

瓦類（第21・22図）

この調査で出土した瓦類は少なく軒丸瓦22点、軒平瓦25点の他若干の丸・平瓦である。これらのほとんどは中世に属するものであり、奈良、平安期に属するものとしては軒丸瓦では老司Ⅰ式および鴻臚館式を含む３点であり、軒平瓦では老司Ⅰ式１点のみである。ここでは第21・



第21図　軒先瓦拓影実測図



第22図　軒先瓦

22図に示した軒先瓦について述べる。

軒丸瓦は８点出土している。全長23.5cm、瓦当径9.5cm～10cmの小型で内区文様は三巴文である。巴文の頭部は尖り気味で中央部で連接しており尾部は比較的長い。この三巴文の周囲には精巧な剣頭文を密に繞らしている。外縁は幅１cmほどの平担縁をなす。平瓦部凸面は二重格子の叩き目を残しており調整は行っていない。凹面は目のこまかい布目を残している。胎土は荒い砂粒をかなり含んでいる。すべて表面は灰色を呈し、焼成は堅緻である。

軒平瓦は瓦当幅15cm前後、瓦当厚2.5cmの小型である。瓦当文様は中央と両脇に二重の円圏によって囲まれた頭部の連接する二巴文を配し、その中間に三個ずつ剣頭文を配している。瓦当は木村捷三郎氏の言う「折り曲げ造り」で、瓦当上縁部は曲線をなしており、瓦当角は直角に近い。瓦当文様面に布目を残すものがある。平瓦部凸面は軒丸瓦同様に二重格子の叩き目が残る。凹面は全面に布目を残しており、ほとんど調整は行われていない。胎土は荒い砂粒を多量に含み、表面は灰色を呈する。焼成は堅緻である。

この軒丸瓦と軒平瓦はセットをなすものと推定されるが、この両者の凸面に残る二重格子の叩き目は大宰府政庁から比較的多量に出土している「賀茂」銘を有する平安期の瓦にも認められるものであり、瓦当文様は全く異なっているが、この軒先瓦は、この「賀茂」銘を有する瓦の系譜を引くものかも知れない。また軒丸瓦、軒平瓦とも同笵と思われるものが福岡市東区香椎

所在の香椎宮から出土している。(註1)

木製品

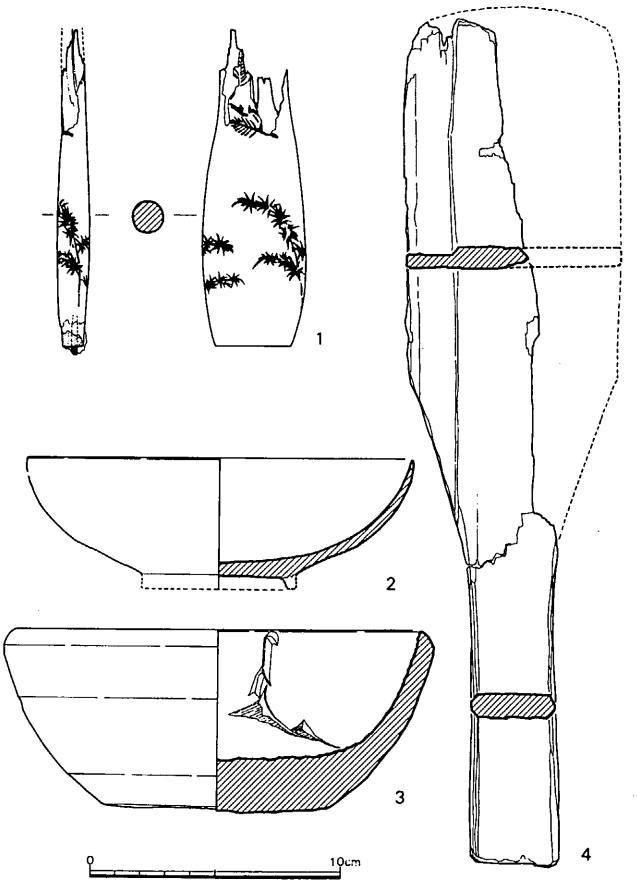
今回の調査で比較的多くの木製品が出土した。特にＳＧ2130の腐植土層、墨灰色土層から仏具関係、食膳具、遊戯具など当時の生活様式を知るうえにおいて貴重な資料が出土した。ここでは出土した木製品を遺構別に述べ、ＳＧ2130・下層腐植土層については種類ごとに述べることとする。

ＳＤ2104・ＳＤ2115出土木製品（第23図、図版39）

黒漆錐状木製品（１）　ＳＤ2104から出土した。ＳＤ2104はＳＢ2140の上層に位置し、幅約1.2ｍ、深さ約0.3ｍで東西方向に約９ｍ検出した溝である。１は現存長13.0cm、中央部で断面径1.3cmのエンタシス形を呈する錐状のものである。基部には幅約1.0cmの薄い銅板が巻かれ、芯に径0.2cmの鉄製の中子がわずかに残る。軸は木製で黒漆が厚く塗られ、金色で「竹笹」「竹葉」の文様が描かれている。

漆容器（２・３）　２は約２分の１を欠失する。口径15.2cm、高さ5.2cmほどに復原できる。外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。３は一木から刳りぬいて作った鉢である。底部は平担で、体部にかけ内彎気味に立上り、口縁部も内彎する。外体部および底部は平面に調整するが、内面は削り面をそのまま残している。内外共に黒漆を薄く塗る。内側面に工具痕が認められる。口径16.2cm、底径8.9cm、高さ7.2cm。ＳＤ2115出土。

羽子板状木製品（４）　約３分の２を欠損する。現存長33.9cm、復原幅約8.6cm、厚さ0.9cmである。長方形の材を削り出して羽子板形に整えている。柄部は幅3.4cmで、両側面は丁寧な削りである。ＳＤ2115出土。

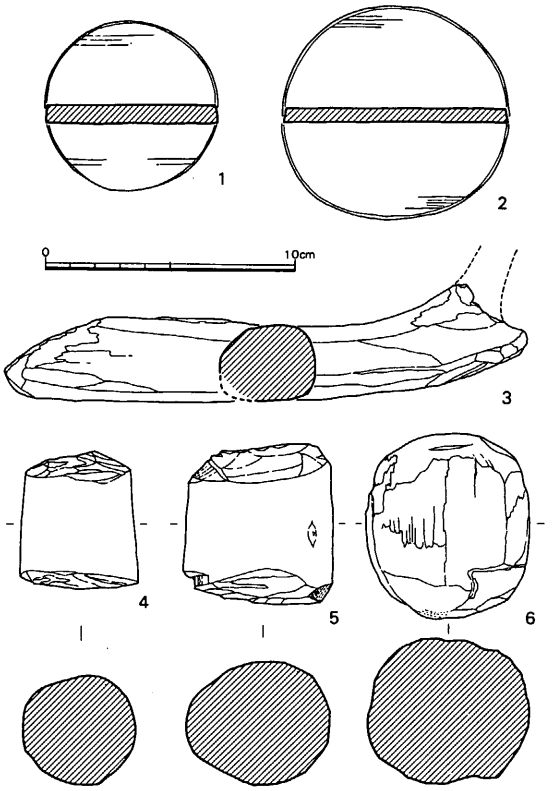


第23図　SD2104・2115出土木製品実測図

ＳＥ2110出土木製品（第24図、図版39）

小型円板（１・２）　１は径6.9cm、厚さ0.7cm、２は径9.1cm、厚さ0.6cmの小型円板である。曲物容器の底板とも考えられるが、側面に木釘痕は認められない。

毬打（３～６）　３は自然木を利用した毬杖と考えられる。柄は欠失している。先端と後端部は断面を三角形状に削り、先端部はやや摩滅している。また中央部は約８cm程擦減っており、毬を打った使用痕が認められる。４～６は毬で３点出土した。４・５は上・下端を削ったのみで再調整はみられない。６は前者に比べ全体に丸味をもって加工され、擦減っており使用されたものであろう。これらは径4.5cm～6.5cmのものである。



第24図　SE2110出土木製品実測図

ＳＧ2130出土木製品（第25図、図版40）

墨書木札

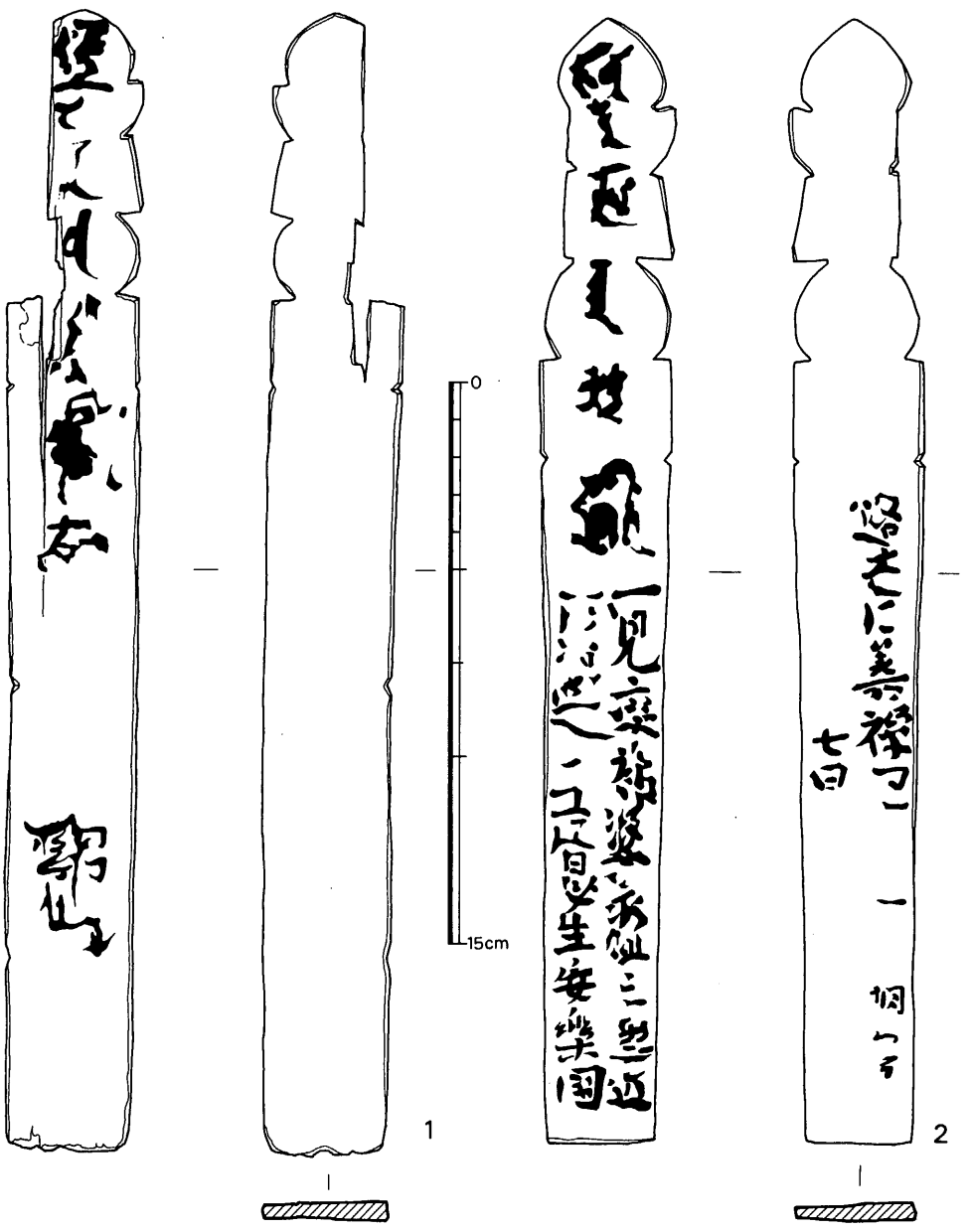
この調査では合計11点を検出したが、これらはすべてＳＧ2130から出土したもので、形態的に見ると、板塔婆が３点、笹塔婆が５点およびその他が３点に大別できる。また、内容的には、種字が多く見られるように、いずれも仏教信仰にかかわるものであり、このことからここではこれらをいわゆる木簡の範疇には入れず、いまだ墨書木札として捉えておくことにする。

以下、若干の所見を述べながら報告するが、その他とした３点のうち２点は小破片であり、、墨痕は認められるが、判読できないのでここでは省略する。

(1)・「𑖀𑖁𑖂𑖃𑖄𑖅 一見卒都婆永□三悪道 」
　　（離）
　　□□造□者必生安楽国
　　（何況）（立）

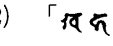
・「　　過去□□□□□□□□ 」
　　七日

南辺部近くから出土した板塔婆で、五輪形に作っている。一部に折損が見られるが、ほぼ完形であり、長さ30.0cm、幅3.4cm、厚さ0.5cmである。表面は五輪を示す種字に続いて本尊のキリークを書き、２行にわたって造立の因由を記しているが、これと同文のものとしては鎌倉市材木座五所神社の弘長２年（1262）11月20日の板石塔婆が知られている（『仏教考古学講座』II塔婆編による）。裏面には表の５字の位置に大日の種字バンを長く書き、年紀や施主名などを

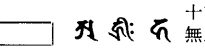


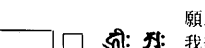
第25図　SG2130 出土卒塔婆実測図

記すのが通例であるが、これでは種字を確認することはできない。また、第4字以下の3文字は「嘉禄三」と推読できるが、かなり崩されており、にわかには断定できない。ちなみに、嘉禄3年は西暦1227年にあたり、12月10日に安貞と改元されている。

(2)　「  南無阿□□佛□□」
(弥陀)

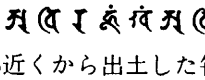
これも南辺部近くから出土した板塔婆で、五輪形に作られている。水輪部より上の左端が欠損しているが、ほぼ原形をとどめ、長さ30.9cm、幅3.5cm、厚さ0.6cmである。五大種字に続いて本尊のキリークを書き、名号を記しているが、次の2字はわずかな墨痕が認められるのみで、文字は判読できない。なお裏面に墨痕は認められない。

(3)・ 
十方□□□唯有一□□
無二□無三□□
(亦)
」

・ 
願以此功徳普及於一切
我等與衆生皆共成佛道
□□佛□□爲頓證菩提
」

中央部やや西寄りから出土したもので、上端部を欠いているが、切込みおよび裏面の種字などから見て、本来は五輪形に作られ、現上端部は水輪部にあたると考えられる。現存部は長さ14.5cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。表面欠損部にも種字が書かれていたと考えられるが、いかなるものかはいまだ想定しえていない。十方以下は妙法蓮華経方便品第二の「十方佛土中唯有一乘法　無二亦無三　除佛方便説」という部分ではないかと推定されるが、わずかに墨痕が見られるのみであり、判読できない。裏面の現上端に半存する種字は宝生を表わすタラークと推定され、これに阿弥陀のキリークと不空成就のアクが続くことから、欠損部には大日のバンと阿閦のウンが記され、金剛界五仏を表わしていたと考えられる。願以下の2行はいわゆる回向文で、しばしば見られるものであり、このことからこの面を裏面と判断した。第3行目は前2行に比して小さく書かれているが、いかなる意味かは明らかでない。

(4)・「□□□□□□□

・「 

南辺部近くから出土した笹塔婆で、上端部は圭頭に作られ、下端は折損している。現存部は長さ13.7cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmである。表面には7文字分の墨痕が認められるが、判読はできない。裏面には5種字からなる胎蔵界大日の報身真言を連続して書いており、なにごとかの成就を願う呪術に用いたものであろう。また、笹塔婆に区分した他の4点はいずれも同じ真言を書いたものであり、形態・材質ともに近似している。それらの法量などは次のとおりである。

(5)　長さ8.6cm、幅1.1cm、厚さ0.1cm。上下ともに折損。

(6)　長さ9.6cm、幅1.2cm、厚さ0.1cm。上端は圭頭、下端は折損。両面に書かれている。

(7)　長さ10.3cm、幅1.2cm、厚さ0.1cm。上端は圭頭、下端は折損。両面に書かれている。

(8)　長さ9.0cm、幅1.4cm、厚さ0.1cm。上端は圭頭、下端は折損。両面に書かれている。

なお、墨痕は認められないが、同じような笹塔婆の一部と推定される小破片が若干出土しているが、いずれも他片とは接続しない。

(9)　菩薩

南辺部近くで出土したもので、上下ともに折損しているため、原形は明らかでない。現存部

は長さ10.8cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmである。これの具体的な性格は明らかでないが、記載内容から見て、他の墨書木札と関連するものであろう。

仏具関係木製品（第26・27図、図版42・47）

位牌（1・2） 形状などから位牌と考えられる。位牌は死者の法名（俗名）を書いて、本尊と同様に供養または祈願する信仰物で、わが国では室町時代の初め頃に古式とされている紀年銘の入った位牌が残っている。1は札型で頭部を圭頭にし、尻部は台座に嵌め込むための切込みがある。頭部の圭頭のものは従来の説に従うと古式に属するものとされている。戒名は墨がほとんど消失しており、その痕跡部が四周に比して一部ではあるが若干盛り上ってはいるものの、残念ながら判読不可能である。長さ25.2cm、幅5.5cm、厚さ0.7cm。杉材。2は位牌の台座と考えられる。長径7.3cm、短径5.1cm、高さ2.8cmで平面は長方形を呈する。台座中央部に長径3.2cm、短径0.8cm、深さ1.2cmの枘穴がある。1とは対にならない。杉材。

部材（3） 表・裏面に「蕨手」の文様などが焼印されており、一方の側面には「膠」が塗られている。何かと接着していたものであろう。調度品および仏具関係の一部品と考えられる。現存長25.5cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm。

木鉢（4） 僧侶が托鉢の際に食を受ける入れ物かと思われる。平面は栗実様を呈し、長径13.8cm、短径12.3cm、高さ6.0cmである。口縁部は幅約0.5cmのふちどりがある。一木を横木取りし、内・外面共に丁寧に削り調整を行っている。特に内面は一木を抉って加工しているため、工具痕が認められる。

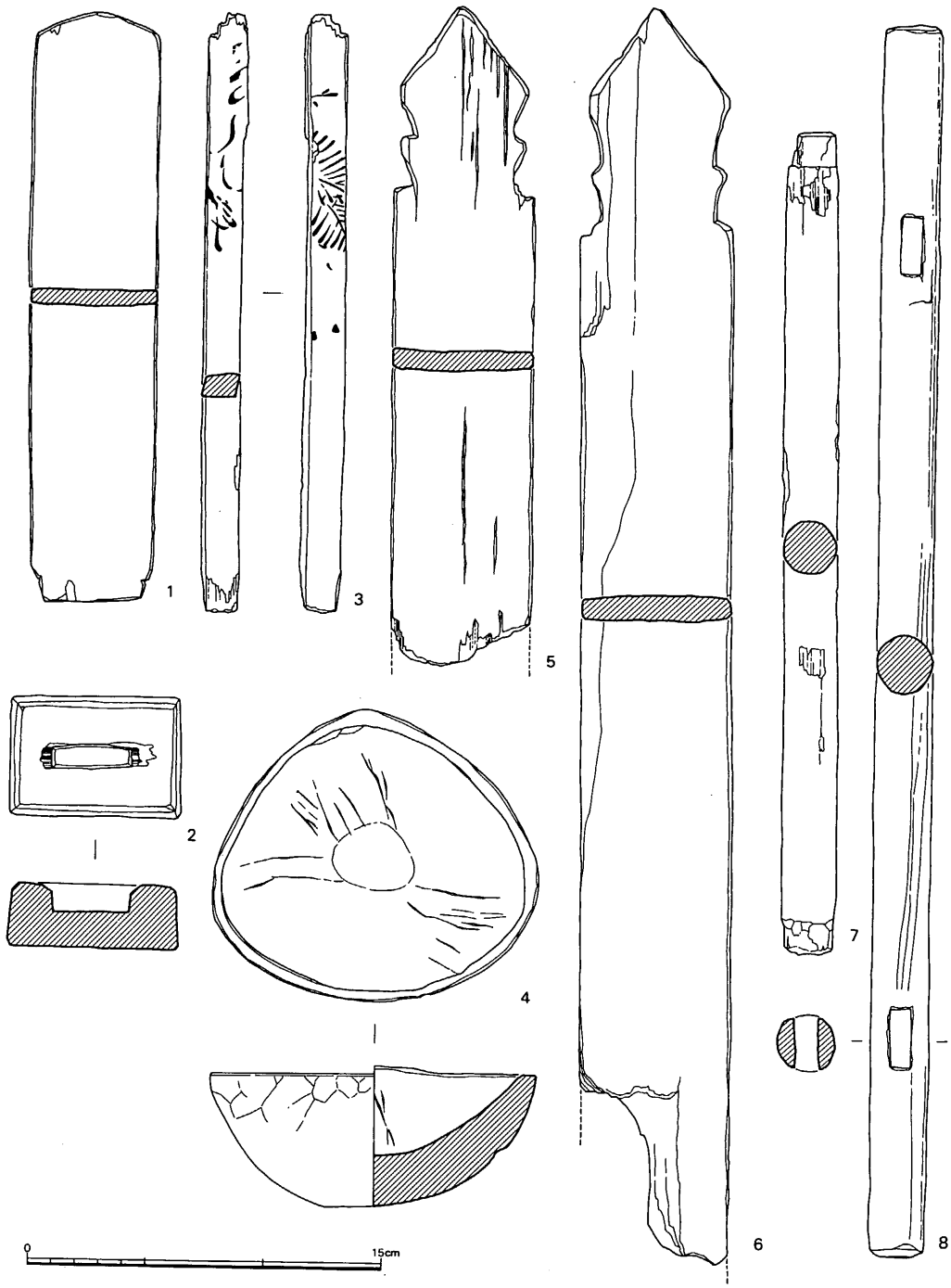
卒塔婆（5・6） 2点出土した。その形状からみて卒塔婆の一部と考えられる。5・6共に頂部を山形に作り、両側に2ヶ所ずつの切り込みがある。6は若干腐植している。墨痕は認められない。5は現存長28.1cm、幅6.0cm、厚さ0.9cm、6は現存長53.5cm、幅6.3cm、厚さ1.1cm。杉材。

棒状木製品（7・8） 7は長さ35.0cm、径2.3cmで断面が円形をなす棒である。両端は木口から約1.4cm程のところまで欠き取っている。8は長さ52.5cm、径2.4cmである。断面は円形を呈し、木口の両端から約8cmのところに2.6cm×0.9cmの長方形を呈する枘穴が穿たれている。形状からみて7・8共に磬架の一部と思われる。

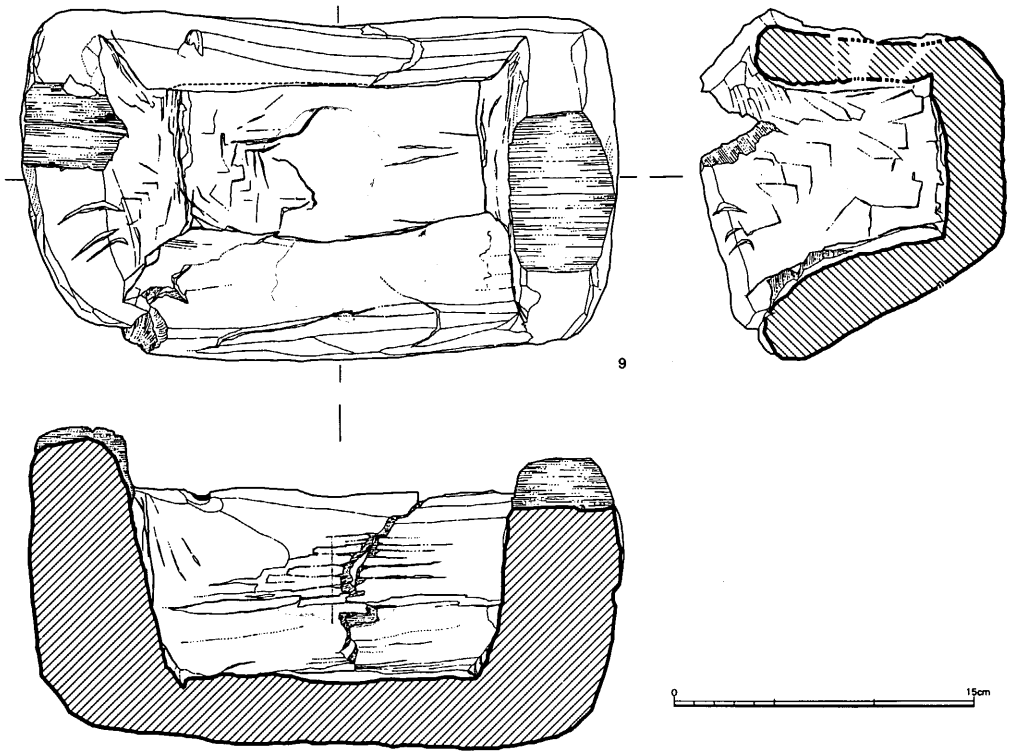
香具（9） 一木を加工して作っている箱型の容器である。心材を縦に木取りして内・外面を削り込んだもの。底面は比較的平担であるが、体部にかけて削りを加え丸味をつける。口縁部は丸味をもって加工され、やや擦減っている。内面は一木を抉ったノミ状の工具痕が明瞭に残る。内面底部および側面の一部は焼け焦げており、おそらく線香立ての容器であろう。長径29.8cm、短径16.7cm、高さ約15cm。

食膳具（第28図、図版43）

漆塗容器（10～13） 小皿2点、高台付小皿1点、椀5点、その他2点の計10点が出土した。



第26図　SG2130・下層腐植土層出土木製品実測図(１)

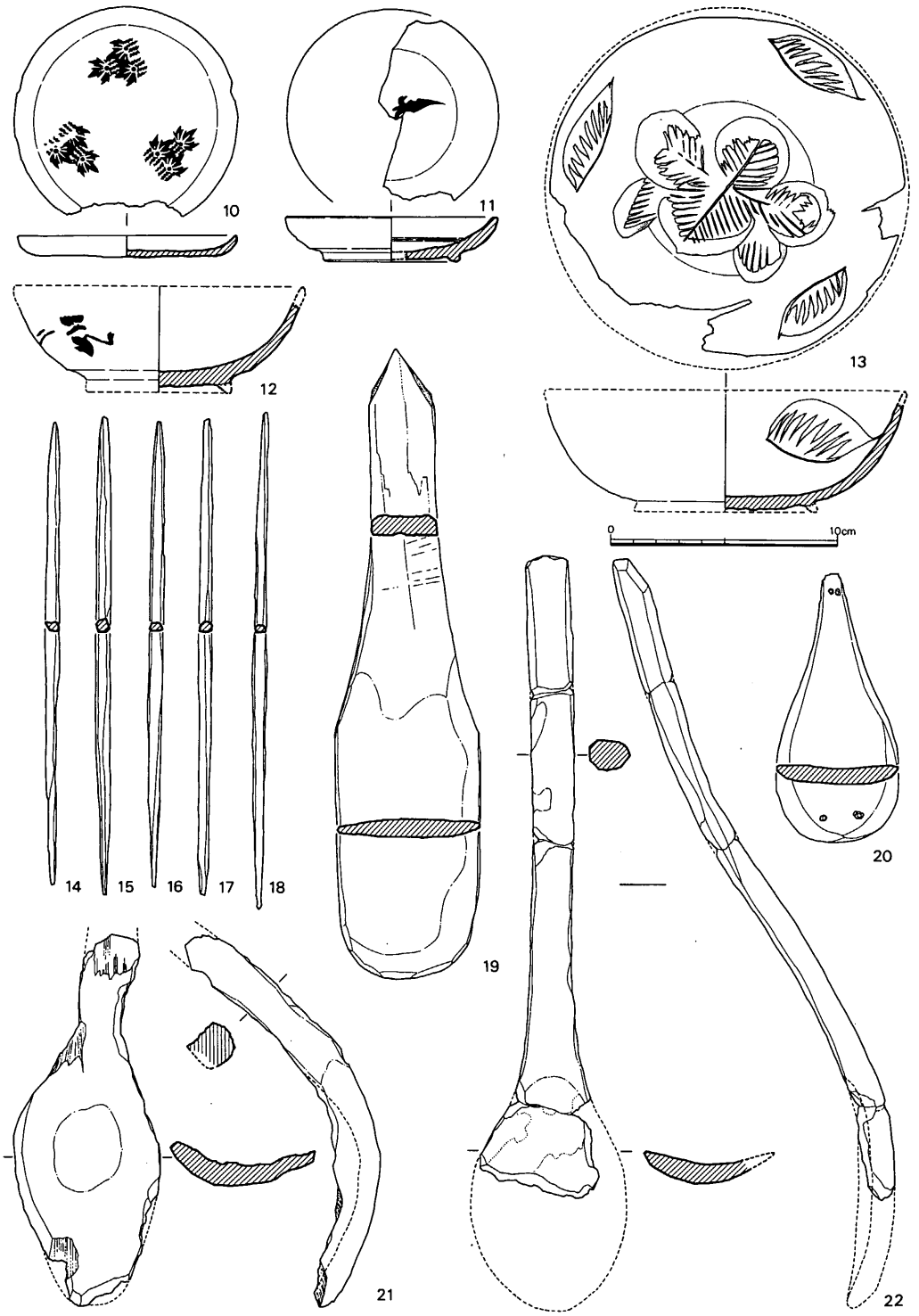


第27図　SG2130・下層腐植土層出土木製品実測図(2)

10・11は皿で、10は口径9.7cm、器高1.0cmの無高台の小皿である。内外面は黒漆を塗り、内面には朱塗りの「桐葉」様の文様3個を1単位として、3個所配されている。スタンプによる施文である。11は2分の1ほどの破片である。復原口径9.4cm、底径6.1cm、器高2.0cmで、低い高台が付く。内・外面は黒漆を上塗りし、内面底部に朱塗りの文様が一部残る。また内面に浅い沈線が認められる。12は口縁部と高台を欠損しているため、法量は定かでない。全体に黒漆が塗られ、外体部に一部ではあるが朱塗りの文様が残っている。13は椀で、口縁部と高台を欠損する。底部から体部にかけやや厚味を増す。内・外面は黒漆が塗られ、内面には「木葉」様の文様が描かれている。文様は底面に六枚の葉を花文風にあしらい、側面には三枚の葉を配している。朱塗りで筆で描かれたものである。

箸状木製品（14～18）　木片を小割りにして棒状にしたもので、両先端部を細く削っている。丁寧に整形しているものと粗雑なものとがある。今回は約280本出土した。平均長約21.0cm、厚さ0.5cm。

杓文字状木製品（19・20）　19は長さ27.9cm、幅6.3cm、身部の厚さ0.8cmである。身の先端を半円形に作り出し、周縁部は薄く削っている。頸部は弓状に曲り、柄尻端部は三角形状に鋭



第28図　SG2130・下層腐植土層出土木製品実測図(３)

く削っている。全体に丁寧な作りである。20は現存長11.9cmで、身の先端は半円形状に作る。身から頸部にかけて弓状に曲り、断面は周縁端部を薄くしてカマボコ形を呈する。中央部では厚さ0.7cmである身の先端部と頸部近くに径0.2cm～0.3cmの穿孔があるが、これらは後に穿たれたものであろう。

杓子（21・22）　2点出土した。21は板目材を加工したもので、柄部と匙先端部を欠く。匙部は内面を刳りぬいて受皿状にしており、汁をすくう具として使用されたものであろう。22は現存長28.3cmで、匙部3分の2ほどを欠損する。柄尻から匙部にかけてゆるく曲り、匙部との境に変換線がつく。匙部は受皿状に作る。柄部、匙部ともに工具で削った後、擦りみがいている。

履物（第29図、図版44）

下駄（22～26）　計11点出土した。これらを分別すると、歯の形状から大きく連歯（6点）と差歯（5点）に分類できる。大半の下駄の木取りは板目材を使用しているが、連歯のものに木心を歯部に木取りしているものがある。23は小児用で2点出土した。板目材を木取りしている。長さ13.0cm、幅7.0cm、歯高2.2cmで前歯、後歯共に原形をとどめている。鼻緒孔は焼火箸で穿孔した可能性がある。24は連歯で他に3点出土した。板目材を木取りしている。長さ18.5cm、幅9.3cmで歯の磨滅は著しく、特に後歯は片減りで、右足で履くと外側が減ることになる。前壺は中央に穿っている。全体に腐植が著しい。25・26は征目材を木取りした差し歯の下駄である。台は台頭と台尻をやや尖り気味に加工した、小判形を呈する。25は長さ17.5cm、幅8.2cm、26は長さ17.9cm、幅9cmである。前壺は共に台幅の中央に穿たれており、後方の2個の孔は外側から内側に向って斜めに穿孔している。鼻緒孔は25・26共に焼け焦げており、焼火箸で穿ったものであろう。また26は歯を固定するため、方1.0cmの楔が前・後に打ち込まれている。

他に歯が8点出土した。すべて差し歯のもので、磨滅の著しいものや、片減りのものがある。

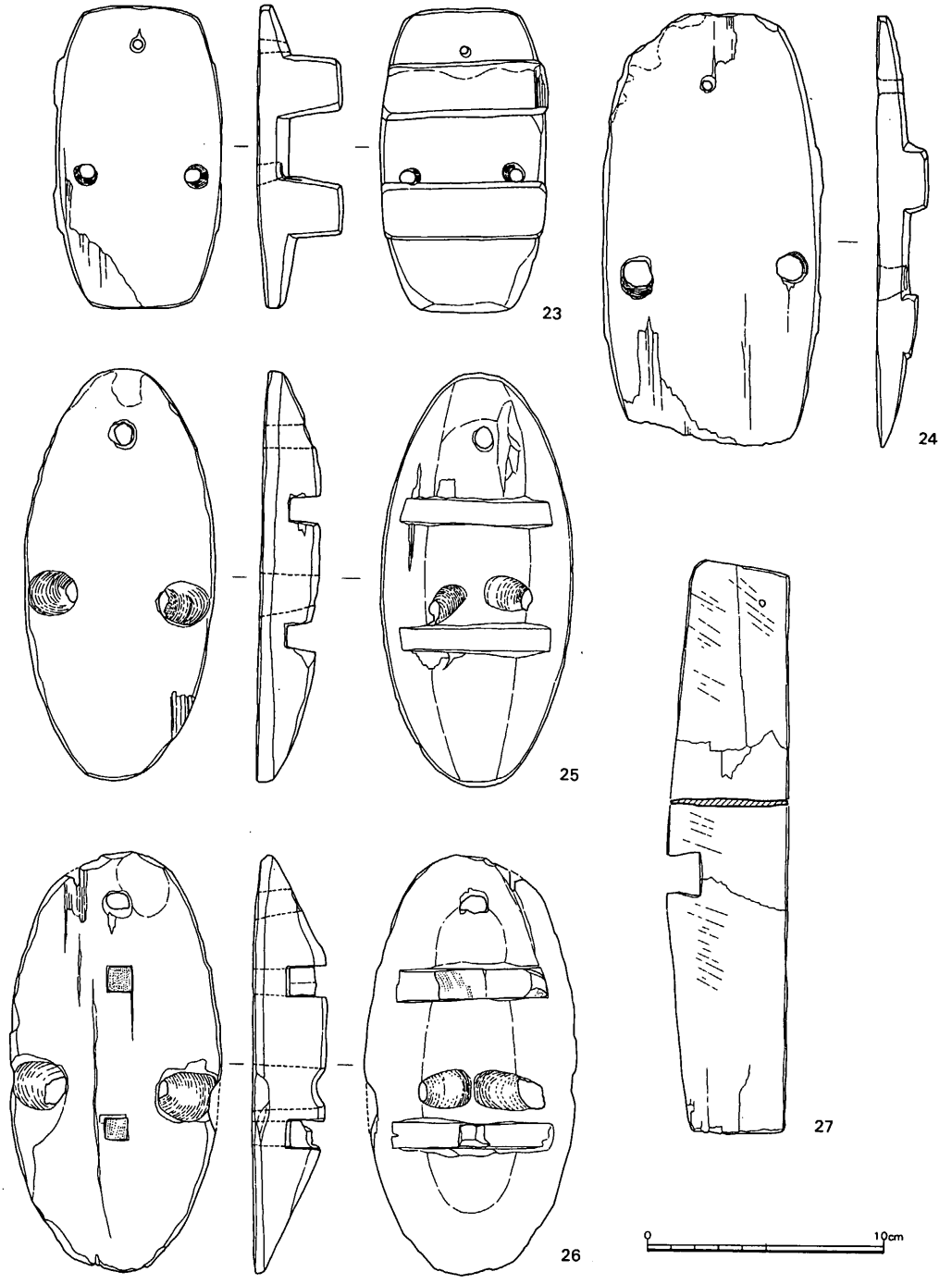
草履状木製品（27）　長さ24.5cm、幅5.1cm、厚さ0.4cmである。後端は方形に切取り、先端は右側に傾斜して加工している。左側中位に方形の抉りがある。先端部には径0.3cmの孔が穿たれている。

遊戯具（第30・32図、図版45・46）

羽子板状木製品（28）　計5点出土した。長方形の材を削り出して羽子板形に加工している。柄部は折損しているため不明である。頸部は両側共に二段に削り出し、頸部から頭端まで30.3cmである。現存長40.0cm、幅8.4cm、厚さ約0.7cm。杉材。

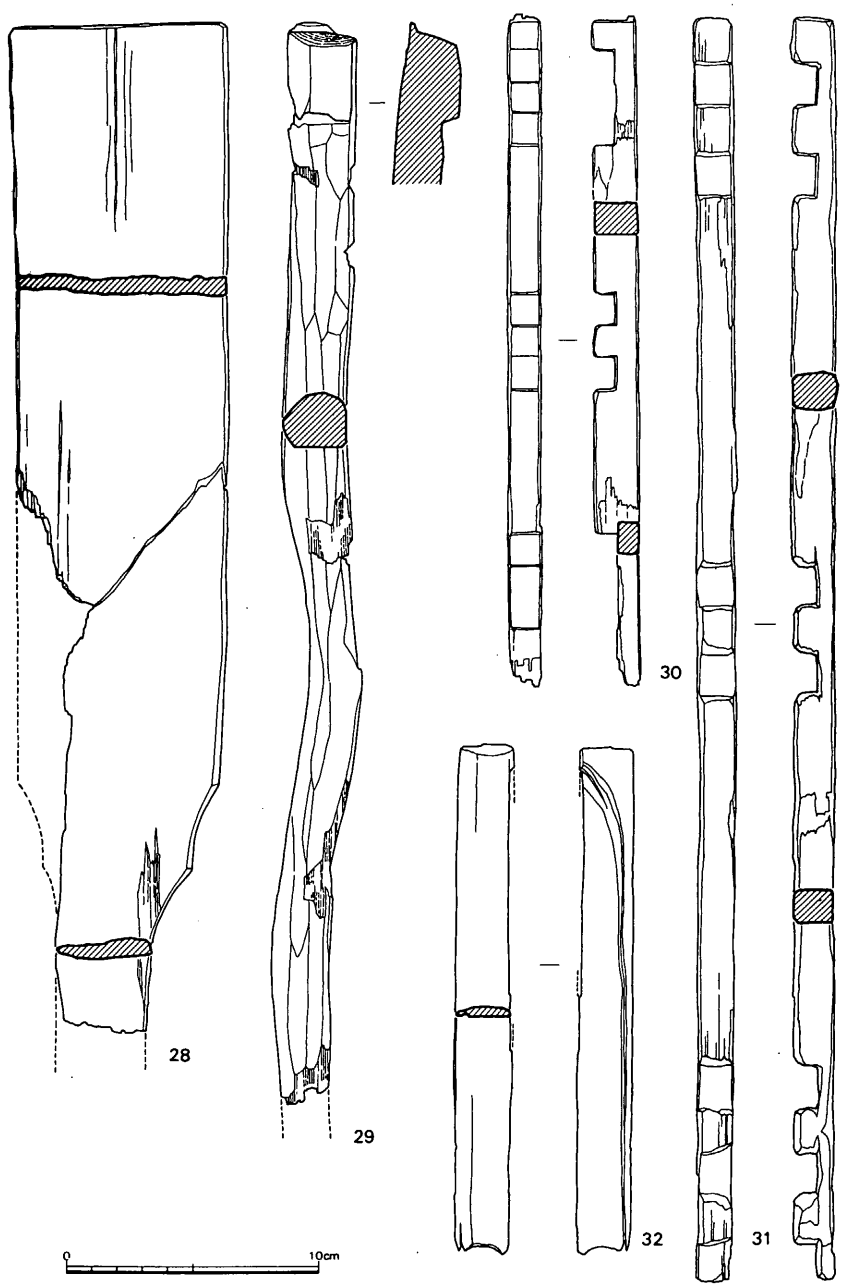
弓状木製品（29）　自然木を加工したもので、現存長43.0cmである。上端から約20cmで弓状に彎曲する。上端部は弦止めと思われる縊部が認められ、L字状の切込みがある。身部の断面は多面体に加工している。

毬打（52～55）　52は自然木を利用して加工した毬杖と考えられる。今回は4点出土した。



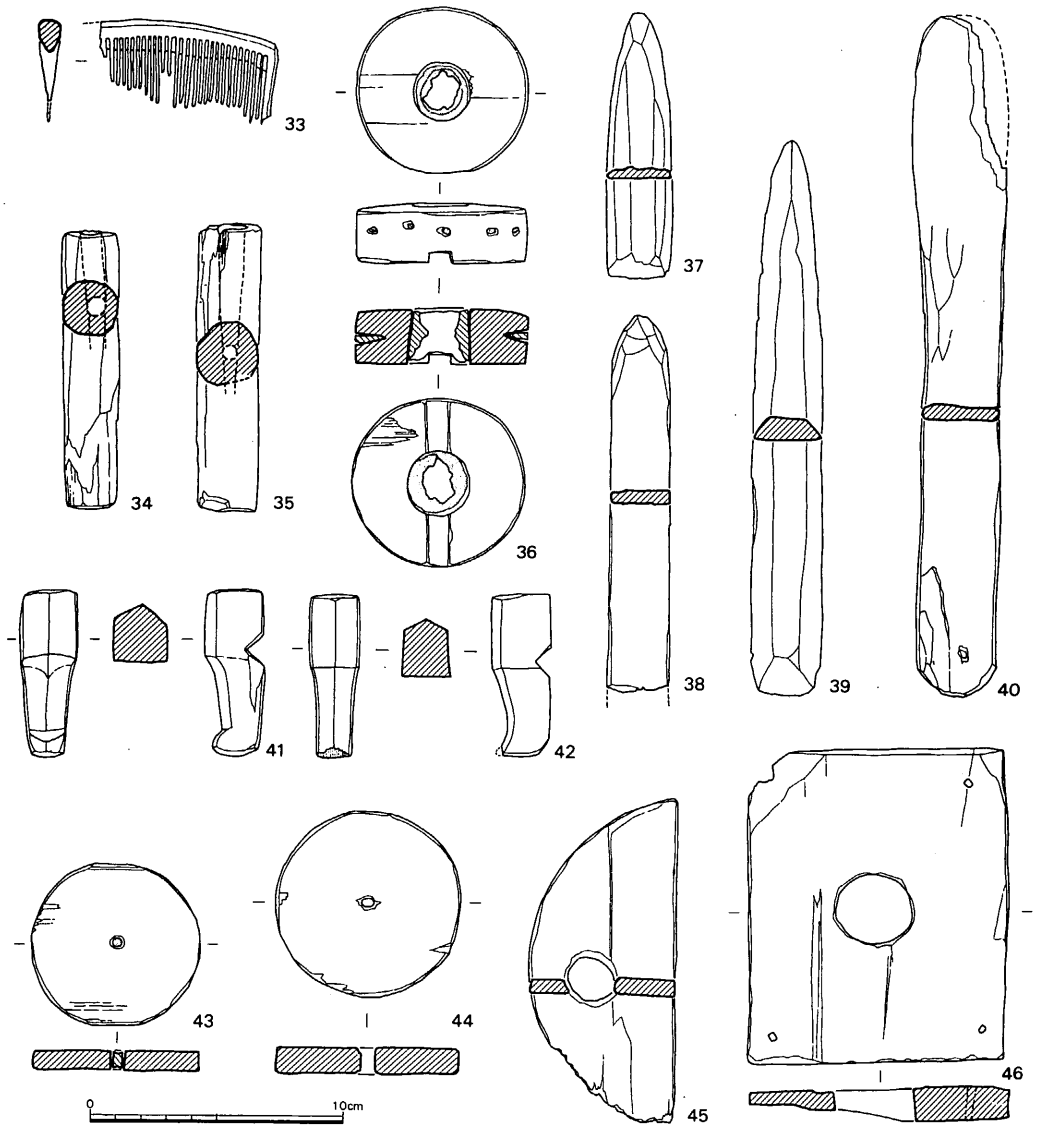
第29図　SG2130・下層腐植土層出土木製品実測図(４)

柄は一部残存しているが、『鳥獣戯画』などにみられる毬杖からすれば、おそらく70cm～80cmはあるものと思われる。先端部は斜めに削り、後端部は両側端から削り込んでやや尖り気味に

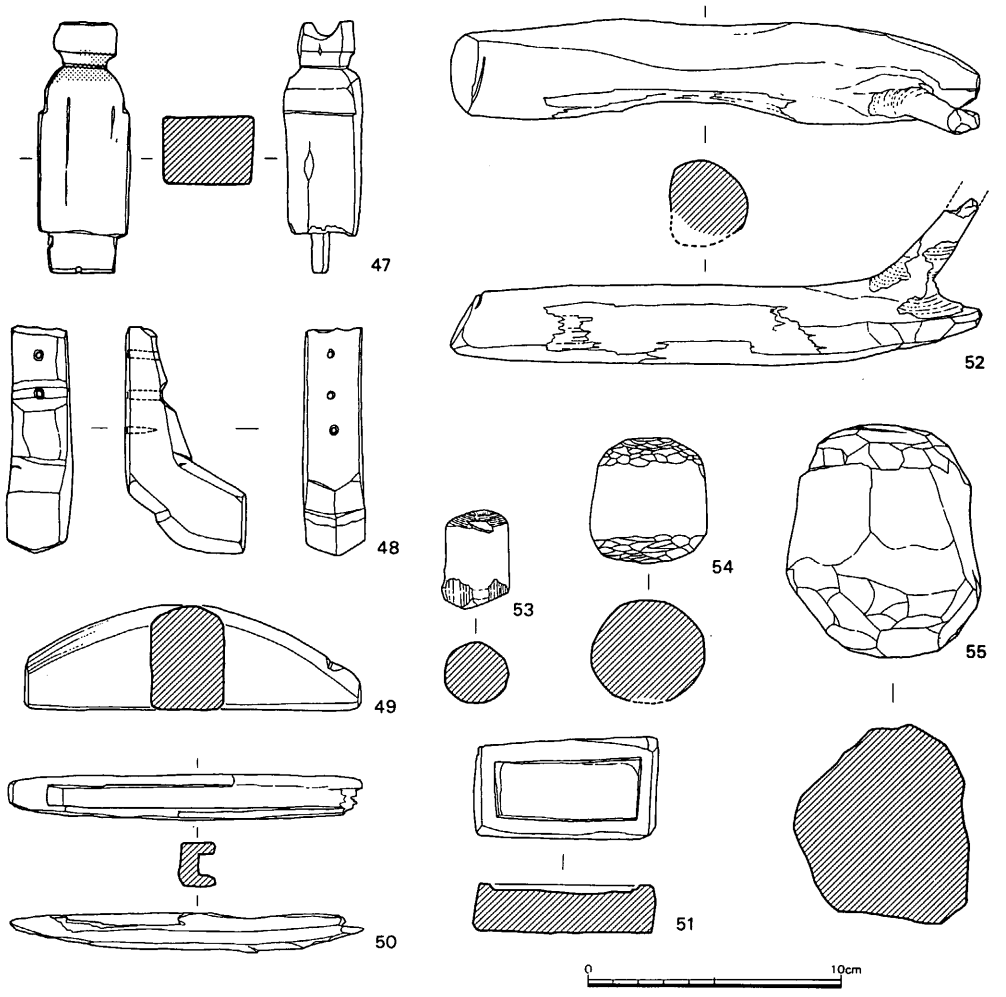


第30図　SG2130・下層腐植土層出土木製品(5)

加工している。側面中央部は幅約10cmほど擦減っており、毬を打った使用痕が認められる。この毬杖からみると右利の人が使用したものであろう。長さ21.0cm、幅3.7cm、高さ3.1cm。53～55は毬で、今回57点が出土した。自然木を利用したもので、53は出土したうちで最も小さく、長径3.7cm、断面は径約2.5cmの円形を呈する。54は長径4.9cmで、上・下端を小刀のようなもので丁寧に削っている。この大きさのものが最も出土量が多い。55は出土した毬のなかで最も大きいものである。長径9.2cmで上・下端は粗い削りである。



第31図　SG2130・下層腐植土層出土木製品実測図(6)



第32図　SG213 ・下層腐植土層出土木製品実測図(７)

部材（第30図、図版45）

建具部材（30・31）　1.3cm×1.7cmの角材に１辺1.2cm～1.6cm、深さ約0.8cmの切り込みを入れた部材である。切り込みは２個を１単位として配され、その間隔幅は６cmのものと14cm～15cmのものとがある。これら組子は互いに合欠きによって組合せるものと考えると、二重組子による長方形の格子になる。おそらく欄間あるいは障子の桟、格子窓などの組子であろう。今回53点が出土した。

生活用具木製品（第30・31図、図版46）

刀子鞘（32）　長さ20.2cm、幅2.3cmの刀子の鞘と思われる。鞘は半片のみで、峯部は欠損し定かでない。内面は刀部に従い、幅0.2cm～0.5cmの切り込みがある。刀子柄との付け根は弧状に

抉っている。外面は丁寧に擦りみがいている。これから刀子(刃部)の長さは約18.8cmを想定できる。

櫛（33）　黒漆塗りの横櫛である。上縁（背）は弧状をなす。身の3分の1ほど欠損している。背は丸く削り、歯の引通し線は背と平行しており、断面は三角形状をなす。実質の歯長は引通し線から歯先端まで約2.8cmである。歯数は2cm当り9本である。現存長7.1cm、高さ4.1cm、厚さ0.9cm。

柄（34・35）　34・35共に柾目材を主軸方向に沿って削り、断面は多面体をなす。34は長さ11.0cm、断面径2.2cmである。柄頭は一部腐植しており、その腐植した部分に錆びた茎先が認められる。茎孔は円形である。茎は柄に対して斜めに打ち込まれている。35は長さ11.3cm、断面は径約2.5cmで円形を呈する。柄元は一部腐植しているが、茎孔は円形である。錐柄とも考えられる。

傘台（36）　柾目材を横木取り。径6.8cm、厚さ2.2cmで平面は円形を呈する。台頭を若干丸味をもって加工し、底面は平坦である。台の中央部には径2.3cmの孔が穿たれ、中に竹が填め込まれている。底面には幅0.9cm、深さ0.4cmの枘溝があり、これは中央の竹と直交しており、おそらく台と竹を固定するためのものであろう。側面には0.3cmの円形の穿孔が12個認められる。側面の孔（傘骨の孔か）、および中央の竹などの形状からみて傘台と考えられる。

箆形木器（37～40）　37は板目材を加工したもので長さ10.5cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmである。柄尻を斜めに削っている。38は下端部が欠損。幅2.4cm、厚さ0.5cmで先端部を丁寧に加工している。39は柾目材を箆軸方向に取り、先端を剣頭状に加工している。身中央部の断面は台形を呈す。長さ22.1cm、幅2.7cm。40は先端および後端部を半円形状に削る。身の中央付近で杓子形状になり、先端部にかけてやや幅広となる。また後端部から1.5cmのところに約0.5cmの穿孔がある。長さ27.1cm、幅3.1cm、厚さ0.7cm。

脚状木製品（41・42）　2点出土した。左辺を山形に削り、上端から約2.5cmのところで長靴形を呈する脚状のものである。41と42では下足部の形が異なっている。右辺は上端からそれぞれ1.7cm、2.0cmのところに断面が三角形状の切込みがある。

有円孔部材（43～46）　43は径6.6cm、厚さ0.8cmの小型円板で、中央部に0.5cmの孔がある。孔には目釘が残っている。44は径7.2cm、厚さ1.1cmで、中央に0.5cmの穿孔が認められる。柾目材。45は約2分の1を欠損している。径約13.0cm、厚さ0.7cmで左端寄りに径約2.2cmの孔が穿たれている。46は長辺12.4cm、短辺10.2cm、厚さ1.4cmの方形板である。中央部には径約3.0cmの円孔があり、板の四隅に目釘が認められる。

用途不明木製品（第32図、図版46）

斗束状木製品（47）　柾目材を加工したもので、頭部は桝形を呈する。頭端部はU字形状に丸く抉っている。頸部は撥形に加工し、朱が塗られている。両側は頸部から下方1.7cmのところまで亀腹状に削り、身部にかけて約0.2cm程立上る。下端部は厚さ0.5cm、高さ1.6cmの柄であ

る。頭端部と下端の形状からみて斗束状のものと考えられる。長さ10.0cm。

把手状木製品（48）　上端部は折損している。左辺は平坦で、径0.3cmの孔が3個所認められる。上端から3番目の孔は貫通していない。また右辺では上端から2番目の孔のところに断面がU字形状の浅いくり方を入れている。下端（把手部）は断面を山形に削り、2段にくり方を入れ、それと対称する右側面には鈍いV字形のくり方がある。現存長9.0cm、幅2.3cm。

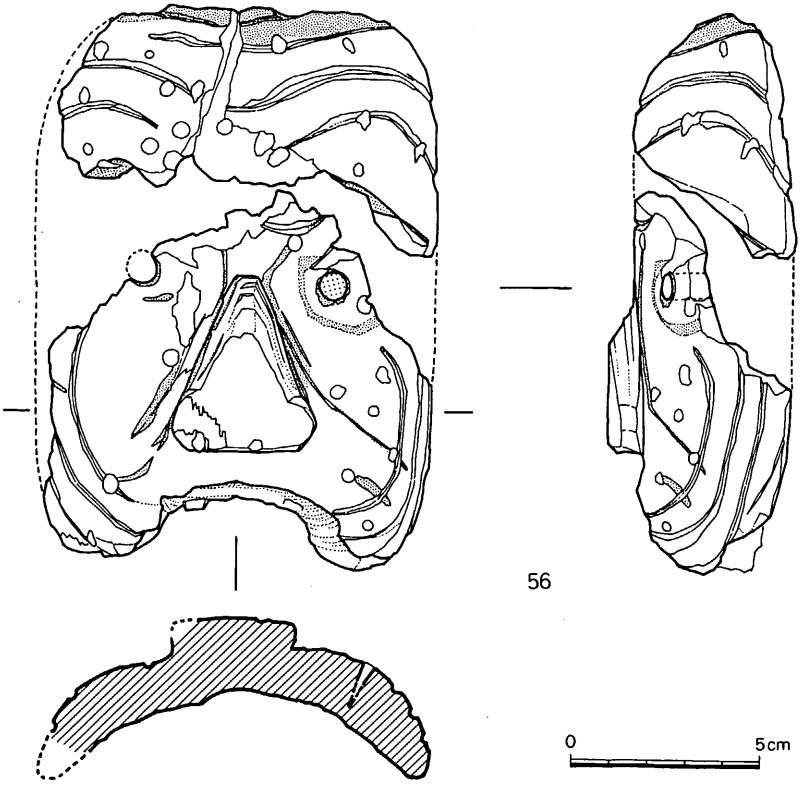
カマボコ形木製品（49）　長径13.3cm、幅2.9cm、高さ4.1cmである。頭部の断面は半円形を呈し、右端部に浅い段が認められる。下端は平坦である。柾目材。

舟形木製品（50）　縦木取りの木片を削り加工したもので、舟形を呈す。底面は先端、後端にかけ舟底状に削り、内面はほぼ平坦に抉っている。現存長14.0cm、幅1.8cm、高さ1.5cm。

台座状木製品（51）　長径約7.2cm、短径約4.0cm、高さ2.0cmの長方形を呈する台である。底面は平坦であるが、削りは粗雑である。上面に2.2cm×5.7cm、深さ0.3cmの長方形の刳り込みがある。

面（第33図、図版47）

一木を縦木取りし、彫出した面である。両眉部および下顎部は欠損している。額から頭頂にかけて丸味をもって作られ、四本の皺が波状に彫られている。鼻の上両端に径0.8cmの穿孔があるが、左側は木目釘が詰っており、右側は半分欠損している。目と推定した。鼻は三角形状を呈し、上端は欠けたものであろう。鼻



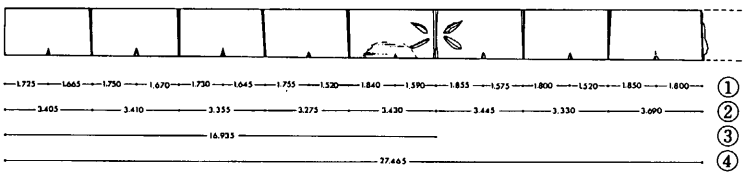
第33図　SG2130・下層腐植土層出土木製品（8）

孔は認められない。両頬には三本の皺が口もとにかけ弓状に彫られている。口は幅約4.5cmで、平面は台形状を呈す。歯は二本認められるが、さらに数本あったものであろう。また口の左端部に径0.3cmの孔が穿たれており、おそらく下顎を別材で作り、紐で吊ったものと考えられる。顔面全体に毛穴痕と思われる31個の穴が認められるが、まとまりはない。また頭頂部・両眼・鼻から頬にかけて墨痕がある。面裏は若干腐植している。このように見ると顔面相から想定すれば、翁や採桑老のような面と思われるが、全体に顔面長が小さく、幅も狭い。また面に墨痕があること、毛穴にまとまりがないことなどを考えると呪術的なことに使用された可能性がある。面長14.8cm、面幅10.3cm、面高約4.3cm、面弧深2.3cm。

10・19・20・22・33・36・49は下層腐植土層、他はＳＧ2130出土である。

木製尺（第34図、図版47）

出土した尺は完存せず、中途で折れて欠失している。幅1.9cm～2.0cm、厚さ0.37cm、現存長約27.5cmである。目盛は刀子様のもので「Ｖ」字状に浅く切り込みを入れている。８寸分残存し、各寸の中間に小さい切り込みを入れている。１寸の目盛は縦に上端から下端まで直に通し（上端の寸法と下端の寸法は必ずしも合っておらず、斜めになっている）左から５目盛（５寸）のところには「×」の印を切り込んでいる。大きい目盛（１寸）のほぼ中間には５分の長さを示す目盛を下端に入れている。



第34図　SG2130出土木製尺実測図

各目盛の計測値は第34図のとおりであるが、計測にあたっては、次の４方法で行った。①は16等分した目盛の計測値であるが、各目盛は一定の数値を示していない。この数値の合計は27.29cmである。これを16で割ると、１目盛（５分）の平均数値は1.706cmとなる。②は８等分した目盛の計測値で、合計27.34cmとなり、１目盛（１寸）の平均数値は3.418cmである。③は５目盛分（５寸）を計測した数値で、16.935cm。④は８目盛分（８寸）を計測した数値で、27.465cmである。

この木製尺は、幅・厚さからみて、本来１尺の長さを有していたと考えられる。①～④の計測数値（平均した数値）で１尺を復原すると、①34.12cm、②34.18cm、③33.87cm、④34.33cmとなる。これらのうち、最も適当と思われる数値は③の計測で得られたものである。その理由として、各目盛の数値は一定しておらず、１尺の２等分（５寸）の目盛が最も有効性を帯びていると考えるからである。ＳＧ2130の腐植土層出土。

銅銭（第35図）

銅銭は、宋□□□（通元寶）など13種・30点のほか、破損のため銭名を判別しえないもの１点および寛永通寶が３点の合計34点が出土した。これらの銭種、出土遺構・層位および各遺構・層位ごと

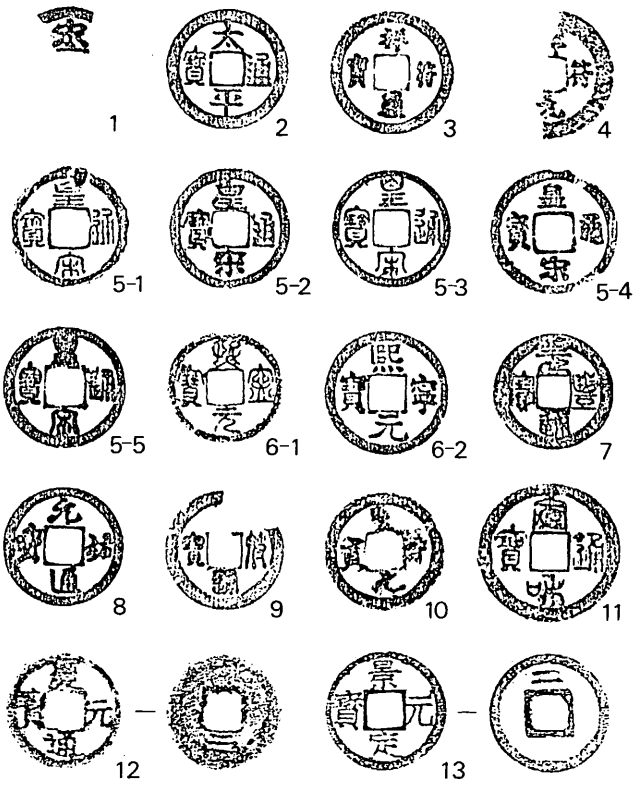
の出土点数については表に示し、各銭種の拓影を第35図にかかげた。なお、表ではとくに区別しなかったが、同一銭種であっても、銭名文字の異なるものおよび背面に文字の見られるものについては拓影をかかげた。表・図とも配列は初鋳年代順であるが、鋳種不明の1点および寛永通寶3点については拓影を割愛した。

金属製品（第36図、図版48）

金属関係の遺物はごく少量である。遺構では主にSG2130、SE2110から出土した。そのほかは各層などから出土したものである。

鈴（1）　銅製鋳物鈴で、全長2.4cm、胴部最大径2.1cmで断面は円形を呈する。鈕部は左右から閉じており、径0.2cmの貫通孔がある。胴中心部には幅約0.2cmの帯が巡り、下端は切口を中心にして左右に耳形の孔を穿っている。「丸」は残っていなかった。黒灰色土層出土。

飾金具（2）　薄い銅板を加工したもので、断面は半円形を呈する。上・下端部を擬宝珠状に作り、両端部から0.7cmのところに径0.2cmの釘孔が穿られている。SG2130出土。



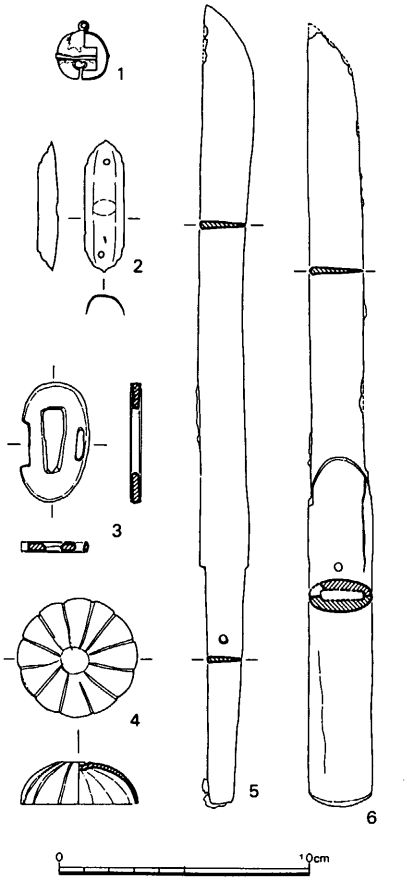
第35図　銅銭拓影

挿図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13			
銭名 / 出土遺構・層位	宋通元寶	太平通寶	祥符通寶	祥符元寶	皇宋通寶	熙寧元寶	元豊通寶	元祐通寶	元符通寶	聖宋元寶	宣和通寶	慶元通寶	景定元寶	その他	寛永通寶	合計
SA 2142													1			1
SD 2100														1		1
SD 2115								1								1
SG 2130				1	6	1					1					9
SX 2146		2														2
SX 2148		2														2
SX 2149		1					2			1						4
茶色土	1															1
暗茶土					1			2	1							4
黒灰土下層			1		1	2						1				5
暗青灰色土						1										1
床土															3	3
合計	1	5	1	1	8	4	2	3	1	1	1	1	1	1	3	34

鍔金具（３）　長径4.8cm、短径2.4cm、厚さ0.4cmである。中央部は茎を差し込む孔があり、棟区幅0.8cmで刃区はやや尖っている。左端に小柄孔が抉られ、右端には笄を差し込んだと考えられる孔がある。暗灰色土層出土。

飾金具（４）　銅製鋳物で、径4.7cm、高さ1.7cmである。平面は菊花様を呈し、下端から上端にかけて幅約0.1cmの沈線を12本打込んでいる。上端はやや凹んでいるが、貫通していない。ＳＥ2110出土。

小刀（５・６）　５は全長32.1cm（茎長9.5cm、刃長22.6cm）である。茎先から6.4cmのところに径0.3cmの目釘孔がある。刃先は中央部が摩滅し、使用したことが想定される。棟区、刃区の高さは0.2cmである。棟幅0.3cm、中央部の高さ1.9cm。ＳＥ2110出土。６は刃先端が欠損している。現存長31.1cm（柄長14.0cm、刃長18.1cm）である。柄頭および柄元は半円形状に作り、柄頭から9.5cmのところに径0.3cmの目釘孔がある。刃先は比較的良く残っているが、一部刃毀れしている。刃幅は2.2cmで、棟は圭頭状に作っている。ＳＧ2130出土。



第36図　金属製品実測図

経石（図版41）

・□(破)魔□(兵)衆　而擊法
□(鼓)　又見菩薩　寂
□(然)宴□(默)　天龍恭敬
不以爲喜　又見菩薩
□(虒)□(林)放光　濟地
獄苦　令入佛道
又見佛子　未
嘗睡眠
・経行林中　勤求
佛道　又見具戒
威儀無缺　淨如□(寶珠)□
以□(求)佛道　又見佛子
住□(忍)辱力

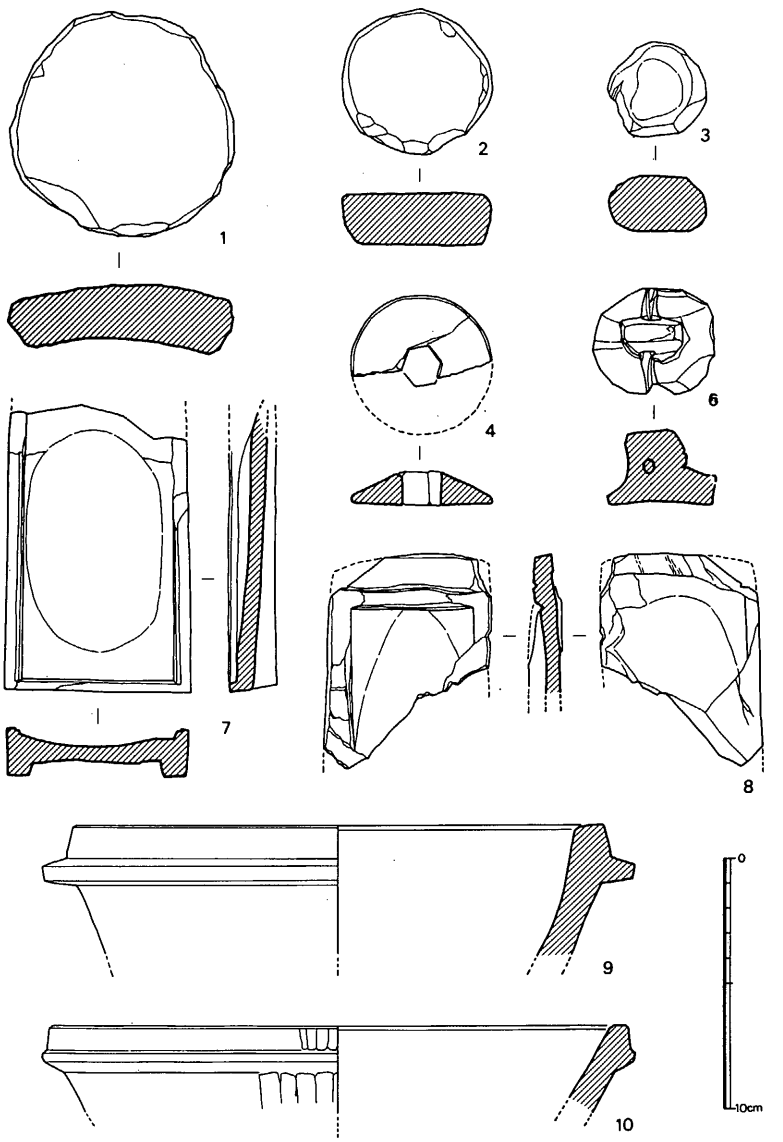
ＳＧ2130の西北部から出土したいわゆる多字一石経で、不整円形の偏平な石の両面に墨書さ

れ、法量の最大値は縦6.9cm、横8.6cm、厚さ1.7cmである。文字は、表面に8行・48字、裏面に5行・32字が記され、内容的には妙法蓮華経序品第一の中間の一部であるが、各行の字数は一定していないなど、書写に際しての法則性は認められない。これは供養のための埋経の一種であり、本来は安置されていたのであろうが、その状況は確認できなかった。また、これの前後に連続するものが存したと考えられるが、それらは発見できなかった。

石製品（第37図、図版49）

石製品として硯・石鍋・紡錘車様石製品・石鍋の転用品などがある。

硯（6・7）　6は長方形の硯である。海部が欠失して完形品ではないが、丁寧な作りのものである。後端幅7.4cmで、前方部に向ってやや幅が狭くなる。縁部は高さ約4㎜で装飾のための段を設けている。裏面は凹面に削って脚としている。小豆色を呈する。緻密な石質のものである。7は表・裏を硯面として成形し、両面とも使用痕が見られる。約半分は欠失しており、縁部などの残存状態も良好でない。石材は暗灰色を呈し、薄く板状に剝離する石質のものである。



第37図　土・石製品実測図

いずれもＳＤ2115出土。

石鍋（８・９）　いずれも滑石製で、小片である。８は復原口径21.0cmで外面には煤の付着が著しい。口縁から1.5cm下方に1.0cmの鍔を削り出している。外面は削りによって整形しているが、煤の付着が著しいため明瞭でない。青灰色を呈する。ＳＤ2115出土。９は復原口径23.0cmで、８に比べて鍔が上位にあり、その削り出しも少ない。外面には煤の付着が著しい。赤味のある茶灰色を呈する。茶色土層出土。

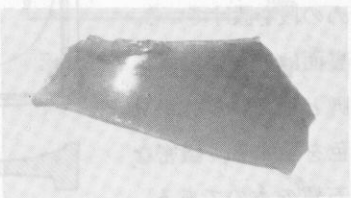
用途不明品（４・５）　４は径5.5cmの円形のもので、断面は笠形を呈する。中央には６角形の穴が削り穿孔されている。石質はやや粗いが、表面は丁寧に磨いている。紡錘車であろうか。やや青味のある暗灰色を呈する。暗茶色土層出土。５はスタンプ様を呈するもので、長方形の撮があり、撮の下端の中央には径0.4cmの穿孔がある。本体の上面には穴に合わせて、細い溝が彫られている。撮には煤状の付着が部分的に削られずに残っている。これは石鍋の鍔を若干再加工して撮としたためである。下面はやや内彎しているが、これは石鍋の内面を再加工することなく、そのまま使用しているためである。黒灰色土下層出土。

土製品（第37図、図版49）

１～３は平瓦を再加工したものである。平瓦片を割って円形に成形した後で、縁は摩ったためか平滑になっている。１は大形のもので、径9.0cm、厚さ2.0cmで、平瓦の反りが若干見られる。２は中形のもので、径6.0cm、厚さ2.0cmである。３は小形のもので、径4.0cm、厚さ2.0cmである。これは摩滅が著しい。１と３はＳＧ2130出土で、２は上層の土壌出土である。

ガラス製品（第38図）

小壺の破片である。小片のため全形については不明であるが、口縁部と肩部が残っている。口径は約4.0cmに復原できる。器壁の厚さは0.1cm強で、口縁部は0.25cmとやや厚くなり、口縁端は薄くしている。明るい空色を呈し、光沢がある。下層腐植土層出土。



第38図　SG2130 出土ガラス製小壺

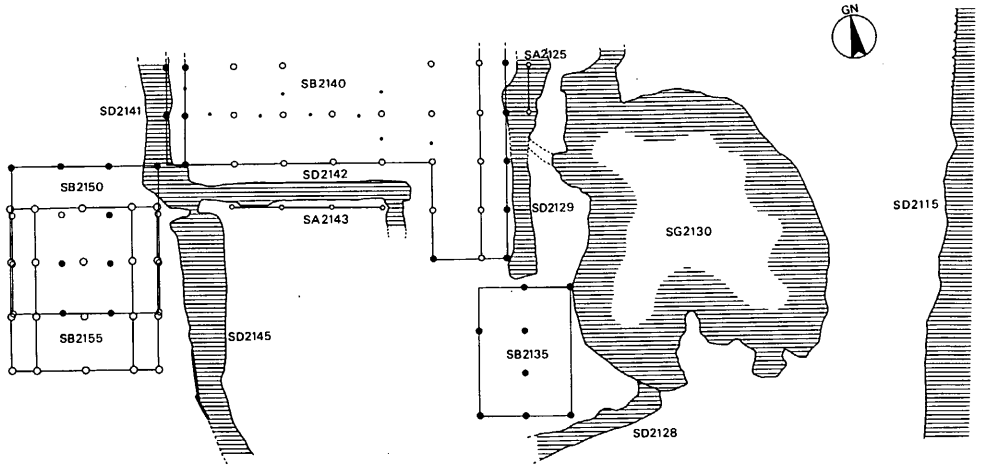
小結

以上、検出遺構と出土遺物について述べたが、ここで整理し、若干の問題点なりを指摘して、まとめとする。

今回検出した顕著な遺構には、建物・井戸・池・溝などがある。これらの遺構について、層位関係から必ずしも明瞭にし得ない部分もあるが、遺構相互の切り合いや、位置関係、それに出土遺物などを勘案しながら、各遺構の年代観等について考察してみたい。

まず、建物４棟についてみてみよう。

ＳＢ2140とその西側に位置するＳＢ2150は、いずれも礎石建物である。両者は方位を合わせ、



第39図　遺構模式図

柱筋も揃え、かつまた柱間寸法も全く同じである。このことからみれば、この両者は期を同じくして計画され、ほぼ同じ頃着工されたとみて大過なかろう。ＳＢ2150と重複する位置にあるＳＢ2155は層位関係から、ＳＢ2155が後出する。ＳＢ2155は掘立柱建物であり、柱間寸法や柱の位置など、ＳＢ2150とは若干異っており、構造的に少し違っているようである。しかしながら、東・西の柱筋はＳＢ2150と同じで、南北長については約0.6ｍ長くなるだけである。この両建物は、ほぼ同じ規模で、位置的にはやや南へ寄っているが、同じ性格を有し、同じ使用目的の建物であったと考えて差し支えなかろう。また、ＳＢ2135については礎石は完存しないが、柱筋をＳＢ2140に合わせ、東西の柱間寸法は1.90ｍで、ＳＢ2140・2150に近似している。このことからみれば、同時計画の可能性は強い。

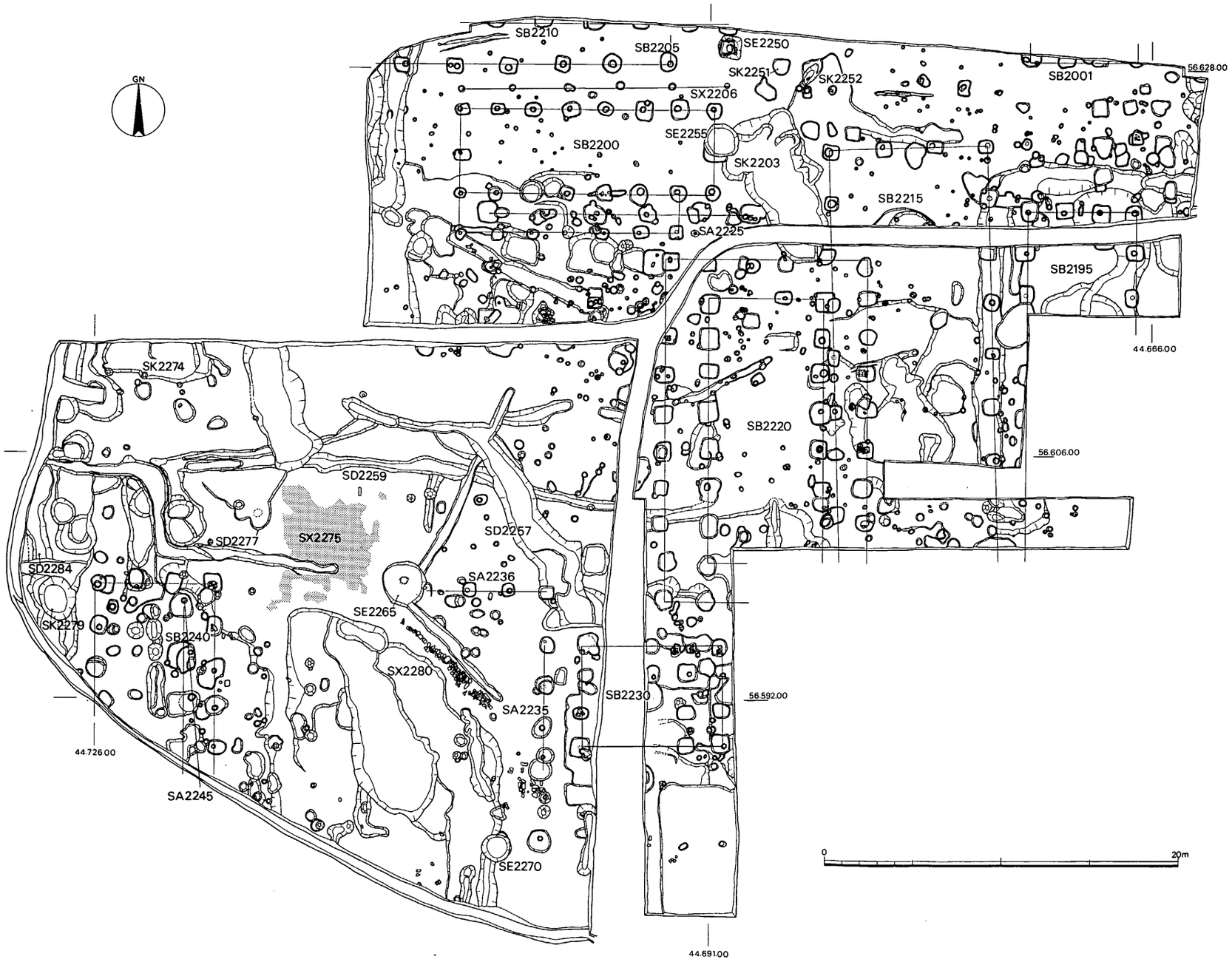
次に、年代を考える上で、出土遺物と池との関係についてみてみよう。ＳＢ2150の廃絶を示す黒灰色土下層出土の土師器は形態的には４つに分類されるが、年代的には14世紀中頃に考えられるものである。このことから、ＳＢ2150は少なくともそれ以前には存在していたものと判断される。ＳＢ2150とＳＢ2140が同一計画のもとに造られたものであることは先に記したとおりである。この２棟の建物の創建ないし存続年代を考える上で一つの手掛りとなるものに池ＳＧ2130がある。ＳＧ2130出土の土師器や陶磁器は14世紀中頃～16世紀中頃までのものを含んでおり、池の存続年代としてはこの時期が考えられる。池は、それ以前の堆積層である下層腐植土層の上に掘削され、下層腐植土層は出土遺物から14世紀前半代の谷の氾濫により堆積したものであることを確認している。このことから池は、明らかにそれ以降のものであると言える。この池と先述の礎石建物２棟との関係は層位上から直接に見出し得ないが、ＳＢ2140をある程

度意識した形で造られていること、ＳＢ2140・2150は14世紀中頃以前には存在していたものであることを考慮すれば、池と礎石建物ＳＢ2140・2150は同一時期に造られたとみて差し支えなかろう。さらに、ＳＢ2140・2150の下層には厚い腐植土層がみられ、この腐植土層の上に整地し、２棟の建物は構築されている。この腐植土層と池の部分で確認された下層腐植土層が同一のものであるのかは明確でないが、地形的な事を考慮すれば同じである可能性は十分認められ、前記の判断をある程度補填し得る。

以上のことから、この地域では当初礎石建物ＳＢ2140・2150・2135、池ＳＧ2130、溝ＳＤ2115が構築される。その時期は14世紀中頃にかけての年代が設定される。そしてＳＢ2150については、火災等の原因で、14世紀中頃以降のそれもあまり隔らない頃にＳＢ2155に建て替えられている。ＳＢ2140がその時点に建て替えられたものかは不明であるが、周囲の状況から判断すれば、その後も存続し、ＳＢ2155と同時に存在したと考えた方が妥当と思われる。

ＳＢ2155廃絶後、柵ＳＡ2105・2106や井戸ＳＥ2110が構築されている。ＳＢ2140・2155の終焉は定かでないが、池の廃絶は16世紀後半代であることからすると、遅くともこの時期には既に存在していなかったとみて大過なかろう。

最後に、周辺の調査結果との関連について若干述べてみたい。昭和47年度に実施した第21次調査では上・下２層の中世の遺構を検出しているが、とくに下層遺構として、南北方向の石組溝と建物跡が確認されている。石組溝ＳＤ460は7.0ｍ分検出され、幅0.75ｍ、深さ0.45ｍのものである。この溝は、今回検出したＳＢ2150から西へ約27.0ｍ、南へ約17.0ｍのところに位置している。方位は座標北から約８°14′西偏している。今回、下層遺構として検出した建物や溝の方位は約９°27′東偏している。両者の遺構の方位は約17°30′程の開きがある。ＳＤ460は鎌倉期に考えられており、時期的にも若干異なり、方位の上からも直接の関連は見出せないので、全く別の遺構である可能性が強い。また、昭和53・55年度に実施した第57・67次調査で検出した金光寺遺跡と比較すると似かよった点が見出される。その一つは年代的なものである。金光寺の遺構は13世紀後半～16世紀中頃に比定されるもので、今回検出の遺構とほぼ同じ頃である。第二として、建物の柱間寸法である。金光寺遺跡検出の建物の多くは、柱間寸法が1.92ｍである。今回検出の建物は1.93ｍで、近似した数値を示している。第三点として出土遺物がある。今回、池ＳＧ2130から多量の木製品が出土したが、その中には卒塔婆・位牌などの仏教関係遺物が比較的多くみられる。現段階では金光寺遺跡と直接の関連性は見出されないが、今回の調査地を含めて、観世音寺の後背部地域は観世音寺の子院跡に推定されている。「太宰府旧跡全図」(文化３年）によると調査地の近くに「サイフクジ」の記載がみられ、今回検出の遺構も子院の一つである可能性も大きく、「サイフクジ」との関連も考慮される。子院跡の調査については、まだ緒についたばかりで、今後、周辺の調査の進行に伴ってしだいに明らかになるものと考えられる。



第40図　第80次発掘調査遺構配置図

3　第80次調査

本次調査は都合上3回に分けて実施した。調査地域は字日吉であることから従来日吉地区官衙群と呼ばれていた。この日吉地区官衙群の調査は第32次調査（今回の調査域と重複する）が最初で、掘立柱建物2棟の一部を検出していた。次いで、第75次調査により掘立柱建物4棟を検出し、この地域の建物群は大宰府政庁第II期開始期にあまり隔らない頃には既に造営されていたことが判明していた。今回の調査目的は建物群の拡がりを追求することと、第75次調査で予想された「コ」形建物配置の確認を主たる目的とした。

調査は昭和57年4月12日に第1次調査を開始し、6月7日に終了した。機材・遺物整理などを行なった後、6月12日第2次調査を始め、8月23日に終了した。第3次調査は同年9月27日から10月13日にかけて実施した。

地番は太宰府市大字観世音寺字日吉256・257である。

検出遺構

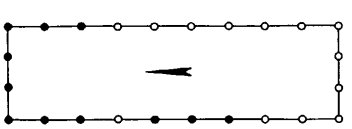
表土を除去すると、床土、灰褐色土層があり、灰褐色土層下が遺構面となる。灰褐色土層は北半部は薄く、南に行く従って厚く堆積する。なお、第1次調査域北側部分は、表土直下は花崗岩のバイラン土で、これが遺構面である。第2次調査域南半部は、地上(花崗岩バイラン土)が急に傾斜するため、この部分には整地がなされている。

検出した主要な遺構は掘立柱建物9棟（1棟は第75次調査域から南へ延びる建物、2棟は第32次調査検出分と重複する)、柵列4条、井戸5基、土壙、溝、礫敷遺構、池状遺構、ピット群である。井戸やピット群は観世音寺周辺域に比して密集度は低く、また少ない。そして、これらの遺構は平安時代末期に集中し、確実に鎌倉時代に属する例はない。つまり官衙廃絶後、居住地区としてあまり使用されていないといえる。

掘立柱建物

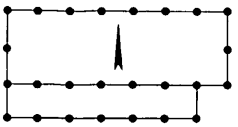
ＳＢ2001　第75次調査区の東南端で北側梁行を調査していたが、今回の調査区東北端で南側梁行を検出した。両者を総合すると、梁行6.3m（2.1尺)、桁行18.6m（62尺）になる。これを3間×9間の建物とすると桁行柱間は7尺（1尺を29.6cmとして）等間になる。しかし、桁行柱間は1間分も調査していないので、9間になるのかどうかは確かではない。また、ＳＢ2000の東側柱列とＳＢ2001・ＳＢ2195の東側柱列は一直線上にある。

ＳＢ2195　調査区東端近くで検出した南北棟建物で、北に位置するＳＢ2001と柱筋を通している。柱間寸法は桁行2.4m(10尺)等間、梁行は中央間が2.1m(7尺)、両端は2.0mである。北側柱列西端柱穴と東から2番目柱穴および東側柱列の北から3番目柱穴には柱根（径約



20cm）が残っていた。西側柱列北から4番目の柱穴は土壙ＳＫ2234によって壊され、その痕跡すらなかった。柱根痕をとどめる柱穴が少ないため正確とは言い難いが、建物方位はＮ―36―Ｗである。

ＳＢ2200　発掘区西北部で検出した3間（7.05ｍ）×7間（14.5ｍ）の東西棟建物である。

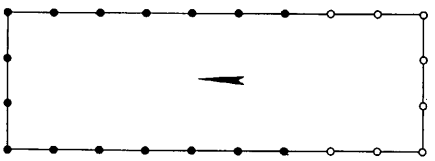


建物方位はグリッドノースに対して直交する。建物の南側には6間分廂がつく。桁行柱間は東・西両端は2.0ｍ、他の5間分は2.1ｍ（7尺）、梁行は2.5ｍ、2.35ｍで8尺を基準としている。廂の出は2.2ｍである。廂の柱掘形は身舎部分よりも小さい。東側の身舎柱穴のうち中央の柱穴はＳＥ2255によって大部分が削り取られている。

ＳＢ2205　発掘区北部ＳＢ2200の北側で、桁行5間分を検出した。東端柱間は3.3ｍ(11尺)、2番目は2.8ｍ、他の3間分は各々3.0ｍ（10尺）である。方位は建物東側で若干（30′）北へ振れている。梁行部分は不明なため建物とは断定できない。あるいは柵列かも知れない。

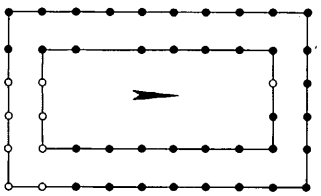
ＳＢ2210　発掘区北端で5間分の柱穴掘形を検出した。柱根痕が不明なため柱間は明らかでないが、大略2.7ｍ（9尺）等間になる。

ＳＢ2215　発掘区西部で梁行3間、桁行6間分検出した。桁行・梁行の柱間は3.0ｍ(10尺)等間である。



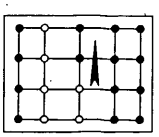
建物方位はＮ―1°45′―Ｅで、日吉地区官衙群検出建物のなかでは唯一西に振れている。桁行・梁行の柱間が3.0ｍあり、掘立柱建物としては最大規模に属する。柱の重複関係からＳＢ2220よりも新しい。

ＳＢ2220　発掘区西域、ＳＢ2215の西側で検出した5間（11.4ｍ）×9間（19.5ｍ）の南北棟建物である。



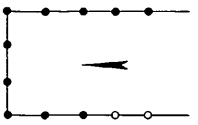
桁行の柱間は南・北3間分は各々2.2ｍ、中央3間分は各々2.1ｍ（7尺）であり、梁行の柱間は2.5ｍ・2.2ｍ・2.1ｍ・2.2ｍである。東側廂部分の柱穴のうち北から4・6番目の掘形の最下に縄の叩き目を有する完形の平瓦を敷いている。北側身舎部分に柱穴が1個あることから四面廂建物を想定したが、北側身舎部分の柱穴が1個欠失していることと南側部分が未調査であるため定かではない。廂の出の寸法が2.2ｍ・2.5ｍと正方形にならない点などを考慮すると東・西にのみ廂を有する建物かも知れない。建物方位は北で東へ約1°程振れている。

ＳＢ2230　第80次調査で検出したのは西側1列だけであり、大部分は第32次調査によって検出（ＳＢ591として報告したが、遺構番号をＳＢ2230に改める）されている。撹乱により柱穴の存しない部分もあるが、3間（5.7ｍ）×4間（8.1ｍ）の総柱建物に想定できる。柱根跡が6～7個所判明しており、それから柱間を復原す



ると、東西列では1.8m・2.25m・2.25m・1.8m、南北列では1.7m・2.0m・2.0mになる。柱穴東北隅には径0.2mの柱根が残っていた。建物方向は北で西へ約50′振れている。

SB2240 発掘区西南隅で検出した南北棟の3間（6.1m）×4間以上の建物である。梁行は両端が2.2m、中央が2.1m、桁行は北から2間分は2.4m（8尺）であるが他は若干狭くなる。東北隅柱穴には根がらみの石が配されている。柱穴掘形は不整形である。建物方位は略真北を示す。



柵

SA2225 SB2200の廂部分に東西に走る柵列を検出した。柱間は約3.0m（10尺）等間で5間分ある。この柵列の北側8.5m離れたところにSB2205があり、あるいはこの建物の目隠塀であるのかも知れない。

SA2235 SB2230の西側で南北に走る3間の柵列を検出した。柱間は2.2m等間である。柵列の振れはSB2205と同一であり、また約2m程の近接した地点であることから、SB2230の目隠塀と考えられる。

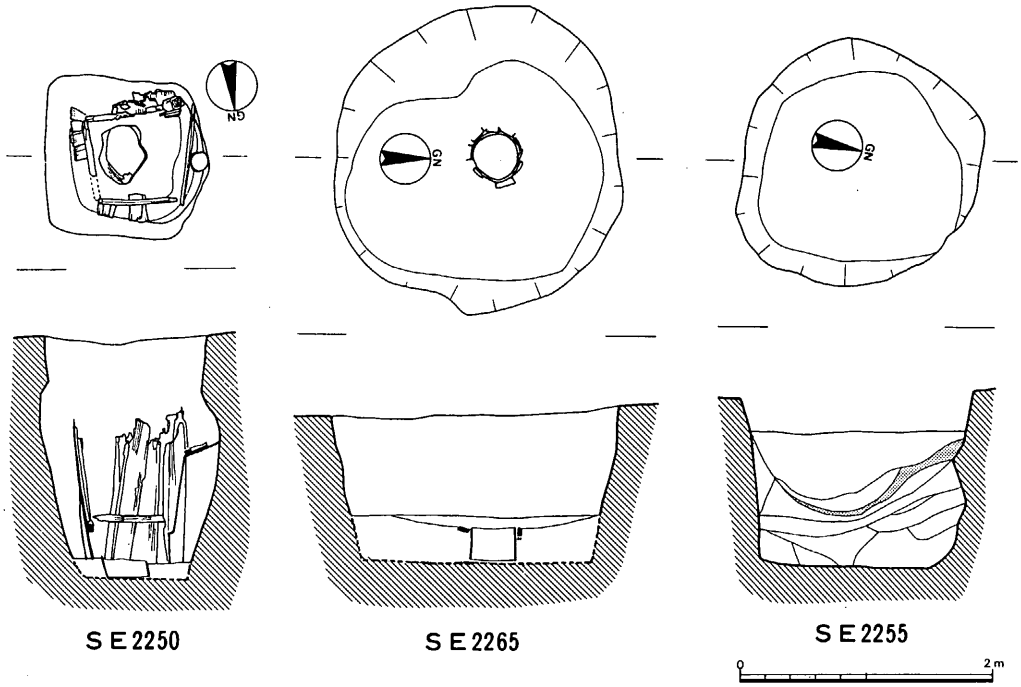
SA2236 SA2235の北部で検出した。3間分の柵列で東西に走る。その方向はSA2235と略直交する。柱間は2.4m（8尺）等間である。西端の柱穴には偏平な石を入れ礎板としていた。掘形は1.5m程あり、しかも隅丸方形を呈し、他の柵列よりも丁寧である。付近に建物はなく、どのような役割りを有するかは明らかでない。

SA2245 SB2240と重複するが、柱穴相互の重複はない。南北に3間分検出し、さらに南へ延びる。柱間はばらばらで、その方向は西へ4°30′程振れている。

井　戸

SE2250 平面が約1.1m×1.3m、深さ1.9mの隅丸方形の掘形を有し、中に方形縦板組の木枠が1段残存する。木枠は残存状態は悪く、下段の横桟も一部原位置にない。原位置を保つ南・西の横桟をもとに木枠の原形を復原すると約0.7m×0.75mになる。隅木は西南隅に1本残存しているが、これは径10cm程を測る丸太材であった。下底に径40cm、深さ18cm程の大きさの曲物を据えている。最下段の木枠を組む際に祭事を行なったのかテラスを造り、径6cm、長85cmの自然木をテラス先端に配し、その内側に径14cm程の曲物を置いている。第9次調査検出SE235では掘形内に完形土師器壺を竹籠に入れて埋置した例があり、これもこのような行為の一つかも知れない。なお、上層には厚さ約8cmの炭層があった。大宰府では、井戸廃棄の際、上層に多量の炭を入れる例が多く、発掘時に井戸かどうかの手掛りにもなっている。 平安時代後期。

SE2255 SE2250の南側で検出した井戸で、辺長約1.9mの不整方形の形状を呈し、深さ約1.2mである。木枠は完全に抜き取られているため、その形状は知り得ない。木枠を抜き取った後直ちに埋め戻されたようで、花崗岩バイラン土のブロックが多数入っていた。また、SE2250



第41図　井戸実測図

でみられたようなレンズ状の炭層がある。掘形からみると方形の木枠が組まれたと考えられる。出土遺物は極めて少なく、時期を決し難いが、掘形などと考え合わせるとＳＥ2250頃と考えられる。

ＳＥ2260　ＳＢ2200の柱穴を切って造られた井戸で、径約1.2ｍ、深さ約1.4ｍを測る。木枠は存しなかったが、掘形の形状や規模から曲物を用いた可能性を指摘できる。

ＳＥ2265　東西約0.74ｍ、南北約0.72ｍ、深さ約1.2ｍの不整形の掘形である。最下部に径18.5㎝、深さ26㎝の曲物を据え、この曲物の周囲に瓦を詰めている。湧水が激しく十分なる観察はできなかったが、方形縦板組の可能性が強いと考えられる。

ＳＥ2270　発掘区南端部で検出した円形の掘形を有する井戸である。径1.5ｍ～1.6ｍ、深さ0.8ｍである。ＳＥ2260と同様に曲物を用いて井戸側をしたと考えられる。

土　壙

ＳＫ2203　発掘区北部で検出した不整形な浅い土壙である。長軸約6.3ｍ、短軸約4.0ｍ、深さ約0.4ｍである。ＳＥ2255と先後関係があり、ＳＫ2203が遅れる。

ＳＫ2251　発掘区北部、ＳＥ2250の東南方にある。略隅丸方形で約9.2ｍ×約1.0ｍ、深さ約0.1ｍである。

ＳＫ2252　ＳＫ2251の東隣にある隅丸三角形で、約1.0ｍ×約1.8ｍ、深さ0.3ｍである。ＳＫ

2251出土の土器とこの土壙出土の土器は接合することから同時に埋められたと考えられる。

ＳＫ2274　発掘区西北隅にある土壙で、東と北へ拡がる。検出部分では幅約6.0m、深さ0.4mである。

ＳＫ2279　発掘区西南隅で検出した。径約5.6mを測る。深さ1.1mまで発掘したが、湧水が激しく、また崩壊の危険があったため作業を中止した。埋土状態や湧水などを考慮すると井戸の可能性もある。ＳＤ2284によって切られる。

礫敷遺構

ＳＸ2275　ＳＢ2240の東北方に小指大から拳大の石が多数敷き詰められている遺構である。大部分は後の撹乱により石が除去されているが礫群西北部では比較的良く残っている。礫群の厚さは厚いところで25cm程で、小石を一面に敷いた程度である。一部完形の土器も含むが、細片化した土器を多数伴なっていた、これらの土器は８世紀後半から９世紀初頭頃にかけてのものである。何故このような礫敷がなされたのかは俄に判断し難い。

池状遺構

ＳＸ2280　ＳＸ2275の南ＳＢ2240の東にある浅い凹みである。凹みの東北部から東側の縁辺部には瓦が配され、列をなす。瓦列は丸・平瓦で構成されるが平瓦が圧倒的に多い。瓦の叩き目は縄目がほとんどで、格子目は少数である。凹みを池状遺構、瓦列を縁辺を飾る仕事と考えたが、積極的な根拠はない。

出土遺物

ＳＢ2220出土土器（第42図、別表）

土師器

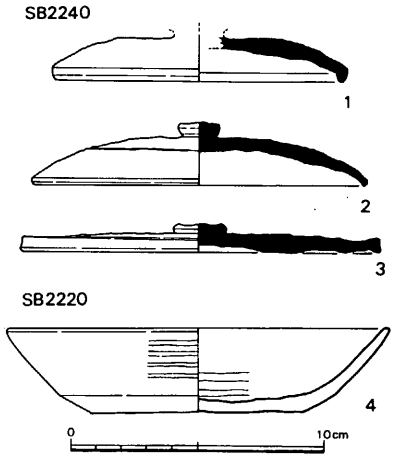
杯（４）　口径15.0cm、器高3.3cm、底径8.4cmである。体部下位以下から底部にかけて回転ヘラ削り、体部中以上および内面全部にヘラミガキを行なう。胎土は精良で砂粒は少ない。赤褐色、軟質に焼成されている。柱穴掘形出土。８世紀後半頃。

ＳＢ2240出土土器（第42図、別表、図版50）

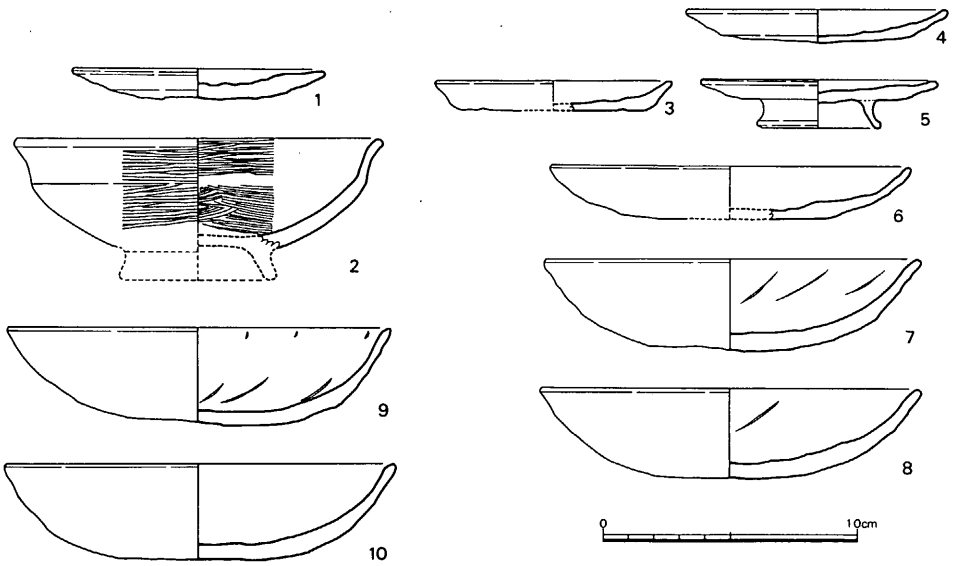
須恵器

蓋（１～３）　器高が高い１・２と偏平な３とがある。このなかで２がもっとも新しく、身受け部は小さく、体部との境いが不明瞭である。１～３ともに天井部はヘラ切りのままで再調整はしていない。

他に土師器の細片が出土している。多くは８世紀後半



第42図　SB2220・2240出土土器実測図



第43図　SE2250・2265出土土器実測図

代の特徴を有している。

ＳＥ2250出土土器（第43図、別表、図版50）

土　師　器

皿ａ（１）　口径10.0cm、器高1.3cm、底径7.0cmである。

黒色土器

椀（２）　底部を欠失する。体部下位はヘラ削り、他は丁寧なヘラミガキを行なう。燻しは内面だけで、外面にはおよばない。

ＳＥ2265出土土器（第43図、別表、図版50）

土　師　器

皿ａ（３・４）　口径9.4cm・10.3cm、器高1.2cm・1.3cm、底径7.4cm・7.5cmである。

皿ｃ（５）　口径9.4cm、器高1.9cm、高台径4.9cmである。

皿（６）　口径14.2cm、器高2.1cm、底径8.6cmである。

丸底の杯（７・８）　口径14.7cm・15.0cm、器高3.6cm・3.6cmである。体部内面のミガキは密である。内面には放射状のコテあて痕が明瞭である。

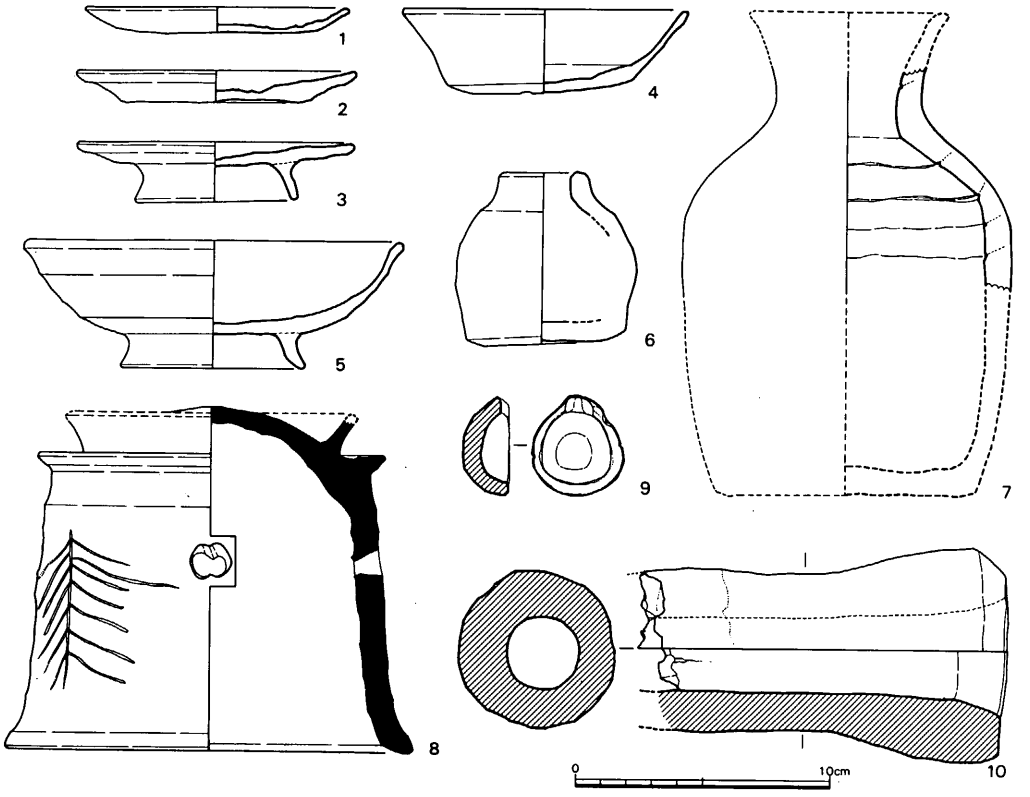
ＳＫ2203出土土器・鋳型・鞴羽口（第44図、別表、図版51）

土　師　器

皿ａ（１・２）　口径10.5cm・11.1cm、器高1.1cm・1.3cm、底径8.2cm・7.5cmである。

皿ｃ（３）　口径10.8cm、器高2.3cm、高台径6.4cmである。

杯（４）　口径11.2cm、器高3.2cm、底径7.2cmである。



第44図　SK2203出土土器・鋳型・鞴羽口実測図

椀（５）　口径15.0cm、器高5.1cm、高台径7.4cmである。ヨコナデ・ナデ仕上げだけの椀形品としては最新期に属する。

壺（６・７）　６は口径3.6cm、器高6.8cm、胴部最大径7.1cmの小壺である。焼成は悪く、器面が風化している。胎土は精良で砂粒は少ない。７は頸部上半および体部中位以下を欠失する。内面は粘土紐の痕跡が顕著である。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

須　恵　器

硯（８）　器高13.6cmの鉢形品を粘土紐でつくり、それを倒置し、２条の突帯を貼付して硯の祖形をなす。台部はヨコナデをするが、内天井部は成形時のままで、指頭痕が著しい。台部には双円形の透しを３個所入れ、その間に綾杉文を線刻している。胎土中には砂粒を比較的多く含む。焼成は悪く、淡灰茶色を呈する。

鋳　型

隅丸三角形状のもので、幅3.6cm×4.0cmの大きさである。外端部に２個所切り込みがあり、他方との合せ目にしたと思われる。内面は摩滅し、剝落したためか真土部分はない。鋳型とす

る確証はない。細砂粒を多く含む。赤褐色で堅緻に焼成されている。

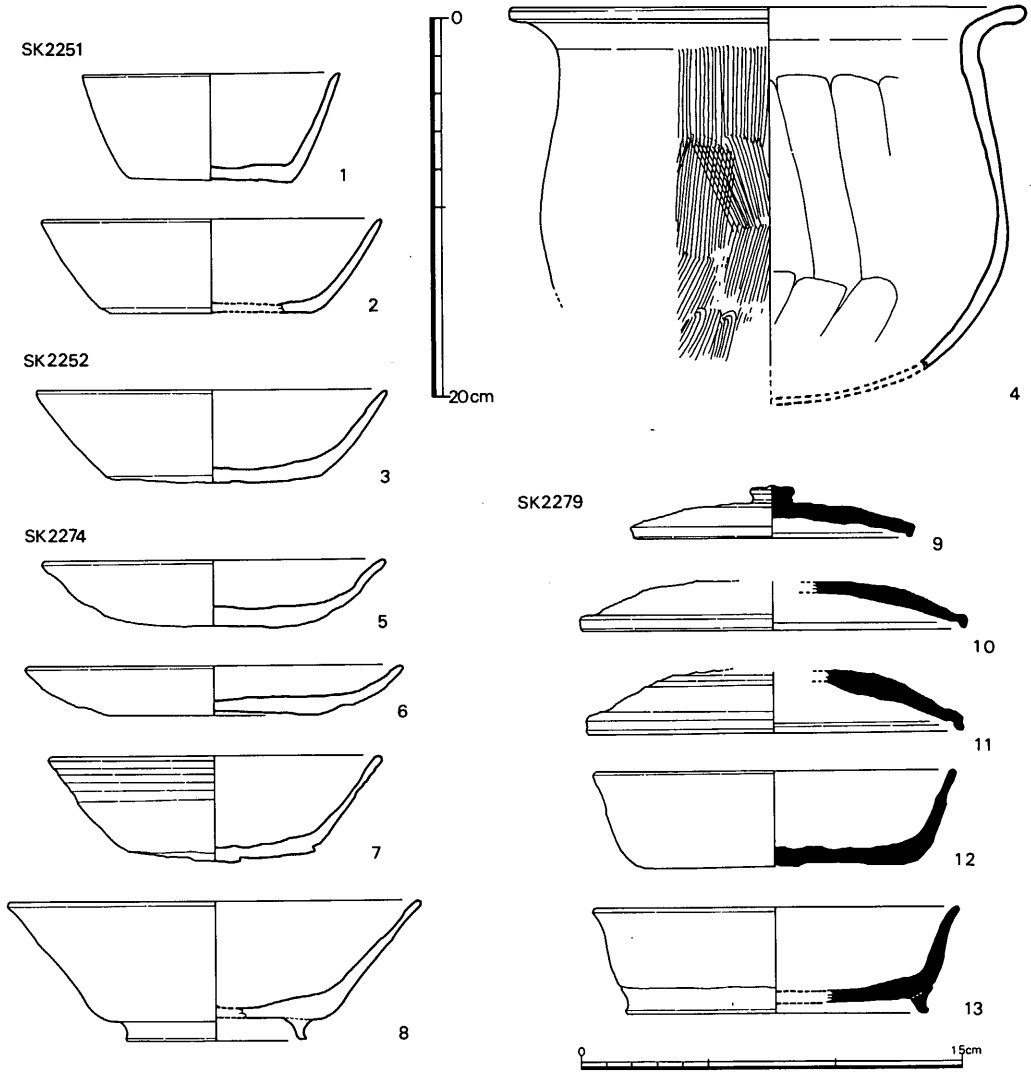
鞴　羽　口

型に粘土を巻き付け、指押えで成形している。先端部を欠失するが、残存部上端付近は火熱を受け青灰色を呈する。胎土中には砂礫を多く含む。焼成はやや不良で比較的軟質で、茶褐色を呈する。

ＳＫ2251出土土器（第45図、別表）

土　師　器

杯（１・２）　１は口径10.2cm、器高4.2cm、底径6.3cmの小型の杯である。外底部はヘラ切



第45図　SK2251・2252・2274・2279出土土器実測図

り離しのままで、再調整はない。2は4分の1程の小片から復原すると口径13.4cm、器高3.7cm、底径8.0cmになる。外底部の調整については残存部が少なく、また摩滅のため明らかでない。1・2とも胎土は精良で砂粒は少ない。1は淡茶赤色、2は淡茶色を呈する。

ＳＫ2252出土土器（第45図、別表、図版50）

土　師　器

杯（3）　口径13.7cm、器高3.6cm、底径7.4cmである。器面全体風化のため調整は不明。外底に墨書があるが判読困難である。少量砂粒を含む。淡赤茶色。完形。

甕（4）　ＳＫ2251とＳＫ2252とから約半分づつ出土した。底部を欠失するが、他はほぼ残存している。口径27.5cm、体部最大径約25cmである。図では体部下位は大きく屈曲し、広い丸底になるが、この部分の残存部が少ないためで、更に下方へ延びる可能性もある。つまり、器高は若干高くなるかも知れない。外面は粗い刷毛目、内面は体部上位はヨコ方向、下位はタテ方向のヘラ削り調整である。体部下位は火熱を受け淡赤色を呈し、内面には焦げ付きが認められる。胎土中に細砂粒を比較的多く含む。淡茶色を呈し、焼成は良好である。

ＳＫ2274出土土器（第45図、別表、図版51）

土　師　器

皿（5・6）　口径13.4cm・14.8cm、器高2.6cm・2.0cm、底径8.8cm、8.0cmである。5・6とも体部は大きく外へ開くため、口径に対して底径の割合は小さい。ヘラ切りの後ナデ調整を行なう。5は一定方向の板状圧痕、6は方向を違えた板状圧痕がある。この方向の違いは内底をナデる時に器を動かしたため生じると考えられる。ともに胎土は精良で、砂粒はほとんど含まない。淡赤茶色を呈し、焼成は良好である。

杯（7）　口径13.0cm、器高4.2cm、底径7.5cmである。体部上位は強いヨコナデによる螺旋状の凹線が巡る。外底のヘラ切りは粗い。外底から体部下位の一部にかけてヘラによる乱雑な傷がある。胎土中に少量砂粒を含む。淡灰茶色を呈し、焼成は良好である。

椀（8）　体部を大きく開く椀で、口径16.2cm、器高5.5cm、高台径7.1cmである。胎土は精良で砂粒は少ない。淡乳茶色を呈し、焼成は良好である。

ＳＫ2279出土土器（第45図、別表、図版50）

須　恵　器

蓋（9～11）　9は口径11.2cm、器高2.1cmの小形の杯蓋である。天井部は回転ヘラ削り調整を行なっている。10・11は撮を欠失する杯蓋である。口径は15cm前後を測る。10の天井部はヘラ切りのままであるが、11は回転ヘラ削り調整をしている。

杯（12・13）　12は口径14.2cm、器高3.7cmで、外底部はヘラ切りのままである。13は口径14.4cm、器高4.2cmで、外底部は回転ヘラ削り調整を行なう。12・13とも体部の開きは少ない。

ＳＸ2275出土土器・陶磁器（第46図、別表、図版52）

須　恵　器

蓋（１～５）　器高が高いもの(１～２)と低いもの(３～５)とがある。１・２・５は天井部の再調整は行なわず、ヘラ切り離しのままである。３・４は天井部を回転ヘラ削りしている。

杯（６）　口径13.8cm、器高3.7cm、高台径8.1cmである。高台は断面四角形で、底部端より内側につく。

皿（７）　口径19.0cm、器高2.2cm、底径15.4cmである。外底部はヘラ切り離しのままである。

土　師　器

蓋（８～10）　３点ともに身受け部は丸味を有し、退化した姿を有する。８・９の天井部はヘラ切りのままであるが、10は丁寧に回転ヘラ削り調整を行なっている。10は撮を除いてヘラミガキされる。

杯（11～18）　11は口径13.6cm、器高3.2cm、底径7.6cm。体部下位および外底部は丁寧な回転ヘラ削り調整、体部内面は密でないヘラミガキを行なう。法量および体部の傾斜度により12・13・14および15～18の４種類に分かれる。外底部はいずれもヨコナデかナデ調整されている。

皿（19～25）　小形品（19～23）と大形品（24・25）に分かれる。小形品はヘラ切り離しのままで調整は行なわないが大形品24は回転ヘラ削り、25はナデ調整を行なっている。20の外底中央付近に板状圧痕がある。

甕（26）　口径26.9cmに復原できる。体部内面は斜め上方へヘラ削りした後に上端付近だけヨコ方向のヘラ削りをする。

青　磁

壺（37）　口径8.7cm程の四耳壺の破片である。胎土は粗く白砂・黒砂を多く含み器面に浮き出ている。細かい貫入を多数伴なう黄緑色の釉は内外面ともにかけられている。逆Ｕ形の耳は隋・唐代の白磁によくみられる形態である。

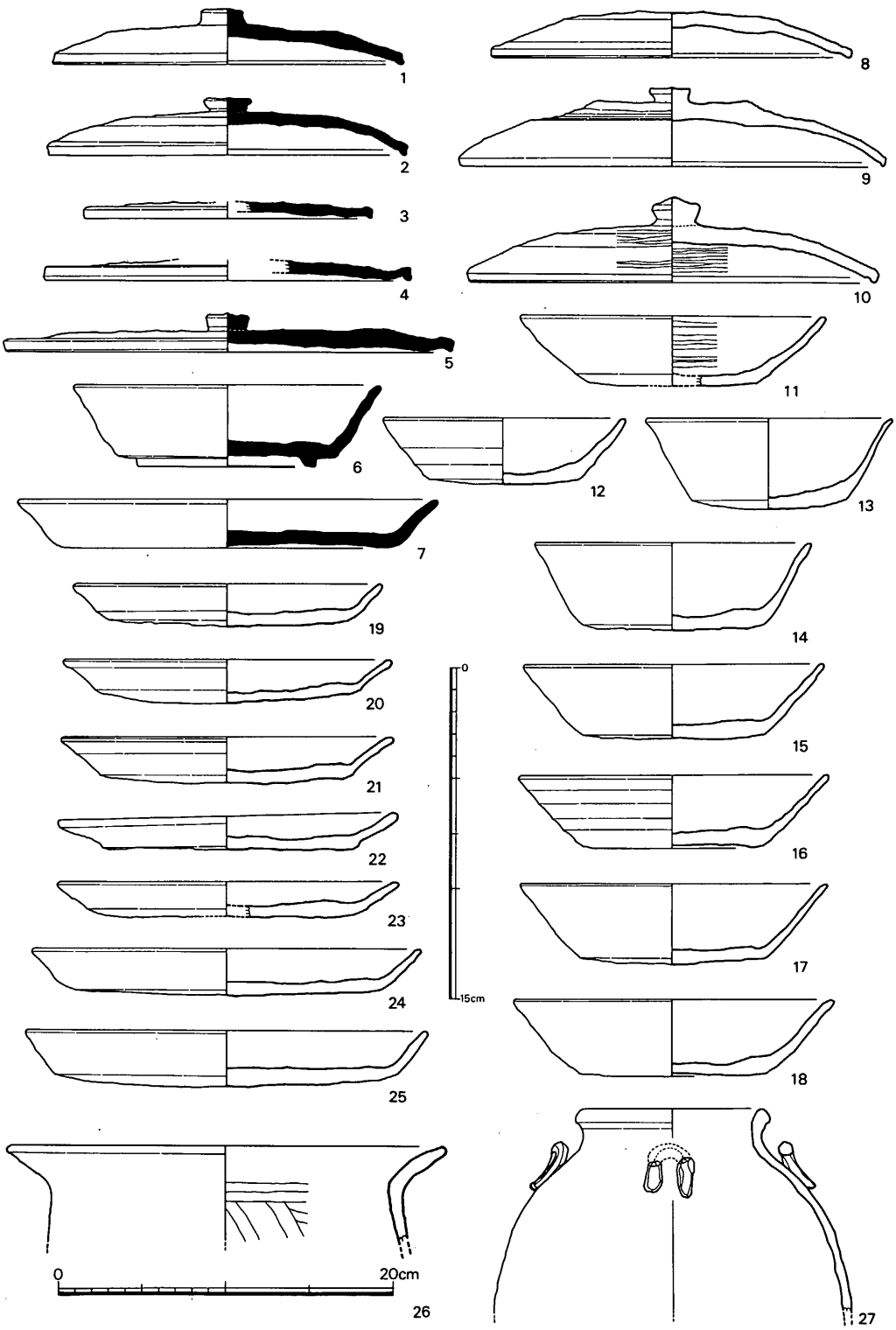
整地層出土土器（第47図、別表、図版53）

須　恵　器

蓋（１・２）　１は口径13.9cm。天井部はヘラ切りのままである。２は口径15.2cm、器高2.2cmである。天井部は回転ヘラ削り調整される。硯として使用されたのであろう。内天井部は滑らかである。

杯（３・４）　口径13.0cm・14.2cm、器高3.7cm・4.2cm、高台径8.0cm・9.8cmである。高台は底部と体部との境いよりも内側に貼付される。体部の立上がり傾斜は急であり、あまり外上方へ開かない。

この整地層出土土器はＳＸ2280の下方で検出した。他に土師器も出土しており、須恵器とともに８世紀中頃と考えられる。整地層は地山の凹みおよびＳＢ2240に拡がる。ＳＢ2240の上限



第46図　SX2275出土土器・陶磁器実測図

を示す。

遺構面上出土土器（第48図、別表、図版53）

ＳＢ2240の直上から一括して出土した。

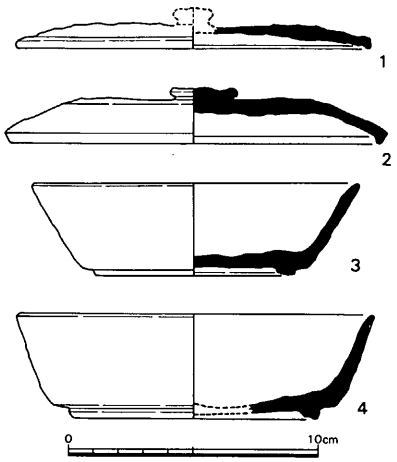
須　恵　器

蓋（１～７）　杯蓋は器高の高い１～３と低い（４～６）に分かれる。前者は天井部を全て回転ヘラ削り調整しているが、後者は切り離しのままである。７は通例の杯蓋とは相違する。あるいは壺蓋かも知れない。

杯（８・９）　口径の小さなものである。

土　師　器

椀（10）　口径12.4cm、器高4.5cm、高台径4.5cmの小椀である。体部は内外ともにヘラミガキされる。



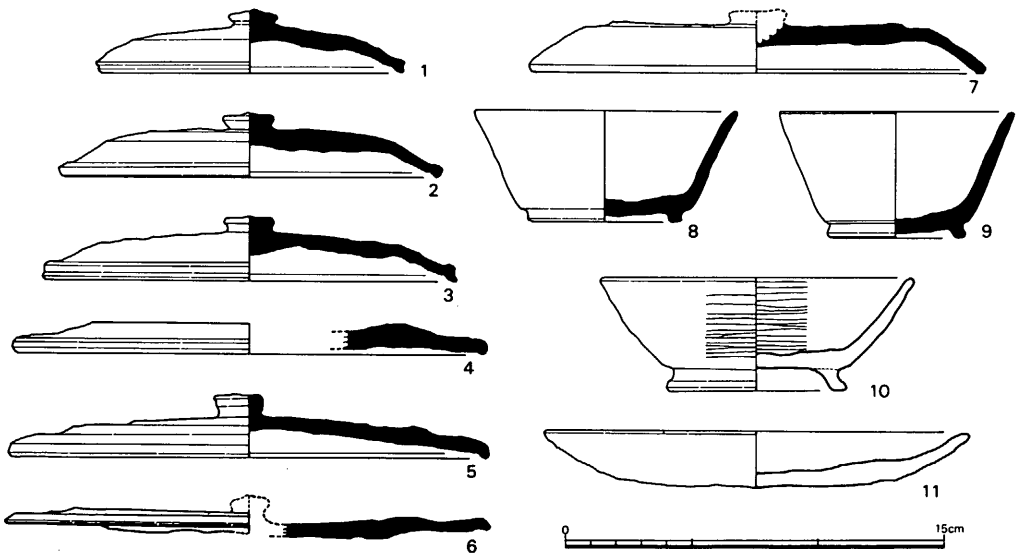
第47図　整地層出土土器実測図

皿（11）　口径16.8cm、器高2.3cm、底径13.0cmである。外底部はヘラ切り離しのままである。

黒灰砂質土層出土土器・硯（第49・50図、別表、図版54・55）

ＳＢ2105を覆う層からの出土である。

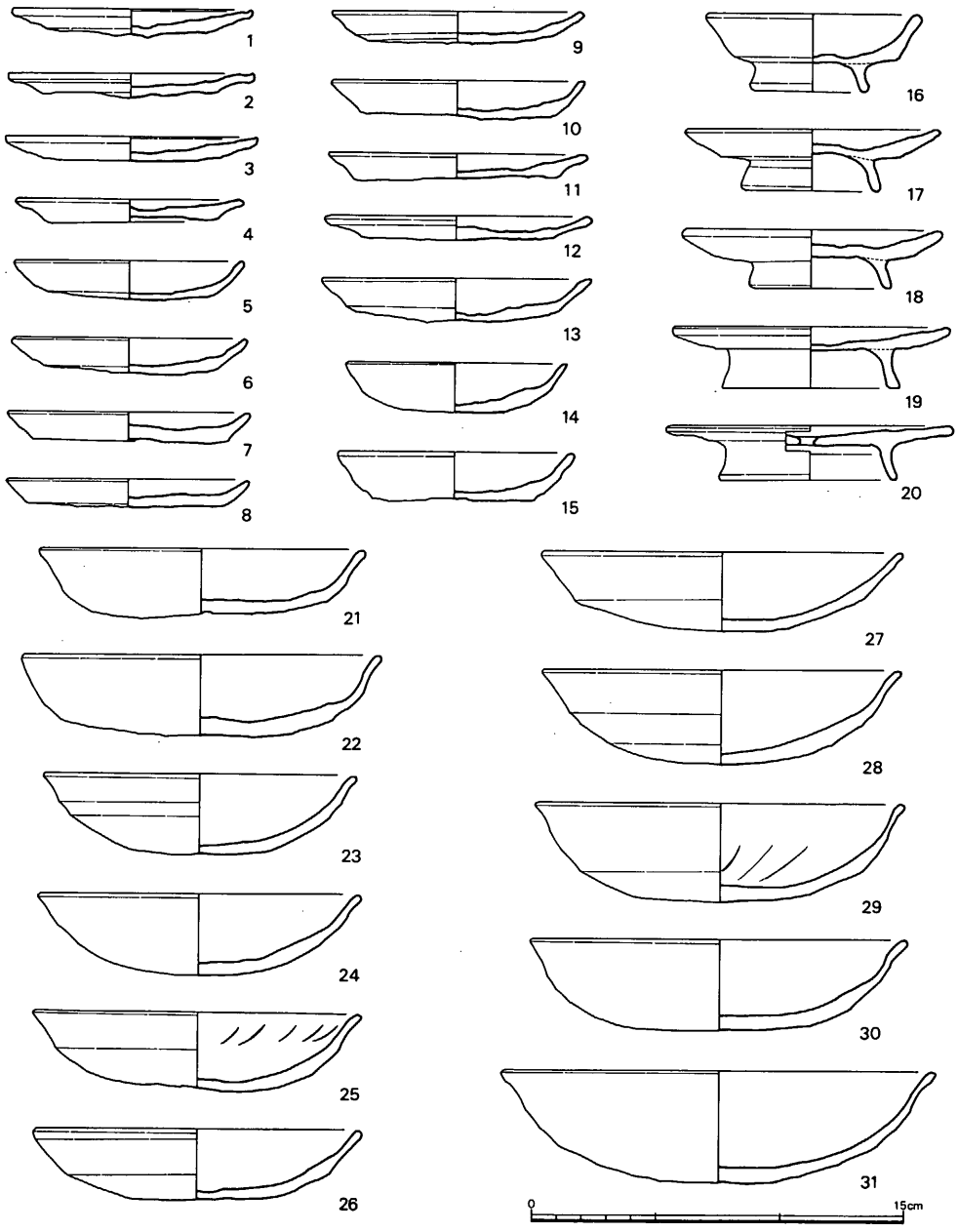
土　師　器



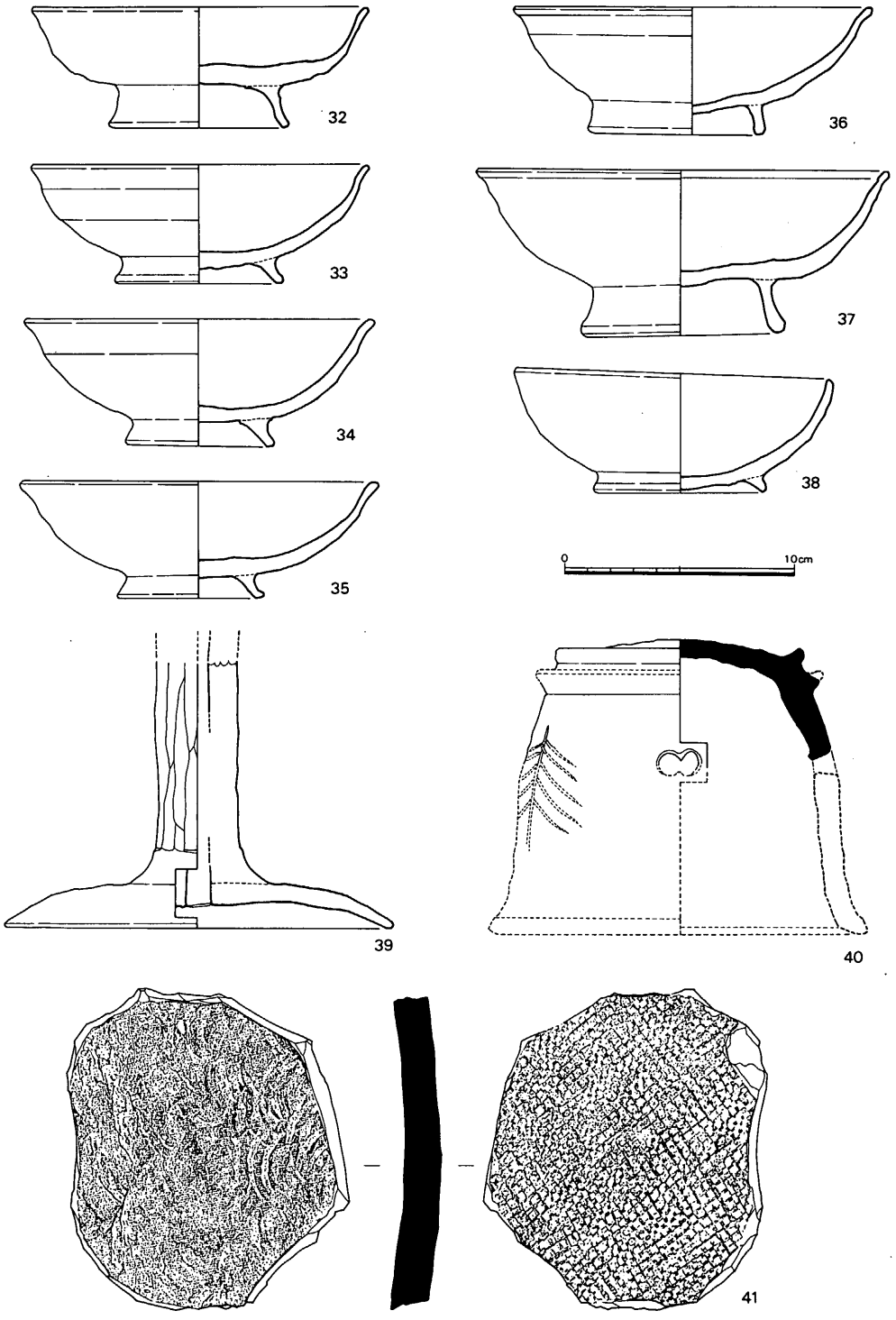
第48図　遺構面上出土土器実測図

皿（１～３）　蓋を倒置したような形態を有する。口径9.8cm～10.2cm、器高1.0cm～1.1cm、底径6.4cm～7.2cmである。

皿a（４～15）　４～13は口径9.2cm～10.9cm、器高1.0cm～1.8cm、底径6.4cm～8.4cmである。４を除いて全て板状圧痕がある。14・15は口径8.9cm・9.6cm、器高2.0cm・2.1cm、底径6.8cm・



第49図　黒灰砂質土層出土土器実測図（１）



第50図　黒灰砂質土層出土土器・硯実測図(２)

6.9cmである。

皿ｃ（16～21）　16は口径8.6cm、器高4.7cm、高台径4.7cm、17～20は口径10.3cm～11.6cm、器高2.2cm～2.5cm、高台径5.7cm～7.0cmである。20の底部には1つの搾孔がある。

杯（21・22）　口径13.2cm・14.4cm、器高2.5cm・3.3cm、底径9.5cm・11.0cmである。杯が小形化し皿となる段階以降に出現する形態のもので、量的割り合いは非常に少ない資料である。

丸底の杯（21～31）　口径12.6cm～17.5cm、器高2.9cm～4.6cmである。丸底の杯は体部内面を全て磨くが30は器面風化のためミガキは明瞭でない。25・29の体部内面にはコテあて痕がある。

椀（32～37）　32を除く33～37は丸底の杯と同一の成形法で、体部内面にはミガキ、体部外面中位には指頭圧痕がある。32は口径14.7cm、器高5.3cm、高台径7.6cm、33～37は口径14.8cm～17.6cm、器高5.1cm～7.3cm、高台径6.1cm～8.2cmである。

器台（39）　棒状のものに粘土を巻いて筒部を造り、それに丸底の杯を上・下に貼り付けた器形である。同一の台部をつけるため上下は明らかでない。筒部は粗く面取りされる。

黒色土器

椀（38）　口径13.5cm、器高5.2cm、高台径7.2cmを測り、内外面とも真黒色に燻している。器面風化のためヘラミガキはあまり明らかでない。

硯

40は粘土紐を巻き上げて鉢形品を造くり、それを逆にし粘土帯を貼り付け海部を成形している。胴部には円形の透しと線刻の綾杉文を描いている。内天井部は乱雑な指頭痕が残る。陸部は未調整である。胎土中には砂礫を比較的多く含む。焼成は不良で淡茶色を呈する。41は甕の胴部片を用いて硯としている。外面は正格子文、内面は青海波文の叩き目があり、縁部は打ち欠いただけである。青海波文が消える程よく使用されている。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。内面は黒色、外面は暗灰色を呈する。

灰褐色土層出土土器・陶磁器（第51図、別表、図版56・57）

須恵器

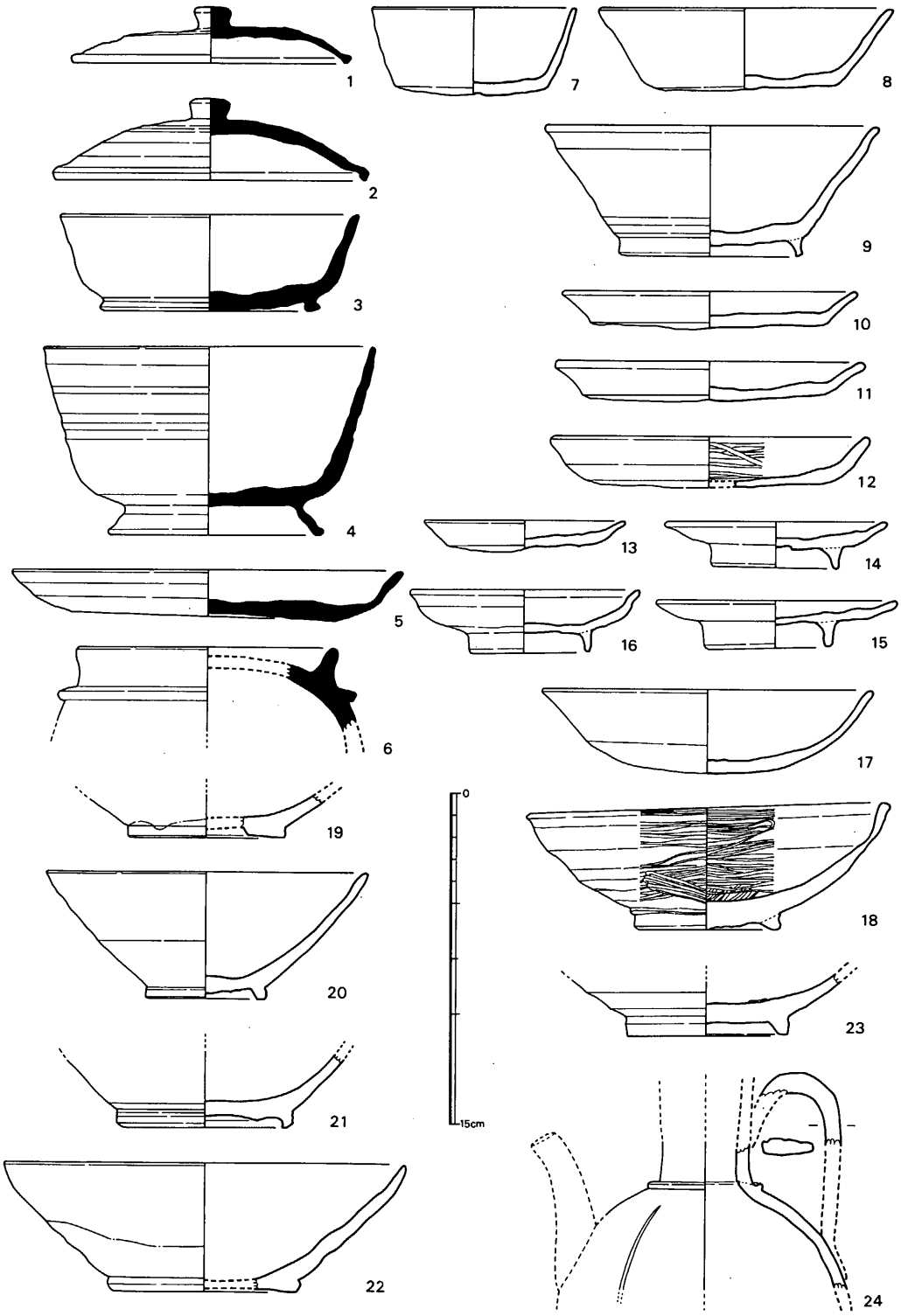
蓋（1・2）　口径12.5cm・14.2cm、器高2.6cm・3.7cmで、両者とも天井部を丁寧な回転ヘラ削り調整する。2の内側天井部には「×」印のヘラ記号がある。

杯（3）　口径13.4cm、器高4.4cm、高台径10.0cmである。外底はヘラ切り離しのままである。

椀（4）　口径15.0cm、器高8.5cm、高台径9.7cmである。高台は細く、外方へふんばる。体部には3条の沈線が巡る。外底部を回転ヘラ削り調整している。

皿（5）　口径17.5cm、器高2.1cm、底径11.8cmである。体部は外方へ開き「く」字状に屈曲する。外底部を回転ヘラ削り調整する。外面は暗灰色を呈するが、内面は暗赤褐色、灰黒色を呈し、また、灰を被り若干光沢を放つ。

硯



第51図　灰褐色土層出土土器・陶磁器実測図

6は円面硯の小片である。焼成は悪く、器面が風化している。脚部に透しの一部が残存する。

土師器

杯（7・8）　7は口径9.2cm、器高4.0cm、底径6.6cmである。外底部はヘラナデ仕上げするが、内底はヨコナデだけである。体部外面に「〆」、内面に「＝」のヘラ記号がある。8は口径13.2cm、器高8.3cm、底径3.7cmである。外底部はヘラ切り離しのままで、内底にはナデ仕上げはない。

椀（9）　口径15.0cm、器高5.7cm、高台径5.9cmである。体部は外上方へ高く延び、高台は細く立つ。内底にナデ、外底に板状圧痕がある。

皿（10～12）　10・11は口径13.3cm・13.8cm、器高1.5cm、底径10.6cmである。10・11ともに外底はヘラナデ調整されている。13は口径14.2cm、器高2.3cm、底径11.0cmで、内面は丁寧なヘラミガキ調整がなされている。

皿a（13）　口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.8cmである。

皿c（14～16）　14・15は口径10.0cm・10.9cm、器高2.0cm・2.1cm、高台径5.6cm・5.6cmである。16は口径10.3cm、器高2.9cm、高台径6.0cmで、14・15よりも皿部は深く、より古期に属する。

丸底の杯（17）　口径15.0cm、器高3.7cmである。体部中位には指頭圧痕が残っているが、内面のミガキは摩滅のため不明である。

黒色土器

椀（18）　内外面ともに真黒色に燻した黒色土器Bの椀である。軟らかい時に高台を貼付したためか、外底見込み部には貼付時のヨコナデが渦文状に顕著に残っている。内外面のヘラミガキは非常に丁寧である。

白磁

椀（19）　幅広の高台を有する椀の底部片である。胎土は白色で緻密である。内面の釉は薄く均一にかかるが、外面は高台付近に涙痕があり、その部分は淡黄色を呈する。

青磁

椀（20～23）　20・21は全面施釉後高台畳付部の釉を削る。20は口径14.4cm、器高5.6cm、高台径5.6cm。畳付に4つの目跡があるが、内底にはない。21は重ね焼きのため、内面に白色の目跡がある。22は口径18.0cm、器高5.9cm、底径8.6cmで、円盤状の高台を有する。体部はヨコナデだけで、再調整は行なわないタイプである。体部外面中位まで施釉され、他は露胎である。胎土は粗く暗灰色を呈するため白化粧土をかけ施釉している。釉は淡緑青色を呈し、細い貫入を無数伴なう。23は、内・外に5個の目跡を有するものである。胎土は粗く、白色や黒色の砂粒を比較的多く含む。釉は全面に施釉され淡黄緑色を呈する。土師器17と伴って、数は少ないがたびたび出土する。

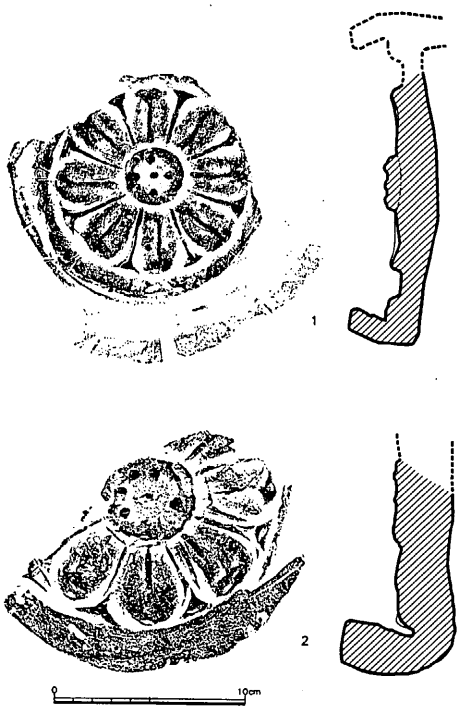
緑褐釉陶器

水注（24）　越州窯系青磁水注と酷似した形態を有する。器肉は栗色、露胎の内面は暗灰色を呈する。釉は淡黄緑色を呈し、細貫入を多数伴なう。頸部と体部との境いには突帯を巡らし、球形状の胴部には縦沈線を入れ、瓜胴とする。越州窯系水注との類似点から10世紀前半代には、このタイプは成立していたと考えられる。

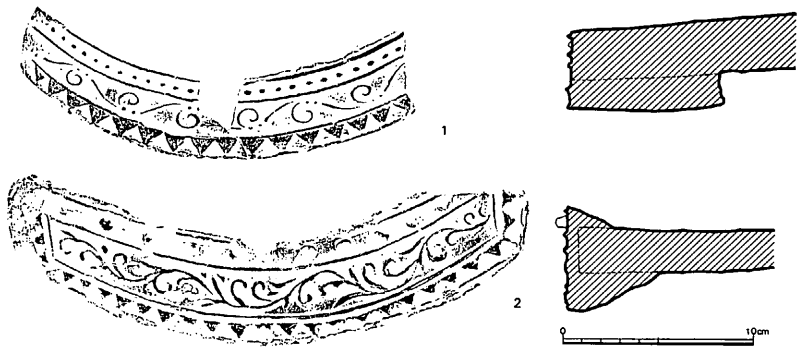
瓦　類（第52～54図、図版58）

この調査で出土した瓦類は丸、平瓦の他、軒丸瓦32点、軒平瓦24点および文字瓦150点、熨斗瓦1点である。

まず軒丸瓦は14型式に分類できるが、それぞれ数点ずつの出土で特にまとまった傾向は認められない。第52図に示した2点はいずれも単弁八弁の百済系の軒丸瓦で大宰府史跡出土の軒丸瓦のなかでは最も古期に属するものと推定される。1は突出した小さな中房に1＋4の蓮子を配する。蓮弁は強く反転し中央に稜線が走る。弁区の周囲には幅1cmほどの凹帯が巡る。外縁は幅1cm、高さ1cmほどの平担縁である。瓦当側面は荒いヘラケズリ調整を行っている。また内区と外縁部との粘土剝離痕跡から外縁部は幅3.5cmほどの粘土板を貼りつけて成形したものと考えられる。胎土は荒い砂粒を若干含んでいるが比較的精良である。表面は灰白色を呈し焼成はやや軟質である。2は瓦当径18cmほどに復元できる。突出したやや大きな中房には1＋8の蓮子を配する。蓮弁は幅が広く中央に細い子葉を配している。外縁部は1と同様の技法によっているものと推定され、幅2cm、高さ2.5cmの平担縁である。瓦当裏

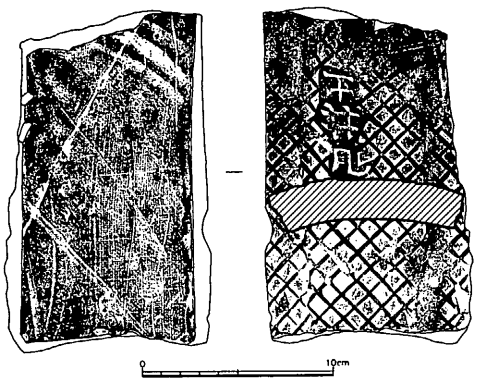


第52図　軒丸瓦拓影実測図



第53図　軒平瓦拓影実測図

面および測面には指頭圧痕が顕著に認められる。また瓦当裏面の下端部はゆるい曲線をなす。胎土は精良で灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。



第54図　熨斗瓦拓影実測図

次に軒平瓦は出土点数24点のうち14点が老司II式であり、これまでの政庁前面域の調査における出土傾向と一致している。第53図に示した2点は、これまでの調査では小片しか出土していなかったものである。1は内区文様が右から左へ流れる偏行唐草文で、老司式軒平瓦の主文である唐草文の支葉を連接したもので、各支葉の中間に小さな珠文2個を配している。上外区は小さな珠文を密に配し、下外区は外向する凸鋸歯文を配する。顎は平瓦部凸面に粘土を貼りつけて成形した段顎で、顎面と平瓦部には縦位の縄叩き目が残る。平瓦部凹面はヘラケズリとナデによって丁寧に調整している。胎土は荒い砂粒を少量含む。表面は青灰色を呈し焼成は堅緻である。下外区鋸歯文の形態や顎部の製作技法から、老司II式とほぼ同時期のものと考えられる。2は内区文様が右から左へ流れる偏行唐草文で老司式系統のものと判断されるが主文の中間に多数の支葉を付加している。上外区は突出した大きな珠文を14個配している。両脇区と下外区は外向する凸鋸歯文を配している。縦断面は撥形を呈しており瓦当と平瓦の接続は「さしこみ式」である。平瓦凸面は荒い格子の叩き目が残る。また凹面には粘土板の合せ目と布目が残り未調整のままである。胎土は砂粒を少量含んでいるが比較的精良である。表面は灰白色を呈し焼成は堅緻である。

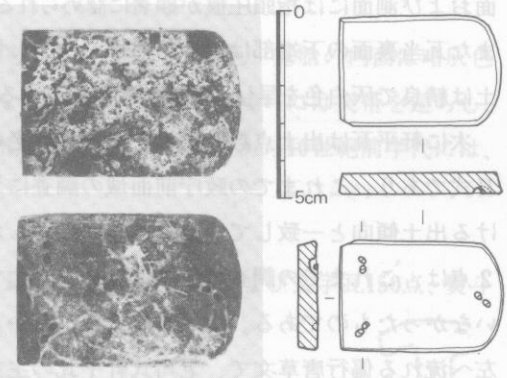
文字瓦には平井瓦屋、平井瓦、平井、賀茂、門司、佐など多岐にわたるが、これらはいずれも叩き板に刻されたものが反転して印されたものである。なかでも平井瓦屋銘のものが41点あり圧倒的に多い。一辺が65cmほどで二重の界線で囲こまれた方形の枠の中に平井、瓦屋と二行に裏文字で印されており、その上下はやや小さな格子目である。大宰府出土の文字瓦の中では古期に属するもののようである。

道具瓦としては熨斗瓦が1点ある。平瓦製作後、生乾きの段階で分割して作った「半熨斗」で、凸面は格子目の叩きで、中に平井瓦の陰刻がある。凹面は全面に布目が残る。側縁は、両側縁とも全く調整を加えず分割痕跡を残したままである。

石帯（第55図）

発掘区の東南隅部の浅い落ち込みである黒灰色砂質土層から出土した。今回出土した石帯は帯の先端を飾る鉈尾に相当する。長さ4.3cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmをはかる。暗青色の地に白濁色がまだらに入り混じっている。上面および側面は丁寧な磨きによって仕上げられ光沢を放っている。裏面には帯への装着のための三対のかがり穴を彫り込んでいる。全てを面取りし、遺存

の良好なものである。石質については不明であるが、蛇紋岩系のものと考えられる。



第55図　石帯実測図

小　　結

今回検出した主要な遺構は、掘立柱建物9棟、井戸5基、池状遺構1である。これと第32・75次調査検出分を加えて遺構を分類するとⅠ～Ⅳ期に分かれる。

Ⅰ期　ＳＢ2000の東側柱筋と同一直線上にあるＳＢ2001がⅠ期を代表する。建物方向は北で西へ若干振れている。柱穴からは縄の叩き目がある瓦が出土したが、土器の出土量は極めて少ない。ＳＢ1995とＳＢ2195は、ＳＢ1995・ＳＢ2000後に建てられたと考えられ、両者は東側柱筋を揃える。

Ⅱ期　ＳＢ1990・ＳＢ2215とＳＢ2240が配置される。これもⅠ期建物配置と同様に「コ」字形配置を取ると考えられる。建物方位は北で東へ若干振れる。ＳＢ2215柱穴掘形から出土した土器から8世紀後半頃を上限とする。この期にＳＢ2215を切ってＳＢ2220が建てられる。また、ＳＢ2240柱穴掘形からＳＢ2215出土と同種の土器が出土している。

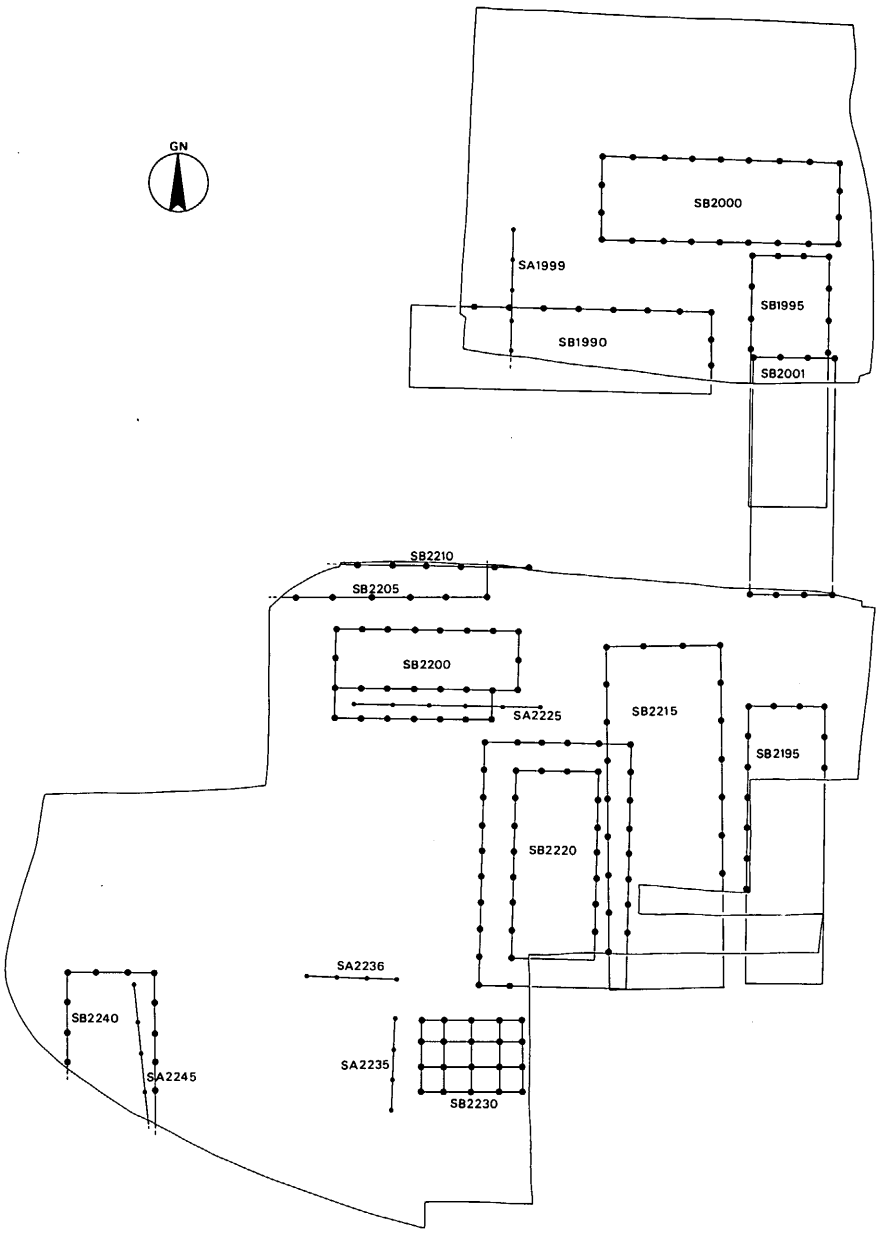
Ⅲ期　ＳＢ2220とＳＢ2230からなる。建物方向は真北に近いが若干西へ振れる。ＳＢ2220柱穴掘形から出土した遺物から9世紀後半頃を上限とする。この期の建物配置は「コ」字形をなさないようである。

Ⅳ期　ＳＥ2250・2255・2260・2265・2270が設置された時期である。この期は官衙建物が廃され、小ピット（建物）群と井戸からなる。観世音寺周辺地域と同様に11世紀後半代から始まる。観世音寺周辺地域では小規模建物や井戸が密集し、14世紀前半代まで続くが、この地域では12世紀中頃で小規模建物群は消滅するようである。また、密集度も非常に低い。

以上Ⅰ～Ⅳ期までをみると、Ⅰ・Ⅱ期は整然とした建物配置がみられるが、Ⅲ期になるとこの形は崩れ、官衙の性格が変化するようである。Ⅳ期は官衙的性格の建物が廃されている時期である。

Ⅰ期　8世紀前半から8世紀後半
Ⅱ期　8世紀後半から9世紀後半
Ⅲ期　9世紀後半から11世紀
Ⅳ期　11世紀後半から12世紀中頃

の年代が考えられる。


GN
SB2000
SA1999
SB1995
SB1990
SB2001
SB2210
SB2205
SB2200
SA2225
SB2215
SB2195
SB2220
SA2236
SB2240
SA2245
SA2235
SB2230

第56図　遺構模式図

4　第81次調査

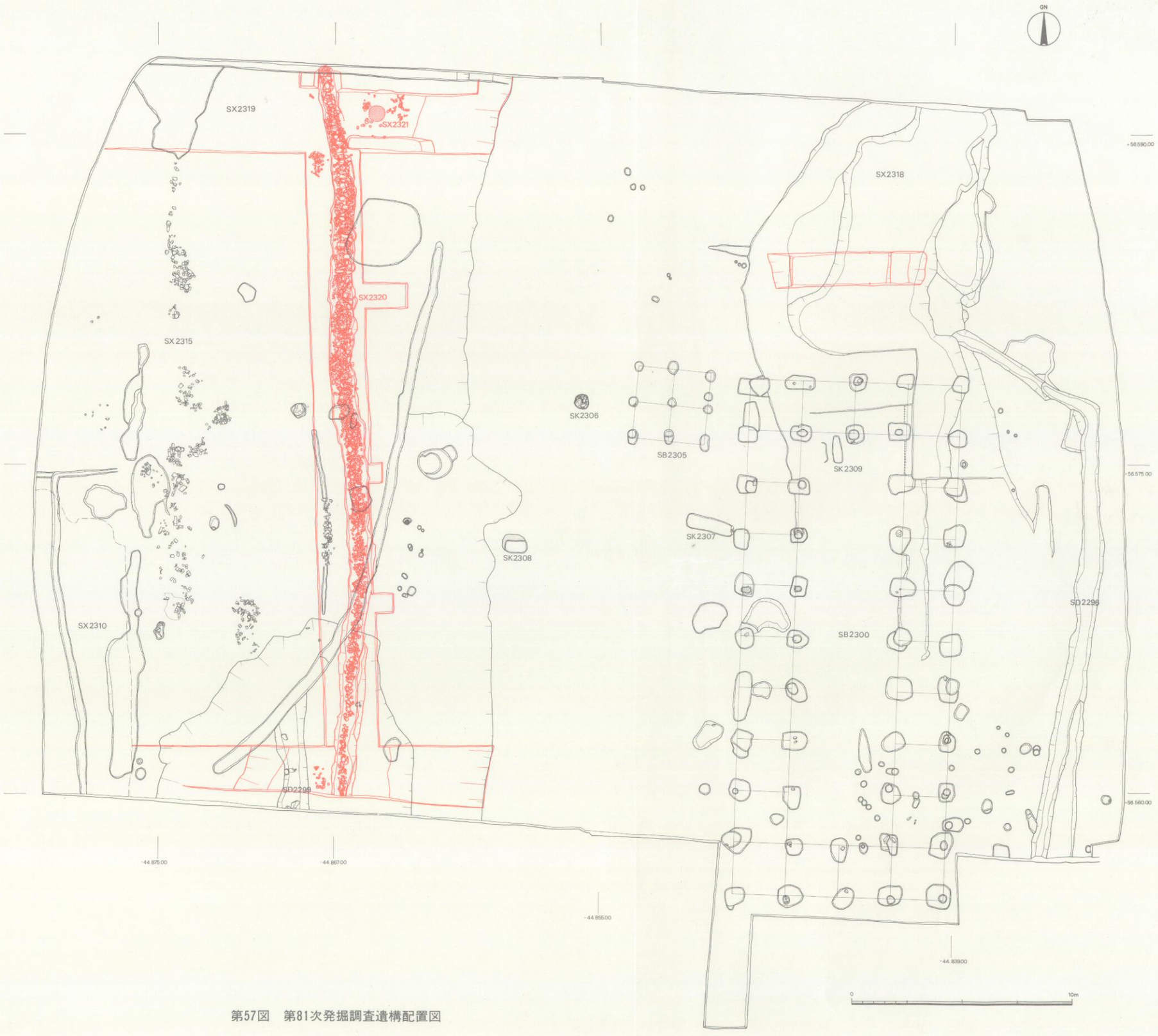
大宰府政庁南門の前面（県道山家一関屋線の南側）の推定政庁中軸線上には従来朱雀大路の存在が推定されていた。ところが昭和53年度の第58次、昭和55年度の第73次の両次の調査では朱雀大路に関する遺構はまったく確認できなかった。県道南側では推定朱雀大路を挟んで字日吉、字不丁にそれぞれ官衙域の存在が知られている。したがって、第58・73次における朱雀大路関連遺構および建物等の遺構の欠如は、それが遺構の削平などによるものではなく、この部分に朱雀大路が存在しなかったこと、すなわち従来の推定よりも大宰府の庁域が南へ拡張することを示すものと理解された。こうして現在では政庁前面に広場的な空間地の存在が推定されている。そこで第81次調査は政庁推定中軸線の西側、第58・73次調査地の西南に接する約1670㎡の地を対象として実施した。条坊復原案によると右郭の六条一坊に相当する。県道南側の官衙域を対象とした一連の調査の成果のもとで、今回の調査では広場的性格をもつと推定される空間地の西・南への広がりの確認を目的とした。地番は太宰府市大字観世音寺字不丁279—1、280である。

調査は昭和57年8月23日に開始した。排土置場の関係から打っ手替えしての調査の必要があり、まず東半分の調査に着手した。耕作土・床土を除去すると遺構面にいたり、9月9日には遺構検出にはいった。調査区（東）の中央部で予想外にも南北棟の掘立柱建物を検出し、その南が調査区外へと延びていたため、写真撮影・実測図作成ののちに南へ調査区を拡張し、4間×10間の四面廂の南北棟建物であることを確認した。このような経過を経て10月9日に東区の調査を完了した。

東区の調査終了後、直ちに機械力を用いて発掘区を埋め戻したため、西区の調査に着手したのは10月14日のことであった。10月25日には遺構検出にはいったが、顕著な遺構はなく、11月8日には写真撮影・実測図作成を完了した。その後下層で西区の中央部を南北に走る暗渠を検出し、その調査を経て、12月9日には調査のすべてを完了した。

検出遺構

今回の調査では掘立柱建物2棟、溝5条、暗渠施設1条、土壙・柱穴を検出した。これらの遺構は下層の暗渠施設を除けば、いずれも耕作土・床土のほぼ直下で検出されたため層位的な時期の区別はできなかった。下層とした暗渠施設にしても政庁前面域の整地事業および掘立柱建物の建設にともなう性格をもっており、いわゆる上層・下層の関係とは多少異なっている。以下、今回の調査の主要な成果であった掘立柱建物と暗渠施設を中心に、検出遺構を紹介しておく。



第57図　第81次発掘調査遺構配置図

掘立柱建物

ＳＢ2300　発掘区の東側で4間×10間の南北棟の掘立柱建物を検出した。2間×8間の身舎の周囲に廂を取り付けた四面廂の建物である。その柱間は身舎・廂ともに梁行・桁行ともすべて約2.4ｍ（8尺）等間に復原される。主軸はＧ.Ｎ. に対して約1°45′東にふれている。政庁正殿にも匹敵する規模の建物ではあるが、柱掘形の配列はやや雑である。柱掘形の深さにも0.8ｍ前後にもおよぶ著しい高低差があり、相対的に身舎に比較して廂の掘形が深い。また身舎では東側がより深く、廂を含め北半よりも南半が深くなる傾向をもつ。これらの掘形には埋土および柱抜き跡に土器・瓦を含む例があり、後述するように政庁第II期の築造に併行しての建設が考えられる。

ＳＢ2305　ＳＢ2300の西北隅に接するように位置する。直径0.4ｍ前後の円形掘形を用いた、2間×2間の総柱建物である。柱間は各々1.65ｍ（5.5尺）に復原される。ＳＢ2300にくらべ主軸が約3°30′東に傾斜している。

土　壙

ＳＫ2306　ＳＢ2305の西約2ｍのところで検出した。径0.65ｍ前後のやや角張った不整円形土壙で、約0.3ｍほどの深さを測る。壙中には西半分に40㎝大の石が置かれ、その他の部分には軒丸瓦5点、軒平瓦1点および若干の丸・平瓦片が投げ込まれていた。いずれも鴻臚館式に属する。軒丸瓦中1点は丸瓦部を含め完存し、2点は瓦当が完存していた。

ＳＫ2307　ＳＢ2300の柱掘形に接するようにして検出した土壙で、長さ約2.2ｍ、幅0.55ｍ～0.7ｍ前後の隅丸長方形を呈する。壙底には置台状に瓦片・石が敷かれていたが、すでに大半を削平されていたため土壙の性格を明らかにすることはできない。瓦片・石の間には土師器の小皿が数点置かれていた。

ＳＫ2308　ＳＢ2300の西約10ｍで検出した。長さ1.04ｍ、幅0.56ｍ、深さ0.05ｍ～0.1ｍほどの隅丸長方形の土壙で、四周は熱を受け赤変している。壙内および周辺には炭化物・炭灰が堆積していたが、ことに北・北西部に著しかった。時期を示すような遺物の出土はなかった。

ＳＫ2309　ＳＢ2300の身舎北端付近で検出した、長さ1.25ｍ、幅0.44ｍ、深さ0.1ｍほどの南北方向の土壙である。

ＳＫ2323　ＳＫ2309の南に位置する東西方向の土壙で、長さ幅ともＳＫ2309よりも一回り大き目であったが、同様に浅く、ＳＢ2300柱掘形の検出の過程で削平した。炭化物に混在して遺物が出土している。

暗渠施設

ＳＸ2320　発掘区中央部のやや西側で検出した。暗渠は発掘区の北側から始まり、区内の約33.5ｍを調査したが、さらに南区外へと連続している。政庁前面の整地にともなう施設と考えられる。ＳＸ2320は発掘区内で認められた二本の緩かな谷筋（ＳＸ2318・2319）のうち西側の



第58図　SX2320実測図

ＳＸ2319の埋立てに伴うものである。谷筋の底部は全体に有機質を多く含んだ黒色の腐植土からなる。その上にまず厚さ20cmほどの盛土を行ない、谷筋に沿ってほぼ南北に幅１ｍ前後の溝をつくっている。次に溝中に20cm前後の石を雑に並べ、その上に長さ30～40cm前後の大きさの石を蓋を横架するように積んでいる。さらにこうした積石を砂で覆って暗渠を完成している(第58図、図版25・26)。暗渠の完成後に整地が開始されている。

もっともこうした作業が段階的に行われたわけではない。暗渠は全体としては北から南へと作られているが、直線状に作られつつ４ｍ～９ｍほどの不定の間隔で方向を多少ながら変え、結果として蛇行している。一気の作業にしては不自然に思われる。ところで、南北方向の土層断面をみると、整地積み土は北から南へと順次行われているが、比較的平坦な積み土部分と、それが南へ向って強い傾斜を示す部分とからなる。この土層の傾斜部と暗渠の屈曲とはおおむね一致している。これは暗渠が整地の進行にともなって継ぎ足すようにして構築されたことを意味すると理解される。つまり、新たに暗渠を継ぎ足した時、その既存部分はすでに整地によって埋没しており、そのために蛇行が生じたのであろう。

なお、暗渠発掘部分の北端付近の東側に径70cm～80cmほどの範囲に２cm～５cm大の石を敷き詰めたＳＸ2321が認められた。しかし、ただ石を敷くのみで、その上・下には何らの施設をも伴なわず、性格を明らかにすることはできなかった。

不明遺構

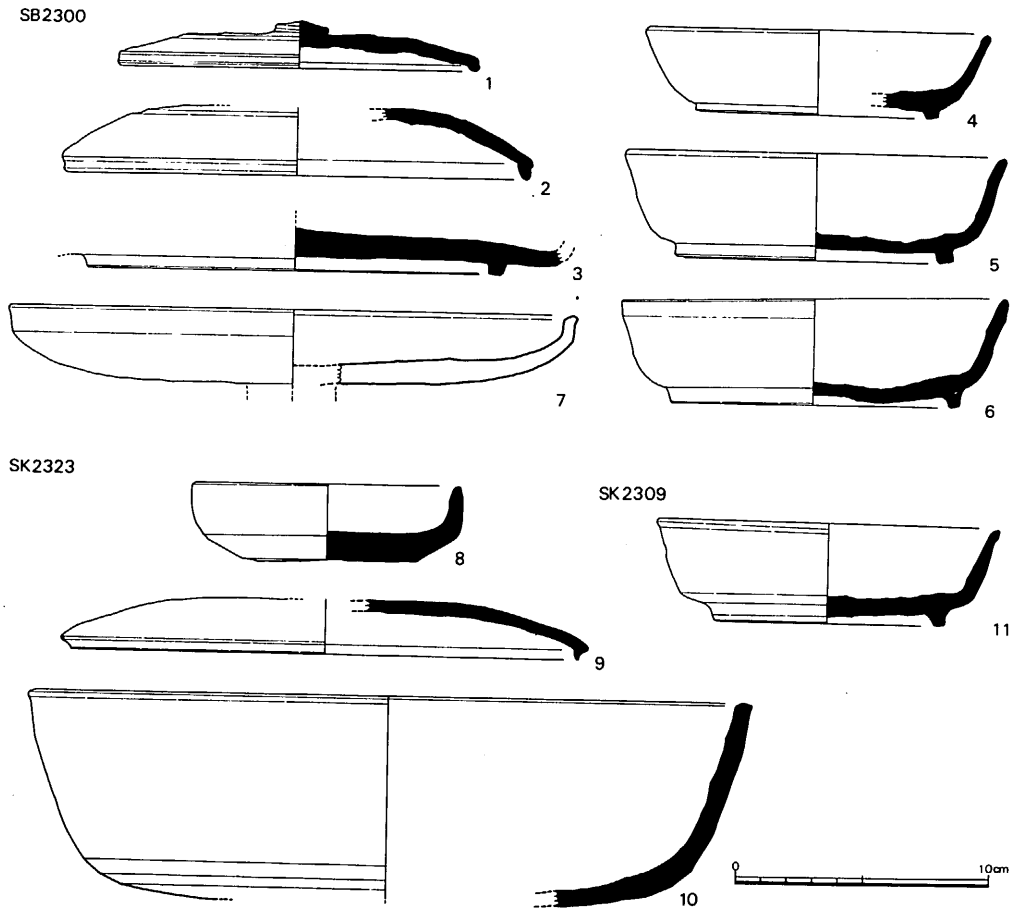
ＳＸ2310・ＳＸ2315　ＳＸ2310は発掘区の西端付近で検出された礫群で、遺構配置図に一点鎖線でその範囲を示している。発掘区内の地山には礫を含まないが、この部分には礫の散布が顕著であった。そのため一部を掘り下げたところ、地山を約20cmほど掘り下げ、その後に礫と黄色粘土を詰めて固めていることが知られた。このＳＸ2310の約1.5m東で南北方向に瓦の散布ＳＸ2315が認められた。－44.874.50ｍラインを境にその西側には散布がみられず、東側にもそれほど拡がっていない。この瓦の散布とＳＸ2310とが関連するとすれば、ここに道路とそれに付属する瓦を用いる施設の存在が予想される。このラインが政庁西面回廊・築地の延長上にほぼ一致している点も注目される。しかし発掘区内ではこれ以上にはその性格を確認することはできなかった。

出土遺物

今回の調査では土器、陶磁器、瓦類、金属製品（小銅鈴）などが出土したが、全体に遺物の出土量は少量である。

ＳＢ2300出土土器（第59図、図版59）

ＳＢ2300のいくつかの柱掘形埋土および柱穴から須恵器、土師器が出土した。それらの中で器形の明らかな例を図示している。



第59図　SB2300・SK2309・2323出土土器実測図

須　恵　器

蓋（1、2）　1はつまみを有する杯蓋で、約半分が遺存している。天井部をヘラ削りし、全体をヨコナデで調整している。下縁外端部をつまみ出しているが、その断面は丸味をもっている。口径14.0cm、器高1.9cmをはかる。柱穴からの出土。2も同様の調整でつくられた杯蓋の小片で、口径18cmほどに復原される。外縁下端部は大きく垂下している。つまみの有無は不明。天井部内面は平滑になっており、部分的に墨が付着していることから、硯への転用をうかがわせる。掘形埋土からの出土。

杯（3～6）　4～6は低い高台を有する杯で、残りは比較的良く、6は完形に近い。4～6はそれぞれ口径13.3cm・14.8cm・14.9cm、高台径9.6cm・11.0cm・11.3cm、器高3.4cm・4.2cm・4.2cmをはかる。4・6の高台はヘラ切り離しされた底部の外端付近に付けられ、5はやや内側につけられる。4～6ともに体部は内弯気味に丸味をもって立ち上がらせ端部を若干外反させ

るが、器高は口径にくらべやや低い。いずれも掘形埋土出土。3は高台径16.3cmをはかる大形の杯の底部で、底部のみは完存するが、体部を欠く。掘形柱穴内に裾えるようにして置かれていた。底部の内外面ともにていねいにヘラ削りされている。内面はかなり平滑になっている。

土　師　器

高杯（7）　口径約22.2cmに復原される高杯杯部の小片で、赤茶色を呈する。内外面ともに器表の剝離が著るしいが、ヘラミガキを施していることがうかがえる。掘形埋土からの出土。

ＳＫ2309出土土器（第59図、図版59）

須　恵　器

杯（11）　底部外端のやや内側に低い高台をつく杯で、直線的に立ち上がる体部の端部をわずかに外反させている。底部と体部の境は器表の摩耗のため丸味をもっているが、本来は明瞭な稜をなす。全体の¾を残している。口径13.2cm、高台径9.1cm、器高4.0cmをはかる。

ＳＫ2323出土土器（第59図、図版59）

須　恵　器

皿（8）　分厚くつくられた平底の底部に、ほぼ直立し端部を丸くおさめた体部がつく。体部下位を鋭く斜めに切り、屈曲をつけている。したがって底部と体部の境、体部下位に鋭い稜がみられる。外底、体部外面はていねいなヘラ削りで仕上げられている。内面は摩れのためきわめて平滑になっている。内面および体部の一部を欠くがその破損面に赤色顔料が付着しており、それを摩り潰すためにその摩り皿として用いられたのであろう。口径10.2cm、底径6.8cm、器高3.0cm。色調・焼成などからみて須恵器としたが、須恵器にしては器形・手法に異質のものがあり、他に類例を求めるべきかもしれない。

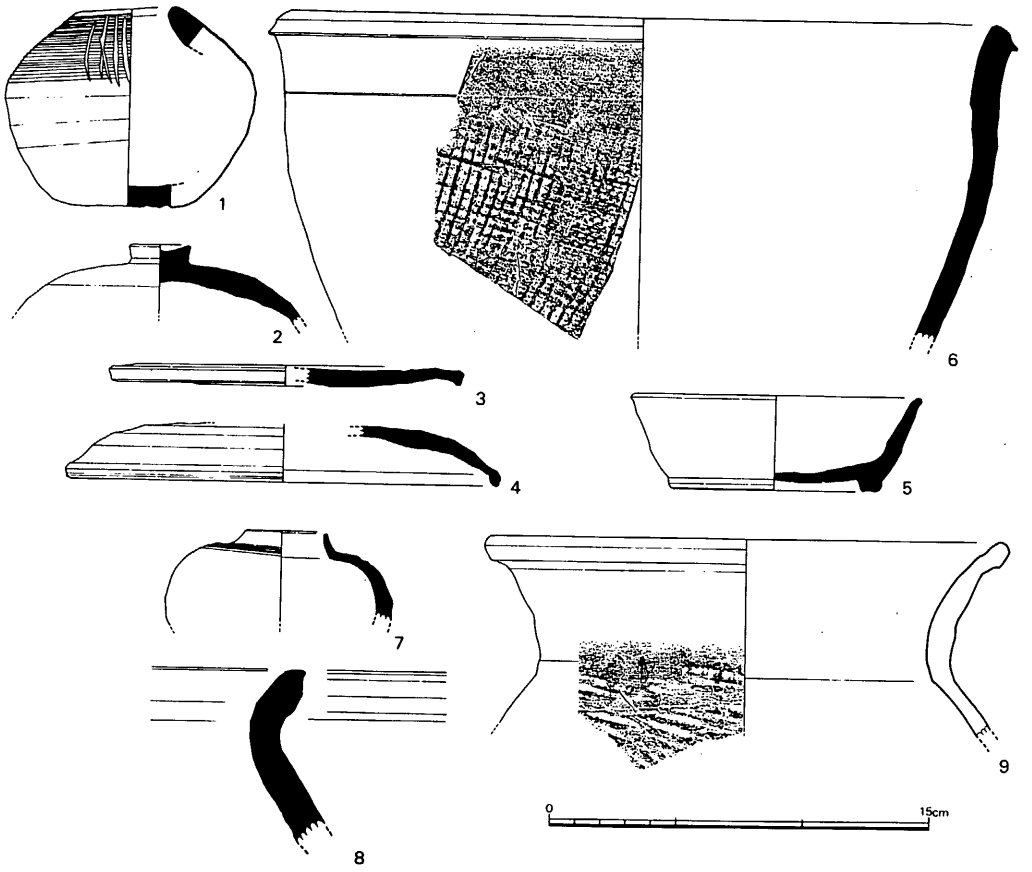
蓋（9）　口径19.9cmに復原される大形の杯蓋の小片で、断面三角形状の外縁下端部はかすかに外に引き出されている。天井部内面はヨコナデ調整が消えるほどに平滑になっており、墨の付着から硯への転用がうかがえる。

鉢（10）　平底の鉢で、口径27.2cm、器高8.7cmほどに復原される。体部は底部からわずかに内弯気味に立ち上がるが、その境は明瞭でない。焼成が軟質のため内外面ともに器表の荒れが著しく調整の観察を困難にしているが、底部から体部の下位にかけてのヘラ削りがわずかにうかがえる。

ＳＸ2318出土土器（第60図、図版59）

ＳＸ2318は発掘区内東側の南北に位置した谷筋で、ＳＢ2300の建築にともなって事前に整地されている。ＳＢ2300の保存のため発掘は一部にとどまり、また土器の出土量も少ないが、ＳＢ2300の上限を決定しているので小片をも図示している。1～6は上層、7～9は下層からの出土である。

須　恵　器



第60図　SX2318出土土器実測図

坩（1・7）　1は無頸坩（壺）で、今回の調査では唯一の完形品である。口径3.7cm、胴部最大径10.0cm、底径4.6cm、器高7.9cmをはかる。外表の調整は比較的雑で、体部中位の屈曲部から上はていねいにカキ目調整を施しているが、下半は簡単にヘラ削りするのみである。胴部上半にはカキ目の上から縦方向の線5条がヘラで刻まれている。全体に器壁が分厚く、ズッシリとした重要感がある。7は短頸坩（壺）で、胴部上半の⅔ほどを残すが、胴下半を欠いている。扁球形で最大幅9.0cm近く復原される胴部に、わずかに外反しつつ短かくのびる口縁部が内傾してつけられている。口径3.2cm。器表の残りは良くないが肩部に2～3条の凹線がめぐらされている。

蓋（2～4）　2は口縁部を欠くため器形および法量を明らかにしえない。天井部外面はカキ目調整が施され、内面（つまみ付着裏面）にはタタキ痕が残っている。高杯の蓋である。3は口径13.8cm、器高0.8cm、4は口径16.8cm、器高2.3cm前後に復原されるが、いずれも小片である。3の天井部内面は摩れによって平滑化しており、硯への転用がうかがえる。

杯（５）　ヘラ切り離しされた底部の外端に低いが、しっかりとした高台が付き、そこから立ち上がる直線状の体部が端部近くでわずかに外反している。これもまた小片である。口径11.1cm、高台径8.2cm、器高3.7cmに復原される。

鉢（６）　口径27.8cmに復原される大形の鉢の小破片で、底部を欠く。外面には正格子のタタキが施されるが、口縁近くにはヨコナデ調整がみられる。内面にも一部にタタキがみられるが、櫛目で消している。

甕（８）　口径が47.7cm程に復原される大甕の小片で、短かく外反する口縁部は外面に幅1.7cmほどの薄い凸帯を貼付して肥厚させている。口縁部は内外ともにていねいなヨコナデの調整がみられる。胴部には内外ともにタタキがみられるが、外面のそれはほとんどナデで消されている。

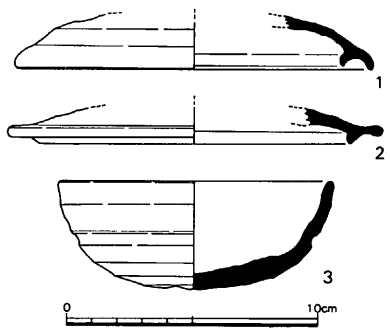
土　師　器

甕（９）　甕の口縁部の⅓ほどの破片で、口径は19.9cmに復原される。器表の残りが良くなく、調整は不明瞭であるが、口縁から口頸部の外面はヨコナデ調整され、胴部は櫛状施文具を連続的に押しつけタタキ風に仕上げている。胎土に大粒の砂を含む。口縁部外側には部分的に１条の細い沈線がうかがえる。口縁部の特徴などに須恵器を思わせるものがあり、あるいは須恵器の生焼けである疑いもあるが、胎土や焼成は土師器そのものである。

ＳＸ2320出土土器（第61図、図版59）

須　恵　器

蓋（１・２）　いずれも口縁部内側に返りを有する杯蓋の小破片である。１は口径14.0cmに復原され、薄手の器壁をヨコナデ調整している。２は口径14.8cmに復原され、返りが口縁端部よりも下に突き出している。いずれも灰黒色を呈し、堅緻に焼成されている。



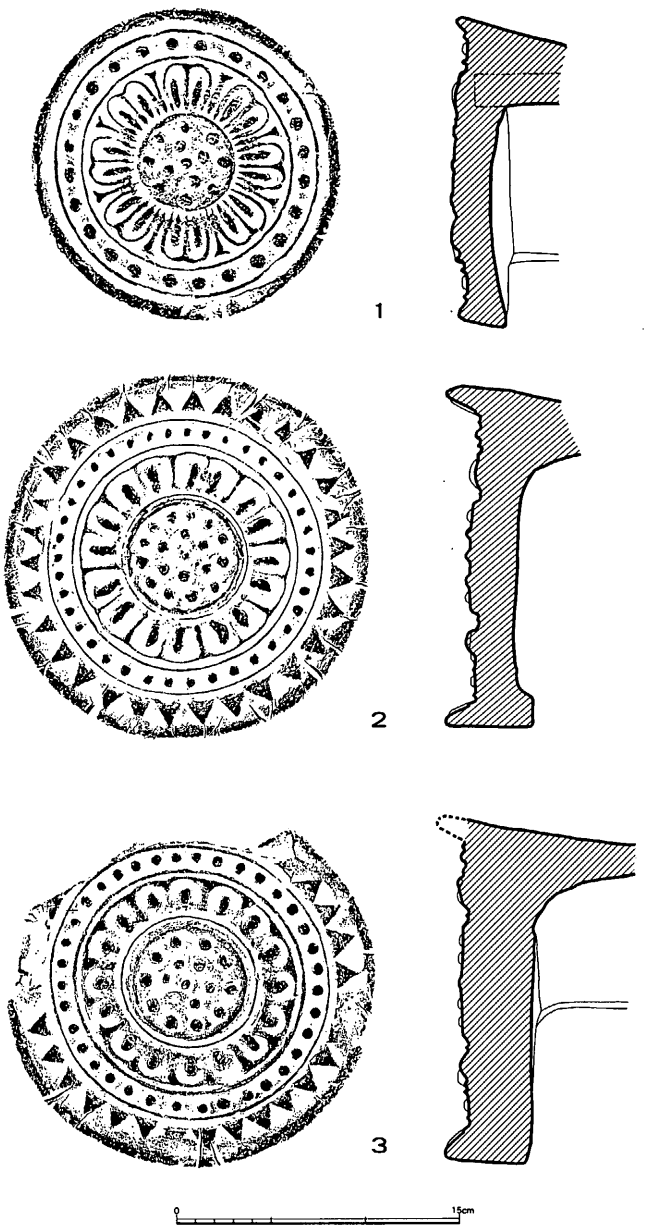
第61図　ＳＸ2320出土土器実測図

椀（３）　口径10.8cm、器高4.4cmをはかる。椀の½ほどの破片である。丸味の強い底部から緩やかに内弯する体部が立ち上がるために、全体に丸味をもった器形となっている。体部外面の中位に５㎜幅の凹線をめぐらしている。外底はヘラ削りされ、刻まれたヘラ記号の一部が残っている。

瓦　類（第62～64図、図版60）

この調査で出土した瓦類は丸、平瓦のほか軒丸瓦49点、軒平瓦22点および道具瓦として鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦がある。

まず軒丸瓦は４型式に分類できるが、第62図－１の鴻臚舘式が26点あり圧倒的に多い。他は老司Ⅱ式と第62図－２、３の老司式系統のものである。２は瓦当経18.5cmで、内区は複弁八弁蓮華文で圏線に囲こまれた大きな中房に１＋６＋12の蓮子を配する。蓮弁は比較的幅が広く、

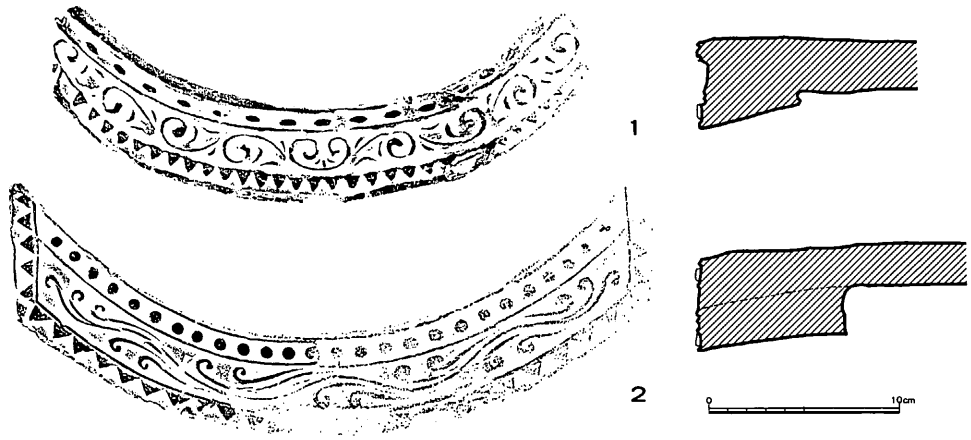


第62図　軒丸瓦拓影実測図

子葉の盛上りが大きい。外区は内縁に38個の珠文を、外縁にはやや縦長の凸鋸歯文30個を配する。瓦当面文様は老司Ⅰ、Ⅱ式に比較して、やや粗雑な感じを受ける。瓦当裏面はナデによって丁寧に仕上げられている。また裏面下半部は周縁に沿って一段高くなっている。胎土は比較的砂粒が少く、灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。3は2と同大で瓦当径は18.5cmである。瓦当面文様は2と類似しているが、細部において若干異っている。内区は複弁八弁蓮華文で中房の蓮子は1＋6＋10で2よりも最外側で2個減じている。蓮弁は幅の広さに対して長さが短く、したがって子葉が円形に近くなっている。外区は内縁に珠文36個を配し、外縁には正三角形に近い凸鋸歯文33個を配している。瓦当裏面はヘラナデによって調整を行っている。胎土は精良で灰白色を呈し焼成は軟質である。

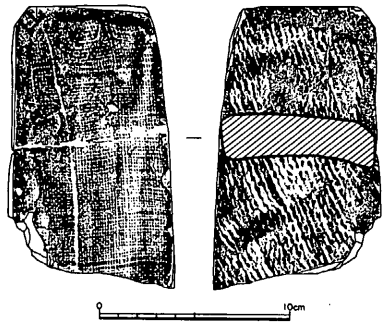
軒平瓦は3型式に分類でき第63図に示した鴻臚館式(1)が9点、老司Ⅱ式(2)が11点であり圧倒的に多い。この両者は後に述べるように発掘区東半部で検出されたＳＢ2300の柱穴および掘形からも検出されており、ＳＢ2300の時期決定の有力な資料である。

道具瓦のうち鬼瓦は小片で左側下端の珠文帯の部分である。熨斗瓦は2点あるが、いずれも平瓦を三分割して作ったもので、凸面は縄叩き目であるが縦位と斜位のものとに分れる。凹面は



第63図　軒平瓦拓影実測図

いずれも布目を残したままで調整は行っていない。側面はヘラケズリによっているが第64図に示したものは表裏とも面取りを行っている。面戸瓦はいわゆる蟹面戸瓦で凸面は丁寧な横位のナデを施し、凹面は布目痕を残す。丸瓦の左右を焼成後に小刻みに打ち欠いて作ったものである。



第64図　熨斗瓦拓影実測図

さて先きに述べたようにＳＢ2300の柱穴および掘形からは比較的多量の軒先瓦が出土している。これらの遺構から出土した軒先瓦は老司式と鴻臚舘式の２型式のみである。まず老司式は第62図－３に示した老司系軒丸瓦１点とII式軒平瓦３点があり、鴻臚舘式は軒丸瓦６点、軒平瓦４点がある。その検出状況については若干の厳密性に欠ける面はあるが、老司式が柱掘形から出土しているのに対し、鴻臚舘式は柱穴から出土している。特に建物の北側妻の中央の柱穴からは瓦当部の完全な鴻臚舘式軒丸瓦３点が投げ込まれた状態で検出された。このような出土状況からみると老司II式は鴻臚舘式に先行するものであることは明らかであり、また老司II式軒先瓦の瓦当文様が藤原宮出土の軒先瓦ときわめて類似していることと共に老司II式は八世紀初頭頃に位置づけることが可能であり、したがってＳＢ2300の建物の時期も限定されてくる。

小　　結

今回の調査での成果に政庁前面における整地の実態の確認がある。

政庁第Ｉ期当時、発掘区には浅い二本の谷筋（ＳＸ2318・ＳＸ2319）が存在していたことが、地山面の検出から知られた。これらの谷筋は人為的に埋立てられているが、その造成が一気の作業であることは、西側の谷筋ＳＸ2319の谷部につくられた暗渠施設ＳＸ2320の存在およびそ

の整地の工程から明らかになった。造成時期についてはＳＸ2319、ＳＸ2320出土土器から決定されるが、小片が多く万全を期し難い。しかしその少数の出土土器（須恵器）の特徴はおおむね政庁第Ⅰ期のそれであった。いっぽう造成直後に建てられた掘立柱建物ＳＢ2300の柱掘形からも遺物が出土している。第59図１～７に示した７点の土器のうち柱穴出土の１・３を除いた５点は掘形埋土からの出土であった。ことに残りのよい４～６の３点の須恵器高台杯は低い器高と直線化しきらない体部に第Ⅰ期の特徴を示している。掘形からは瓦も出土しているが、完璧に分類されたわけではないけれども、掘形埋土からは老司Ⅱ式、柱穴（抜き跡）からは鴻臚舘式が出土し、老司Ⅱ式の先行を示していた。ともあれ老司Ⅱ式・鴻臚舘式瓦は第Ⅱ期政庁の甍を飾っていたことが知られている。そうであれば、掘形埋土と柱抜き跡の二様の土器・瓦からの出土の在り方から、ＳＢ2300は政庁第Ⅱ期の開始期に併行して建設され、短かい存続期間の後にその生命を終えたことが理解される。したがって、整地のための造成は第Ⅰ期でもその最終段階に行なわれたであろうと判断される。

調査終了後、発掘区の約50ｍ北方で県道側溝の改修工事が行なわれた。この工事個所においても整地層が確認され、整地が少なくともこの地点から始まることが確認された。こうして知られた整地の規模の大きさからみて、その目的が政庁前面での庁域の拡充にあったことは明らかである。直接的には政庁前面の整地は広場の造成を目的としたのであろうが、その完成後直ちに１棟の南北棟建物ＳＢ2300が建設されている。ＳＢ2300は四面廂の掘立柱建物で、その北側妻は政庁南門心から約129.5ｍ、東側柱列は推定政庁中軸線から西に18.5ｍ～19.5ｍのところにある。したがって、現在知られている大宰府庁域を構成する官衙建物中もっとも南側に位置する建物であり、六条のラインを大きく越える建物のはじめての検出例となった。

問題となるのは、広場に１棟のみ建てられたＳＢ2300の性格である。中軸線から約19ｍのところに位置することは、まだ未確認の朱雀大路（その起点はさらに南になろうが）と何らかの関連を有する可能性が考えられる。これについては中軸線の対象の位置に同様の建物の存在が期待された。ところが、偶々調査中に対称の地点の地下げが行なわれ立会ったが、建物を含めいっさいの遺構が存在しなかった。

ＳＢ2300の中軸線の対称の位置に建物が所在しない事実は、この建物の規模からして、それが西面する官衙ブロックの正殿である可能性をうかがわせた。しかし発掘区内には他にまったく建物が存在しなかった。したがってＳＢ2300が孤立した建物であることは確実である。小屋的な建物ＳＢ2305がＳＢ2300に付属するものであれば、ＳＢ2300が西面する建物である一つの傍証となる。

こうしてみると、ＳＢ2300はやはり中軸線（それは朱雀大路・朱雀門と関連するであろう）を意識した性格、すなわち朝集堂的な性格を有していた可能性が高いように考えられる。

ともあれ、この位置に建物が所在することは広場の南への拡がりがこの付近であること、つまり政庁域の南限がこの建物の南近くにくることが予測される。ところで昭和56年度の第76次

調査で検出された東西溝ＳＤ2015は政庁域の南を限る有力な施設と考えられている。このＳＤ2015は政庁南門心から南約196ｍにある。したがってＳＢ2300とはその南側妻から42ｍほどの間隔をもつことになる。つまり先の推定からすれば間隔が大きすぎるようである。ＳＤ2015が正しく南限の溝であれば、ＳＢ2300の南にもう一棟同規模の建物の存在を仮定するのか、あるいはＳＤ2015が東へ向かうにしたがって鍵手状に屈曲するのか、であろう。もっともＳＢ2300の存続期間の短かさからすれば、その位置の不適切から早い時期に解体された可能性が生じ、ＳＤ2015とは矛盾しなくなる。いずれにせよ、政庁前面における整地層の南への拡がりの確認(ＳＢ2300の南は崖状をなし確認が不可能であるが、暗渠の施設ＳＸ2320の南への延長の確認をもって代用するのも一つの方法である）は、今後に残された課題といえよう。

別　　表

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
第78次調査								
SD2115(青灰色土)								
		土師器　杯b						
1	3	11.6	5.4	3.0		○		
		土師器　釜						
1	6	13.4		(18.2)				
		土師器　鍋						
1	7	37.6		(15.4)				
SD2115								
		土師器　杯a						
1	1	12.7	9.0	2.8		○	○	○
2	2	12.6	9.0	3.1		○	○	○
		皿c						
1	4	7.2	5.2	1.6		○	○	
2	5	7.2	5.1	1.6		○	○	○
SD2145								
		土師器　皿a						
1	1	7.3	5.6	1.2		○	○	
2	2	7.5	6.0	1.2		○	○	○
3	3	7.8	6.0	1.3		○	○	○
4	4	7.9	5.7	1.2		○	○	
5	5	8.0	6.1	1.2		○	○	○
6	6	8.1	6.1	1.2		○	○	
		皿b						
1	10	6.0	4.8	1.4		○	○	
2	11	6.1	4.6	1.4		○	○	
3	12	6.2	4.3	1.4		○	○	
4	13	6.5	4.4	1.8		○	○	○
5	14	6.8	4.6	1.4		○	○	○
6	15	6.8	4.7	1.6		○	○	○
7	16	6.8	4.6	1.8		○	○	○
8	17	6.9	5.0	1.6		○	○	○
9	18	7.0	4.7	1.5		○	○	
10	19	7.0	4.9	1.6		○	○	○
11	20	7.0	5.0	1.6		○	○	○
12	21	7.0	4.7	1.7		○	○	○
13	22	7.0	5.1	1.7		○	○	○
14	23	7.1	4.9	1.8		○	○	○
15	24	7.2	4.5	1.7		○	○	○
16	25	7.2	4.9	1.7		○	○	○
17	26	7.2	5.1	1.7		○	○	○
18	27	7.2	5.0	1.8		○	○	○
19	28	7.2	4.6	1.9		○	○	○
20	29	7.2	4.8	1.9		○	○	○
21	30	7.5	5.6	1.6		○	○	○
22	31	7.6	5.7	1.5		○	○	

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
23	32	7.6	5.6	1.9		○	○	○
皿c								
1	7	7.3	5.4	2.2		○	○	(○)
2	8	8.0	5.0	2.3		○	○	
3	9	8.3	6.0	2.0		○	○	
皿								
1	33	11.9	10.5	1.4		○		○
杯a・b								
1	34	11.6	8.0	3.0		○	○	○
2	35	11.8	7.7	2.9		○		
3	36	11.8	7.3	3.1		○	○	○
4	37	12.0	8.3	2.8		○	○	○
5	38	12.1	7.5	2.8		○	○	
6	39	12.1	8.1	2.8		○	○	
7	40	12.1	7.8	2.9		○	○	
8	41	12.2	8.6	3.2		○	○	○
9	42	12.3	8.0	2.8		○	○	○
10	43	12.5	8.1	2.9		○	○	○
杯								
1	44	15.0	9.7	3.7		○	○	○
SE2110								
土師器　皿b								
1	1	6.6	4.5	1.8		○	○	
皿c								
1	3	9.2		2.2			○	
皿d								
1	2	8.4	5.3	2.2		○	○	
杯a・b								
1	4	12.0	7.8	2.9		○	○	
2	5	12.1	8.2	2.7		○	○	○
3	6	12.8	8.0	2.9		○	○	
4	7	13.6	10.2	2.7		○	○	○
5	8	13.9	10.0	2.8		○	○	○
6	9	14.0	10.2	2.5		○	○	○
杯b								
1	10	15.2	9.5	3.8		○	○	○
SK2159								
土師器　皿b								
1	1	6.2	4.0	1.5		○	(○)	○
2	2	6.7	4.3	1.5		○		
3	3	6.8	4.5	1.7		○	○	○
杯a								
1	6	12.4	8.2	2.7		○	(○)	○
杯b								
1	4	11.6	7.0	2.7		○		
2	5	11.6	6.7	2.8		○	( )	不明
3	7	12.6	7.6	2.9		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
4	8	12.7	7.7	2.4		○		
SG2130（腐植土層）								
土師器　皿a								
1	1	7.7	5.8	1.2		○	○	○
2	2	7.8	5.4	1.2		○	○	○
3	3	7.9	5.8	1.3		○	○	○
4	4	8.1	6.3	1.3		○	○	○
5	5	8.1	6.5	1.0		○	○	○
6	6	8.5	5.6	1.4		○	○	○
皿b								
1	7	6.4	3.9	1.7		○	○	○
2	8	6.5	5.1	1.7		○	○	○
3	9	6.6	4.1	1.6		○	○	○
4	10	6.6	5.3	1.8		○	○	○
5	11	6.9	4.9	1.5		○	○	
6	12	6.9	4.6	1.9		○	○	○
7	13	7.0	5.2	1.5		○	○	○
8	14	7.0	4.7	1.7		○	○	
9	15	7.4	5.4	2.0		○	○	○
10	16	7.4	5.3	1.7		○	○	○
11	17	7.5	4.9	1.8		○	○	
12	18	7.6	5.2	2.1		○	○	
13	19	8.3	5.3	1.8		○	○	○
14	20	7.9	4.7	2.1		○	○	○
15	21	7.6	5.4	2.1		○	○	○
16	22	6.7	3.7	1.9		○		
17	23	6.9	3.9	2.1		○	○	○
18	24	7.0	3.5	1.6		○		
皿d								
1	25	8.5	5.1	2.7		○	○	○
杯								
1	26	16.3	11.2	3.6		○	○	○
杯a・b								
1	27	12.4	7.8	2.7		○	○	○
2	28	12.5	7.8	2.9		○	○	○
3	29	12.5	8.4	2.8		○	○	○
4	30	12.8	8.8	2.7		○		
5	31	12.9	8.2	2.9		○	○	○
6	32	12.9	8.2	2.9		○	○	○
7	33	13.1	8.7	2.6		○	○	○
8	34	13.1	8.8	2.7		○	○	○
9	35	13.2	8.4	2.8		○	○	○
10	36	13.5	8.3	3.0		○	○	○
11	37	13.5	8.0	3.4		○	○	○
12	38	13.7	8.9	3.1		○	○	○
13	39	13.8	8.1	2.9		○	○	○
14	40	13.8	7.2	2.8		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
15	41	13.8	9.2	3.4		○	○	○
16	42	14.0	7.8	3.0		○	○	○
17	43	12.1	6.5	2.8		○	○	○
18	44	12.1	6.7	2.7		○	○	
19	45	12.2	7.0	3.1		○	○	○
20	46	12.3	4.9	3.0		○		
21	47	13.1	4.2	4.0		○		
		土師器　鍋						
1	57	25.2		(12.9)				
		土師器　鉢						
1	58	30.8	15.6	11.2				
		瓦質土器　鉢						
1	59	45.2		(11.6)				
SG2130（暗灰色砂質土）								
		土師器　皿b						
1	48	6.0	3.8	1.1		○		
2	49	6.6	4.3	1.7		○	○	○
			皿d					
1	50	8.7	6.0	2.6		○	○	○
			杯b					
1	51	12.3	5.7	3.3		○		
SG2130（黒灰色土）								
		土師器　皿b						
1	52	7.1	4.9	2.0		○	○	○
2	53	7.4	4.9	1.6		○	○	○
3	54	6.0	3.3	1.3		○		
4	55	6.6	3.2	1.6		○		
			杯b					
1	56	11.4	5.1	2.5		○		
		土師器　鉢						
1	60	26	13	8.9				
		土師器　鍋						
1	61	36		17.5				
		瓦質土器　釜						
1	62	14		(33)				
		瓦質土器　鉢						
1	63	35.2	(31.6)	(11.1)				
SG2130（黄茶色土）								
		瓦質土器　釜						
1	64	15.6		(16.9)				
SX2127								
		土師器　杯a						
1	1	12.6	8.6	2.7		○	○	○
2	2	12.7	8.2	2.6		○	○	○
3	3	12.7	9.0	2.8		○	○	○
4	4	12.7	8.3	2.7		○	○	○
5	5	12.8	8.5	2.7		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
6	6	13.2	8.8	2.8		○	○	○
7	7	13.5	9.0	2.9		○	○	○
8	8	14.0	9.2	2.7		○	○	○
杯								
1	9	16.1	11.0	3.9		○	○	○
2	10	16.4	11.6	3.9		○	○	○
3	11	16.8	11.5	3.4		○	○	○
SX2139								
土師器　皿a								
1	1	7.7	5.8	1.4		○	○	○
2	2	7.9	5.5	1.1		○	○	
3	3	8.4	6.3	1.5		○	○	○
皿b								
1	4	7.1	4.9	1.8		○	○	○
2	5	7.1	4.8	1.8		○	○	○
3	6	7.2	4.5	1.9		○	○	
4	7	7.4	4.6	1.7		○	○	○
5	8	7.9	5.7	1.8		○	○	
皿d								
1	9	8.9	5.2	2.5		○	○	
杯a・b								
1	10	12.0	8.0	3.1		○	○	
2	11	12.2	8.3	2.9		○	○	○
3	12	12.2	8.1	3.0		○	○	
4	13	12.4	7.4	3.0		○	○	○
5	14	12.4	8.1	3.0		○	○	○
杯								
1	15	19.0	12.6	3.9		○	○	
黒灰色土下層								
土師器　皿a								
1	1	7.3	5.8	1.2		○	○	○
2	2	7.4	5.3	1.3		○	○	
3	3	7.5	5.5	1.4		○	○	○
4	4	7.6	5.9	1.2		○	○	○
5	5	7.6	5.7	1.4		○	○	○
6	6	7.7	5.7	1.3		○	○	○
7	7	7.8	5.7	1.2		○	○	○
8	8	8.0	6.0	1.1		○	○	○
9	9	8.0	6.1	1.2		○	○	○
10	10	8.1	6.0	1.3		○	○	○
11	11	8.3	6.0	1.3		○	○	○
12	12	8.7	6.8	1.5		○	○	○
皿b								
1	13	6.0	4.1	1.5		○	○	○
2	14	6.0	3.6	1.6		○	○	
3	15	6.1	3.9	1.8		○	○	○
4	16	6.2	4.4	1.3		○	不明	×

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
5	17	6.2	4.5	1.4		○	○	○
6	18	6.2	4.6	1.4		○	○	○
7	19	6.2	3.9	1.5		○	○	○
8	20	6.3	4.5	1.3		○	不　明	不　明
9	21	6.3	4.6	1.4		○	○	○
10	22	6.3	4.4	1.4		○	○	○
11	23	6.3	4.8	1.9		○	○	
12	24	6.4	4.7	1.5		○	○	○
13	25	6.5	4.9	1.4		○	○	○
14	26	6.4	4.9	1.5		○	○	○
15	27	6.4	5.1	1.6		○	○	○
16	28	6.4	4.2	1.6		○	○	○
17	29	6.4	4.7	1.7		○	○	○
18	30	6.4	5.1	1.7		○	○	○
19	31	6.4	5.1	2.0		○	○	○
20	32	6.5	4.7	1.4		○	○	
21	33	6.5	4.5	1.6		○	○	○
22	34	6.5	4.6	1.6		○	○	
23	35	6.6	4.8	1.4		○	○	×
24	36	6.6	4.7	1.4		○	○	○
25	37	6.6	4.7	1.4		○	○	
26	38	6.6	4.8	1.8		○	○	○
27	39	6.7	4.5	1.3		○	○	○
28	40	6.7	4.8	1.3		○	○	○
29	41	6.7	4.8	1.4		○	○	不　明
30	42	6.7	5.3	1.4		○	○	○
31	43	6.7	4.8	1.5		○	○	○
32	44	6.7	4.8	1.5		○	○	○
33	45	6.7	4.5	1.6		○	○	×
34	46	6.7	4.6	1.6		○	○	×
35	47	6.7	5.1	1.6		○	○	○
36	48	6.7	4.4	1.7		○	○	○
37	49	6.7	4.4	1.8		○	○	○
38	50	6.8	5.6	1.6		○	○	○
39	51	6.8	4.8	1.6		○	○	○
40	52	6.8	5.0	1.6		○	○	○
41	53	6.8	5.2	1.6		○	(　)	×
42	54	6.8	4.7	1.7		○	○	○
43	55	6.8	4.8	1.7		○	○	○
44	56	6.8	5.0	1.7		○	○	○
45	57	6.8	4.8	1.8		○	○	○
46	58	6.8	4.4	1.9		○	○	○
47	59	6.9	4.9	1.4		○	○	○
48	60	6.9	4.8	1.4		○	○	○
49	61	6.9	5.0	1.5		○	○	×
50	62	6.9	4.8	1.7		○	○	○
51	63	6.9	5.0	1.8		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
52	64	6.9	5.0	2.0		○	○	○
53	65	7.0	4.4	1.7		○	○	
54	66	7.0	5.1	1.7		○	○	○
55	67	7.0	4.5	1.8		○	○	○
56	68	7.0	4.7	1.9		○	( )	
57	69	7.1	4.9	1.5		○	○	
58	70	7.1	5.1	1.5		○	○	不明
59	71	7.1	5.2	1.5		○	不明	不明
60	72	7.1	5.1	1.8		○	○	○
61	73	7.1	5.3	1.8		○	○	○
62	74	7.1	4.7	1.9		○	( )	不明
63	75	7.1	4.8	1.9		○	○	○
64	76	7.2	4.8	1.2		○	○	×
65	77	7.2	4.8	1.8		○	( )	
66	78	7.2	4.9	1.8		○	○	○
67	79	7.2	4.6	1.9		○	○	○
68	80	7.2	4.5	1.9		○	○	○
69	81	7.2	5.3	1.9		○	○	○
70	82	7.2	5.4	1.9		○	○	○
71	83	7.3	5.0	1.5		○	不明	×
72	84	7.3	5.2	1.6		○	○	○
73	85	7.4	5.4	1.5		○	( )	
74	86	7.4	5.0	1.8		○	○	○
75	87	7.4	5.0	2.2		○	○	○
76	88	7.8	4.8	1.9		○	○	○
77	89	8.1	6.3	1.6		○	○	
皿c								
1	90	7.4	6.4	2.5		○	○	
2	91	7.8	4.7	2.4			○	
3	92	7.8	6.6	2.2			○	
4	93	7.9	5.8	2.1			○	
5	94	8.2	6.3	1.8			○	
6	95	8.2	6.2	2.0			○	
7	96	8.2	6.6	2.4			○	
8	97	8.3	6.4	2.5			○	
9	98	8.4	6.1	2.8			○	
杯a・b								
1	99	11.4	7.1	2.8		○	○	
2	100	11.5	8.0	2.9		○	○	○
3	101	11.6	6.5	2.7		○	○	○
4	102	11.6	7.2	2.7		○	○	○
5	103	11.7	7.1	2.6		○	○	○
6	104	11.8	7.5	2.7		○	○	○
7	105	11.8	7.3	3.0		○	○	○
8	106	11.9	7.1	2.7		○	○	
9	107	11.9	7.7	2.9		○	○	○
10	108	12.0	7.6	2.5		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
11	109	12.0	7.0	2.5		○	○	○
12	110	12.0	7.1	2.7		○	○	×
13	111	12.0	7.4	2.7		○	不明	
14	112	12.0	7.7	2.7		○	○	○
15	113	12.0	8.8	2.8		○	○	×
16	114	12.1	8.6	2.5		○	○	○
17	115	12.1	8.0	2.7		○	○	×
18	116	12.1	7.0	2.8		○	不明	
19	117	12.1	7.0	2.7		○	( )	
20	118	12.1	8.4	2.7		○	○	○
21	119	12.1	8.0	2.7		○	○	○
22	120	12.1	8.0	3.0		○	○	×
23	121	12.2	7.7	2.7		○	○	○
24	122	12.2	7.7	2.7		○	○	○
25	123	12.2	8.3	2.8		○	○	○
26	124	12.2	8.6	2.8		○	○	○
27	125	12.2	7.6	3.0		○	○	○
28	126	12.3	7.5	2.8		○	○	○
29	127	12.3	8	2.8		○	○	○
30	128	12.3	8.1	2.8		○	○	○
31	129	12.3	7.8	2.9		○	○	○
32	130	12.3	8.5	2.9		○		
33	131	12.3	8.5	2.9		○	○	○
34	132	12.4	8.1	2.7		○	( )	
35	133	12.4	8.2	2.7		○	○	○
36	134	12.4	7.6	2.9		○	○	○
37	135	12.4	7.3	3.0		○	○	○
38	136	12.4	8.1	3.0		○	○	
39	137	12.4	8.2	3.0		○	○	○
40	138	12.4	8.0	3.1		○	不明	不明
41	139	12.5	8.4	2.7		○		○
42	140	12.5	8.5	2.9		○	○	○
43	141	12.5	8.2	3.1		○	○	○
44	142	12.6	8.7	2.7		○	○	○
45	143	12.6	8.6	2.9		○	○	○
46	144	12.6	8.6	2.9		○	○	○
47	145	12.6	7.7	3.2		○	○	○
48	146	12.7	8.4	2.6		○	○	○
49	147	12.7	7.6	3.1		○	○	○
50	148	12.8	8.5	2.8		○	○	○
51	149	12.9	7.8	2.8		○	○	
52	150	12.9	8.9	2.8		○	○	○
杯								
1	151	16.2	14.0	3.8		○	○	○
2	152	17.1	11.5	3.5		○		○
下層腐植土層								
土師器　皿a								

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
1	1	7.3	6.3	1.0		○	○	○
2	2	8.1	5.4	1.3		○	○	○
3	3	8.4	6.3	1.3		○	○	○
4	4	8.4	6.5	1.3		○	○	○
5	5	8.4	6.8	0.9		○	○	○
6	6	8.5	6.4	1.0		○	○	
7	7	8.6	6.4	1.0		○	○	○
8	8	8.6	6.9	1.3		○	○	○
9	9	8.7	6.9	1.4		○	○	○
10	10	9.2	7.2	1.2		○	○	○
杯a								
1	11	12.3	8.7	2.5		○	○	○
2	12	12.4	8.9	2.7		○	○	○
3	13	12.6	8.5	2.4		○	○	○
杯b								
1	14	12.7	8.0	2.7		○	○	○

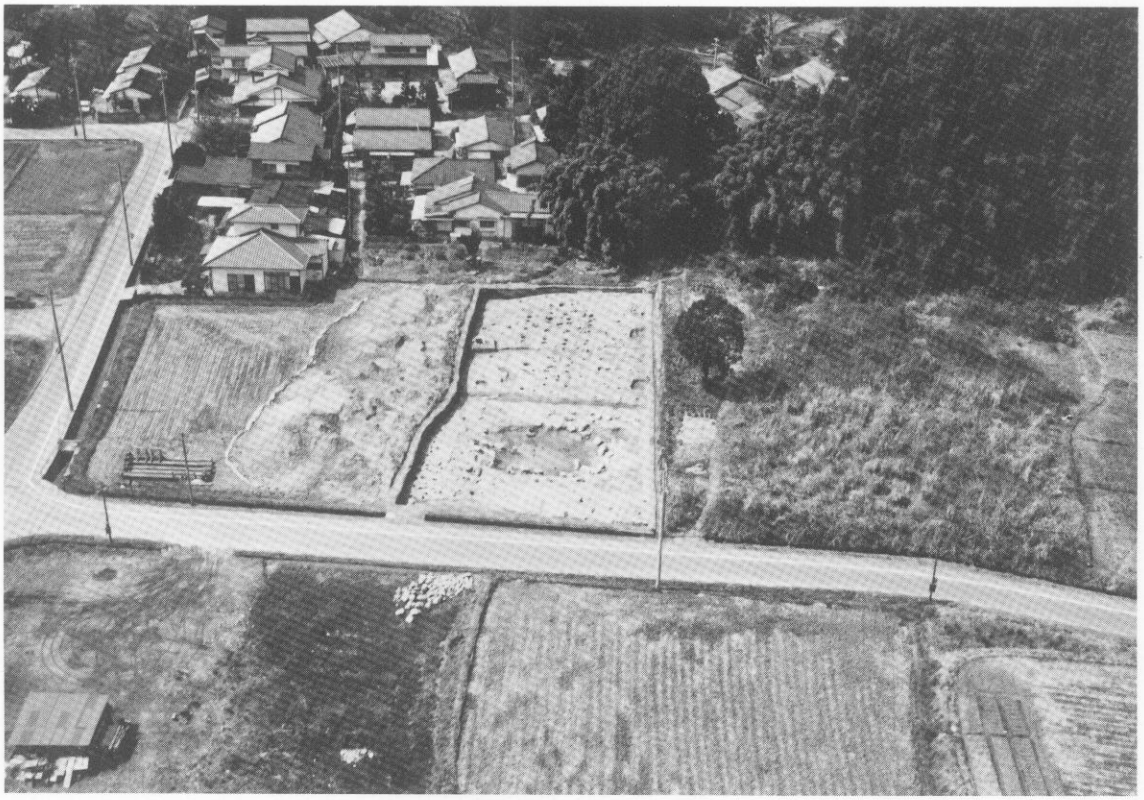
番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
第80次調査								
SB2220								
		土師器　杯						
1	4	15.0	8.4	3.3				
SB2240								
		須恵器　蓋						
1	1	11.6			○			
2	2	13.2			○			
3	3	14.2			○			
SE2250								
		土師器　皿a						
1	1	10.0	7.0	1.3	○		○	
		黒色土器　A						
1	2	14.6						
SE2265								
		土師器　皿a						
1	3	9.4	7.4	1.2	○		○	
2	4	10.3	7.5	1.3	○		○	○
			皿c					
1	5	9.4	4.9	1.9			○	○
			皿					
1	6	14.2	8.6	2.1	○			
SK2203								
		土師器　皿a						
1	1	10.5	8.2	1.1	○		(○)	
2	2	11.1	7.5	1.3	○		○	
			皿c					
1	3	10.8	6.4	2.3			○	○
			杯					
1	4	11.2	7.2	3.2	○		○	○
			椀					
1	5	15.0	7.4	5.1			○	
			小壺					
1	6	3.6	4.7	6.8				
SK2251								
		土師器　杯						
1	1	10.2	6.3	4.2	○		○	
1	2	13.3	8.0	3.7				
SK2252								
		土師器　杯						
1	3	13.7	7.4	3.6	○			
SK2274								
		土師器　皿						
1	5	13.4	8.8	2.6	○		○	○
2	6	14.8	8.0	2.0	○		○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
土師器　杯								
1	7	13.0	7.5	4.2	○			
椀								
1	8	16.2	7.0	5.5				
SK2279								
須恵器　蓋								
1	9	11.2		2.1				
2	10	(15.2)			○			
3	11	(14.8)		2.5				
杯								
1	12	14.2	11.0	3.7	○		○	
2	13	14.4	11.8	4.2			○	
SX2275								
須恵器　蓋								
1	1	15.8		2.6				
2	2	16.2		2.6				
3	3	13.0						
4	4	16.5						
5	5	20.2		1.7				
杯								
1	6	13.8	8.1	3.7	○		○	
皿								
1	7	19.0	15.4	2.2	○		○	
土師器　蓋								
1	8	16.1		2.1				
2	9	19.2		3.5				
3	10	18.5		3.8				
杯								
1	11	13.6	7.6	3.2	○			
2	12	10.9	6.8	3.0	○		○	
3	13	11.0	6.6	4.1	○		○	○
4	14	12.3	8.2	4.0	○			
5	15	13.4	8.0	3.4	○			
6	16	13.8	8.1	3.3	○			
7	17	13.8	8.3	3.7	○			
8	18	14.3	8.2	3.4	○			
皿								
1	19	13.7	10.5	1.9	○			
2	20	14.8	12.0	2.0	○		○	○
3	21	14.9	11.4	2.1	○			
4	22	15.2	11.4	1.5	○			
5	23	15.3	12.6	1.6	○			
6	24	17.4	13.8	2.1	○			
7	25	18.0	15.4	2.6	○		○	

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
整地層								
須恵器　蓋								
1	1	13.9			○		○	
2	2	15.2		2.2				
杯								
1	3	13.0	8.0	3.7	○			
2	4	14.2	9.8	4.2				
遺構面上								
須恵器　蓋								
1	1	12.2		2.4			○	
2	2	15.2		2.5			○	
3	3	16.3		2.6				
4	4	18.8			○			
5	5	19.0		2.5	○			
6	6	19.1			○			
7	7	18.0			○		○	
杯								
1	8	10.4	6.1	4.4	○		○	
2	9	9.2	5.4	5.0	○			
土師器　椀								
1	10	12.4	7.0	4.5				
皿								
1	11	16.8	13.0	2.3	○			
黒色砂質土								
土師器　皿								
1	1	9.8	6.4	1.1	○		○	○
2	2	10.0	7.0	1.0	○		○	○
3	3	10.2	7.2	1.0	○			
皿a								
1	4	9.2	7.0	1.0	○			
2	5	9.3	6.7	1.6	○		○	○
3	6	9.5	7.1	1.5	○		(○)	○
4	7	9.7	7.9	1.2	○		○	○
5	8	9.8	8.1	1.2	○		○	○
6	9	10.1	7.5	1.3	○		○	○
7	10	10.1	7.8	1.5	○		○	○
8	11	10.4	8.3	1.1	○		○	
9	12	10.8	7.8	1.0			○	○
10	13	10.9	8.4	1.8	○		○	○
11	14	8.9	6.8	2.0	○		○	
12	15	9.6	6.9	2.1			○	○
皿c								
1	16	8.6	4.7	3.2			○	
2	17	10.3	5.7	2.5			○	
3	18	10.5	5.8	2.4			○	
4	19	11.2	7.1	2.5				
5	20	11.6	7.0	2.2			○	

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
灰褐色土								
			須恵器　蓋					
1	1	12.5		2.6			○	
2	2	14.2		3.7				
			杯					
1	3	13.4	10.0	4.4	○		○	
			椀					
1	4	15.0	9.7	8.5				
			皿					
1	5	17.5	11.8	2.1			○	
			土師器　杯					
1	7	9.2	6.6	4.4	○			
2	8	13.2	8.3	3.7	○			
			椀					
1	9	15.0	8.2	5.9	○		○	○
			皿					
1	10	13.3	10.6	1.5	○			
2	11	13.8	11.1	1.8	○			
3	12	14.2	11.0	2.3	○			
			皿a					
1	13	9.0	6.8	1.2	○			
			皿c					
1	14	10.0	5.6	2.0			○	○
2	15	10.9	5.6	2.1			○	
3	16	10.3	6.0	2.9	○		○	
			丸底の杯					
1	17	15.0		3.7	○			
			黒色土器　B					
1	18	16.4	6.5	5.5				

図　　版

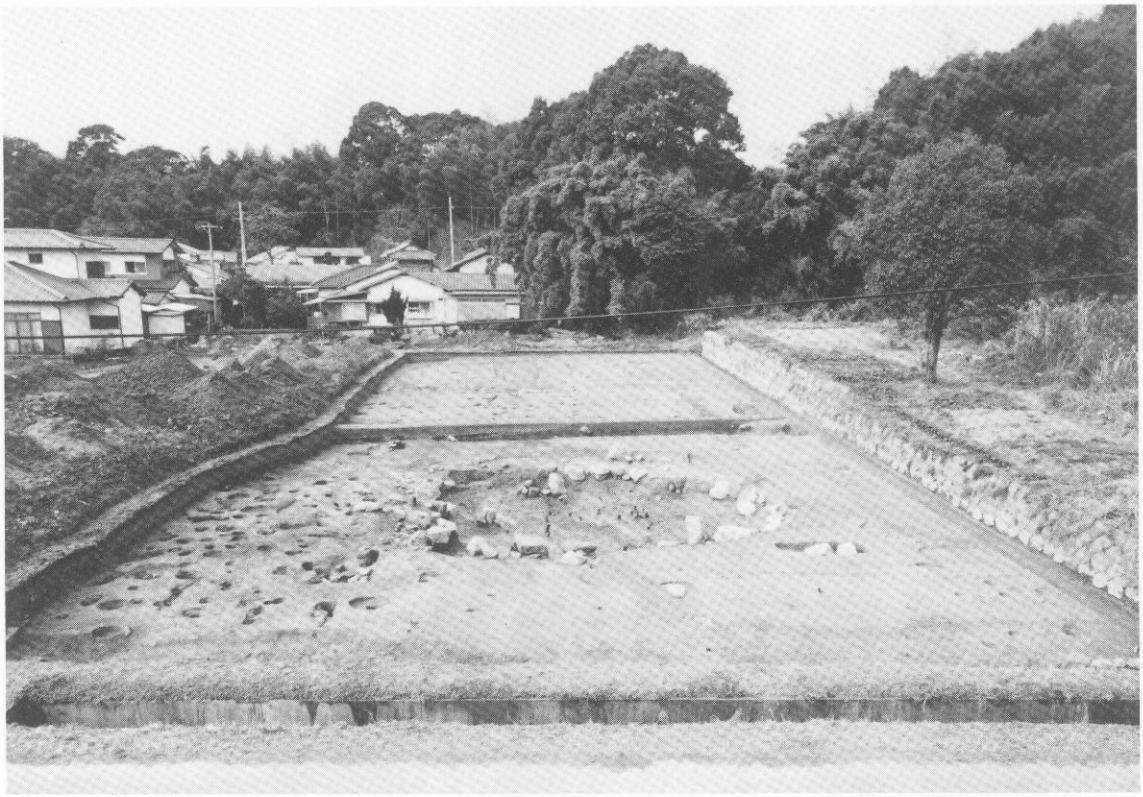


第78次調査区全景航空写真（東から）



第78次調査区上層全景（西から）

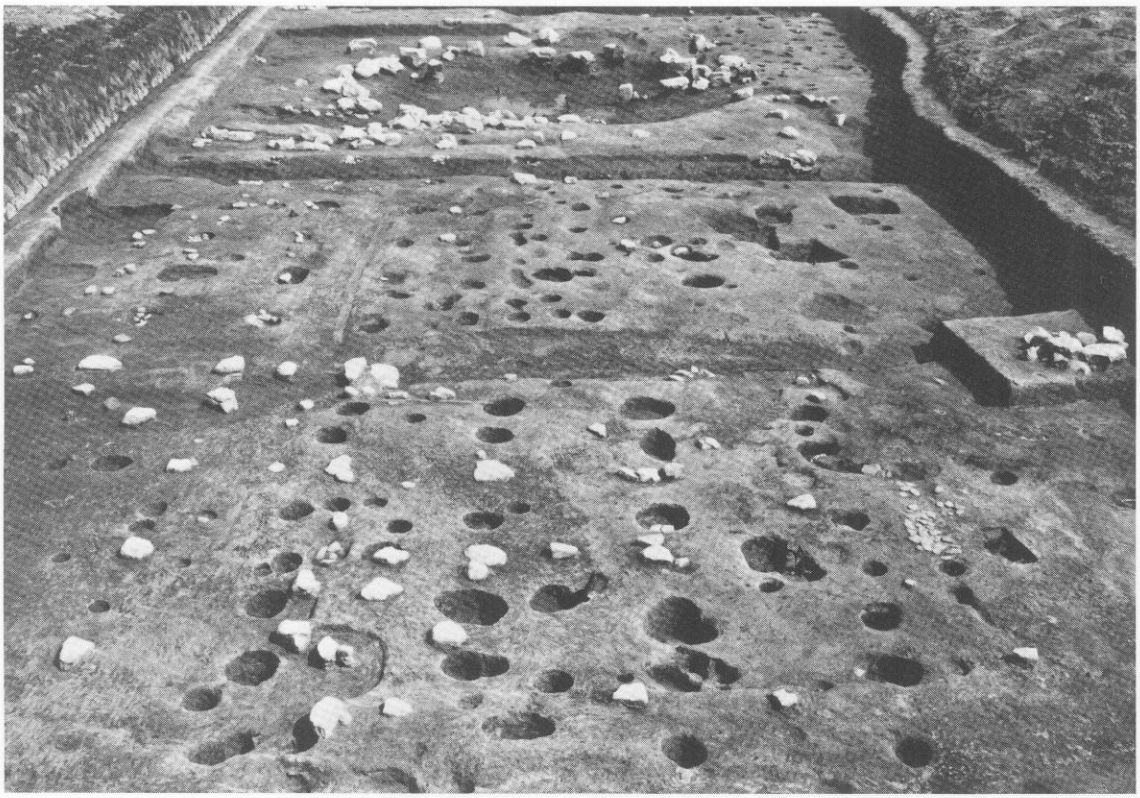
図版 2



第78次調査区中層全景（東から）



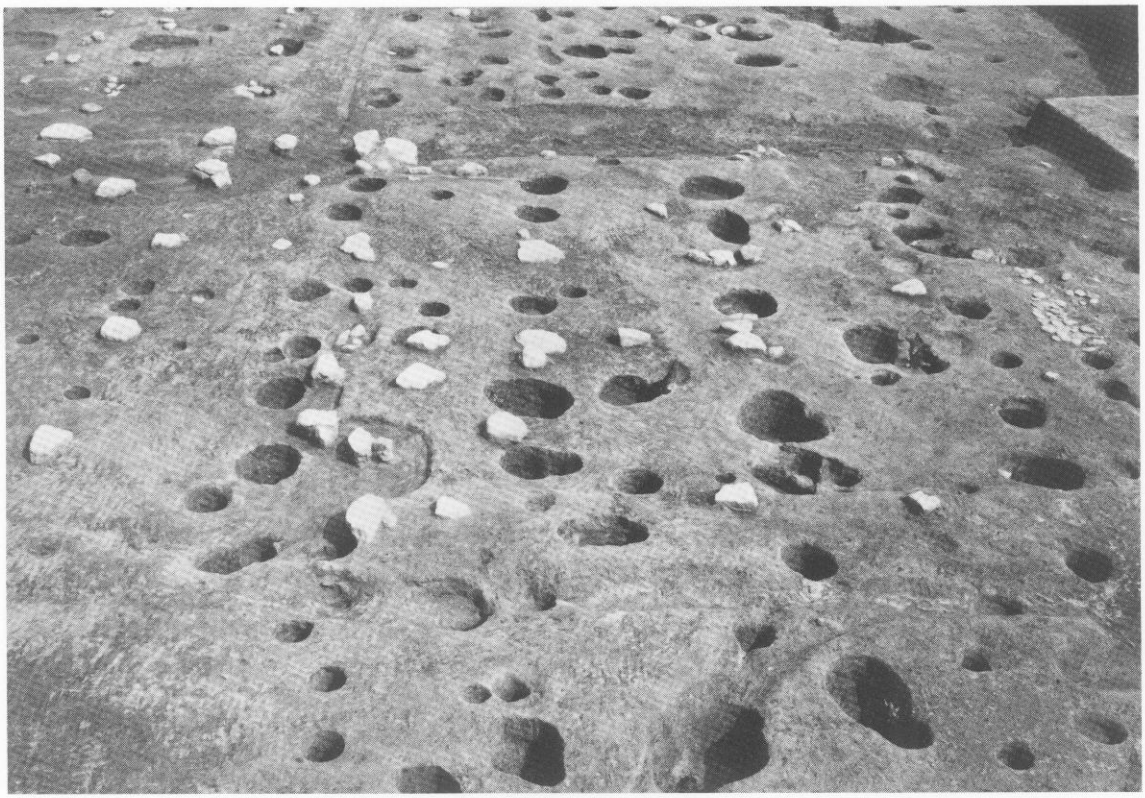
第78次調査区下層全景（東から）



礎石建物ＳＢ2140・ＳＢ2150、掘立柱建物ＳＢ2155(西から)



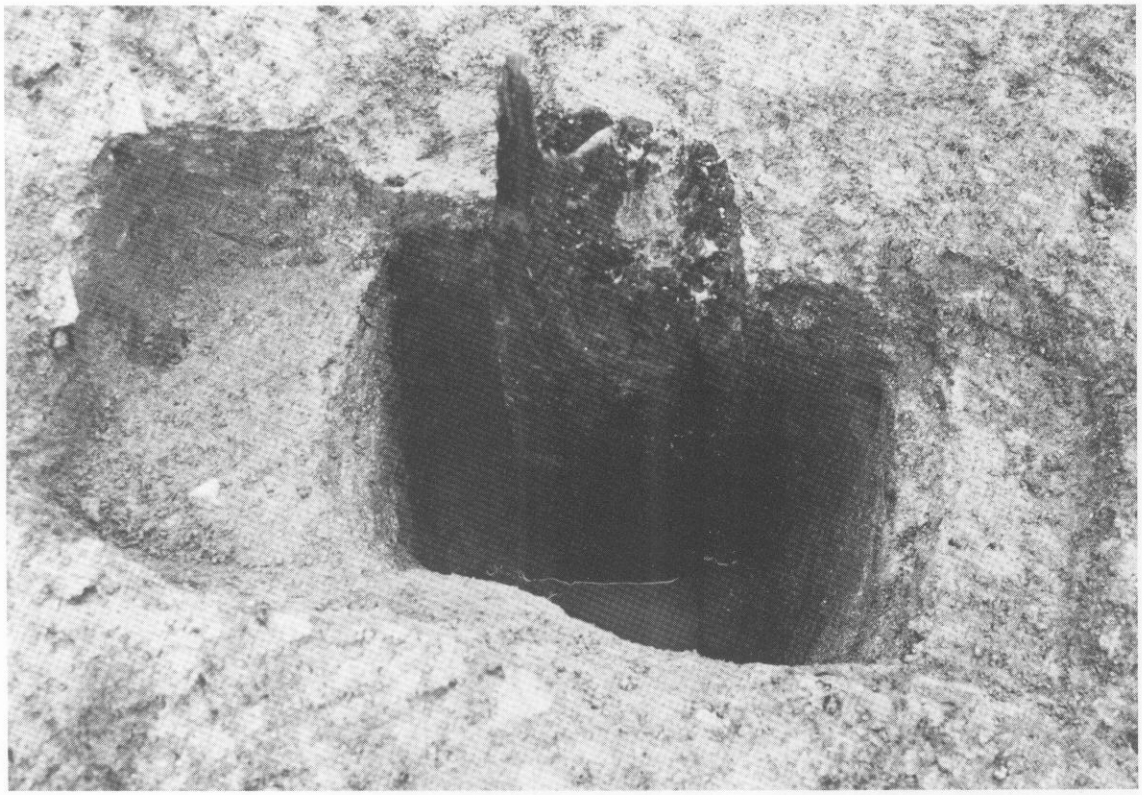
礎石建物ＳＢ2140(西から)



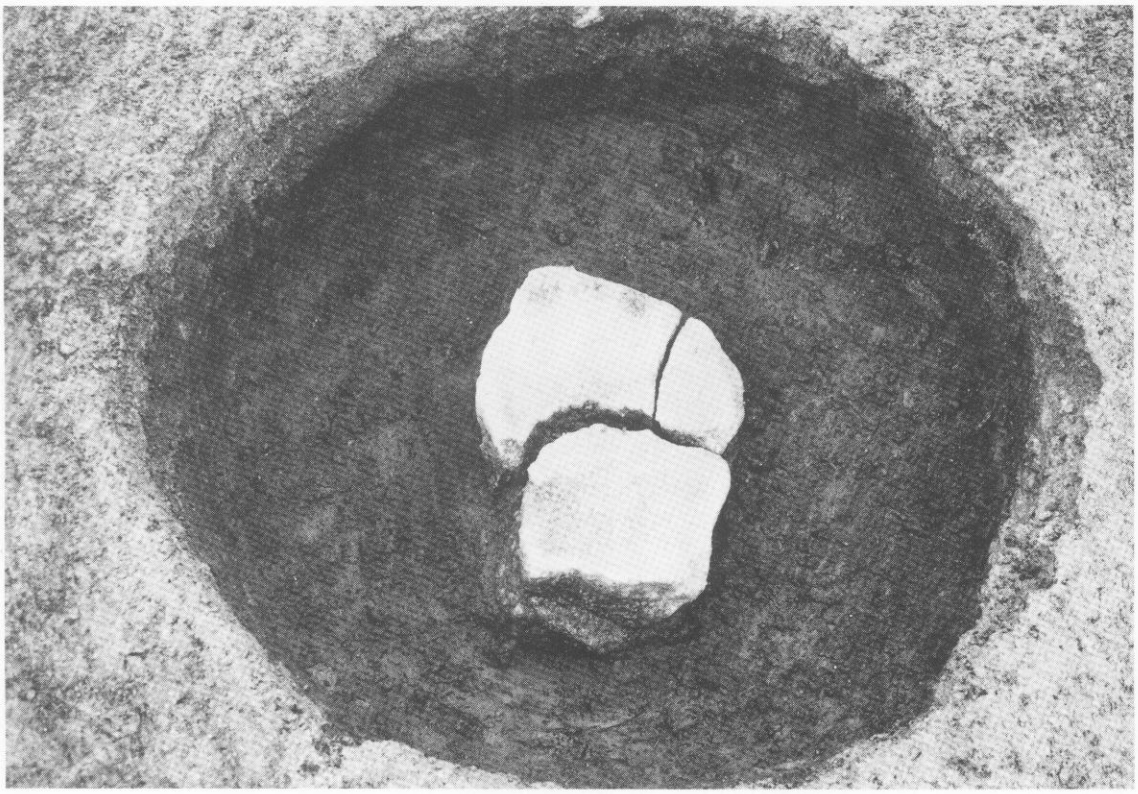
礎石建物ＳＢ2150、掘立柱建物ＳＢ2155(西から)



礎石建物ＳＢ2150、掘立柱建物ＳＢ2155(東から)



柵ＳＡ2105柱根(南から)

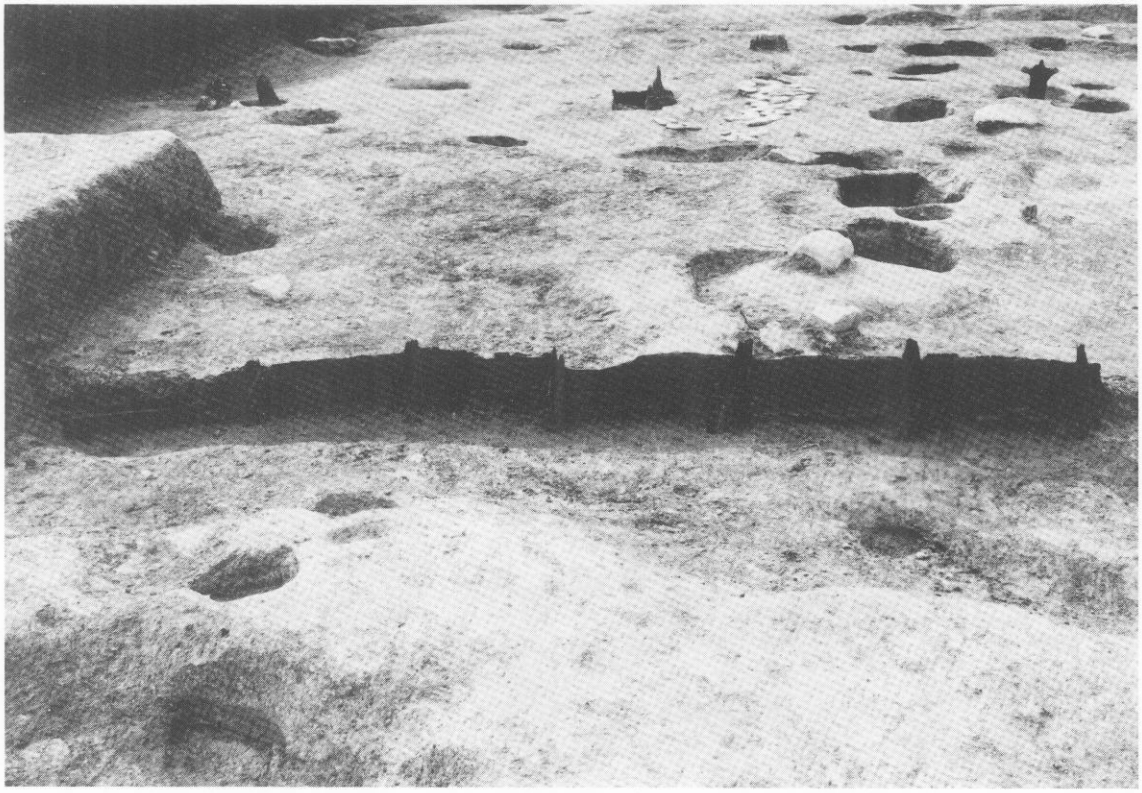


掘立柱建物ＳＢ2155柱掘形(南から)

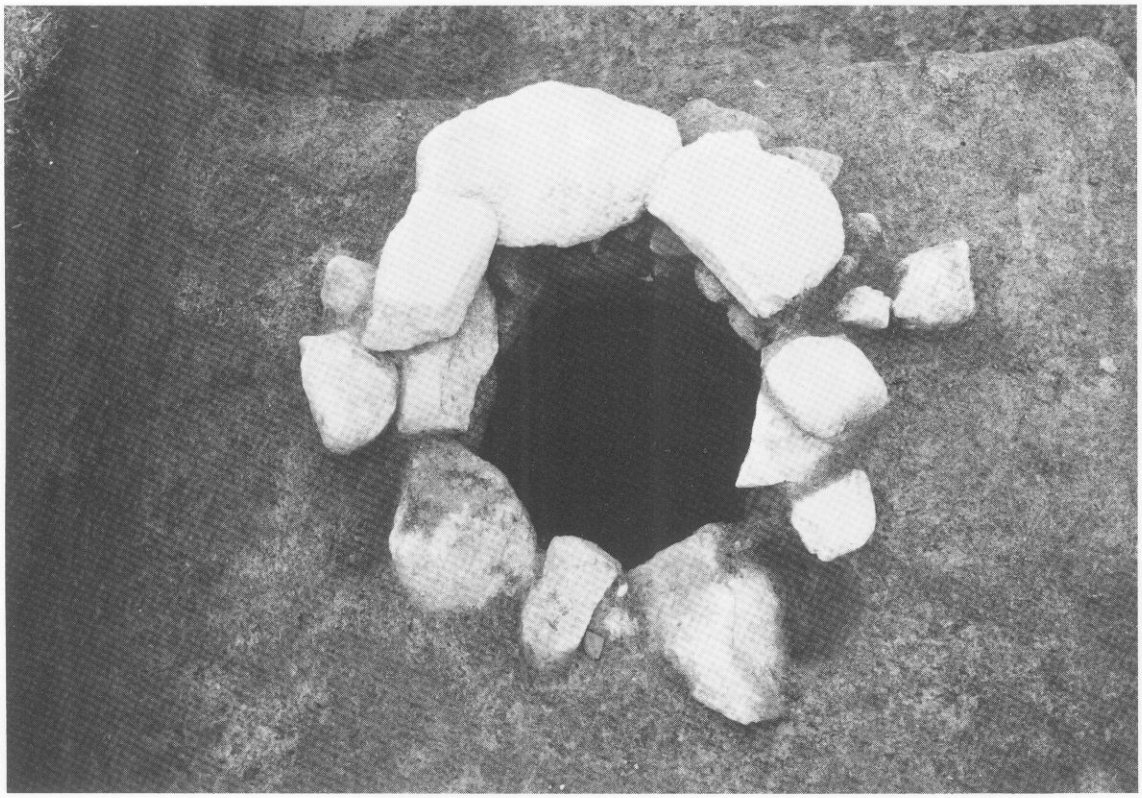
図版 6



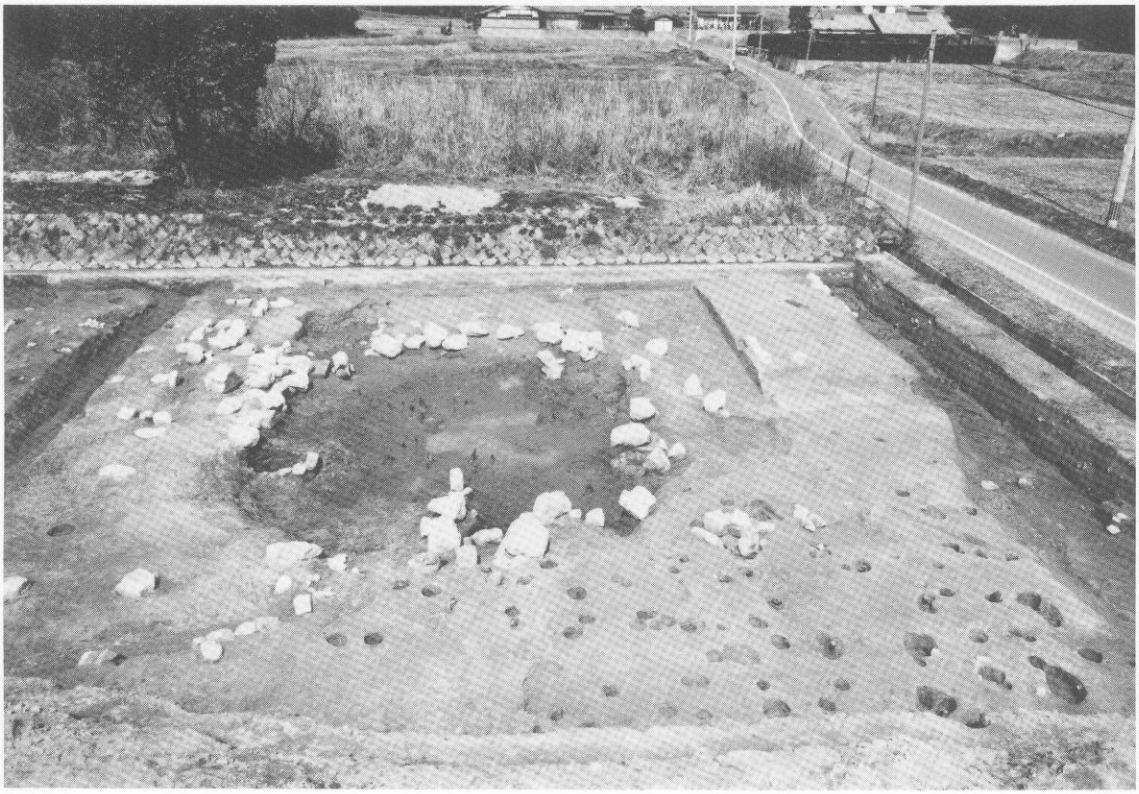
溝ＳＤ2115(北から)



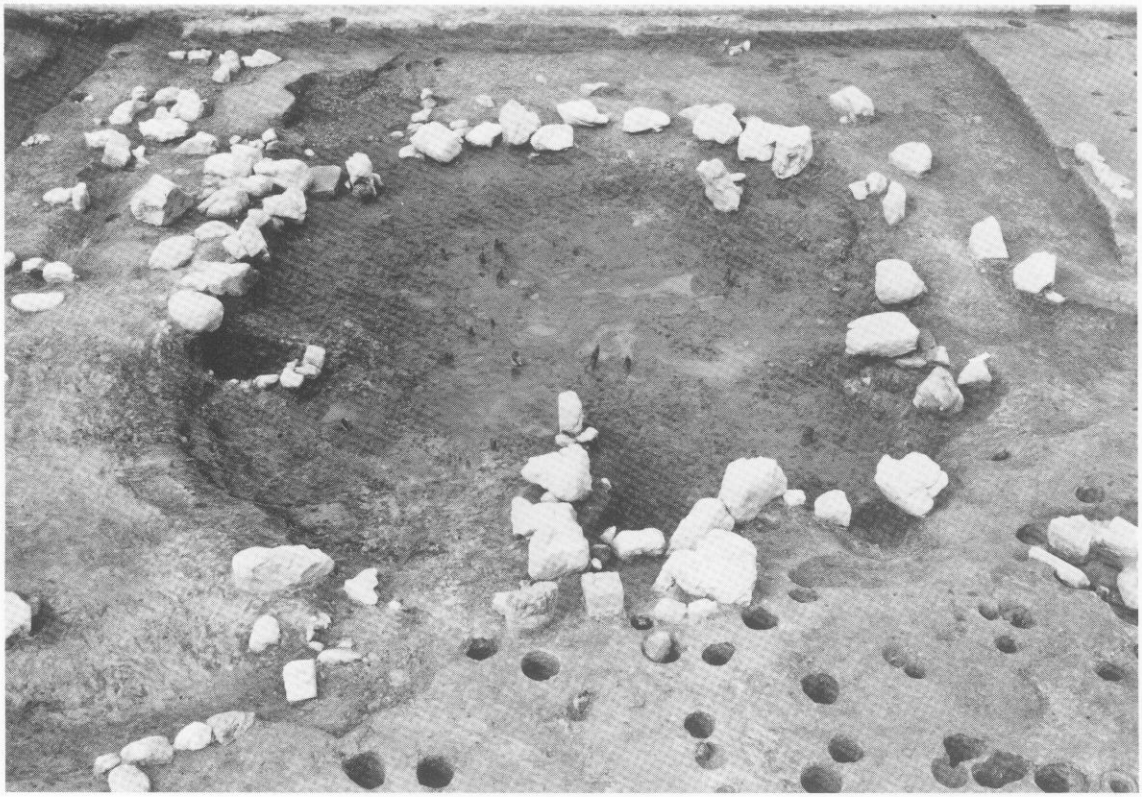
溝ＳＤ2145(東から)



井戸ＳＥ2110(東から)



園池ＳＧ2130(南から)



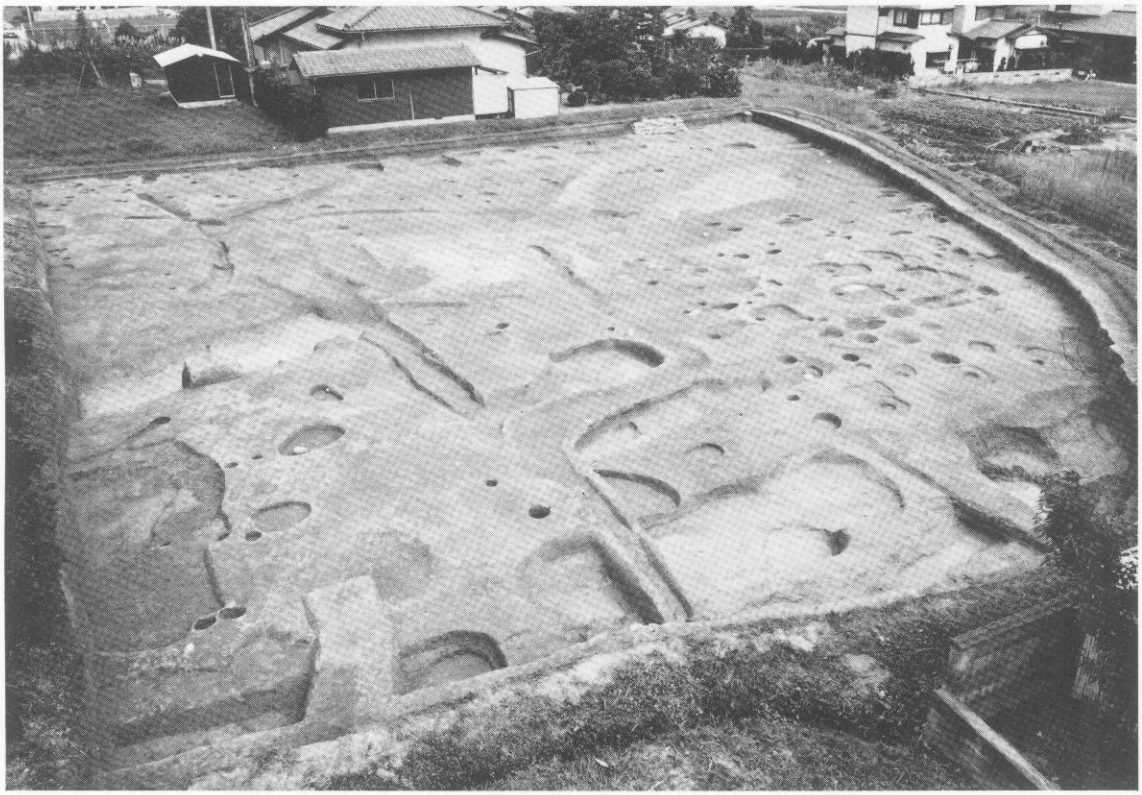
園池ＳＧ2130(南から)



園池ＳＧ2130(北から)



第80－1次調査区全景(東から)

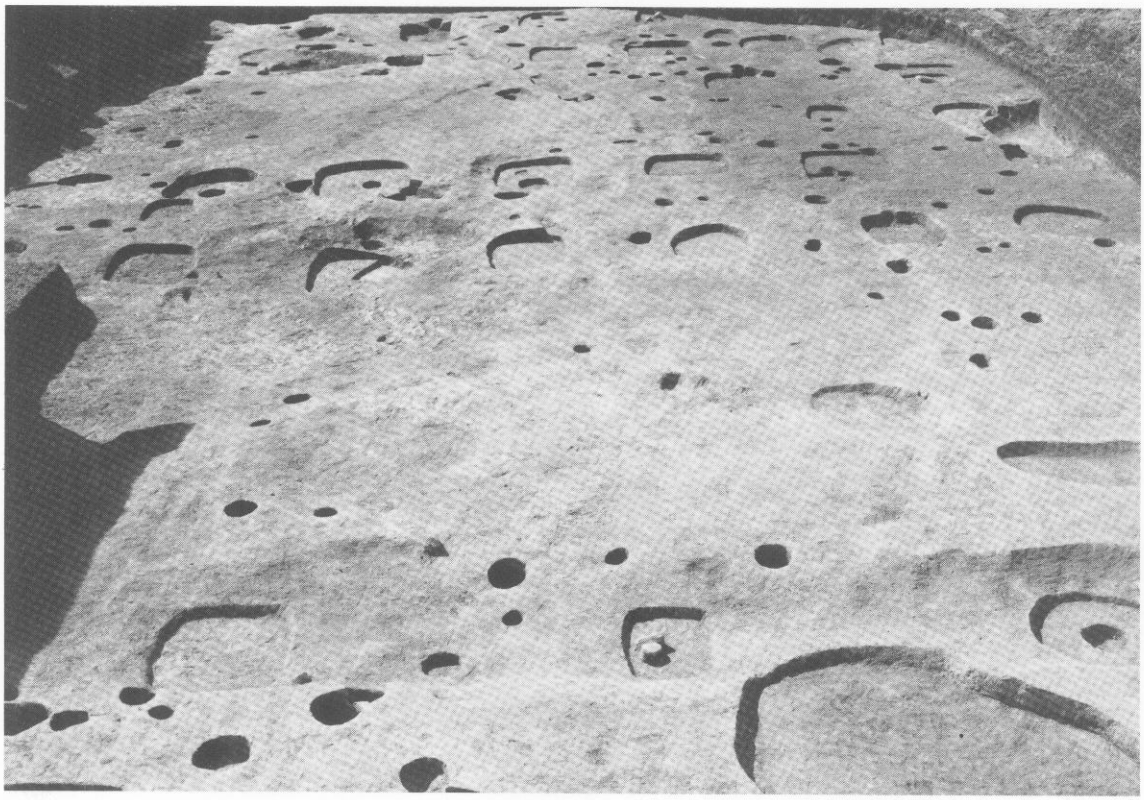


第80－2次調査区全景(西から)

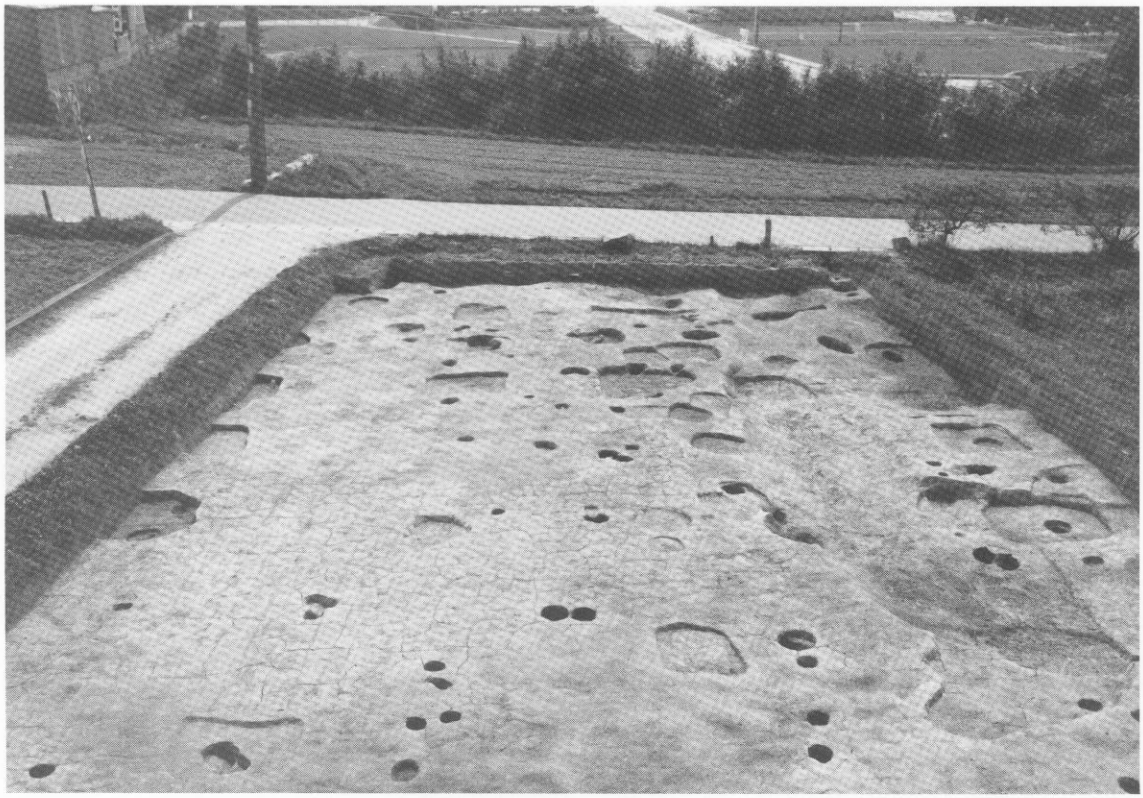
図版10



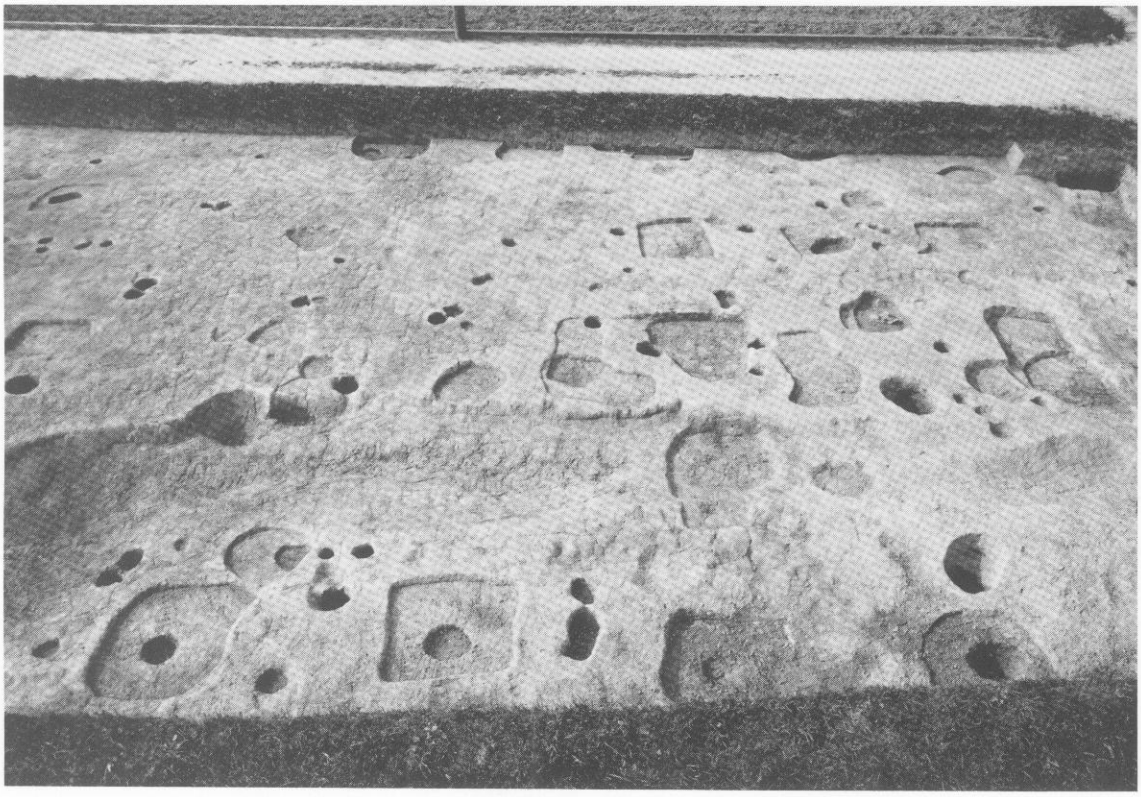
第80－3次調査区全景(西から)



掘立柱建物ＳＢ2215・ＳＢ2220



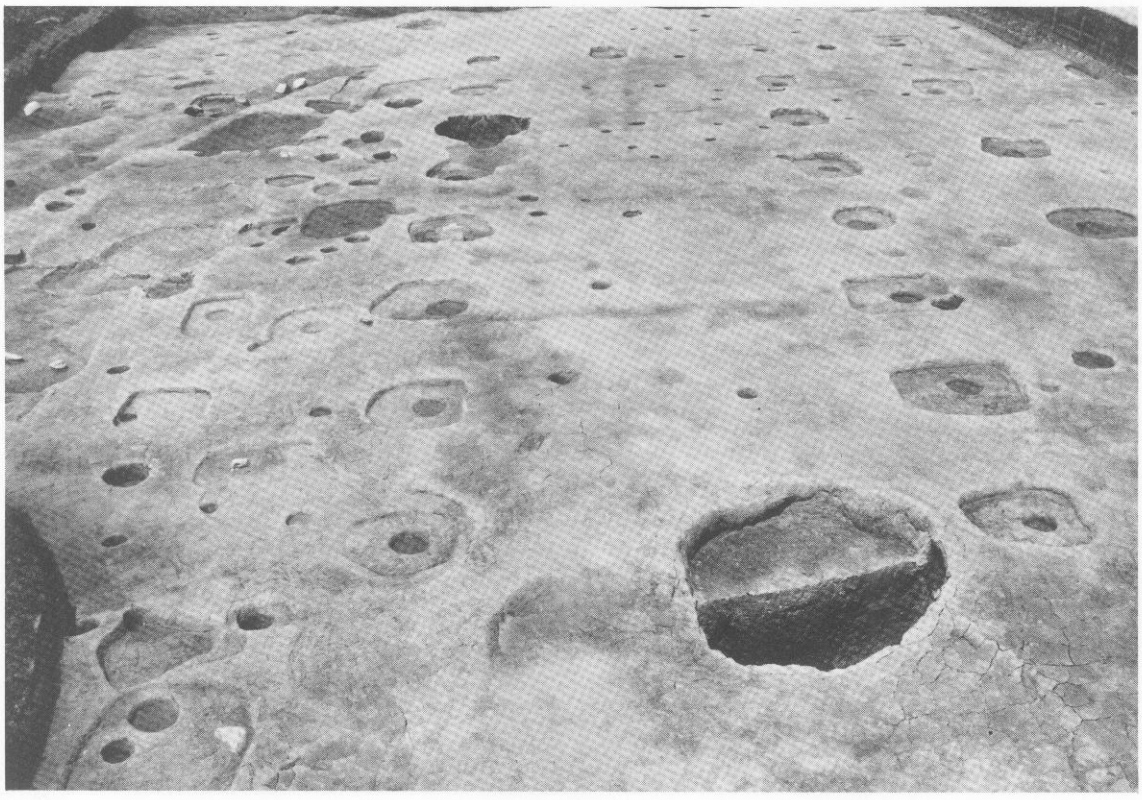
掘立柱建物ＳＢ2001・ＳＢ2195(西から)



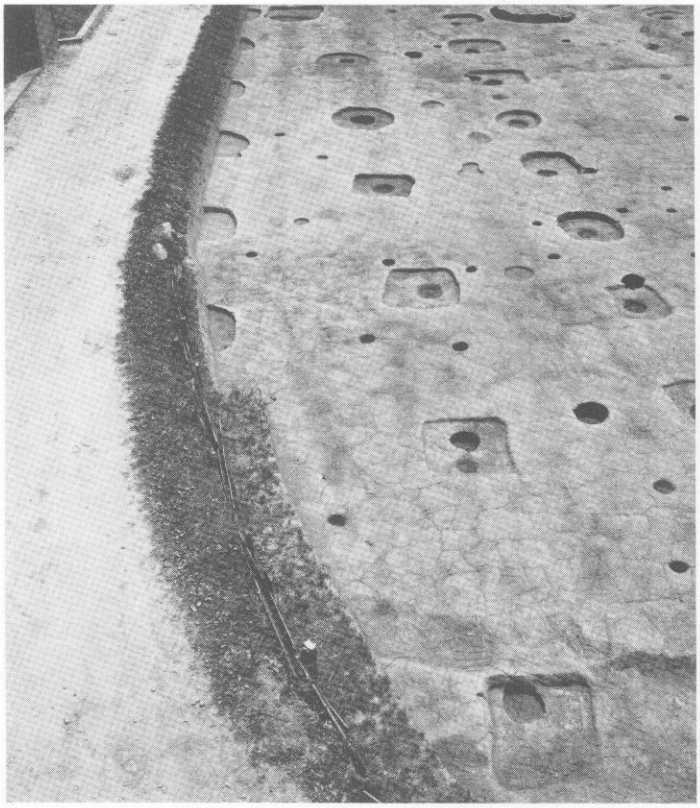
掘立柱建物ＳＢ2001・ＳＢ2195(南から)



掘立柱建物ＳＢ2200(西から)



掘立柱建物ＳＢ2200(東から)



掘立柱建物ＳＢ2205
ＳＢ2210
（西から）



掘立柱建物ＳＢ2215



掘立柱建物ＳＢ2220(北から)



掘立柱建物ＳＢ2230・ＳＢ2240(北から)



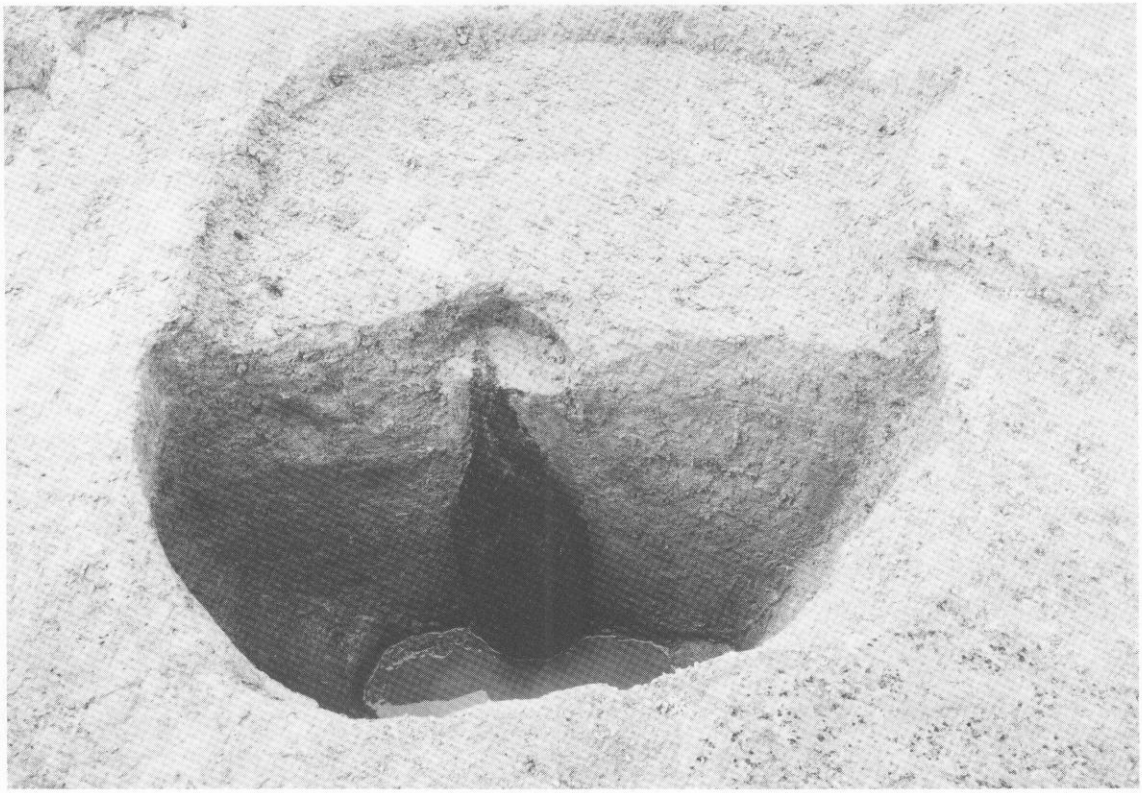
掘立柱建物ＳＢ2230(西から)



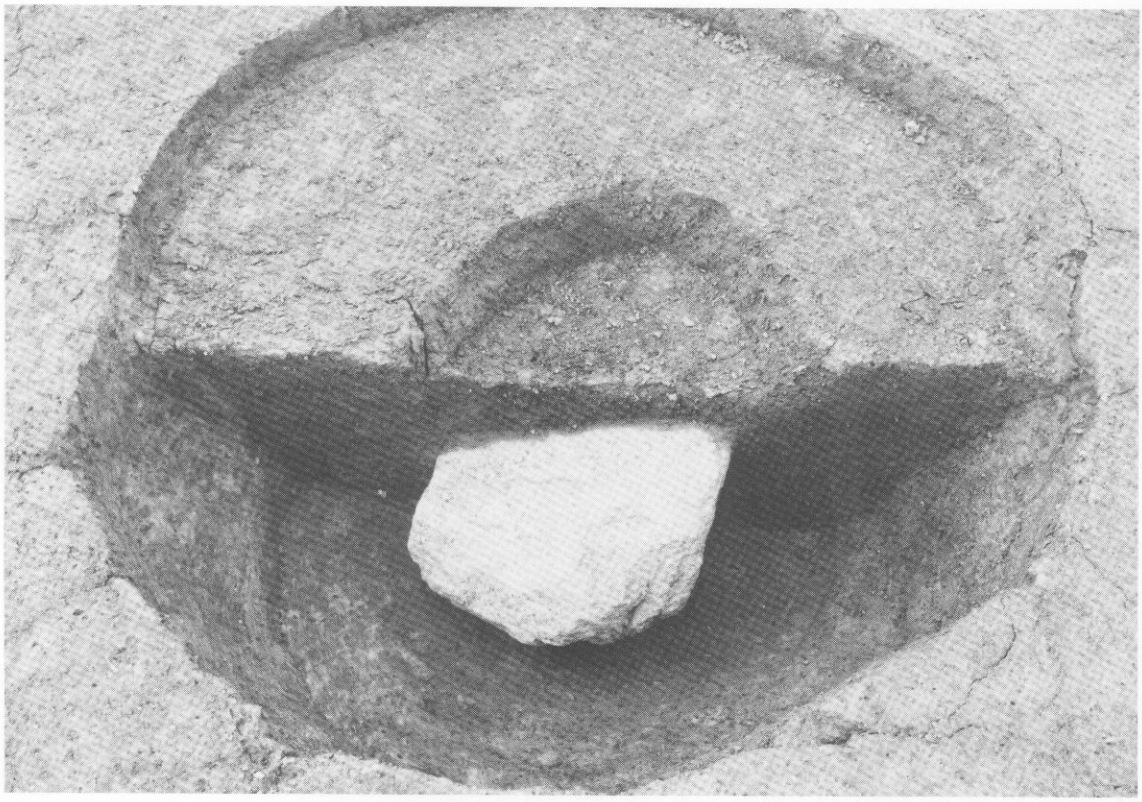
掘立柱建物ＳＢ2240(北から)



掘立柱建物ＳＢ2195柱掘形（南から）



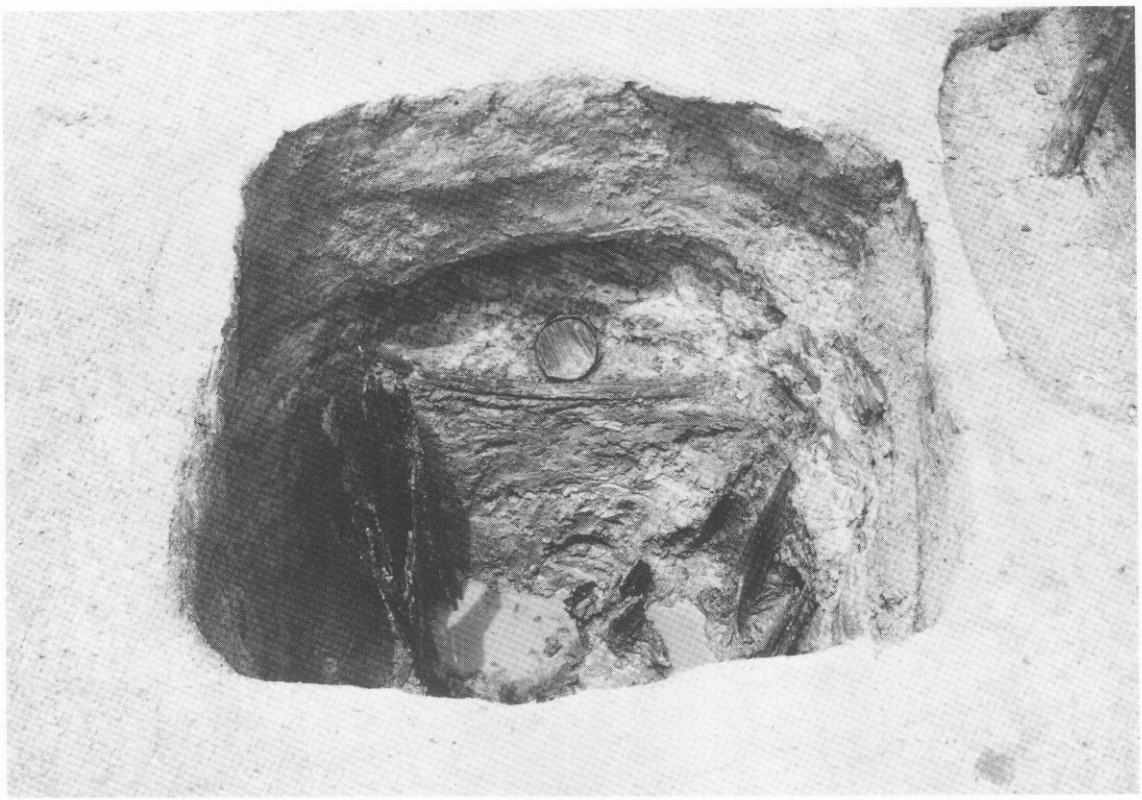
掘立柱建物ＳＢ2195柱掘形（南から）



掘立柱建物ＳＢ2200柱掘形（南から）



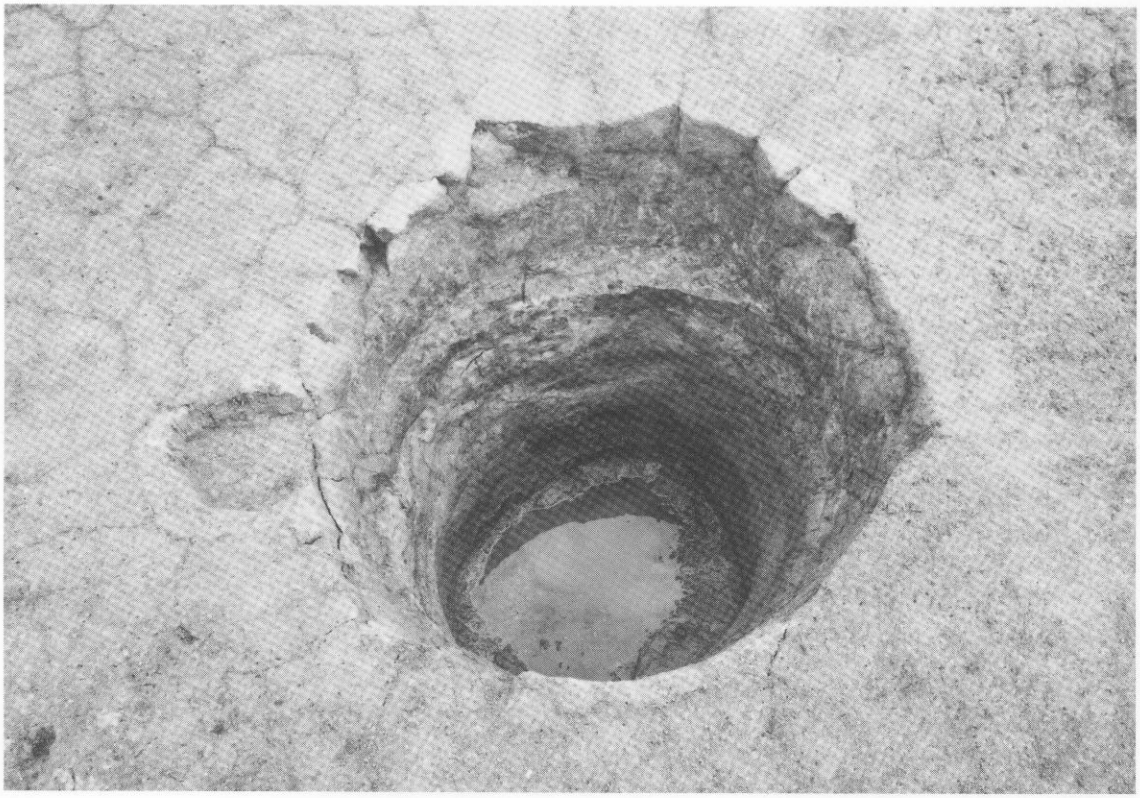
掘立柱建物ＳＢ2220柱掘形（南から）



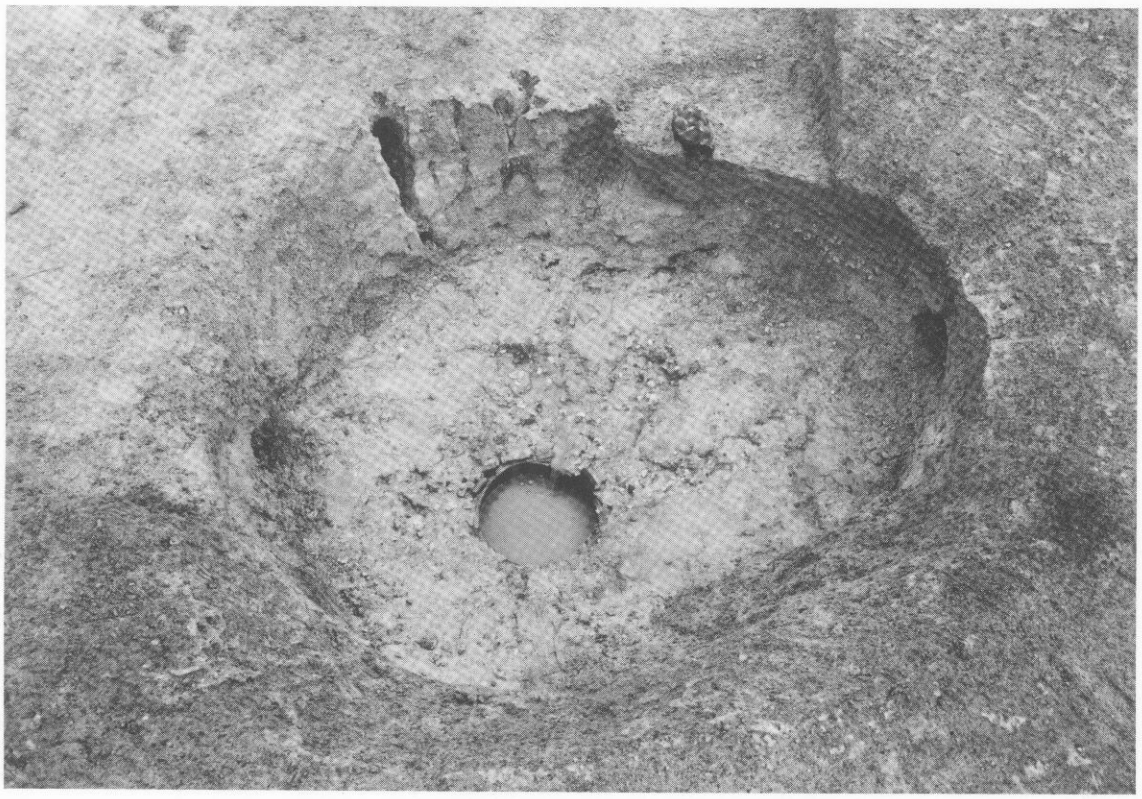
井戸ＳＥ2250(東から)



井戸ＳＥ2255(西から)



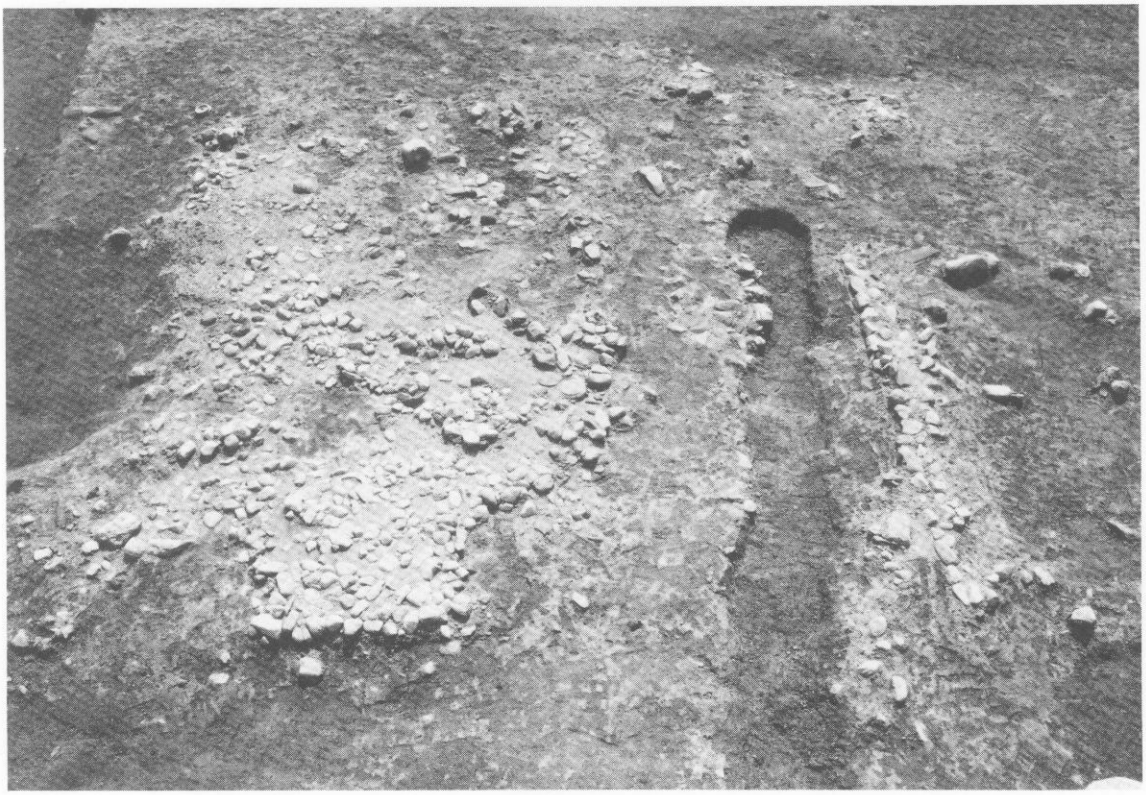
井戸ＳＥ2260(西から)



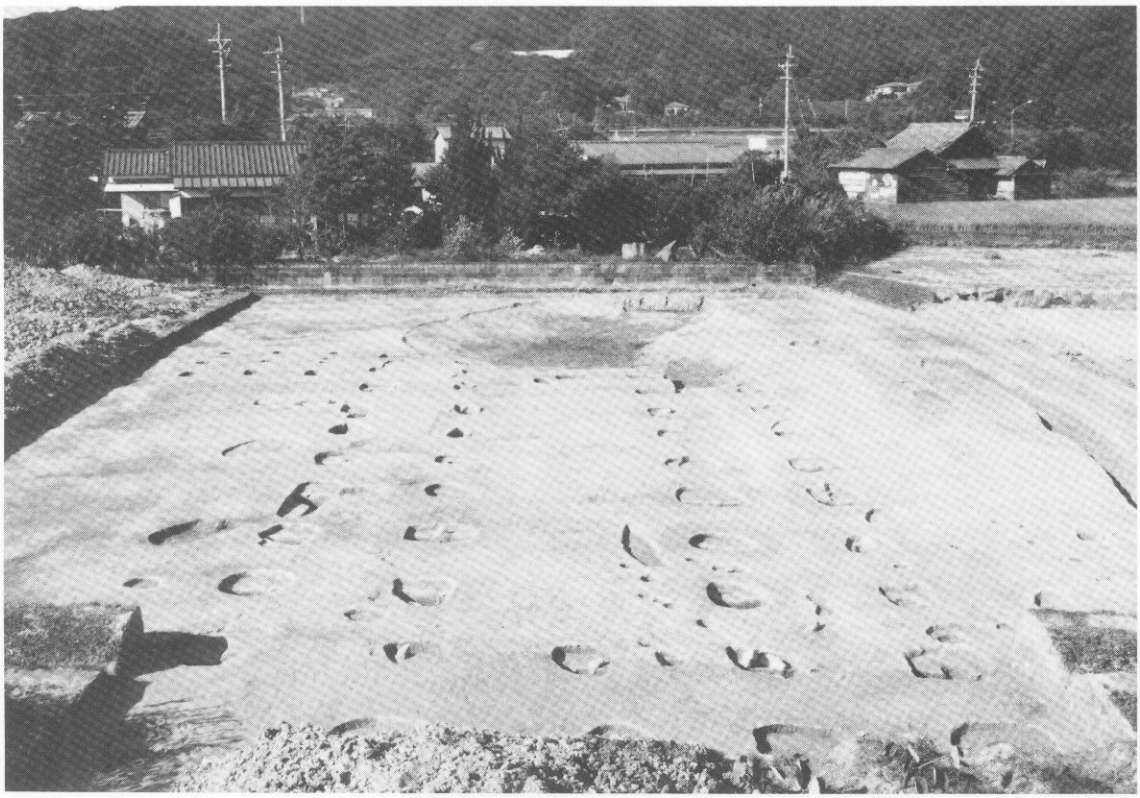
井戸ＳＥ2265(西から)



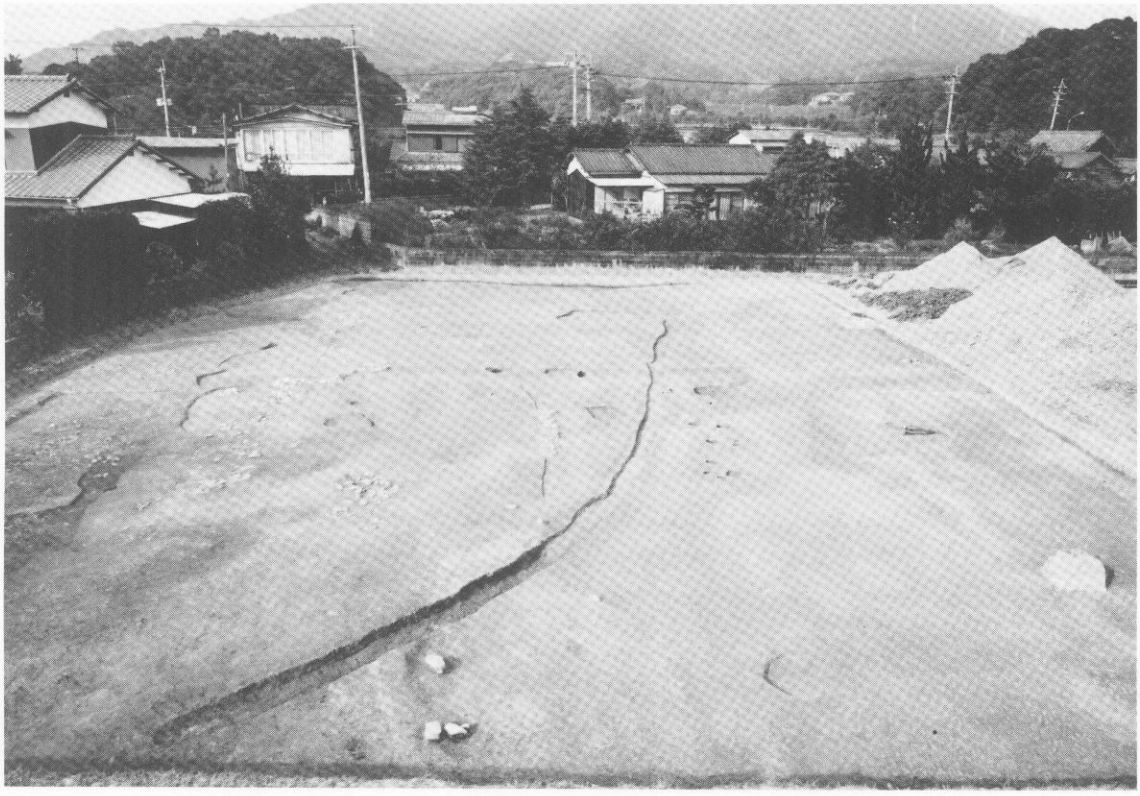
井戸ＳＥ2270(西から)



礫敷遺構ＳＸ2275(西から)



第81次調査東区全景(南から)



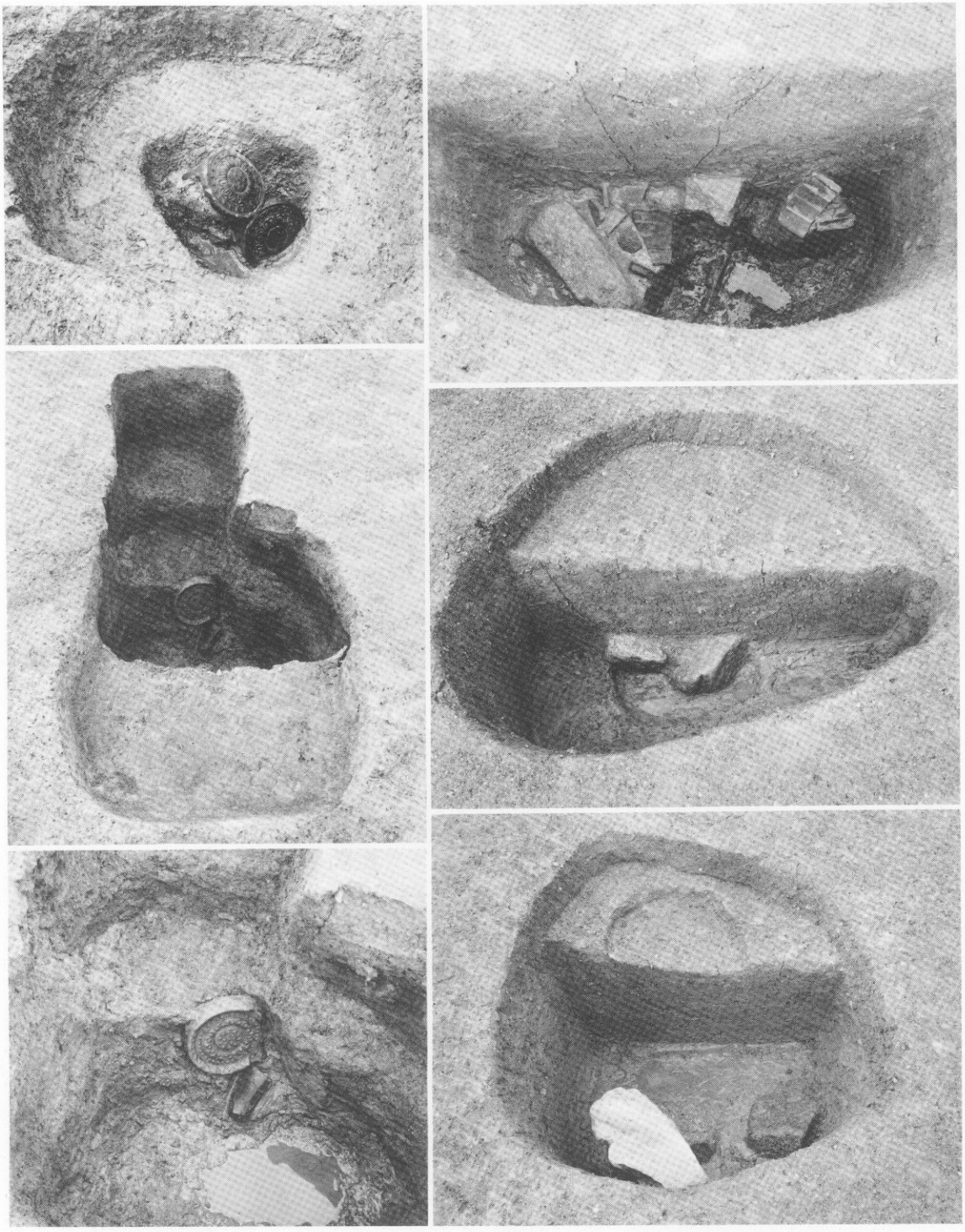
第81次調査西区全景(南から)



掘立柱建物ＳＢ2300・ＳＢ2305(南から)



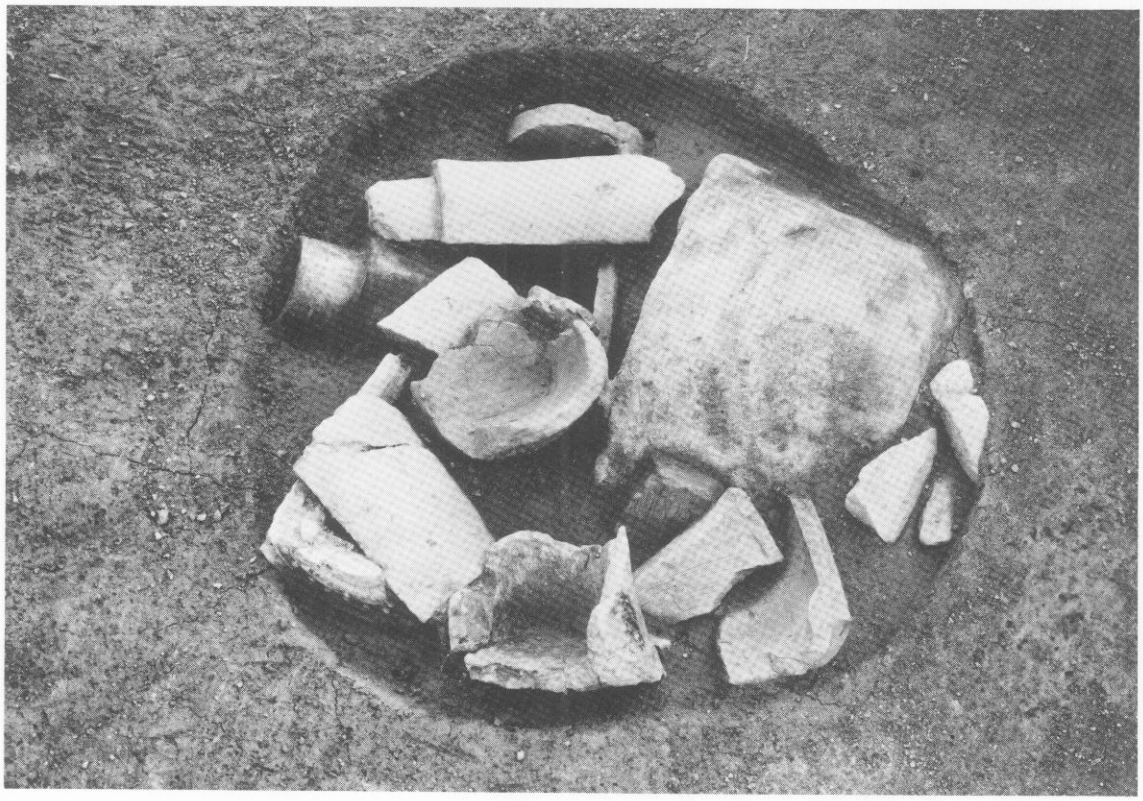
掘立柱建物ＳＢ2300(北から)



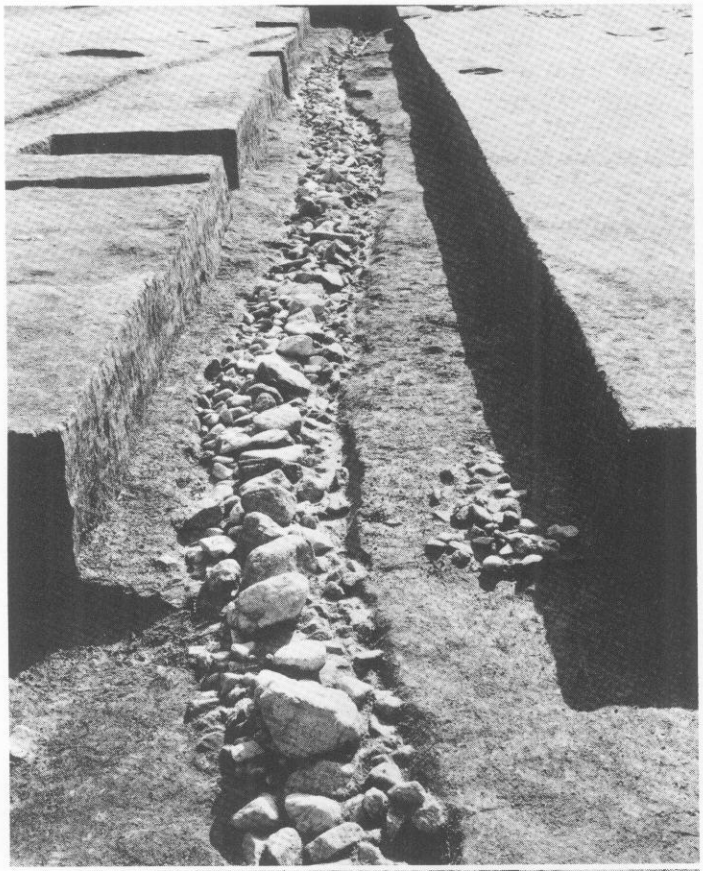
掘立柱建物ＳＢ2300柱掘形



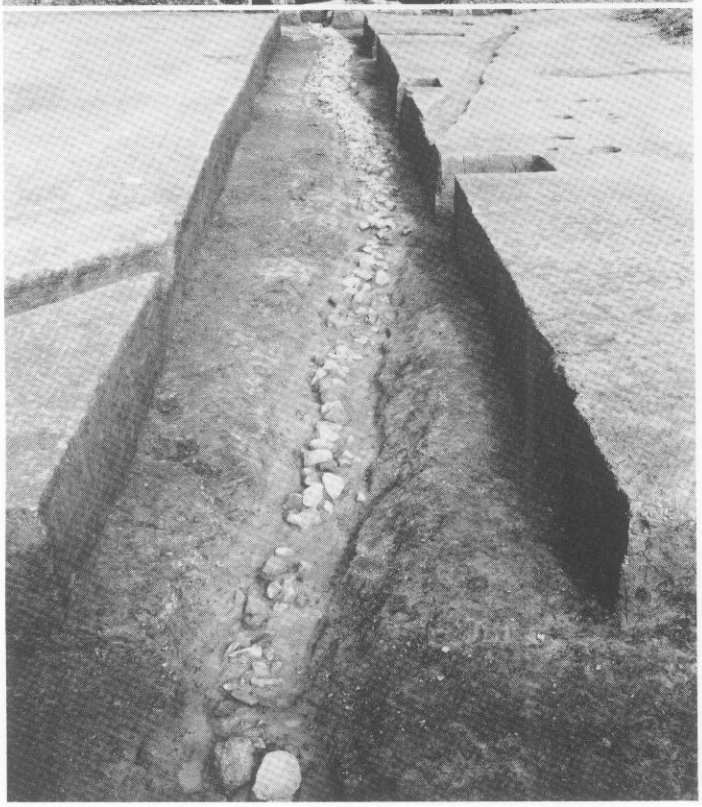
掘立柱建物ＳＢ2305(北から)



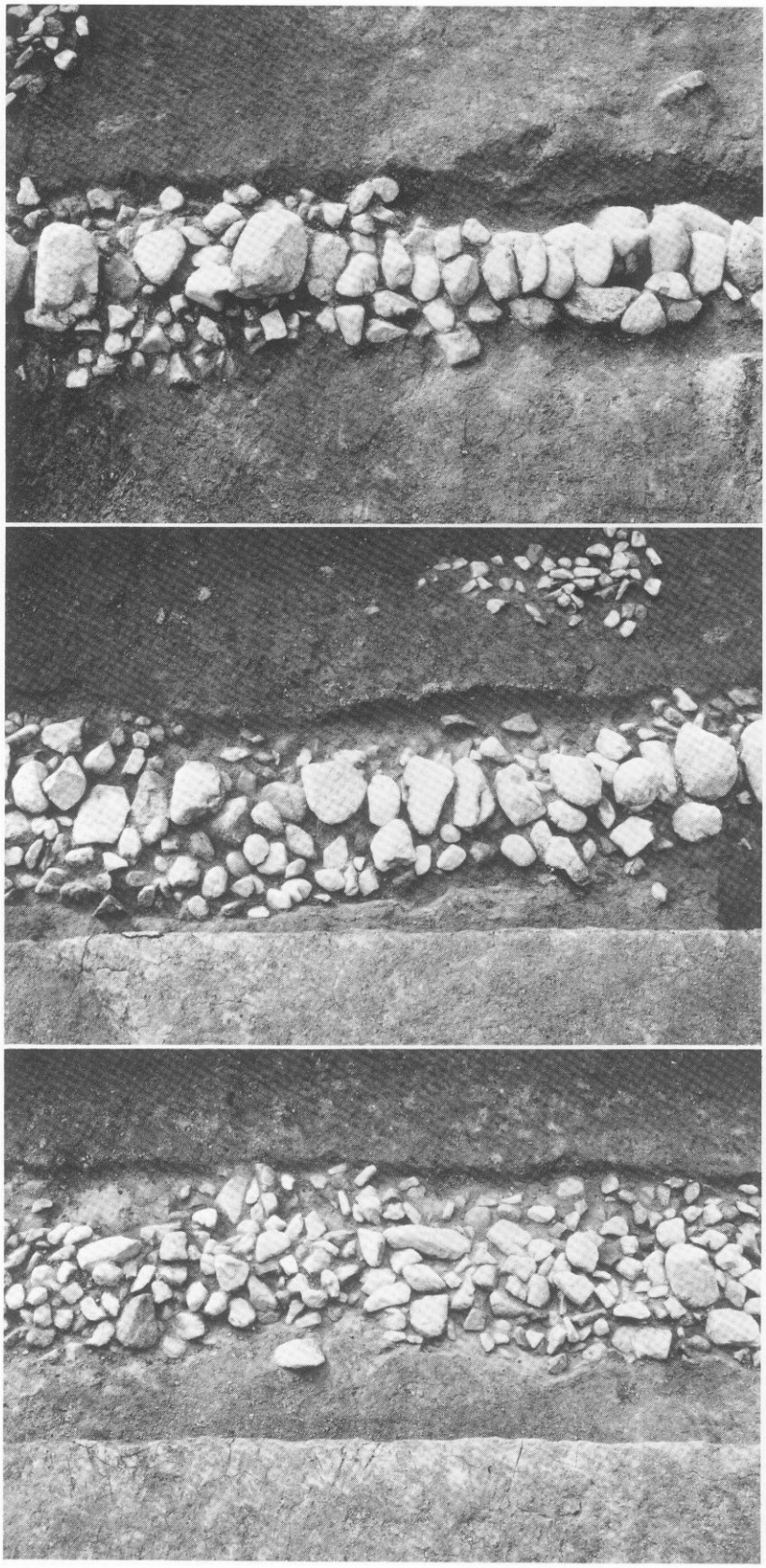
土壙ＳＫ2306(北から)



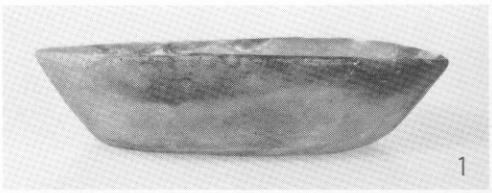
暗渠施設ＳＸ2320全景(北から)



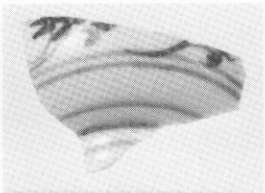
暗渠施設ＳＸ2320全景(南から)

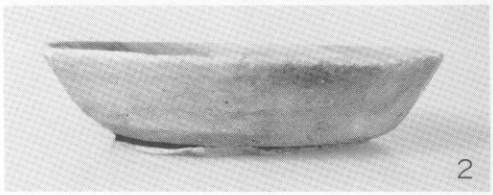


暗渠施設ＳＸ2320各部
（東から）

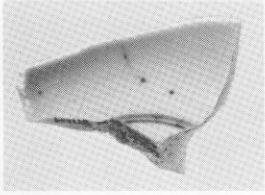

1


4




2

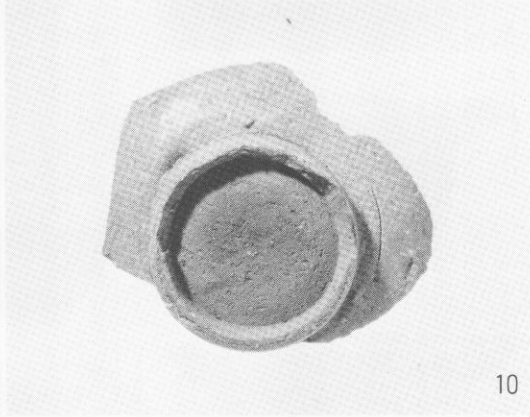

5



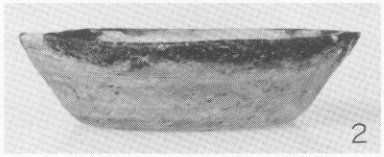

6



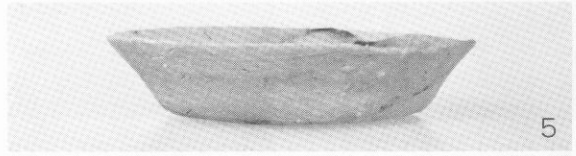

7


10

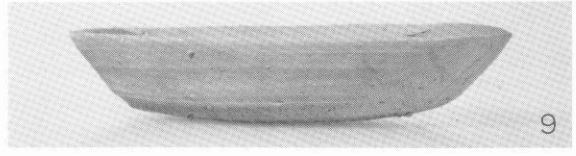

1


2


3

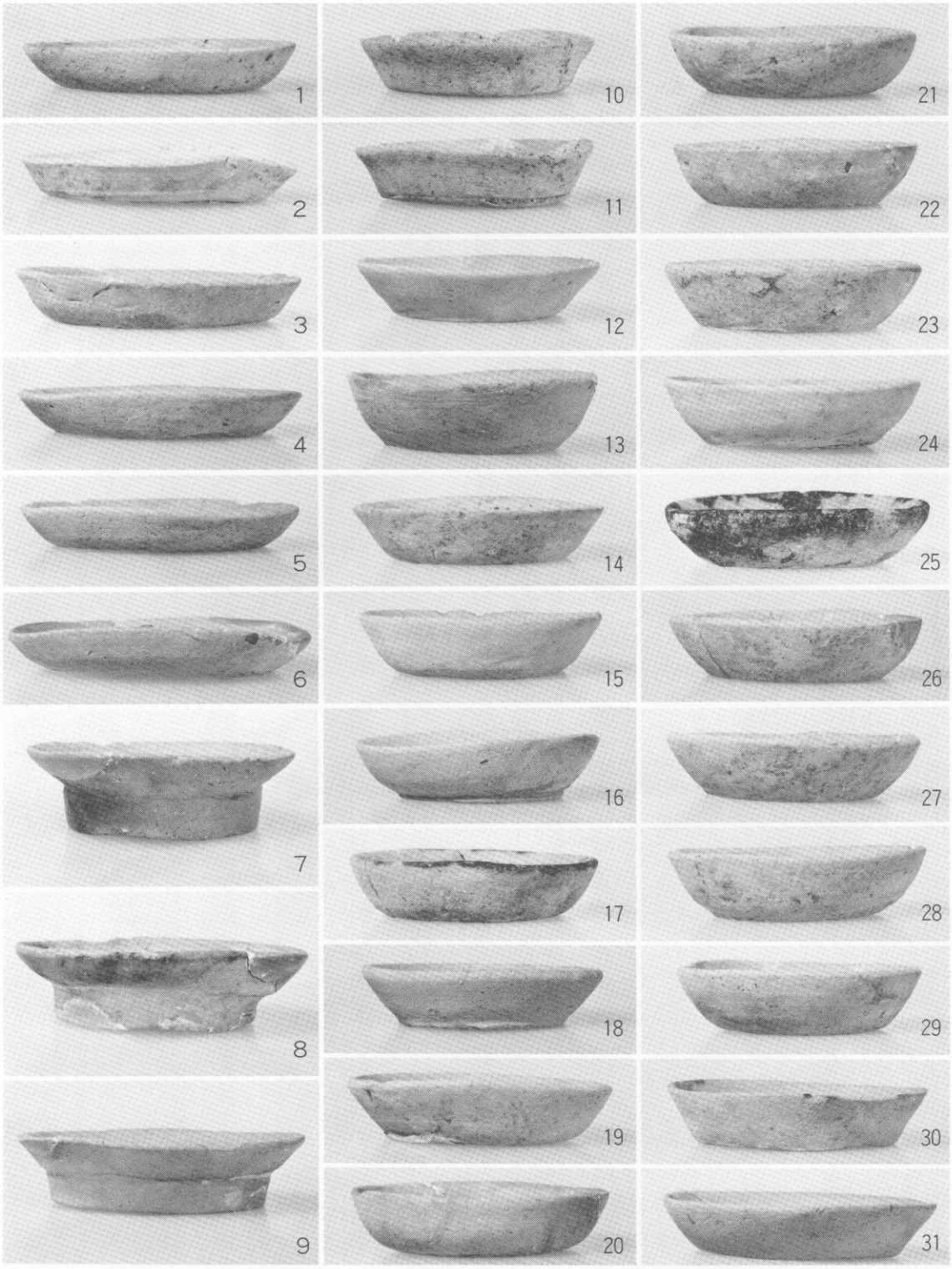

5


6

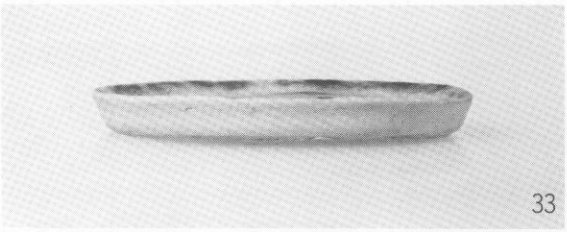

9

第78次調査　SD2115
SE2110出土土器・陶磁器

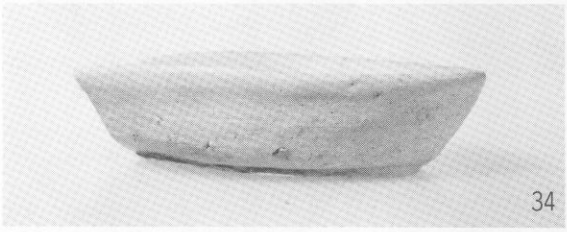
図版28



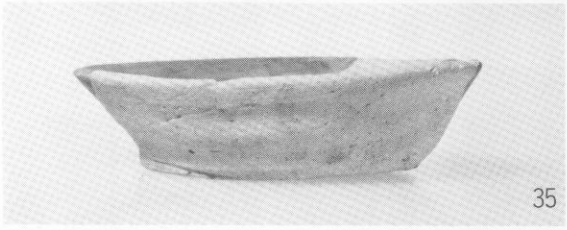
第78次調査　　SD2145出土土器

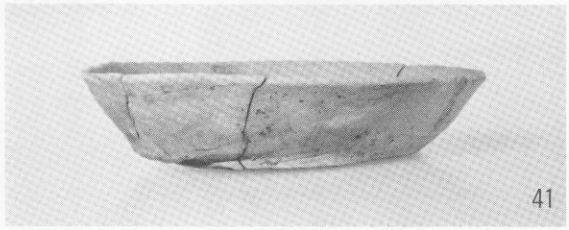

33

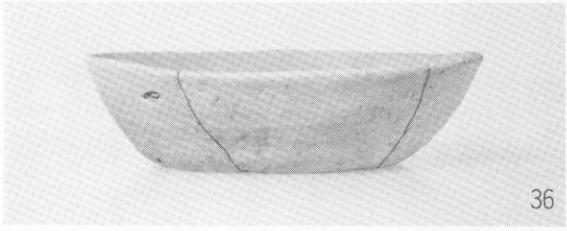

39

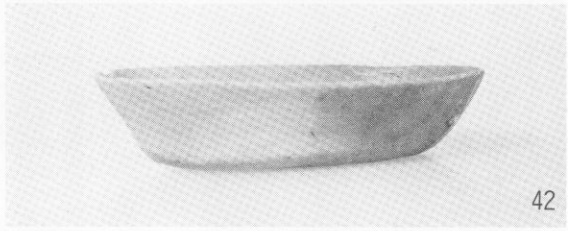

34

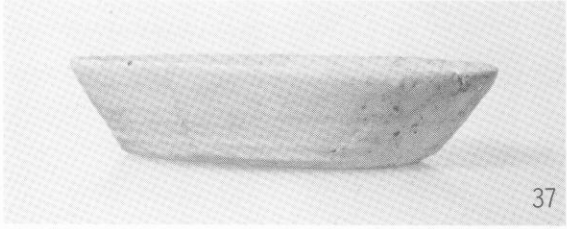

40

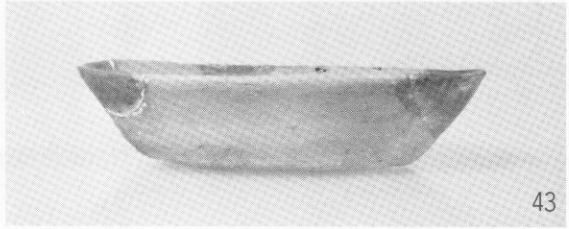

35


41

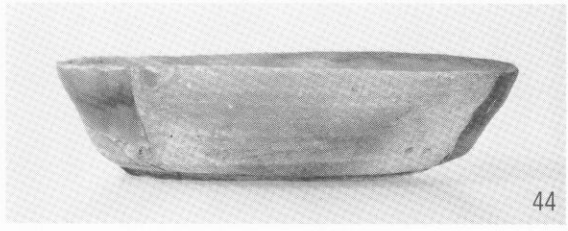

36


42


37

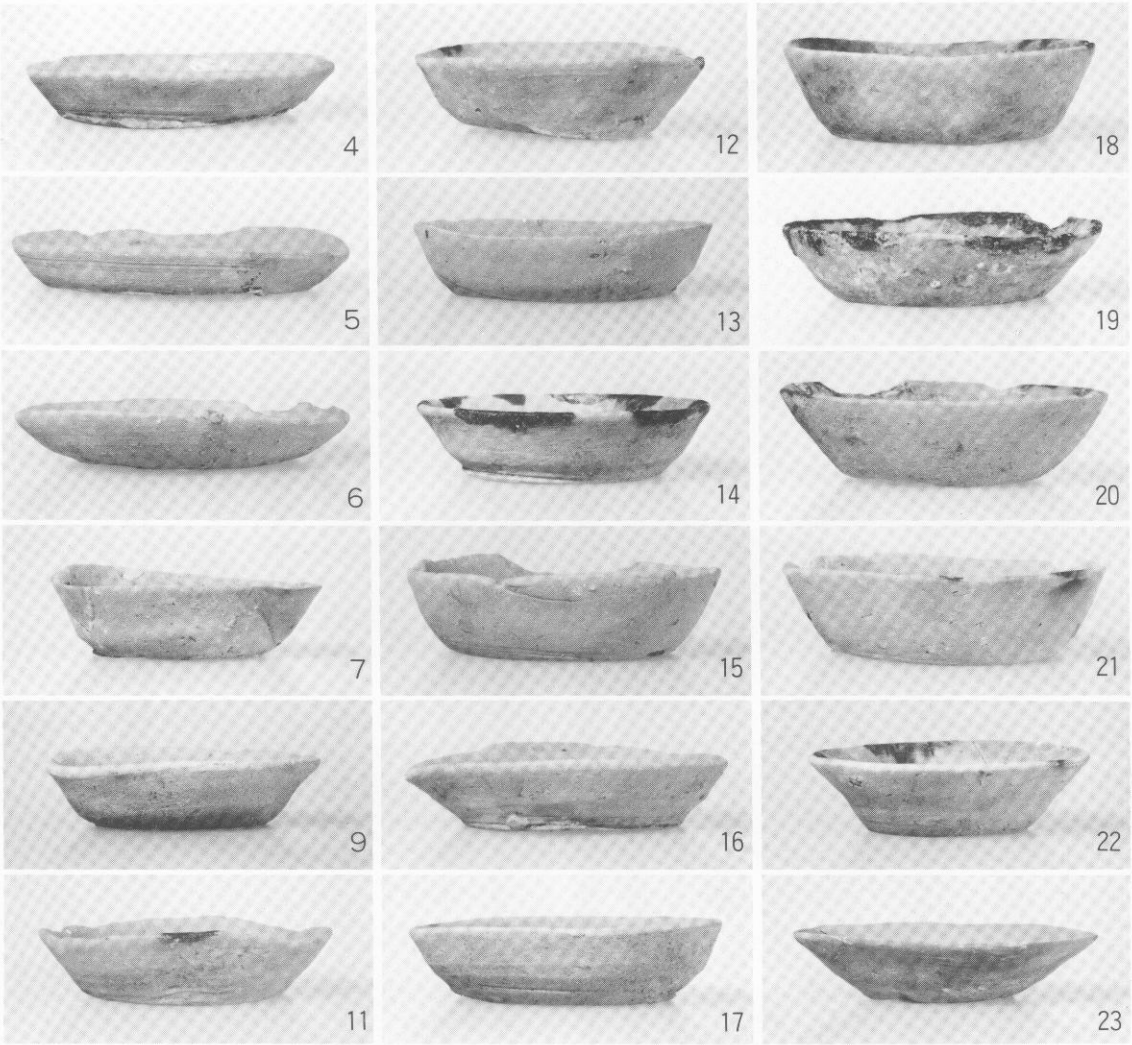

43


38

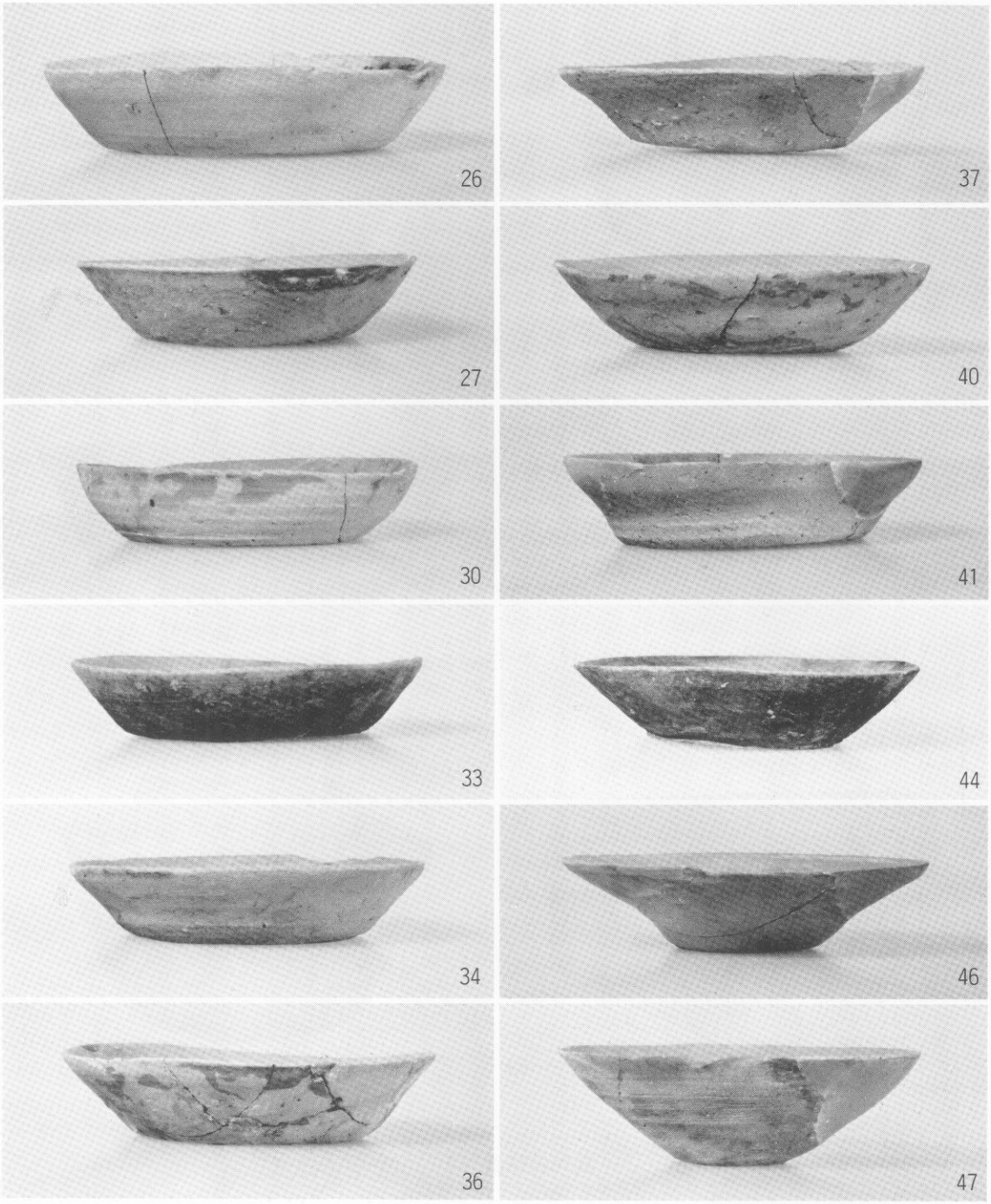

44

第78次調査　　SD2145出土土器

図版30



第78次調査　　SG2130(腐植土層)出土土器



第78次調査　　SG2130(腐植土層)出土土器


57


60


58

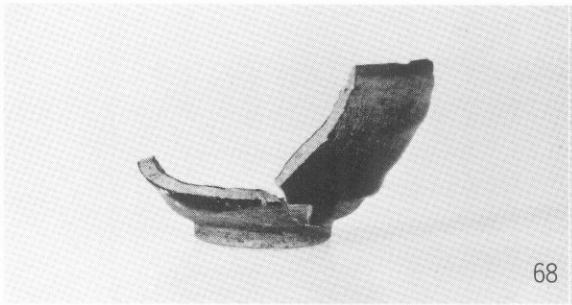

61


59

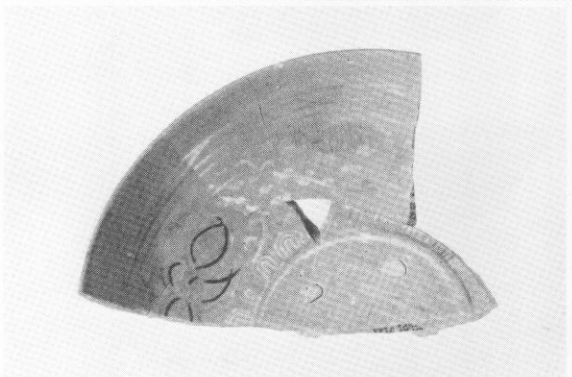

62


63

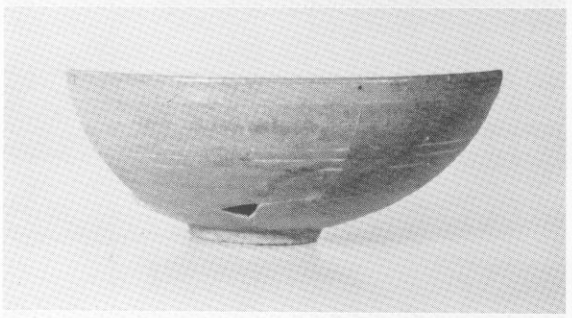
第78次調査　SG2130(腐植土層・黒灰色土層・黄茶色土層)出土土器


68


70

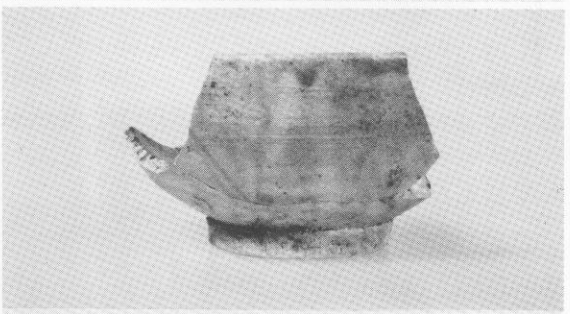


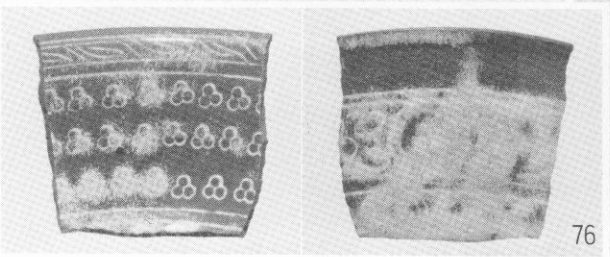





72

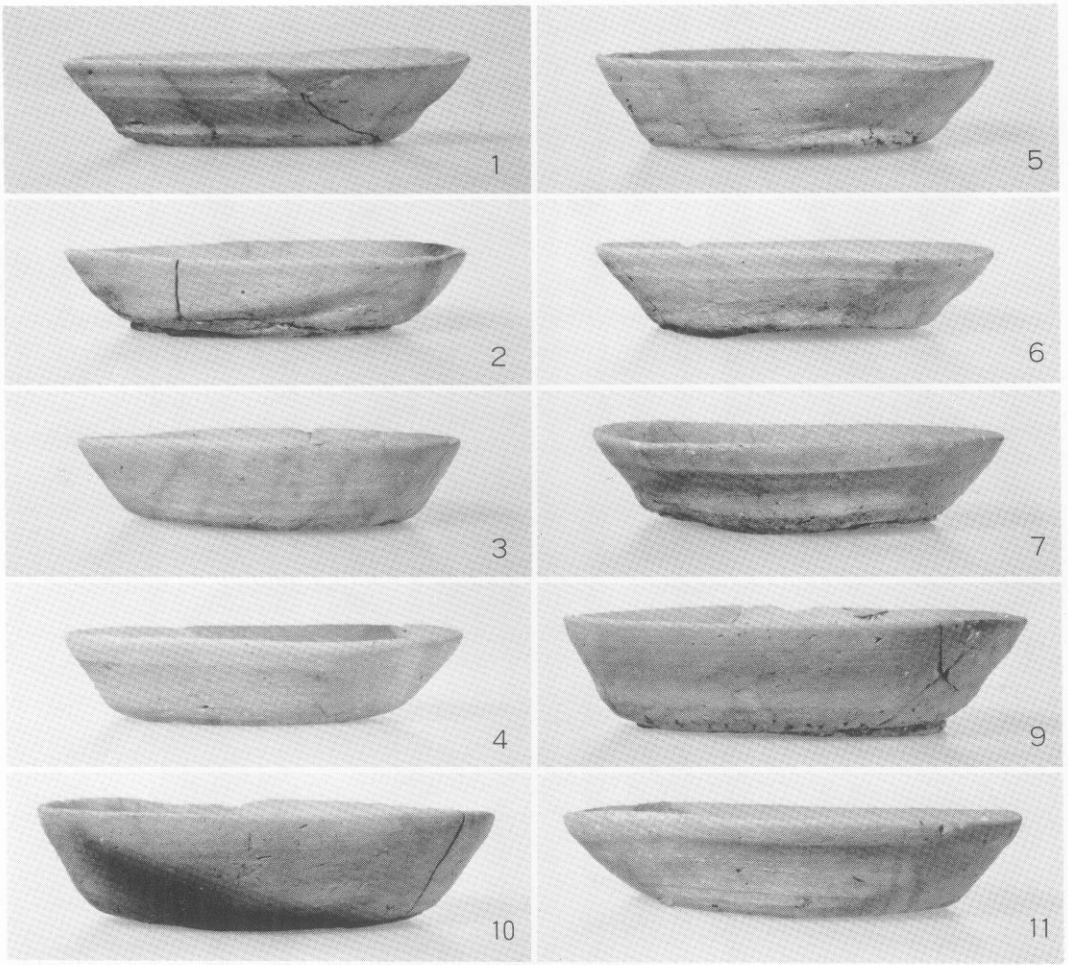

69

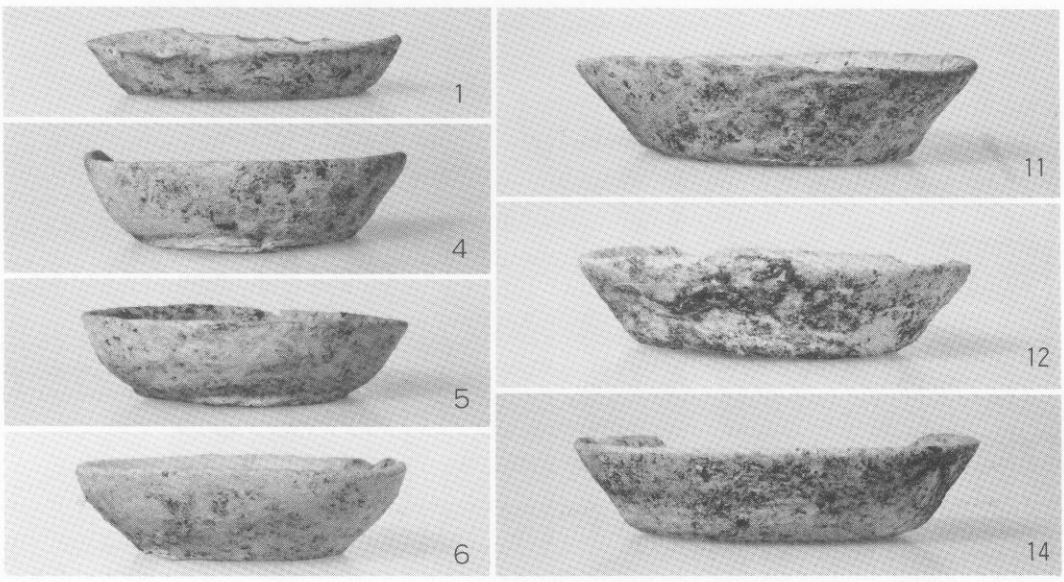



76

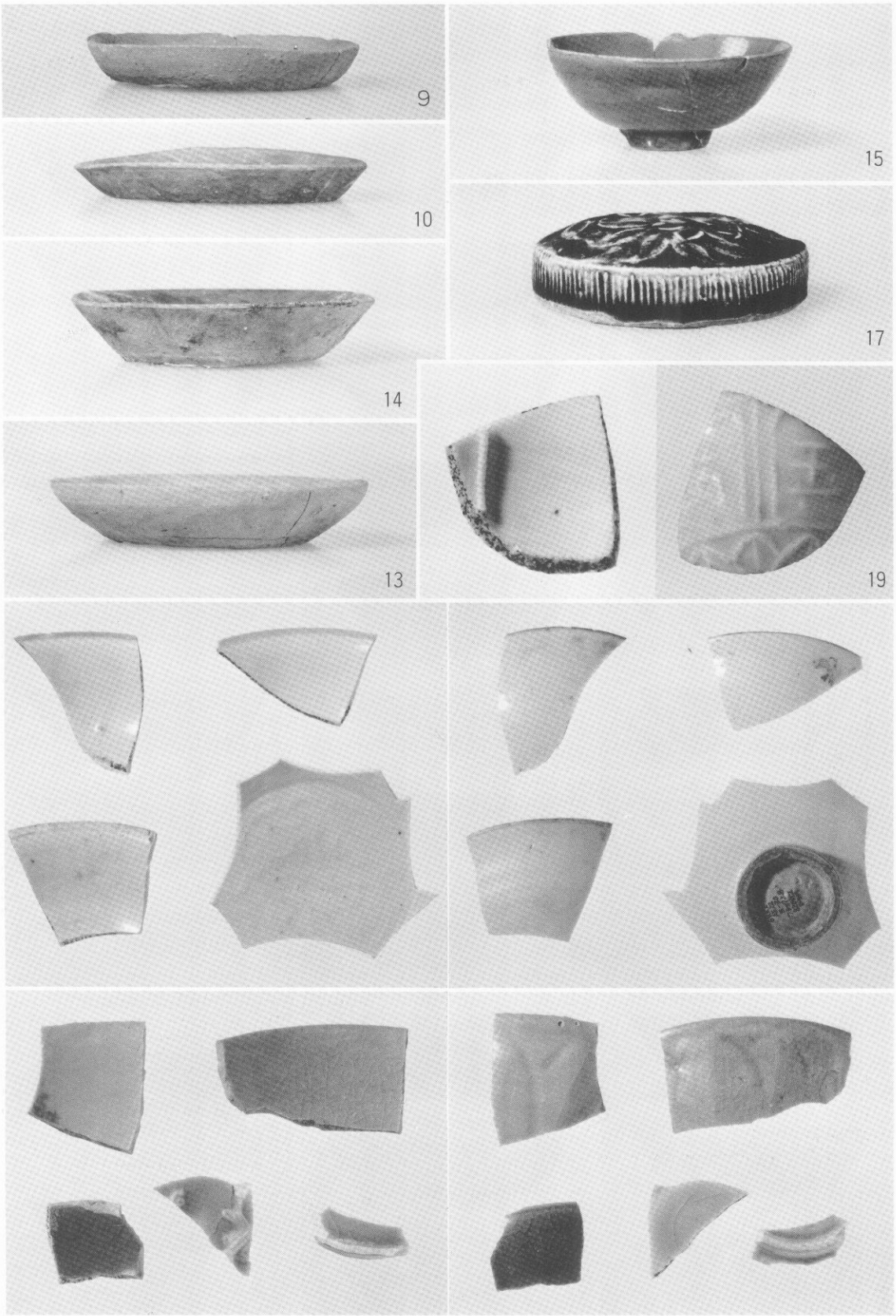

75

第78次調査　　SG2130(腐植土層)出土陶磁器



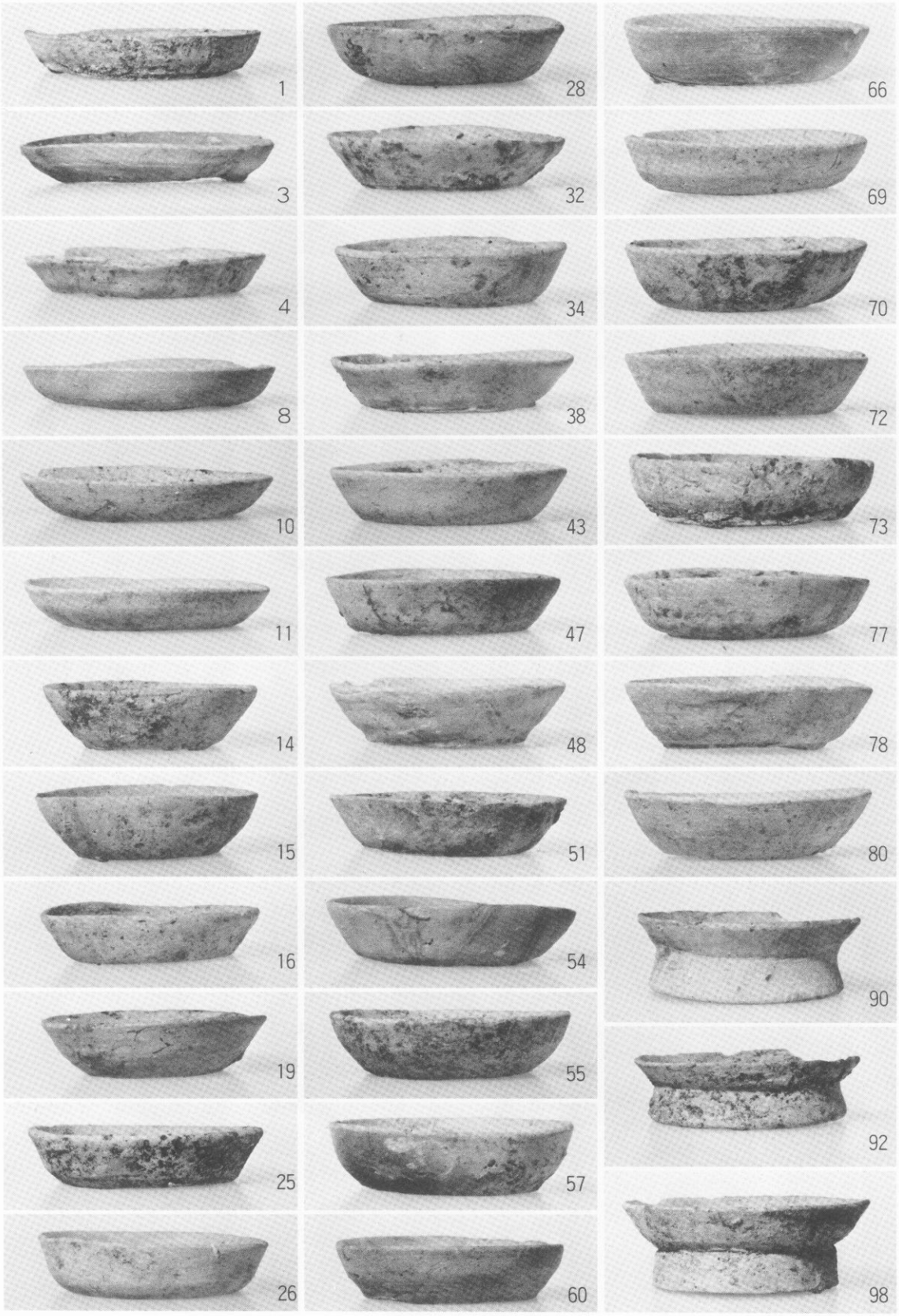


第78次調査　　SX2127・SX2139出土土器

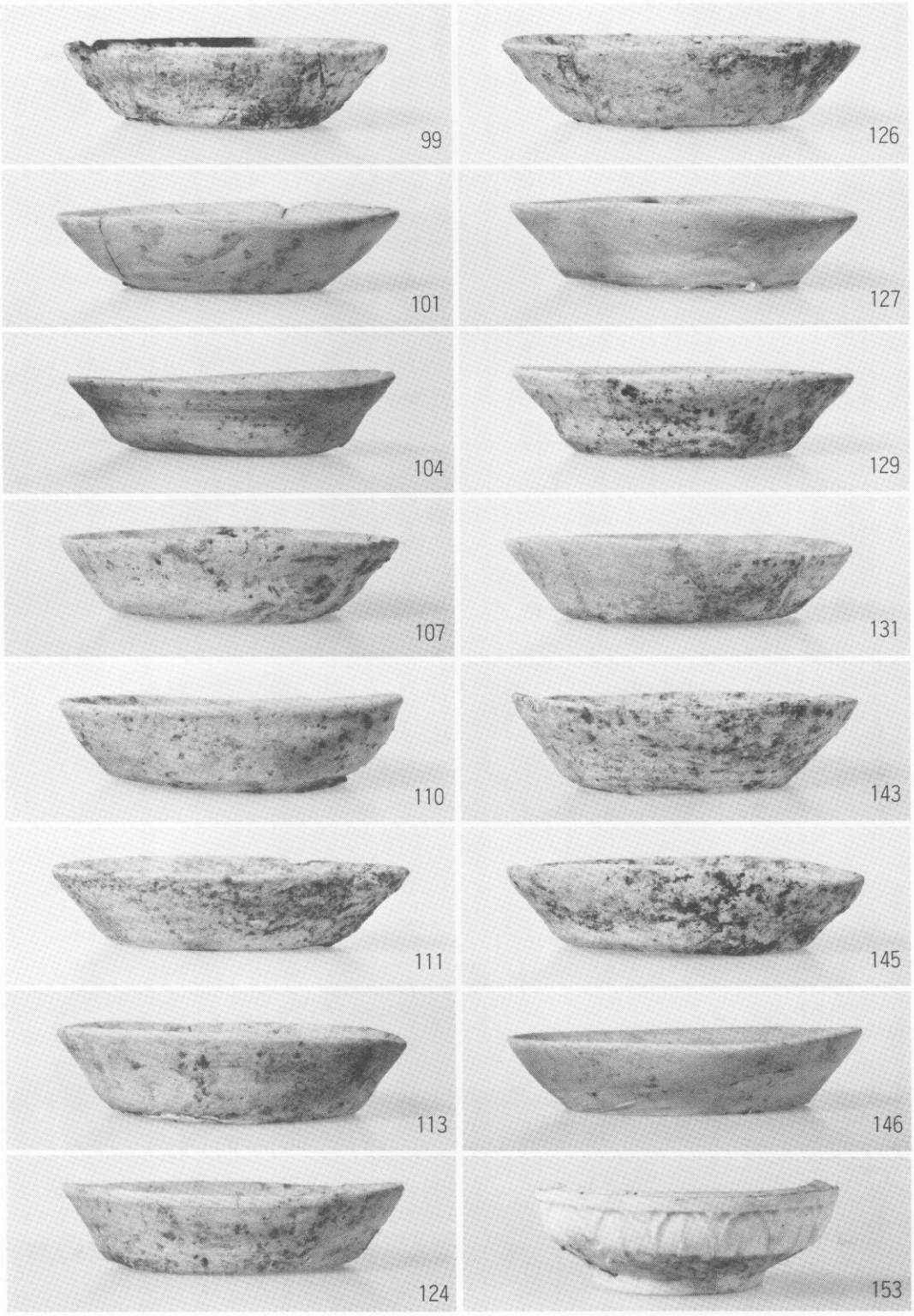


第78次調査　　下層腐植土層出土土器・陶磁器

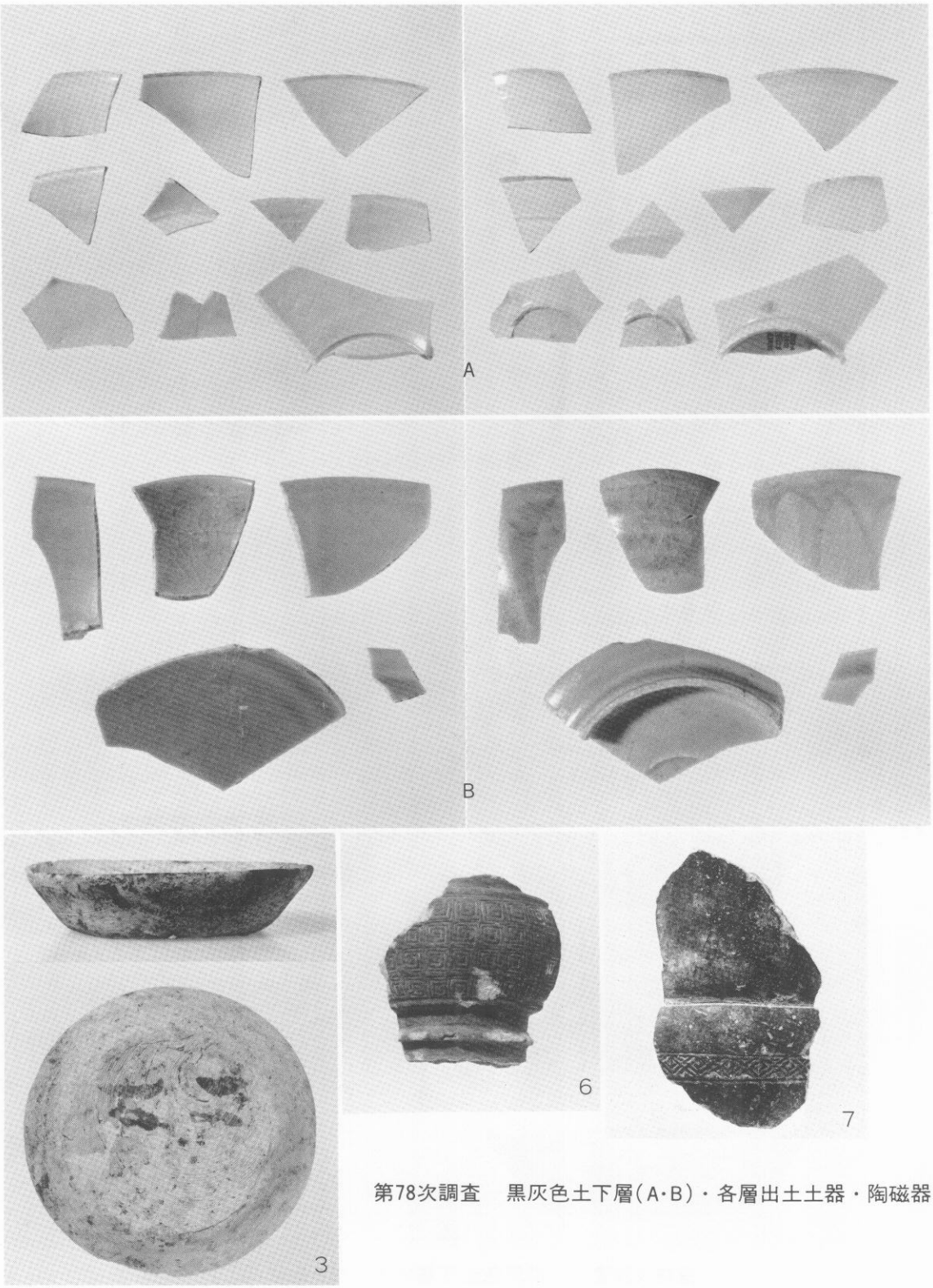
図版36



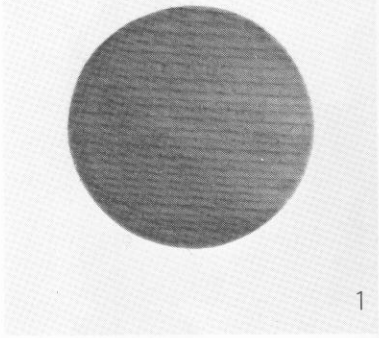
第78次調査　　黒灰色土下層出土土器

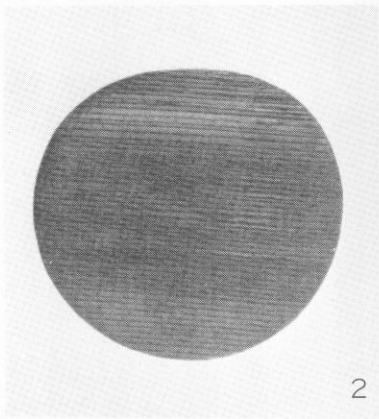


第78次調査　　黒灰色土下層出土土器・陶磁器

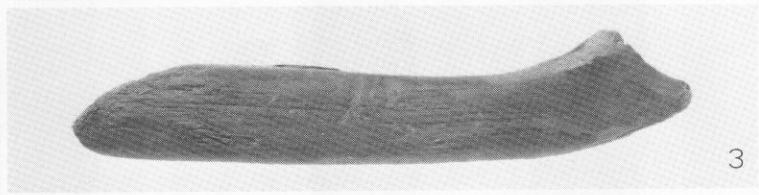


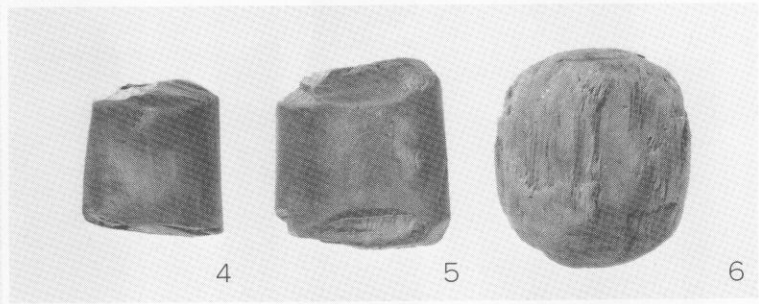
第78次調査　黒灰色土下層(A･B)・各層出土土器・陶磁器

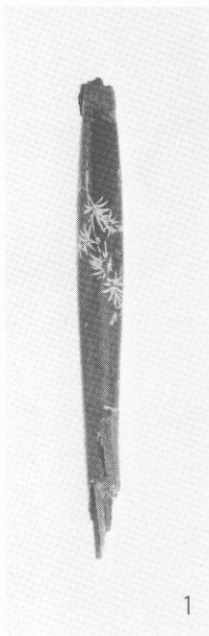

1

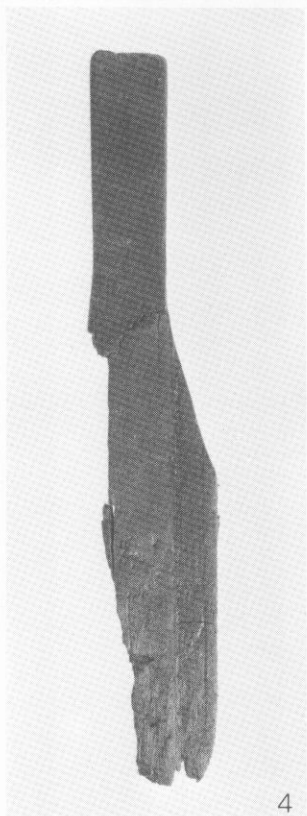

2



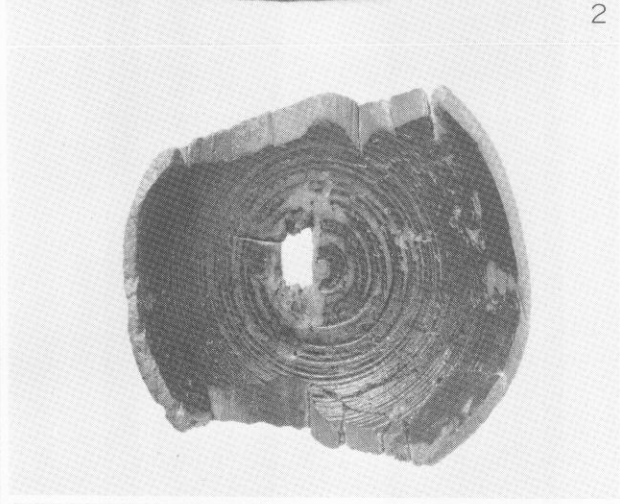

3


4 5 6


1

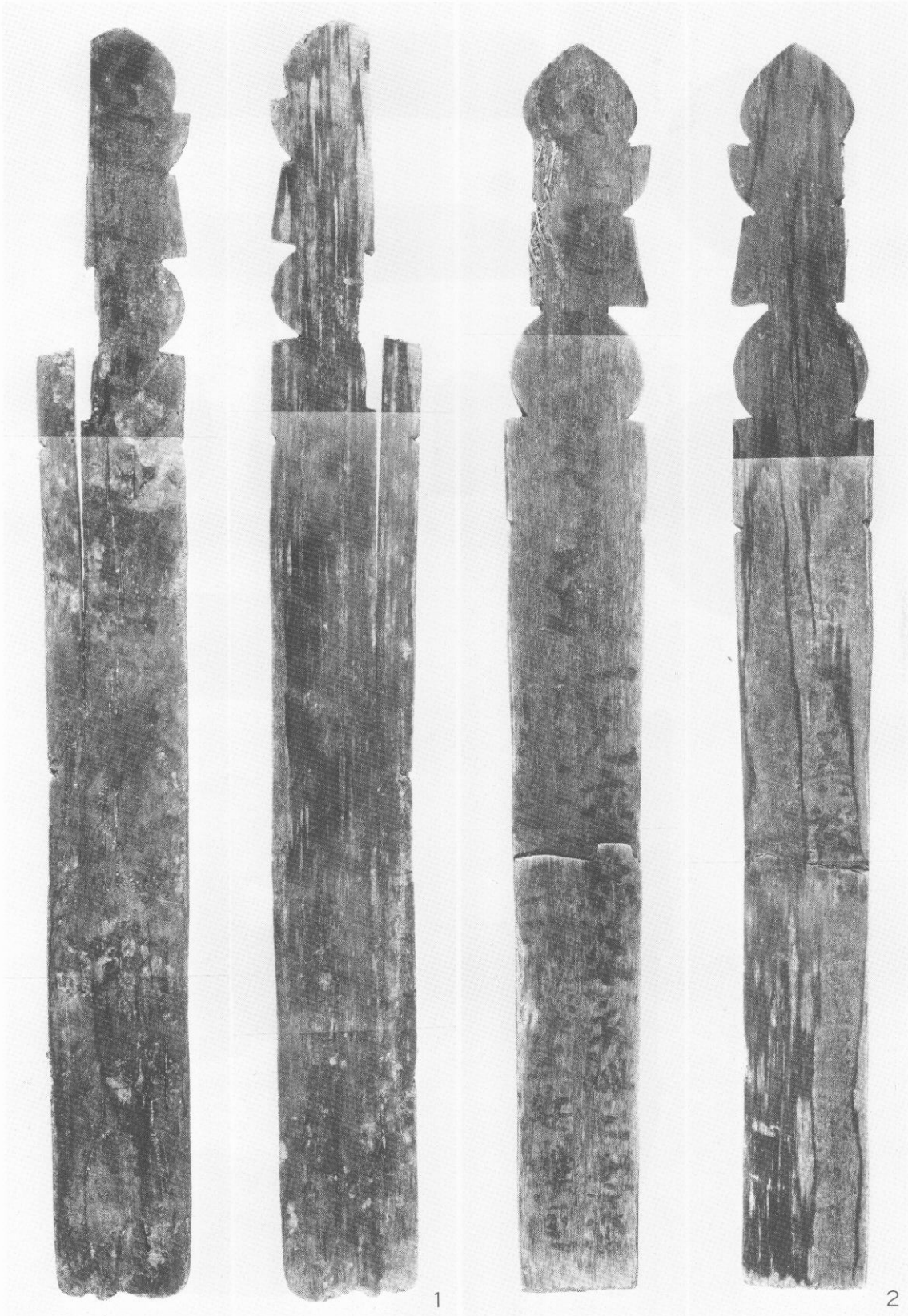

4


2

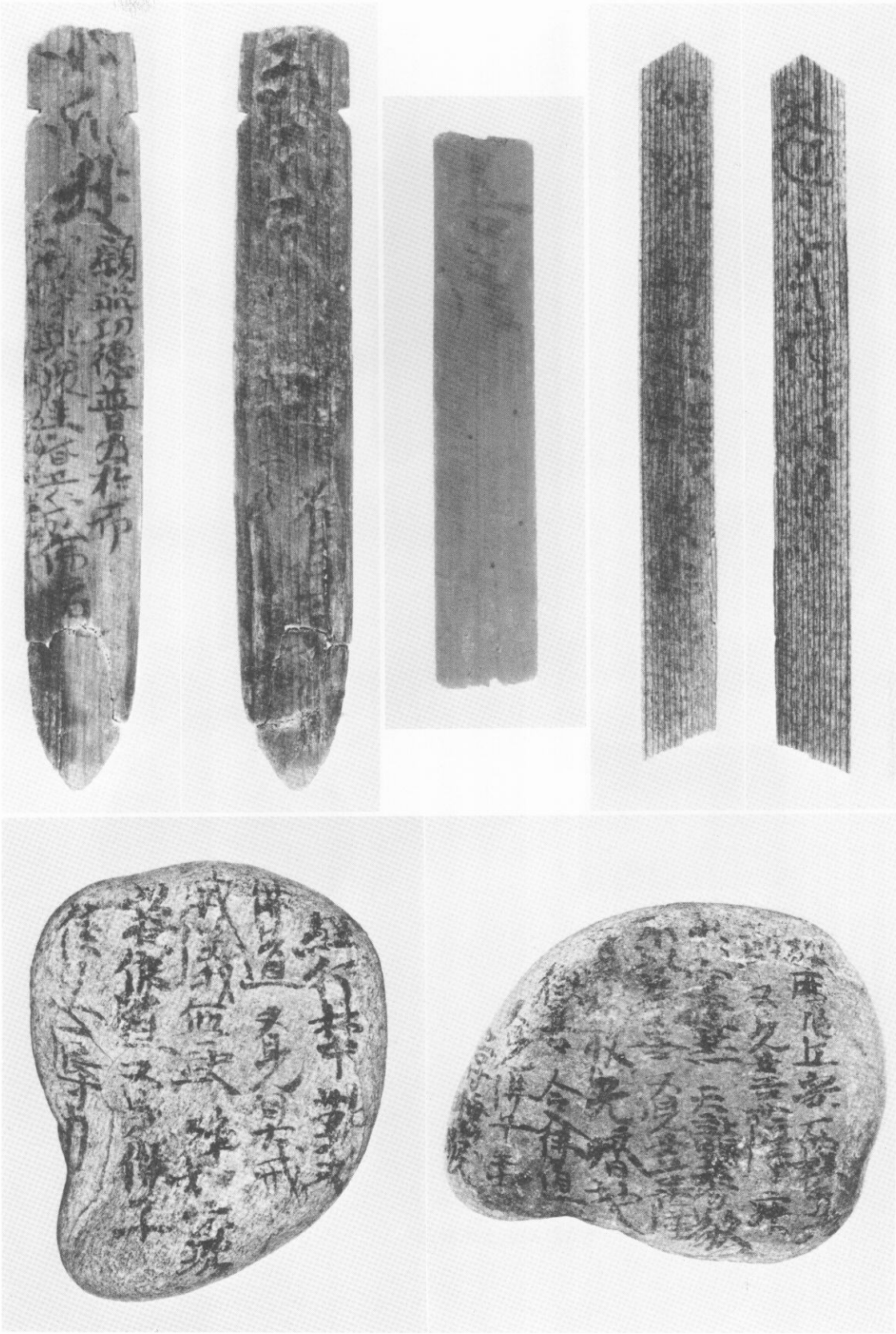



4

第78次調査　　SD2104・SD2115・SE2110出土木製品

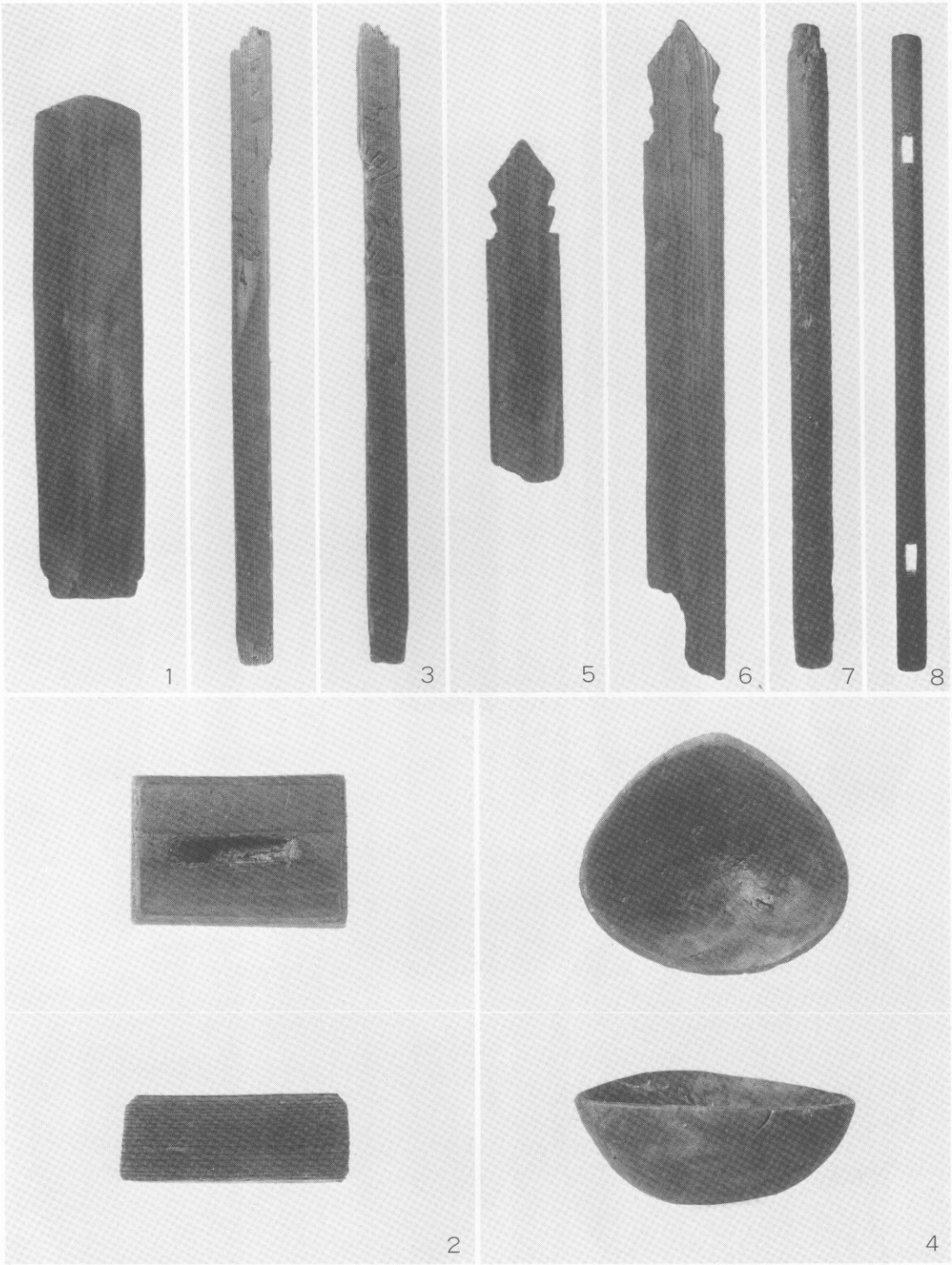


第78次調査　　SG2130出土卒塔婆

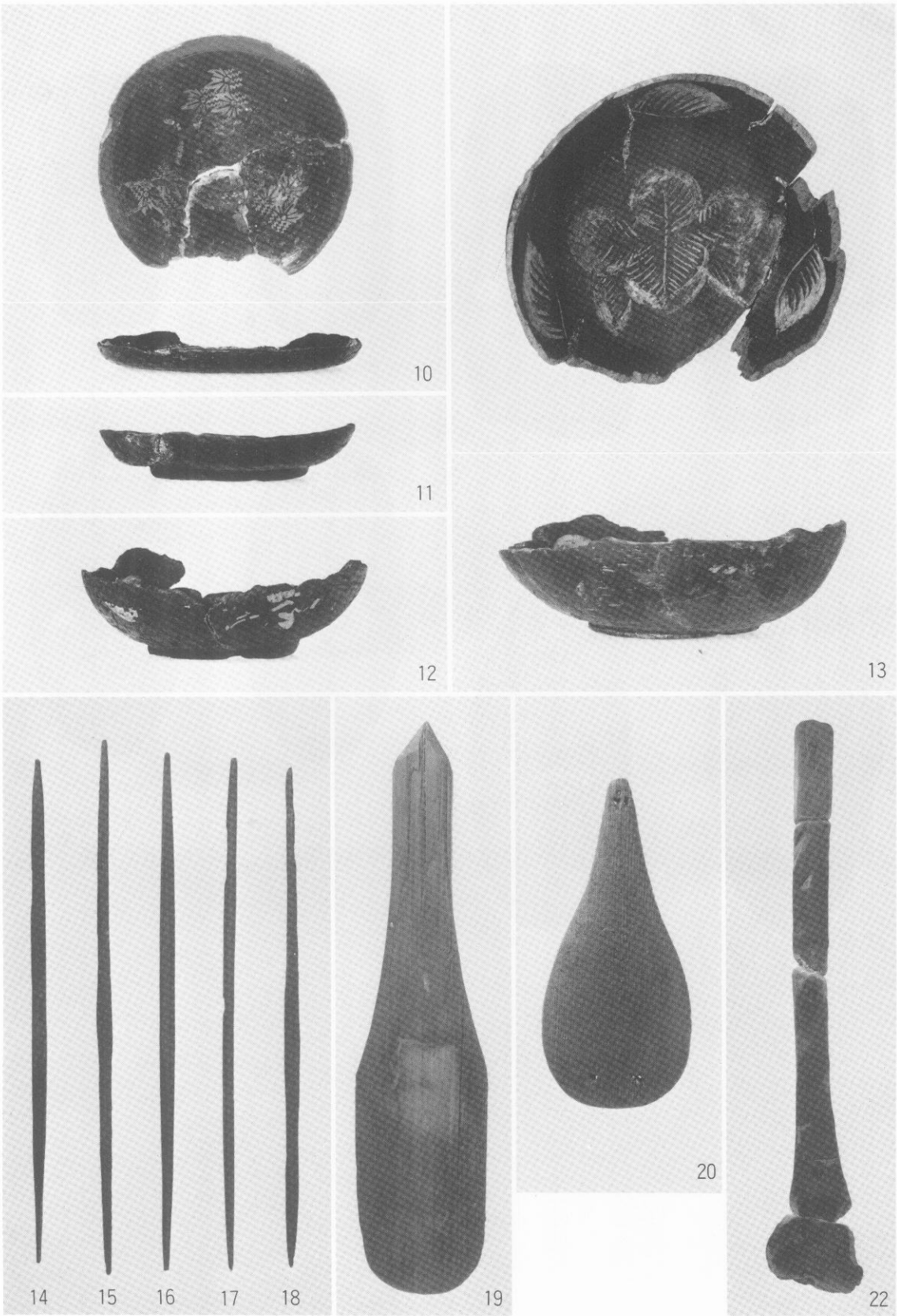


第78次調査　　SB2130出土墨書木札・墨書経石

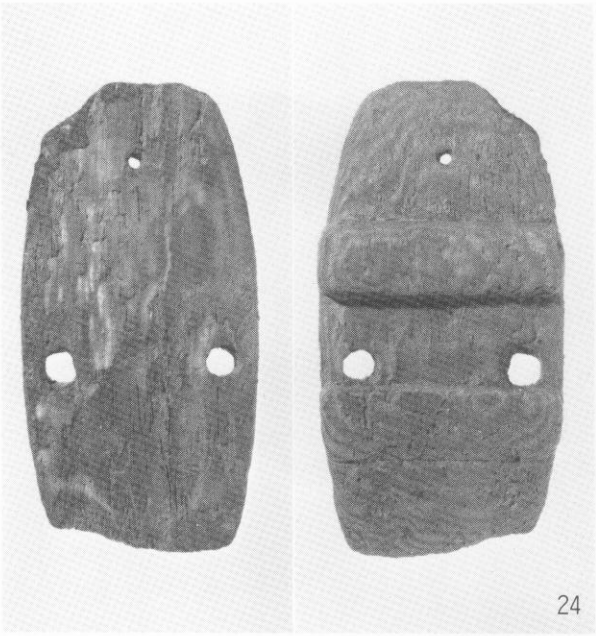
図版42



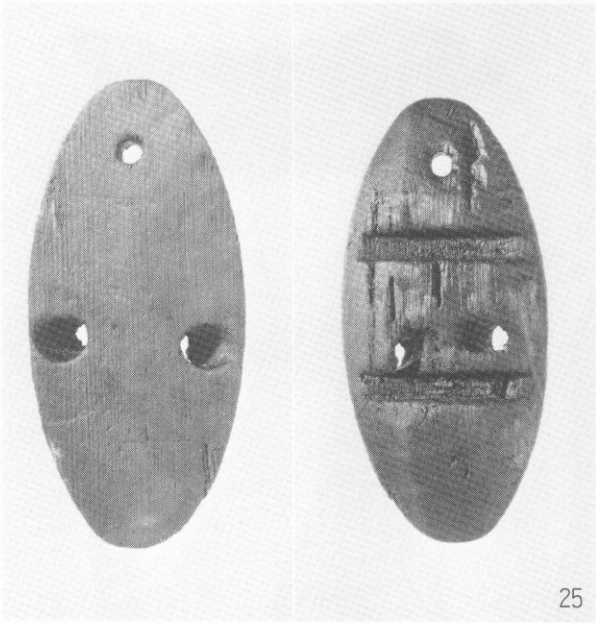
第78次調査　　SG2130出土木製品



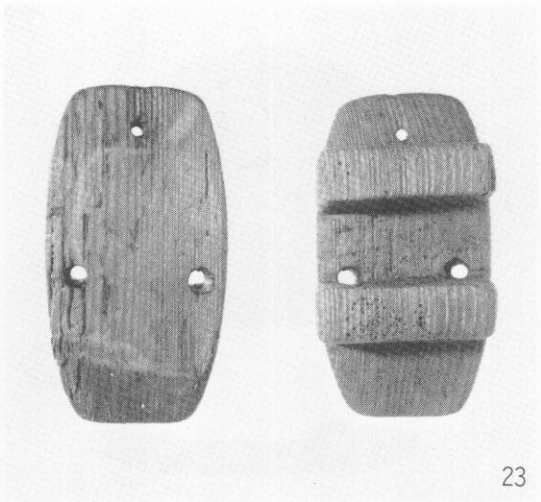
第78次調査　　ＳＧ2130出土木製品



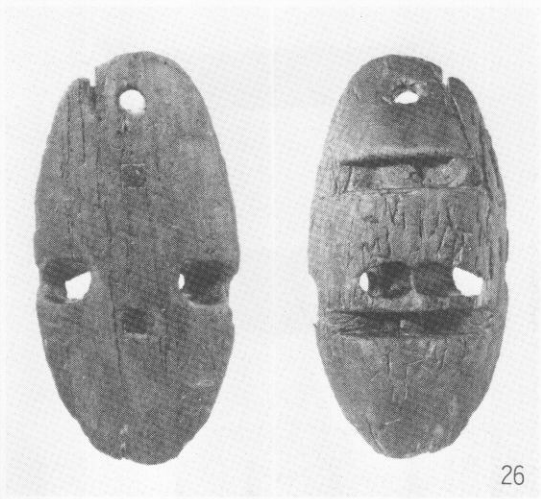
24



25

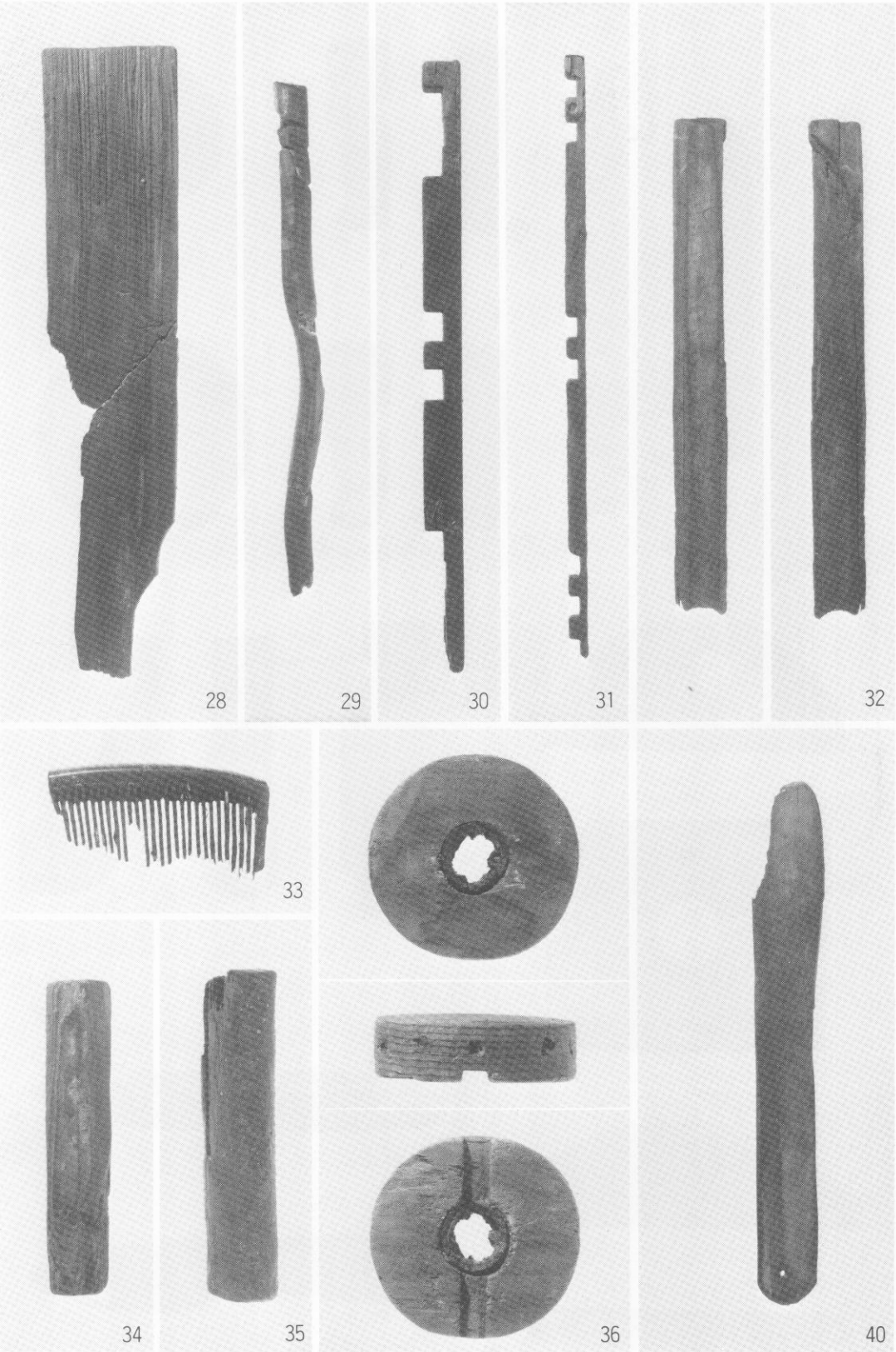


23



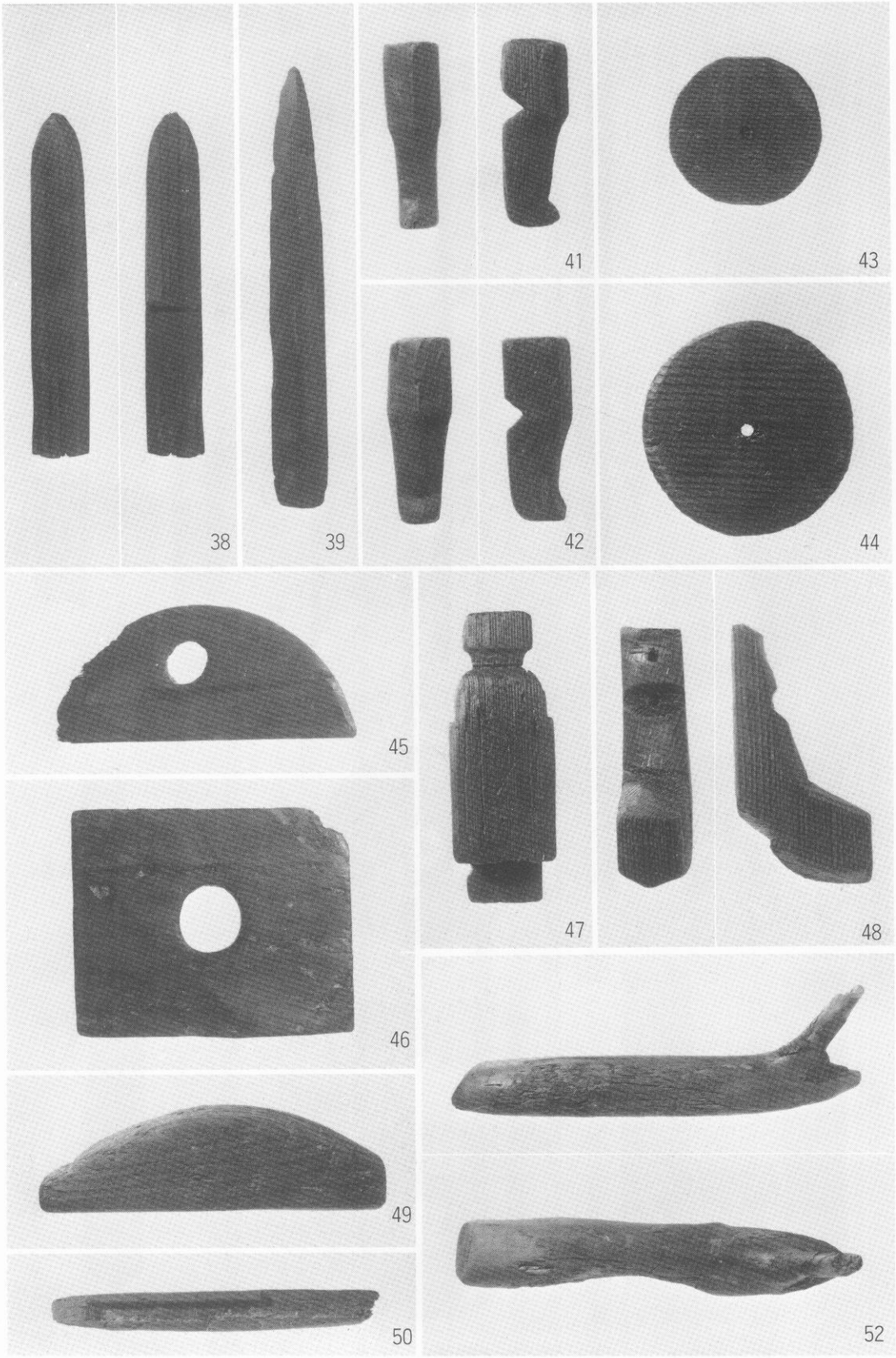
26

第78次調査　　SG2130出土下駄

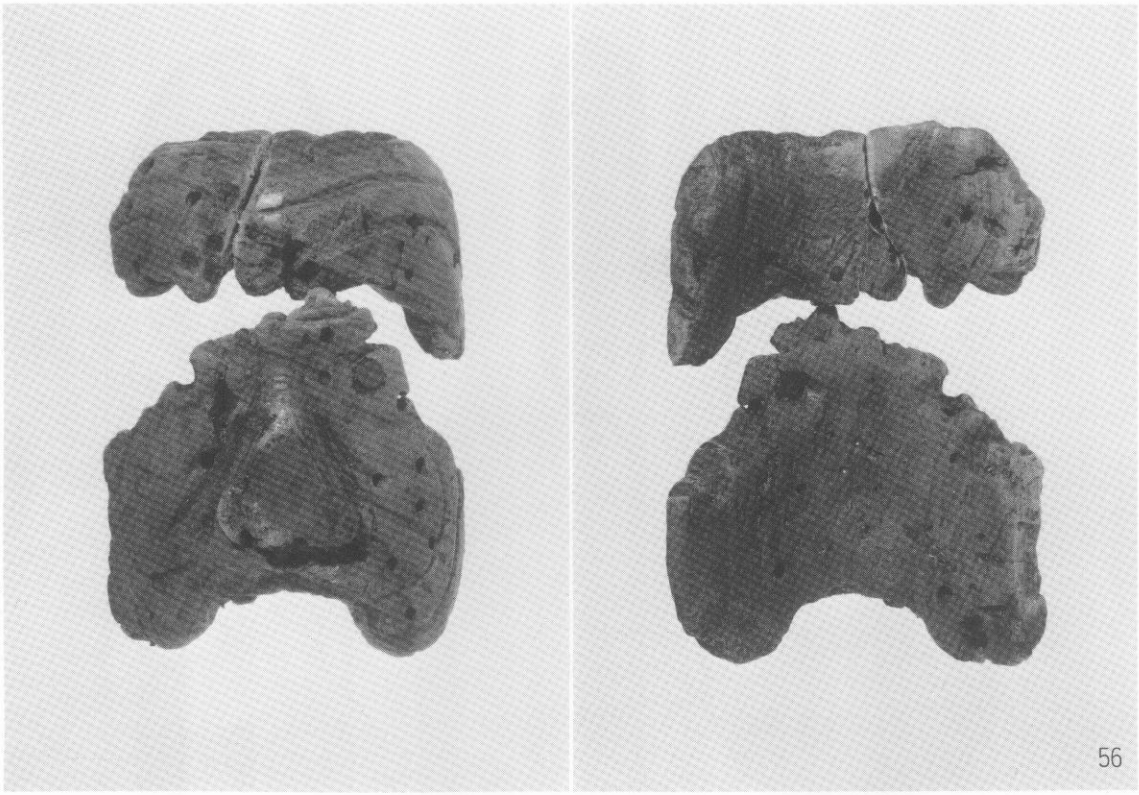


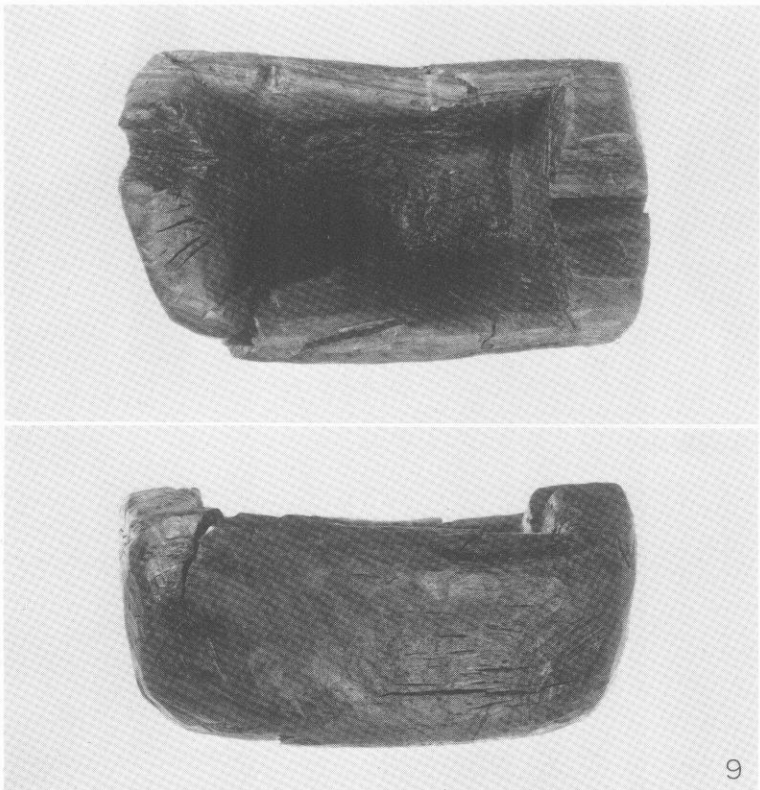
第78次調査　　SG2130出土木製品

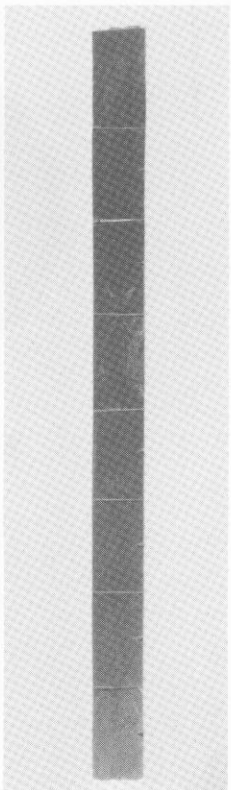
図版46



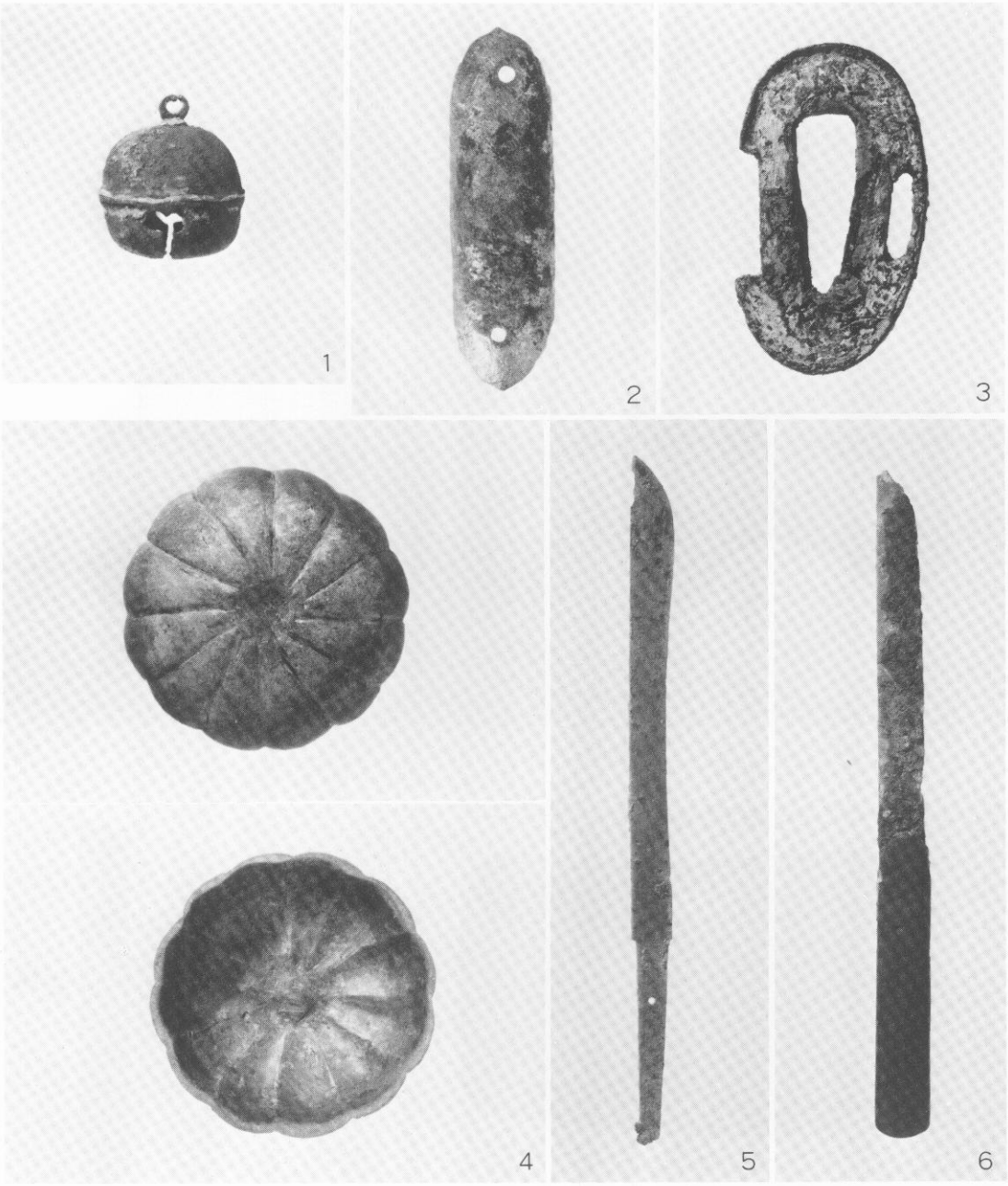
第78次調査　　SG2130出土木製品







第78次調査　　SG2130出土木製品(面・香具・尺)



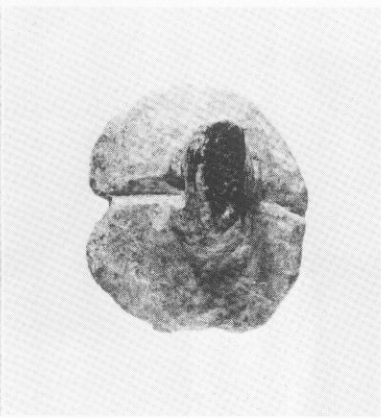
第78次調査　　金属製品


1


2


3






5

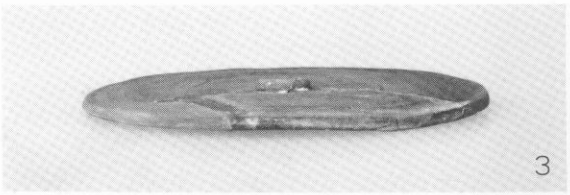


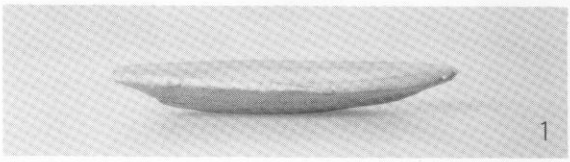

6

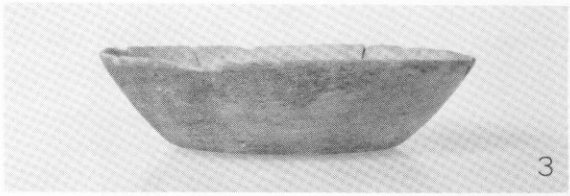

7

第78次調査　土製品・石製品

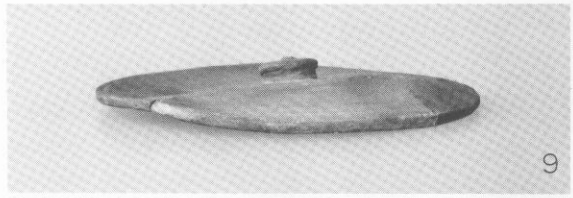
図版50

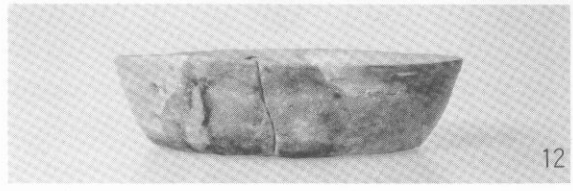

3

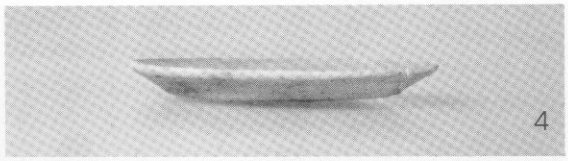

1

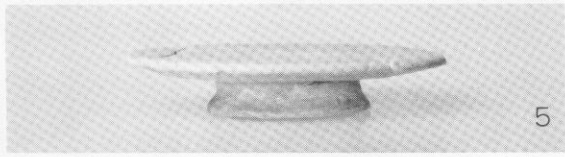

3


4

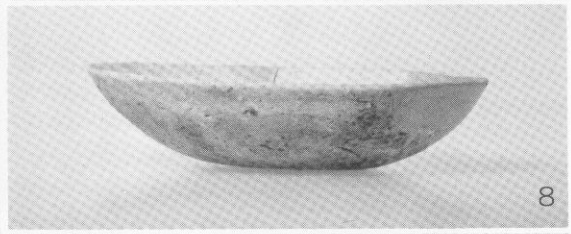

9

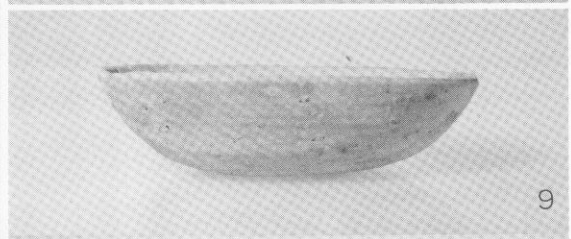

12

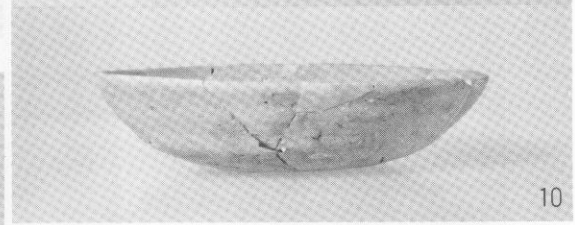

4


5

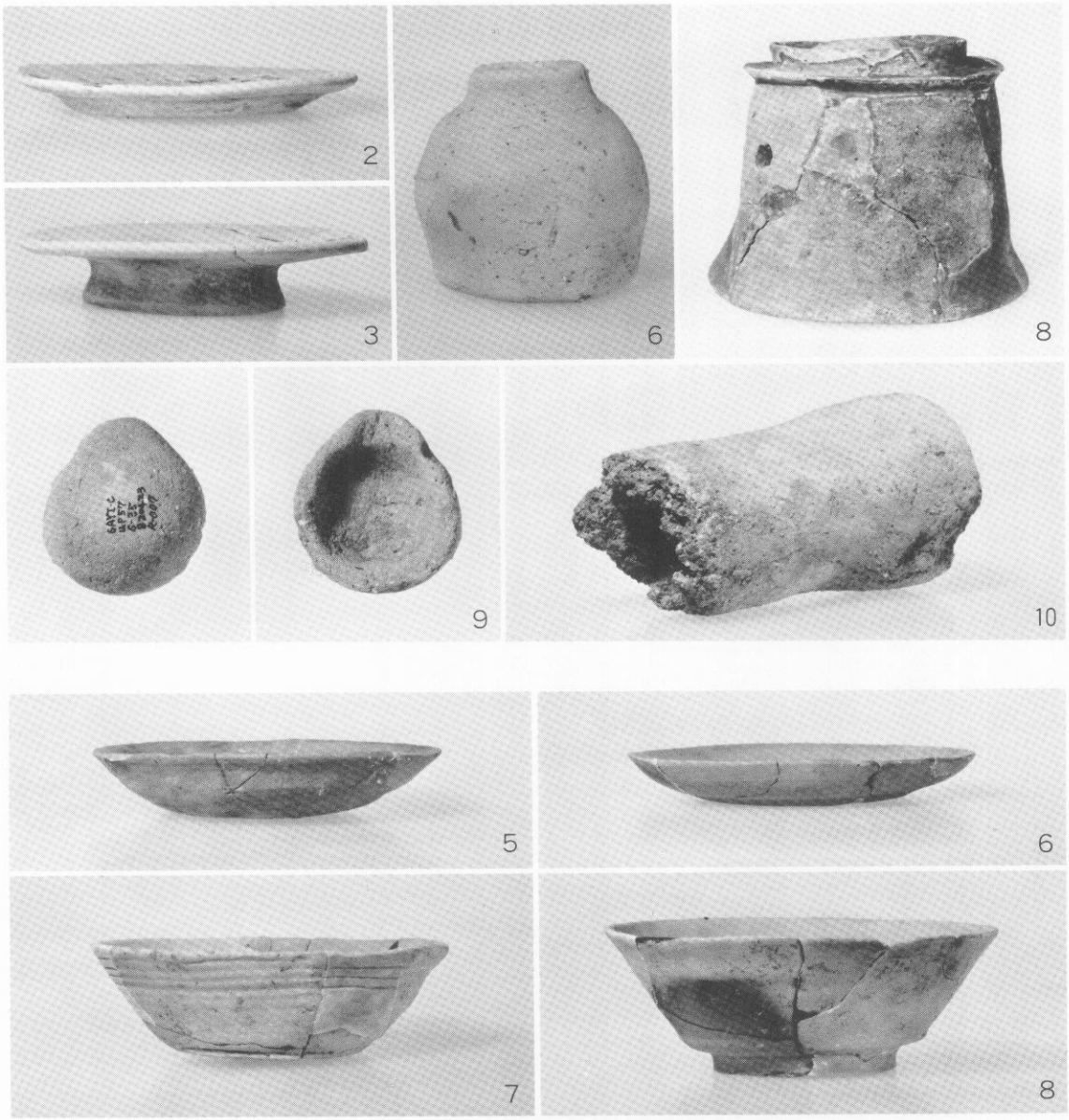

7


8

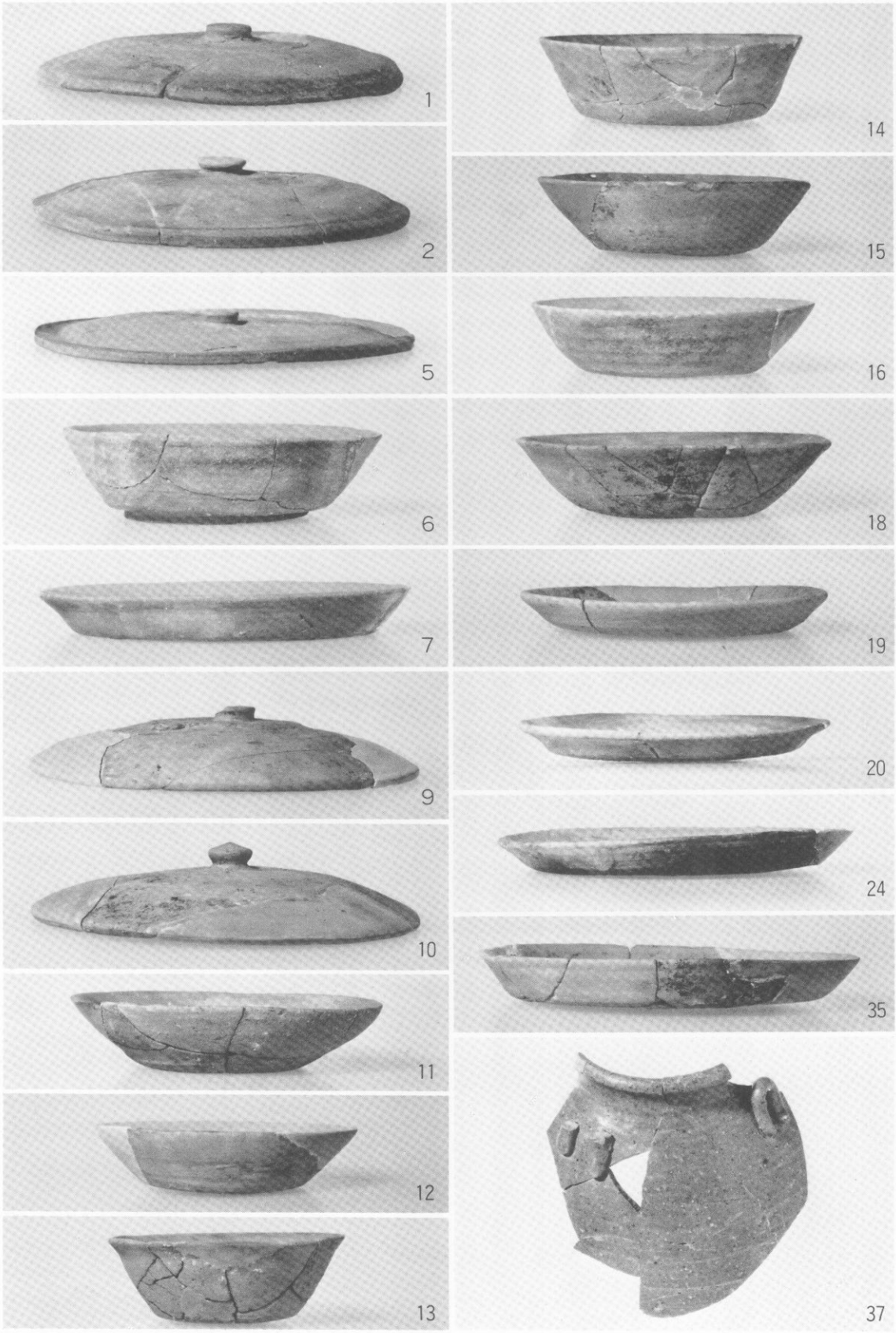

9


10

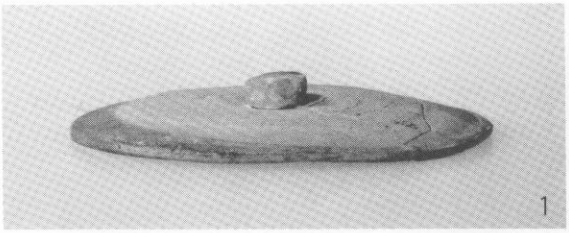
第80次調査　　ＳＢ2240
ＳＥ2250・ＳＥ2265・ＳＫ2252
ＳＫ2279出土土器

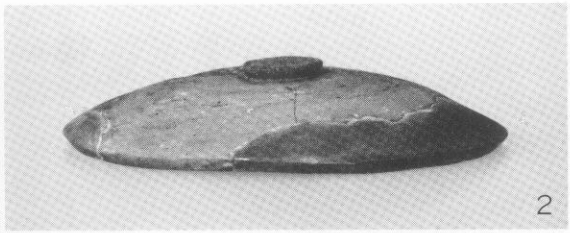


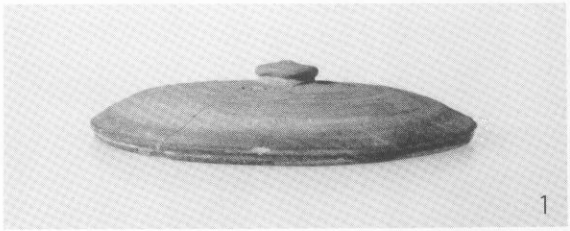
第80次調査　　SK2203・SK2274出土土器・土製品



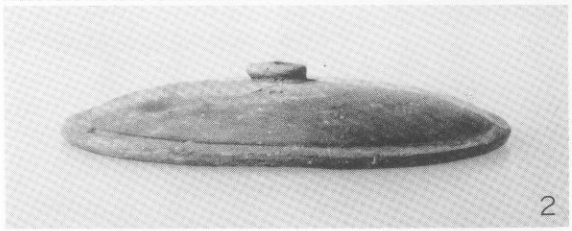
第80次調査　　ＳＸ2275出土土器・陶磁器



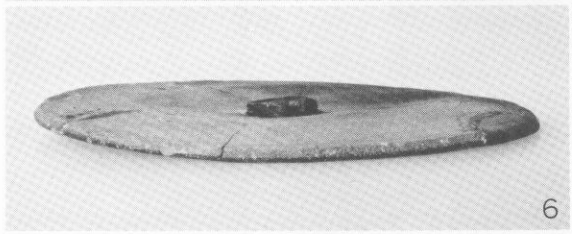




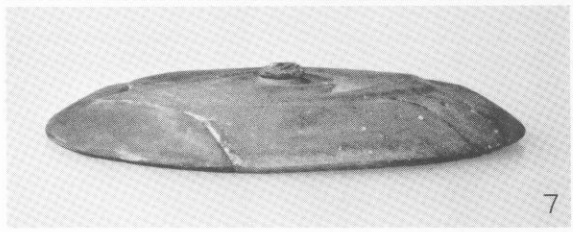






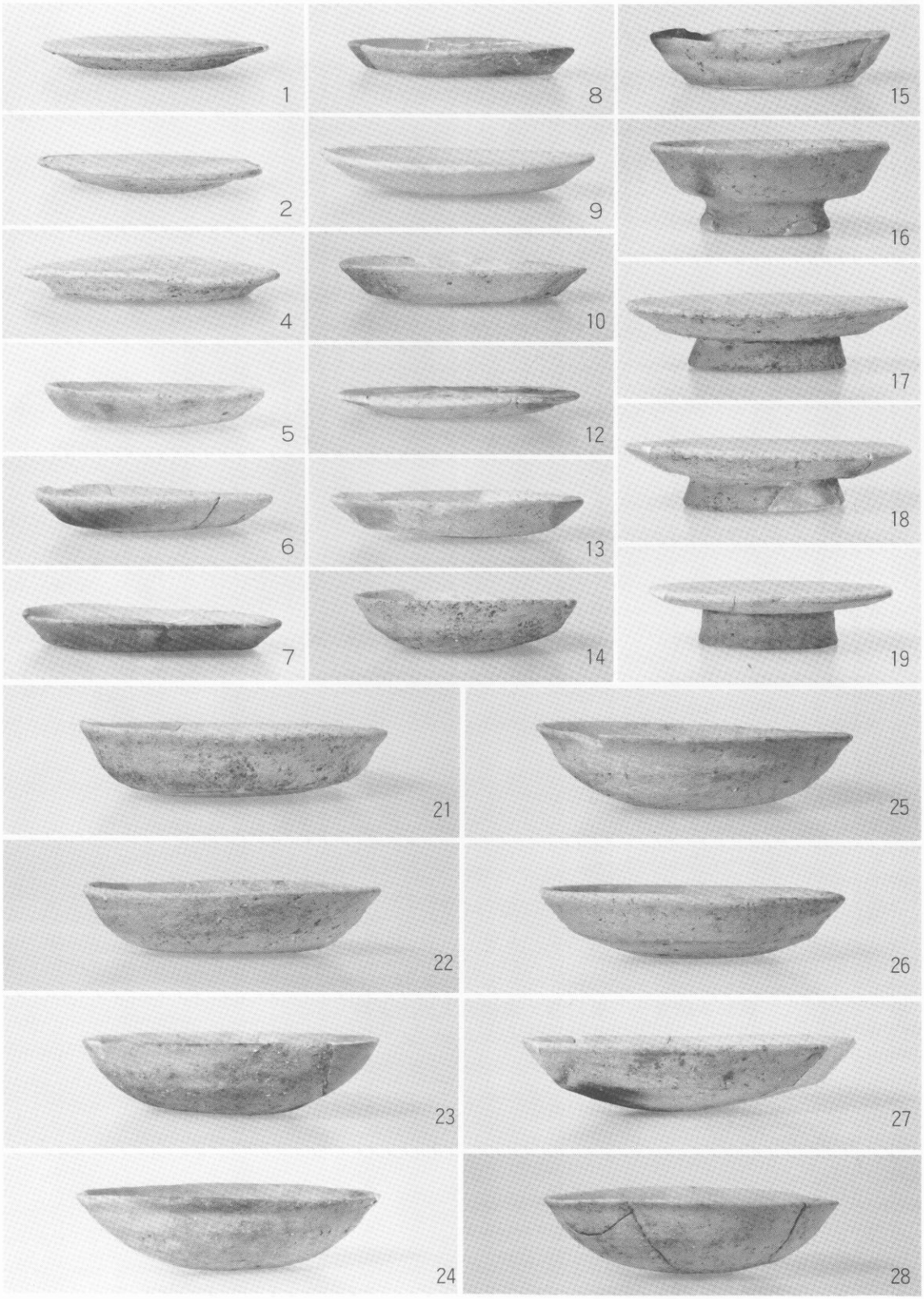




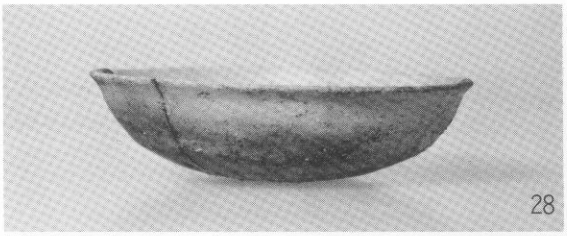


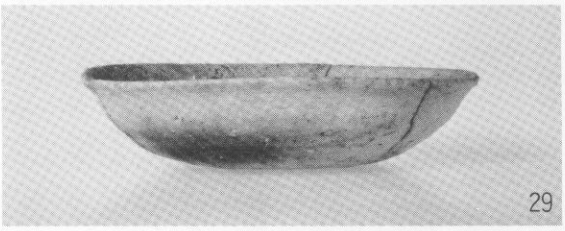


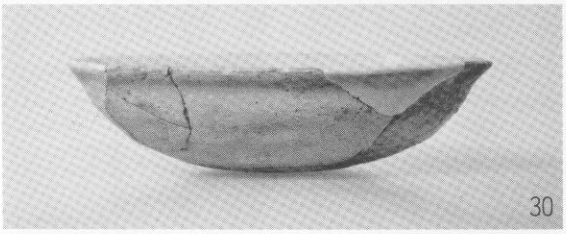
第80次調査　　整地層・遺構面上出土土器



第80次調査　　黒灰色砂質土層出土土器


28


29


30


32


33


34

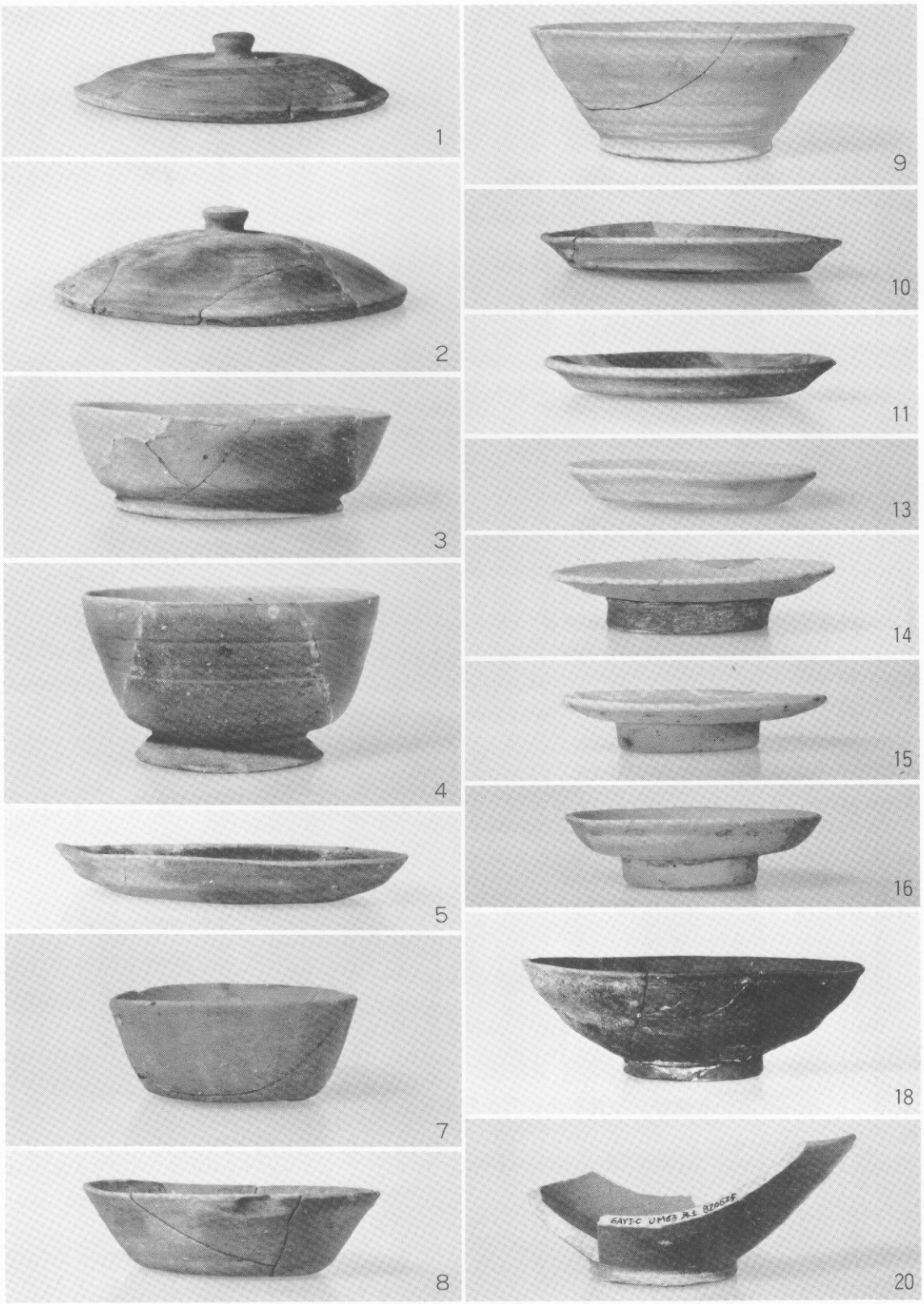

35


36

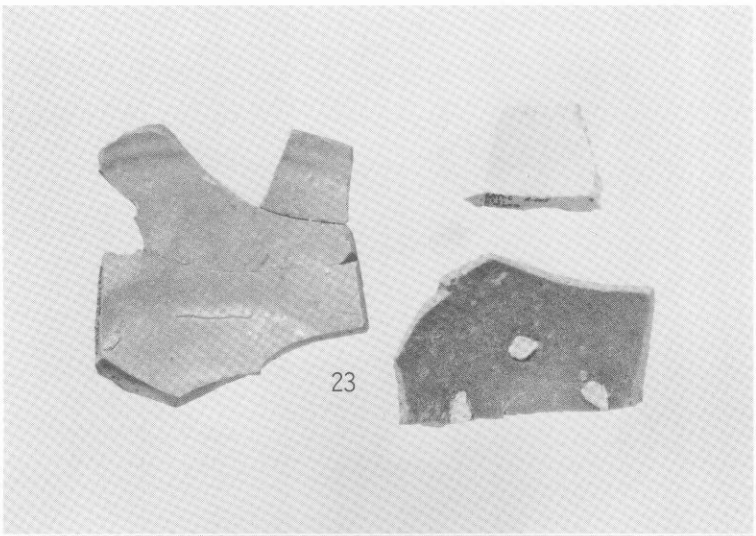

37


38

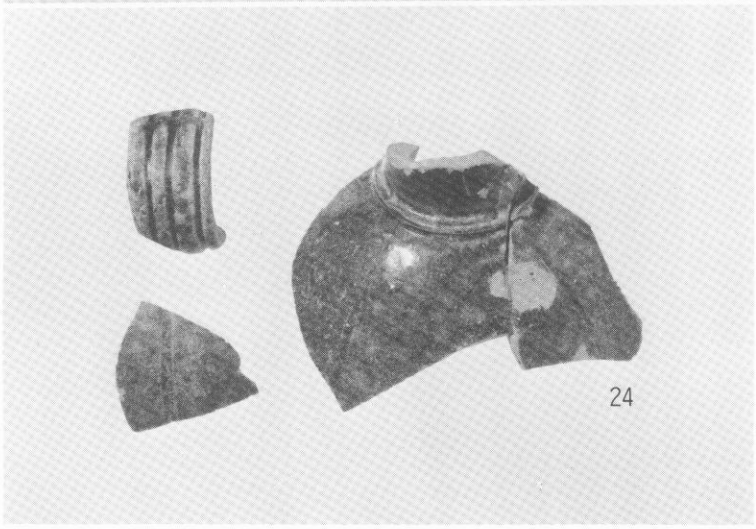
第80次調査　　黒灰色砂質土層出土土器



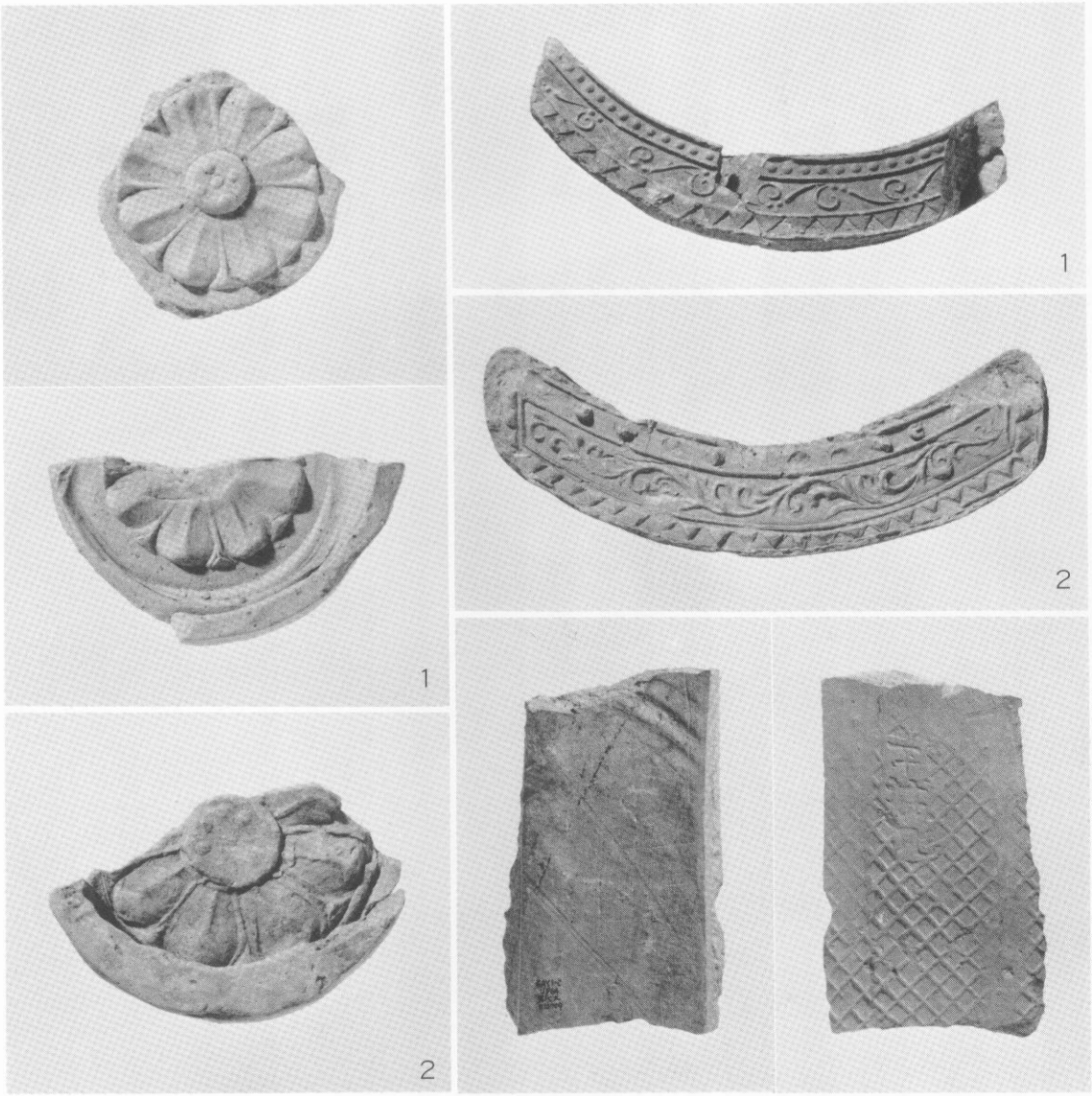
第80次調査　　灰褐色土層出土土器・陶磁器



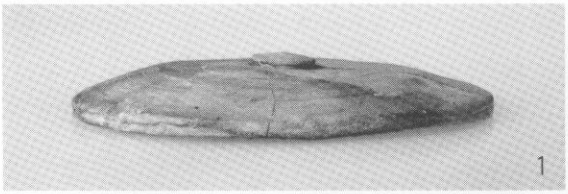


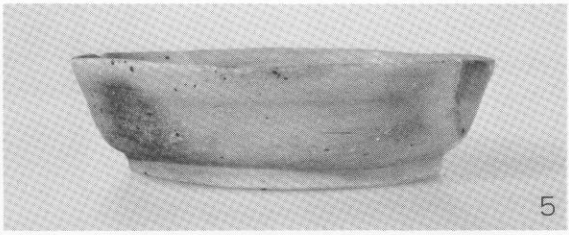


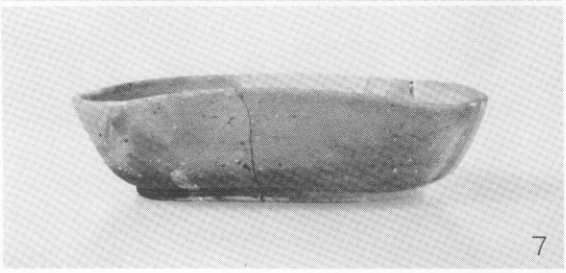
第80次調査
灰褐色土層出土陶磁器

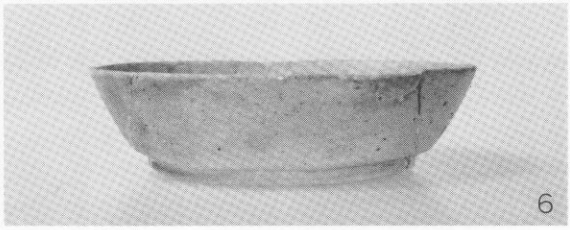


第80次調査　軒先瓦・熨斗瓦

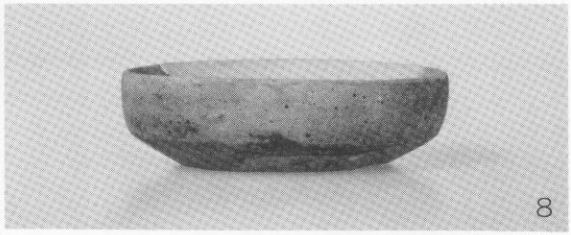

1


5

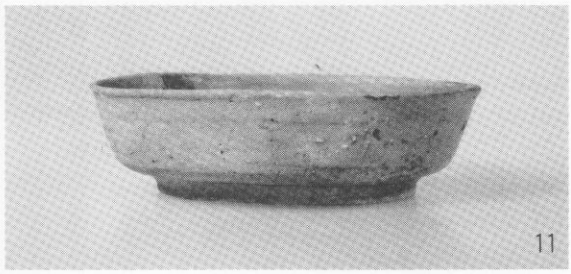

7


6


1

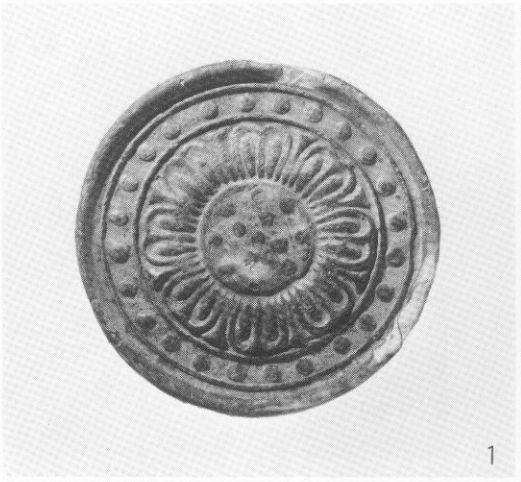

8

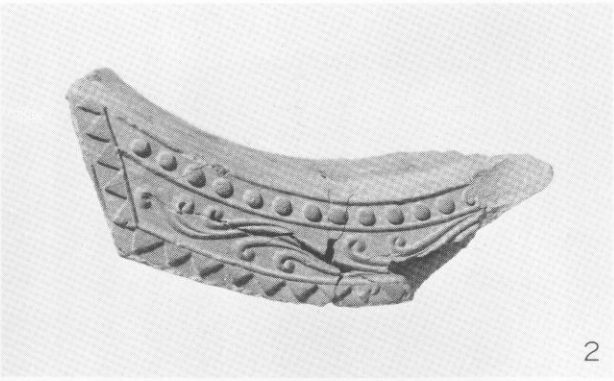

2

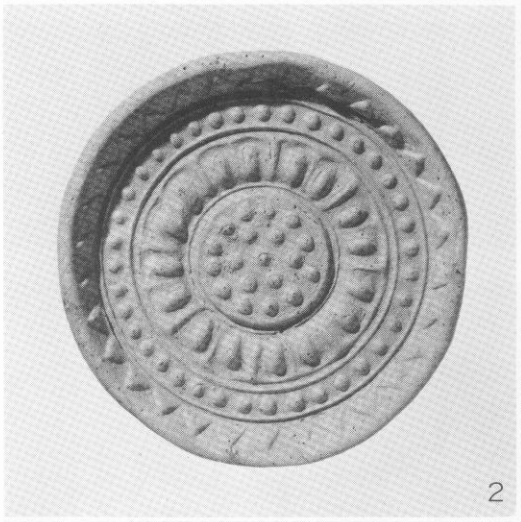

11


3

第81次調査　　SB2300・SK2309・SK2323・SX2318・SX2320出土土器

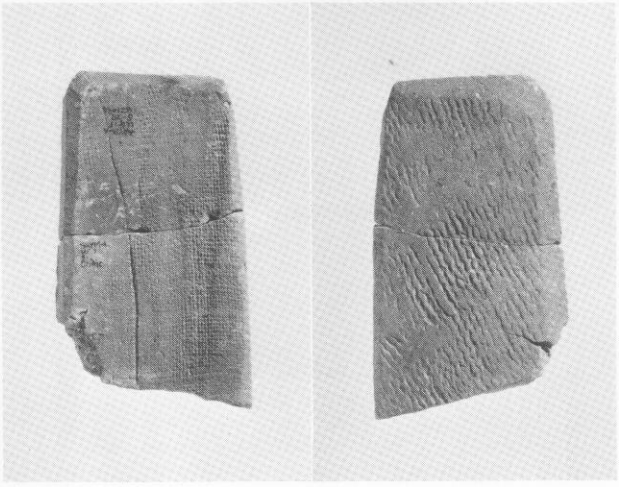

1


2


2


1


3



第81次調査　　軒先瓦・熨斗瓦

大　宰　府　史　跡

昭和57年度発掘調査概報

昭和58年3月

発　行　　九州歴史資料館普及会
太宰府市大字太宰府1025

印　刷　　正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2－21